漆黒の愛し子

花垣ゆえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
漆黒の愛し子

【Ｎコード】
Ｎ９９７５Ｋ

【作者名】
花垣ゆえ

【あらすじ】
速水乙（はやみ・きのと）２１歳。周囲の目を惹き付けてやまない彼女は、植物や動物たちと話すことができる心優しい女性。ある日の黄昏時、神社の裏手の森へ誘われるかのように入り込むと――異世界リリーネルシアにトリップしてしまった。さらに彼女は、至高神ホロの愛し子でもあった。彼女の心にふれ、壊れかけた心を少しずつ癒していく人々。そんな中、いつしか乙への恋心を募らせるようになるが、本人はその手のことに鈍感で――少しずつ恋を知り成長していくようになる。そして物語は国や世界をも巻き込み、複雑な様相を呈してい

く…。最後は予想を裏切るエンディングになるかも…な、長編小説です。

登場人物紹介

○速水（はやみ）　乙（きのと）
【年齢：２１　性別：女　身長：１６０？】
【髪：漆黒色の腰までである長い髪　目：漆黒色】
・温厚で明るく、少し天然。
・小・中・高・大学のすべて女子高。そのため、男性とあまり接したことがなく、“男性＝父、兄”と言う方程式で“人類みな兄弟”的思考をしていた…が、ある事件をきっかけにその考えを改めるようになる。
・リリーネルシアを創造した至高神ホロの愛し子。“漆黒の愛し子”。
・植物や動物と話すことができる。

――地球――

～速水家～
○速水（はやみ）　誠司（せいじ）
【年齢：５０　性別：男　身長：１７８？】
【髪：茶色　目：茶色】
・平安時代まで遡ることのできる由緒正しい速水神社の神主。
・乙の父親。かわいい娘を溺愛している。

○速水（はやみ）　美咲（みさき）

【年齢：５０　性別：女　身長：１５８？】
【髪：茶色　目：茶色】
・速水神社の分家の子。
・乙の母親。のほほんとした性格で、夫や息子が乙を溺愛するのを笑って見守る。

○速水　透（とおる）、速水　遥（はるか）
【年齢：３１　性別：男　身長：１８２？】
【髪：茶色　目：茶色】
・乙の兄。一卵性双生児。見た目も身長も性格も瓜二つ。
・乙を溺愛している。かわいい妹に、悪い虫がつかないように常に気を配る。乙に近づこうとする不届き者がいたら、即刻叩きのめす。双子の餌食となったものは、皆目が虚ろになってしまうという…。

～日本の神～
○阿修羅（八部衆のひとり）
・至高神ホロとは犬猿の仲。
・乱暴者だが、乙をずっと静かに見守る。実は乙のことが大好き。

○毘沙門天（四天王のひとり、部下に夜叉がいる）
・柔らかい笑みと言動とは裏腹に、腹黒でドS。

○日本の八百万の神
・多くの神が乙に興味を持っている。さり気なく守ったりもしていた。

――リリーネルシア――

○至高神ホロ
【年齢：？　性別：？　身長：？】
【髪：漆黒色　目：漆黒色　肌：漆黒色】
・リリーネルシアを創りし神。強大な力をもつ。
・“漆黒の神”と“白光の神”という２つの異名をもつが、“漆黒の神”の名は今や神官のみぞ知る。
・乙の事を愛し、見守っている。

～ワーグナー国～
○クロウリィ・ヘルナ・ワーグナー
【年齢：２４　性別：男　身長：１８５】
【髪：金色で襟足が長い　目：碧色】
・ワーグナー国第二王子。
・女性関係が激しく有名。皆からは、“愚弟殿下”との評価を得ている。国政にも全く参加しない。しかし、それには何か理由が…？
・ルシカとは乳母兄弟。

○カサルア・リリナ・ワーグナー
【年齢：２５　性別：男　身長：１７０～？】
【髪：金色で肩くちで切り揃えられている　目：茶色】
・ワーグナー国第一王子。
・心と体のバランスが取れていない。心の成長が１０歳の時に止まってしまった。
・乙と良く遊ぶ。

○ルシカ
【年齢：２４　性別：男　身長：１８５】
【髪：灰色で肩くちで切り揃えられている　目：はちみつ色】

・若手のホープであり、第一神官に任ぜられている。
・柔らかく甘い笑みに誠実な人柄で、女性はもちろん男性をも虜にしてしまうが、本人にはその意識はない。
・乙と仲が良く、特別な感情も持っている…？

○ミハ・ロード・ガーバント
【年齢：３５　性別：男　身長：１９０】
【髪：燃える様な朱い色、短髪　目：深緑色】
・病のため東方将軍の任を降り、現在はワーグナー国の大臣をしている。
・双子に対する周囲の歪んだ考え方により、辛い目にあってきた。双子のニースとの間には幼いころからのわだかまりがあり、ぎくしゃくしているが、乙の言葉によってそれに変化が…。

○ニース
【年齢：３５　性別：男　身長：１９０】
【髪：灰色の腰まである長い髪　目：盲目】
・神官長の最年少記録をもっている、実力者。
・盲目だが生活には支障ない。
・ミハとの関係がぎくしゃくし始めたきっかけを作ったことに負い目を感じており、自分から踏み出すことができないでいる。

○マース
【年齢：２７　性別：男　身長：１８０】
【髪：暗褐色の肩ほどまでのうねる髪　目：暗褐色】
・闇の一族の一番手。
・乙の護衛を担当している。

○ルドルフ・ウル・ワーグナー
【年齢：４８　性別：男　身長：１９０】

【髪：金髪　目：茶色】
・ワーグナー国国王。賢王として名高い。

○トトゥロ
【年齢：６０？　性別：男　身長：？】
【髪：灰色　目：灰色】
・大神官長として神殿を統括している。
・乙を温かく見守っている。

イラスト集

作者が想像しております、主人公速水乙ちゃんはこんな感じです。
日ごろから、皆様にたくさん応援していただいておりますので、感謝！という気持ちで掲載いたしました。

以前は3枚のイラストを掲載していたのですが、花垣の画力も少し向上いたしましたので、初期の3枚のイラストを新しく描いたものに差し替えることにいたしました。
ご了承ください。
なお、提携サイト「みてみん」にて3枚のイラストはそのまま掲載しておりますので、見たい方はそちらをご利用ください。

興味がある方は、今後も覗いてみてくださいね！
ご反応が良ければ、もしかしたら他の登場人物も現れるかもしれません（＊＾―＾＊）
クロウリィとかルシカとかね…ｖ

●●速水乙●●

＞ｉ２６００９―１５９０＜

第1話　はじまり

夜の始まる黄昏時。
鬱蒼と茂る森の中を進む影が一つ。

ガサッ、ガサッ、ガサッ――――

迷うことなく進む足音。
その影は暗い森を奥へ奥へと吸い込まれるように進む。

ガサッ、ガサッ、ガサッ――――

もし誰かがそれを見たなら、きっと止めていただろう。
なぜなら……森の奥へ奥へと進むその影は、まだ年若い女性のそれであったから。

夜の闇が支配する時がもうすぐそこまで迫る黄昏時。
そんな時分に年若い女性が一人で、森の中を奥へ奥へと躊躇いなく進む姿は…異様である。
しかし当の本人は何も気にしていない様子で、そのまま吸い込まれるように歩みを進める。

あぁ…

あなたは気付くだろうか…

年若い女性を、森の植物たちが手招きしていることに。

おいで、おいで、こっちだよと。

そう、奥へと誘うように…

第1話　はじまり（後書き）

初投稿です。
これからよろしくお願いします。

第2話　日常

空は、清々しい五月晴れである。
ピチチ…
朝の柔らかい日の光の下で、小鳥が空へ元気よく飛び立っていく。

それと同時に家の中から「おはよ―」と元気よく家族に挨拶する年若い女性の声が響く。
次に彼女はリビングの窓を開け放ち、庭に向かって「みんな、おはよ―」と朝の挨拶をするのだった。

もし、家族以外の人がその光景を見たなら「？」と思うであろう。
なぜなら、庭にはだれもいないから…。
では誰に向けて挨拶をしたのか？
庭にある（いる）のは手入れの生き届いた草木や花だけなのだが…
その不思議な行動に対して彼女の家族は全く気にしていないのだった。

そんな彼女の名前は速水乙（やはみきのと）といい、歳は２１である。

実は、彼女は昔から植物と話すことができる不思議な力を持っているのである。
驚くべきことだが…。
彼女が言うには、植物に“意識”を向けるとその植物のささやかな声が聞こえてきて、“伝わるように”と“意識”をすると話をすることができ、自在に会話をすることができるのだという。
家族がその乙の力に気付いたのはまだほんの小さな時分であった。

はじめ植物に話しかける乙を見て家族は“小さな子供がお人形に話しかけるのと同じ”だと捉えていたのだが、乙がだんだんと成長していくに従ってどうも違うようだと気付いたのだ。どうやらこの子は…

この子は、植物と会話ができる――――？

さらに近くに寄ってきた小鳥とも植物と同じように話していることから、動物とも話すことができるのでは？とも気付いたのだ。
こんな不可思議な力を持ってはいたが、両親や2人の兄たちはそんな乙をすんなりと受け入れたし、この上なく愛したのだった。

それというのも、乙が“話せる”と分かった時に家族は「あぁ、やっぱり。自分たちがずっと感じていたことは間違っていなかった」と思ったのだ。

実は、乙がこの世に生まれたときに「おや？」と家族全員が感じたことがある。
何がどうということはないが、感覚的に感じたのだ。

この子は、違うと。

何が？

命の輝き…？まとう空気…？

はっきりとは誰もわからなかったが、家族皆が感じたのだ。

あぁ…この子は……

だから乙に不思議な力があったとしても、驚きはしたがそれもあり得るなと全員が納得したのだった。

朝の挨拶がすんで食卓に座ると「「「「いただきま―す」」」」という掛け声とともに食事が始まった。
乙は何から食べようかなぁ～とわくわくしていると、不意に「今日は仏像展行くんだっけ？」と母親の美咲が尋ねてきた。
そうなの？と驚いたように父の誠司や双子の兄の透と遥は眼を見開いた。
どうやら男性陣は知らなかったようだ。
乙は「そうだよ」と仏教美術に関するレポートを提出するために、近所の国立美術館で開催されている仏教展を見学に行くのだと――簡単に説明した。

彼女は現在大学４年生で、国文学の仏教美術について学んでいた。
それだけなら特に普通の大学生といえるが、彼女の学歴？はとても不思議なものだった。
最初に理解をしなくてはいけないのが、彼女が神社の子であるということ。つまり、父親や兄が神主をしている、そういう家の子なのだ。ちなみに双子の兄たちは乙と１０歳も年が離れており、今年で３１歳である。余談であるが…
乙はそんな家の子ではあったが、高校はクリスチャン系の学校に通った。さらに、大学では仏教について学んでいるという実に変わった“変歴”を持っていた。
神道、キリスト教、仏教と色々な宗教について学んできたのである。
家族はというと「乙の好きにすればいいよ」と、むしろ広い見聞を持つことに対して大いに賛成しており、本人は「宗教のその先にあ

る、心について知りたかった」という理由から様々な宗教について学んできたのである。そのためこのように珍しい学歴を持つこととなった。

…そうか。と父や兄が納得したようにつぶやいたが、その瞳は感情を押し殺したように熱を持って揺れていた。その様子に何かを感じとった乙だが、意味までは理解できなかった。

なんだろう。なんか…変。

ううん。それだけじゃない…周りが――世界がいつもと、違…う…気がす…る？

違和感。

思考の海に潜り込みそうになる寸前、それを遮るかのように乙に声がかかった。

「…と。…のと…。乙…？」

「……ぅん？あぁ、何…？」

名前を呼ばれ、ふいっと顔を上げると父がやさしく微笑んでいた。

「乙、行っておいで…」

「――うん」

「…でも、怪我とか病気とかしないでね…」少し心配顔をしながら母親がいう。

「――うん？」

あはは。と笑いながら「心配しすぎ。だって俺の自慢の妹だぜ」「そうそう、乙は乙だもんな。がんばれよ」と双子の兄は明るく、心配ないよと言って笑っていた。

「――――う…ん？」

何だろう。全く会話が成り立たない気がする。…それとも、成り立

っているのかな。

うーん。と再び思考の海に潜り込みそうな雰囲気を感じてか、父がパンッ――と手を鳴らし「御馳走様でした。さぁ仕事、仕事」といつの間にか朝食を食べ終えて席を立ってしまった。それに続いて兄たちも「「ごちそうさーん」」と席を立った。

それを見て「いつもながら早いな～」とのほほんとそんな感想を浮かべていた乙も「電車に乗り遅れてしまいますよ」と母にせかされ、慌てて食べかけの料理に箸をつつきだした。

すると「あっ♪」と思わず声を上げてとろけるような笑みをこぼした。

朝ご飯にはどうかと思うメニューではあるが、乙の大好物のハンバーグがあることに気づいたのだ。

ラッキーと、夢中で頬張る嬉しそうな乙の笑顔を家族全員が微笑ましげに見ていることには全く気づかなかった。

第2話　日常（後書き）

次、いよいよトリップ。
さらに、乙（きのと）の容姿も！

第3話　異世界へ（前書き）

いよいよです。

第3話　異世界へ

フン、フン、フフン―
陽気に鼻歌を歌う声が公園から聞こえてくる。

あぁ。仏像展楽しかったなぁ～。

乙は仏像展の見学を終えて国立美術館の近くにある公園のベンチに座り、遅めの昼食をとっていた。実は、夢中になるあまり仏像展を４時間も熱心に見学していたのだ。

現在午後2時を過ぎたころなので、公園にはあまり人はいなかったが…しかし、屋外でしかも人前で陽気に鼻歌を歌うとは……今の彼女はよほど興奮しているのだろう。チラチラと通行人や公園で寛ぐ人たちに見られていることに全く気付いていなかった。

あぁ。あの阿修羅像。かわいい顔してたな。こっちに、笑いかけているみたいだった…

ベンチに座りサンドウィッチを頬張りつつ、時折鼻歌を織り交ぜそんなことを思い出しては頬をふにゃりと緩ませるのだった。
すると、先ほどからチラチラ彼女のことを見ていた人たちは「はっ！」と息を呑み、皆もれなく顔を赤く染めるのだった。

そう。

彼女は、とても美しいのだ――皆が息をのむほどに――

肌は白く輝き白磁の陶器のごとくすべらかで、長い漆黒の髪は優雅に腰まで伸び艶やかな輝きを放ち、長い睫毛に縁取られた大きくこぼれんばかりの瞳は、瞳孔と虹彩が全く同じ色でどこからが境目なのかわからない闇夜を思わせる漆黒の双眸は濡れるように煌めいていた。

薔薇色の瑞々しい唇も、細く長い指の先も、均整のとれた四肢も――

どれもこれも美しかった。

しかし、彼女の美しさはそればかりではない。

心――――がとても美しいのだ。

だからその身の内からあふれ出る美しさが、より一層彼女を美しく際立たせていた。

また今日の服装は柔らかな膝丈まである白地のワンピースに、淡いたんぽぽ色のカーディガンという装いで清楚でやわらかい印象を彼女に与えていた。

ちなみに、今日の服は双子の上の兄透の許嫁さんからの贈呈品だった。「着てくれなきゃいや」と、かわいく迫られたため着ているのだが…。乙本人は、どんな服でもよかったのだが…。

実際、本人に服装に対するこだわりはあまりない。そればかりか、全く容姿について正しい理解をしていなかった。

人の目を惹き付けてやまない美しさを持つことに…。

しかし、それもそのはず。

実は小学校、中学校、高校、大学とすべて“女子高”だったのだ。

意図してそうなったのかは分らないが、少なくとも父や双子の兄たちは「かわいい乙を、狼の中にやることはできない」と言っていたという。本人の、全くあずかり知らぬところでの話ではあるが…だからずっと、異性の全くいない中で青春時代を過ごしてきた。そのため、男性の目を気にしたり、奇麗に着飾ったり等々…普通の女の子が通る道を歩んでこなかった。
だからその手のことに関して、とてもとても鈍感だった…。

自身が周囲の人の目を惹きつけているのにも関わらず、全く彼女は気付いていなかった。
相変わらずフンフン――――とのんきに鼻歌を歌っていた。
そしてこっそりと小声で、周りにある植物たちとも会話していた。

―クスクスクス。
―ヨカッタネ。タノシソウダネ。
―クスクスクス。
―ソウナンダ。

囁くように小さな声が乙へとかえってくる。

ふふふ。

それはそれはうれしそうに、とてもうれしそうに。
乙と植物との密やかな会話はその後も続いた。

◆◆◆

いつの間にか時間は過ぎて、夜の足音がひっそりと近付いていた。

――そろそろ帰らないと…

真っ青の空が夕焼けに染まりだしたのを見て、乙はベンチから腰を上げた。

それじゃ、みんなまたね。

にこりと笑い、植物たちと別れの挨拶をした。

・・・・サヨウナラ。サヨウナラ。サヨウナラ。

植物たちは別れを惜しんでいるのか…しかし何か感情を押し殺したような声音で言った。

その様子を感じ取って「あぁ。まただ…」と朝の家族との会話を思い出すのだった。

『行ってらっしゃい』と言われた時に感じたモヤモヤするこれ…何だろう。

思考の海に再度潜りつつ、歩き出す。家に向けて。…結局わからなかったけど。

いつの間にか夜の色が濃くなっていた。
見上げた黄昏の空は焼けたように色づいていた。
家の神社の近くまで来て、ふと感じる。

さわ、さわ、さわ…

微かにざわめくような音が聞こえてきた。
この音はどこから――？
その音を確かめるように、首をめぐらせる。
そして気づく。
――裏手の森だ…。

神社の裏手にある森からそれは聞こえてくるのだ。
たぶん、植物の声が。しかし、ここからでは距離が遠いのか何を言っているのかまでは聞こえない。
乙は、躊躇うことなく歩き出した。
森の奥へ向けて。
声のする方へ。

ガサッ、ガサッ、ガサッ――

森の奥へ奥へと、吸い込まれるように歩く。
何のためらいもなく。

まるで、何かに誘われているかのように。

さわ、さわ、さわ――ザワ、ザワ、ザワ――

奥へと進むにすれて、声が大きくなっている。
しかし何を言っているのかは聞き取れなかった。なぜなら植物たちが口々に話しているため、どれか一つの会話を聞こうとしても他の会話が大きくて聞きとれないのだ。
…でもわかることもある。
彼らはとても――興奮しているということ。
それだけは感じる。肌で。

しばらく歩いていると、突如として鬱蒼と茂る森から開けた場所にでた――

え？

そこにあったのは、大きな大きな巨木であった。
そして、それは淡い白い光で輝いていた。

それを見た瞬間、美しいと感じた。同時に、懐かしいような思いも込み上げてきた。

植物たちはというと、乙がその場所にたどり着いた瞬間水を打ったように静かになってしまった。まるでこれから起きることを目に焼き付けようとするように。しかし、乙はそんな植物たちの行動に全く気付いていなかった。
ただ茫然とその巨木の光を見つめていた。だから、肩からバッグがずり落ちたことにも気付かなかった。

しばらくしておもむろに歩き出す。
その淡く光輝く巨木に吸い込まれるように一歩一歩近づいていく。
やがて傍まで来て、反射的にツイッと手を伸ばし触れようかとしかけた瞬間――
「！」
光の中から人の腕が伸びてきたのだ。

乙は突然のことで、思わず固まってしまった。

すると、光の中から今度はやわらかい面差しが垣間見えた。
それはそれはやさしく乙に笑いかけるように、またさらに腕を伸ばしてきた。

――愛しい子。

……そう聞こえたきがした。

すると考えるより先に身体が動いていた。抱きつくように、捕まえるように、すがるように。
光の中の人に夢中で手を伸ばした。
手が触れ、引き寄せられ、その胸に抱かれた。

あぁなんて…あたたかいのだろう。

あたたかい…そう感じた。
そしてそれは長年乞い願ってきたものだとなぜか分かった。
その拍子に頬に一滴の涙がこぼれた。
美しい涙であった。

ギュッと力を込めて抱きつく。
すると乙はその胸に抱かれ、だんだんと意識が遠のくのを感じた。
親鳥のもとで眠る雛のような安心感とともに。
眠るように――――。

突如、２人を包んでいた光が闇夜に一気に溢れた。
その瞬間、２人は忽然と姿を消していた。

……この世界から。

そして後に残ったのは、光を失い枯れ果てた巨木だけだった。

第3話　異世界へ（後書き）

トリップ…してしまいました。

第４話　神話

【神話】～誕生の章～

無限に広がる漆黒の闇。

何も存在しない無の世界。

その闇はやがて意志を持つようになり、命をも持つこととなった。

そしてそれが瞼を押し上げ目を開くとその瞬間、世界に光が満ちた。

――――――至高神ホロの誕生である。

無限の漆黒の闇の中に、自らが光を放つことで、世界に光を生じさせたのである。

そして、至高神ホロは自らの躰から世界を作り出すこととしたのである。

まず、世界のもととなる５つの力を生じさせた。爪から“木”を生じ、吐息から“火”を生じ、血液から“土”を生じ、髪から“金”

を生じ、涙から“水”を生じさせたのである。
次に、それらの5つの力をかき混ぜることで、互いに関係性を持たせた。
そして最後に、闇と光の力を注ぎ世界を創造したのである。

――――至高神ホロが造りし世界、リリーネルシアの誕生である。

――忘却の名――

…闇と光。

それゆえ至高神ホロは、光に包まれた姿をしているが、漆黒の闇か

ら意識を持ち命を持ったためその身は闇の色をしている。
したがって至高神ホロには、２つの異名がある。

“白光の神”と“漆黒の神”

対極にあるような２つ。

だから、人はあたかも“光＝正”“闇＝悪”と誤認した。

その根本は同じだと言うのに。

そしていつしか人の記憶から“漆黒の神”という名は忘れ去られていった。

今では、至高神ホロに仕える神官のみぞしる事実である――

第４話　神話（後書き）

もう１話続けて投稿します。

第5話　神殿（前書き）

きのと登場・・・！？

第5話　神殿

至高神ホロが創りし世界、リリーネルシア。
この世界には大小いくつもの国が存在しているが、どの国もみな至高神ホロを唯一神として崇めている。よって各国に1つその国の神殿の総本山として中央神殿が建てられており、また各国の中央神殿同士で横に緩やかな繋がりも持っていた。

では、各国に必ず1つ中央神殿が存在している理由は何か。
表向きには「その国の中にある神殿の中心的役割を担うため」である。
しかし、裏の理由――本当の理由はある“モノ”を守るためである。

――“休み木”である。

“休み木”は、神聖なる木のことである。
そしてそれは、至高神ホロが地上に舞い降りる際に必要不可欠なものなのだ。
なぜ必要なのかというと、至高神ホロの神気はこの世界には強過ぎ“地上のバランス”を崩してしまうためだ。だから地上に干渉しないように、神気が世界に漏れないように“休み木”と呼ばれる特別な力を持った木に舞い降り、その危険を回避しているのだ。

といっても、そうそう神が地上に舞い降りることはない。がしかし、その舞い降りる木がなければ神は決してその国に行くことはない。

そのため、中央神殿は“休み木”を守っているのである。

…神に見放された国とならないために。

◆◆◆

空には大きな月がぽっかりと浮いている。
神殿の磨き上げられた大理石の床は、月明かりが反射してきらきらと輝いていた。
その廊下を滑るように、老人が一人明りを持つことなく早足でどこかへ向かっている。
彼は、絹の白地に金糸の刺繍で縁取られた、ゆったりとしたローブを身にまとっていた。その姿からも、高位につく神官だということが分かる。
彼の背中の中ほどまである長い髪は曇天を思わせる灰色で、瞳の色も同じく灰色である。今は考え深げな色をその瞳に浮かべている。
そう…彼こそはこのワーグナー国の中央神殿最高責任者、トトゥロ大神官長である。

――胸騒ぎがする。

怪訝そうに目元にしわを刻む。
彼は世界がざわめくような気配を敏感に感じとっていた。「今日はいつになく騒がしい」と。
何かあるのだろうか…？
そのざわめきの正体を知るために、「奥の間」と呼ばれる部屋へと向かっているのだ。先ほどからその部屋よりざわめく気配を感じるから…。

「奥の間」と呼ばれる部屋は、大神官長の命が無ければ開けることができないように、強い封がされていた。また、実際に命により開けたことのある者も高位の神官が数名だけという、大変厳重に管理されている部屋であった。
ではそこまで厳重に管理されている部屋には、何があるのか。

実は、
その「奥の間」にあるモノこそ中央神殿が密かに守り続ける――“休み木”である。

そこへ、彼は向かっているのだ。
神が舞い降りる神聖なる木に、大切な木に「何か」を感じたから。

トトゥロは「奥の間」の重厚な扉の前に着き、一度呼吸を整え精神を集中させる。
そして腕を伸ばし、指先に力を集め扉に触れる。
封を破る言葉を同時に紡ぎながら……

スー……――。
音もなくゆっくりと開かれる扉。

そして――――「！！！」

目の前に広がる光景に彼は思わず、息をのんだ。
あまりの異常さに。

普段の“休み木”は葉が一枚も無い、ただの白色の木である。何の力さえ感じない、本当にただの木であった。
しかし、今あるのは――――普段とは全く違う、強い神気と眩い光が木から溢れだしているそれである。
そればかりか、木の枝は何かの生物ように蠢き、その木の上部にある“何か”に必死に絡みついていた。
その“何か”は、眩い光のせいで全く見えなかったが…異常である。

トトゥロは大神官長と拝命されて久しく、大抵のことには全く動じることはない。
しかし、今の彼はこの光景に畏怖さえ感じ、一歩も動けないでいた。

大事である…。

――――。
すると突然聞こえた。脳に直接語りかけてくるような、不思議な声が。

男性のようであり、女性のようであり。
甘い響きを持っていたが、他者を従わせるような厳しい響きも持って。

一言。

――私の愛し子だ――

その瞬間、“休み木”から光が一斉に溢れだした。
光の奔流。飲み込まれる！と感じた次の瞬間には――静寂…。

シン…――と何事もなかったかのように静まり返る部屋。

それは一瞬の出来事だった。
部屋の中央にある“休み木”は、まだ淡く光ってはいたが以前のように静かさを取り戻していた。
また、ただの木に戻っていくのだろう…。
トトゥロもまた普段の冷静さを取り戻していた。余裕が出てきたところで改めて“休み木”をみると、なんと――

人がいた。
しかも、少女を言っていい年齢の。

そのほっそりとした身体には、無数の枝が絡みついていた。
あぁ。先ほどの何かはこの少女だったのか…と落ち着いて見遣る。
先ほど蠢く枝がとらえていた何かは、この少女だったのだ…と。

そして――――「！」
よく見ると少女は“漆黒の髪”を枝に散らしていた。

“漆黒！！！”
はっと息を呑む。
まさか――――彼の思考が急速に回転しだす。

――先ほどの声は、きっと……至高神ホロの声だろう……。
“休み木”から発せられる、あのお声は！！！
では、「私の愛し子」との言葉の意味は……あの少女のことなのか……！？
……ならば、漆黒の髪を持つ、その…意味……は……？
至高神ホロのみに体現する色…漆黒を…その身に染める、その意味は――――！！！

そして理解する。

この少女は、至高神ホロの失われし異名“漆黒の神”たる、愛し子。

――漆黒の愛し子なのだと。

第5話　神殿（後書き）

次、男その1でてきます。
これからがイイとこですかね…プププ。

第6話　目覚め

あたたかい…

私を抱く優しい腕。
あなたの胸に抱かれる。
私の体はあなたととろける。
もう離れたくない。
あなたと、ずっとずっとずう―とずっと。
一緒にいたい…。
そういえば、あなたの名前はなあに？
私の名前は、『きのと』だよ。『はやみきのと』っていうんだよ。

光に包まれている。
あなたから溢れだす光に包まれている。

ねぇ…。
私は顔をあげてあなたを見る。
そこには優しいやさしい…光を集めたように輝く金色の瞳が――

◆
◆
◆

朝。
やわらかい光が部屋を包み込む。開いている窓からは爽やかな風が

吹き、白いレースのカーテンを揺らしている。
ここは、ワーグナー国中央神殿の客間の一室である。
全体的に白を基調とした落ち着きのある部屋である。決して華美過ぎず、しかしとてもセンスの良い調度品が置かれており、洗練された部屋である。
今ベッドには、この客間の主人である少女が眠っている。
昨晩突然この世界に舞い降りた少女である。
そしてこの部屋にはもう一人若い男性がいた。
先ほど部屋に入り、少女の様子を見に来たのだ。
すると彼は溜息を小さく落とし、今だに眠っている少女を見て昨晩のことを思い出すのだった。

昨晩。
ざわざわと胸騒ぎがした。
あぁ。これは何だろうか…。
ベッドに入ったはいいが寝るに寝られず、しかたなくベッドから這い出て、ぐるぐると部屋を歩き回っていた。
少しでもこの胸のざわめきが晴れるようにと…。
しかし晴れるどころか、逆に時間が経つごとに酷くなっていくようだった。
これは、トトゥロ大神官長のもとに行くべきか…と思い、手早く夜着から神官としての装いである白いローブへと着がえ、彼の人のもとへと急いだ。

月の光に反射する大理石の廊下を走りあともう少しで部屋に着く、と思った瞬間……
「――――っ！！！」

押しつぶされるような感覚を味わい、彼は思わず廊下に片膝をついた。

いったい…今のは！？

はぁ、はぁ、はぁっ。と肩で荒い呼吸を繰り返しややあって気付く。先ほど感じた感覚はほんの一瞬のことだったのだと。

今は全く感じない…。その不可思議さに、思わず眉間にしわを寄せる。

そして、くっ…！と唇をかみしめ立ち上がりトトゥロ大神官長の部屋ではなく“ある場所”を目指した。

きっとあそこから…あの場所から感じるのだ！！！

確信を持って急いでその場所へ向けて走り出す。

そう、「奥の間」へ。

走る走る走る。

重厚な扉が前方に見えた。厳重な封がされているあの扉。トトゥロ大神官長の許可が無ければ開けることの叶わない扉。それが今うっすらと――開いている！！！

ダンッッ。と体当たりするように扉に突っ込む。

「！！！」

驚愕に目を見開く。これは一体……。

彼は、この「奥の間」にあるモノを以前に見たことがあった。
“休み木”を。
しかし、目の前にあるそれを“休み木”と言っていいのだろうか。
今彼の目の前にあるのは、全くの別物であった。
…困惑。
それもそのはず、普段は葉が一枚も無い、ただの白色の木なのだから。何の力さえ感じない、本当にただの木。けれど、今あるのは淡い光を微かに発しているそれであった。少しだが神気さえも感じる。
しかし、本当に彼を驚かせたものは“休み木”ではない。
絡みつくように枝がとらえている――少女(ひと)であった。

その少女から目を離すことができない。囚われる。あぁ…。

少女の肌はとても白く、遠目から見ても白磁の陶器のごとくすべらかであることがわかる。今は“休み木”から発せられる淡い光に包まれて、珠のように肌が光り輝いている。
それとは対照的に、まるで夜闇を切り取ったかような長い漆黒の髪が枝に散っている。
漆黒…。この世界では珍しい髪色。いや、この世界リリーネルシアにはその色彩を身に宿した者は一人もいない。なぜなら、その色彩は至高神ホロの色彩であるからだ。だから、人である身にその高貴なる色が現れることはない。しかしそれを知る者は少なく、今では神官のみが知る事実ではあるが…。

ぼぅ…と見惚れていた彼を、現実に引き返したのは他でもない、トトゥロ大神官長である。
扉を開けてそのまま固まってしまったルシカへ振り返り、優しく語りかける。
「…ルシカ。ルシカよ。今は何も言うな。わしもはっきりとは分かっておらぬでな。…確認が必要じゃ。確固たるな…。」

重々しい言葉にルシカは我に返る。そして窺うようにトトゥロ大神官長を見て、口から出かかった言葉を呑みこむ。本当は聞きたいことはたくさんあったが、あまりの眼光の鋭さに口を噤んでしまった。そんな彼の様子を見て「…よろしい。彼の人を、まずは客間へ」と言いルシカを中へと促す。

…わかりました。とルシカは小さく頷き“休み木”へと歩みよる。そして木の上部で枝に絡みつかれている少女を見上げ、腕を持ち上げる。すると木はそのことを理解したのか、ミシミシと音を立てながら少女を絡め、枝をルシカへと伸ばす。壊れ者を扱うように優しくとても優しく、少女を手渡した。

すると枝は役目を終えたのか一瞬ののちに元の姿へと戻ってしまった。

…ただの木へと。

だからもう枝は蠢いてもおらず、淡く光ってもいなかった。

すっ、と腕に抱く少女を見下ろす。

眠っている。

すぐ近くで見て改めて感じた。

――美しい、と。

――バサッ。白いレースのカーテンが風に煽られ、大きい音を立てた。

はっ、としてルシカは意識を戻す。

少女を見下ろしている若い男性は、ルシカであった。
朝方、トトゥロ大神官長からこの少女について聞かされたが、今だに信じられない。
この少女が至高神ホロの愛し子“漆黒の愛し子”であるということを――。
そのように尊い存在が今ここに在るということに！

…なんと……稀有なる存在であることか――……。
茫然と少女を見つめる。

すると引き寄せられるかようにルシカはベッドのそばまで歩み寄り、床に膝をつきまじまじと少女を見つめていた。

…美しいと、純粋に思うのだった。

白き肌に漆黒の髪。その対照的な色彩に目を奪われる。
そして美しい顔に咲く一輪の薔薇のごとき色の唇が何とも印象的で、閉じられている瞳の色は何色なのか早く見てみたいと思う。

神官である彼はその職業の特殊性ゆえか、人の美醜に関して特に何を思うこともなかった。また他の神官も同様に、そのような俗物的な考えはしないのが普通であった。
しかし、今彼は生れて初めて思った――なんと美しいのかと。

少女を食い入るように見つめる。
まただ。目が離せない。

…無意識であった。

彼は吸い込まれるように少女に顔を近付ける。
ルシカの肩口で揃えられた灰色の髪がさらりと流れ、少女の漆黒の髪と混ざり合う。
さらに近付くと、浅い呼吸を繰り返す少女の吐息が自らの吐息と混ざり合う。
その甘美な刺激に身体が震え、思わず熱い吐息を吐きだした。
あぁ、なんて……――
そして薔薇色の瑞々しい唇を真近に見て思う。
どんな味を…しているのかと…。

気が付けば――口づけをしていた。

刹那、全身に痺れるような感覚が駆け巡る。
その唇は、思った以上に瑞々しく果実のようで、匂い立つような色香を感じた。

くッッ！とその刺激に耐える。
頭がくらくらする…なにも考えられなくなる。
ルシカは感じた、今まで一度だって感じたことのない“男”としての欲望を。
あぁ。もうこ…れ、以上は…。は…離れな…ければ――でなければ…
“男”として貪り尽くしてしまう…
そんなことはあってはならない、いや今でさえ何ということをしているのか！！！
…深みにはまりそうな己を律し、ゆっくりと顔を上げる。

その瞬間、少女の長い漆黒の睫毛が震えゆっくりと瞼が開いた。
現れたのは髪と同じ漆黒の瞳だった。よく見ると瞳孔と虹彩が同じ色彩をしていたため、その境目が全く分からず思わず吸い込まれそ

うになる闇がその瞳に浮かんでいた。
突然少女が目を開けたので、ルシカは固まってしまった。だから今だに…顔が近い。

一方、少女はまだ夢の中にいるようなとろんとした目で、彼を見上げていた。
実際、少女は寝ぼけていた。

――金色の瞳…？
――あぁ…。答えてよ。私の名前は『きのと』だよ。
――ねぇ。あなたの名前は…？

すると少女はルシカに向かって腕を伸ばし、その首に抱きついた。
「！」
驚いたルシカはビクッと体を震わせて、固まってしまった。そんな彼に追い打ちをかけるように、少女は彼の耳元で甘くそれは甘く囁いた。

「…てよ。…答えてよ。あなたの名前は――？」

第6話　目覚め（後書き）

男その1はルシカでした。

そんなルシカは…思わず。

変態じゃないです！誤解してはだめです！

第7話　この世界

なぜ神官ともあろう自分が、いたいけな少女に口づけをしてしまったのか…。
しかもだ。少女は眠っていた。
あぁ…寝込みを襲うなんて……自分はケダモノだ。

神に仕える神官は、その神聖さゆえに多くの規律や制約、禁忌の中で日々を生活している。それを順守することで己をより高みへと極めていくのだ。（ちなみに男性のみ神官になれる）
例えば、『酒を飲んではならない』――→酒に溺れ道を踏み外すな。
『その手を血で穢してはならない』――→神の言葉を伝え人々を導くものが、人を殺めるなど言語道断！
といったように、他にも色々とある。
そして…
『神にその清らかたる身を奉げる』ともあるのだ。
これは解釈の仕方によっては、生贄！？とも捉えることができるが、実際には“ある行為”を何重にもオブラートで包んだ言葉である。
それを簡単に言ってしまえば…情事を重ねてはいけないということである。つまりは、女性と肉体関係を持ってはならない、ということを美しい言葉で表現しているのである。
女性に溺れ欲することなく、日々を清廉に生きよ！というものだ。
したがって、神官たちは皆俗に言う……「童貞」である。
またそれを破ったものは、破門というかたちで追放される。しかし「愛する女性ができた。結婚したい！」といったときは、神官の職

を辞するというかたちをとる。そのことに関する、お咎めなどはなく自由に生きることができる。つまり神官という職に就いている限りは、その行為は認められないということだ。

だのにだ…。

なぜ。なぜあの時…。

眠る少女に、口づけなどという行為をしてしまったのか。

あぁ…。

日々清廉に生きる神官たる私が…。これでは、“あの男”と一緒ではないか。

口づけをしたら、目を覚ました少女。

一瞬「ばれた！」と、どきりとしてしまったが、本人はまだ眠りの中にいるのかとろんとした目をしていた。

罪悪感に苛まれながらも「ばれていない…？」と卑怯にも安堵した瞬間、ほっそりとした腕に抱きつかれてしまった。

「！」

ルシカの肩口に顔を埋める少女。漆黒の髪からほのかに匂い立つ、甘い香りが鼻腔をくすぐった。

その香りに酔いしれつつ突然のことに固まっていると、耳元で甘く囁かれてしまった。

…名を聞かれた。

私の…名だろうか？しかし、いやきっと少女はまだ夢の中にいるのだろう。その続きを――――していると思われた。では、いったい誰にしているのか…。そう思うと微かに胸がざわついた。

――――永遠にも感じられる時間。実際には、数分だろうか。しばら

くすると夢と現がはっきりしだしたのか、それとも返答がないことに焦れたのか…少女はようやく腕を緩め、ルシカの顔を正面に捉えた。

……。

無言。

思わず吸い込まれそうになるほどの漆黒色の瞳は、先ほどのような夢の住人の目ではなかった。

しっかりとルシカを見据え、懸命に事態を把握しようとしているそれであった。

……。

無言。

ルシカと少女は、互いに見つめあった。

そして、ようやく少女はその美しい薔薇色の唇を動かし「…はちみつ色の目」と小さな声でぽつりとこぼした。

蜂蜜色の目。そう、ルシカの瞳の色はとろんとした蜂蜜色なのだ。

光の加減によっては、光り輝く金色の瞳にも見える。

そのため、夢の中に出てきた金色の目の人と、現で目の前にいたルシカの蜂蜜色の目を間違えてしまったのだ。

そうと理解すると少女は焦ったように、ルシカに絡みついていた腕を解き「ええと…。あのぅ…」と何事かを言おうとするが何と言って良いかわからないという顔をした。

ちなみに顔はりんごのように真っ赤だった。

ルシカは意外にも顔を赤らめる初心な反応を見て思わず笑みをこぼ

しそうになったが、なんとか顔を引き締め神官然りといった顔を作った。

「…少々お待ちください。説明は全て私の上官である者がいたします。…不安かとは思いますが、今呼んできますのでもう暫しお待ちください」

フッ。と安心させるように、やわらかい微笑みを少女に向けた。

もし、このルシカの表情を貴族のご令嬢方が見たなら、卒倒しただろう。

なぜならルシカは、やわらかな目元にとろける蜂蜜色の瞳に、甘く端正な顔立ちで、高い身長に細身ではあるが程よく筋肉のついたしなやかな身体をしていた。さらに物腰柔らかで誠実な人柄とくれば…文句のつけようもなかった。しかし当の本人には、全くその自覚が無いのだった…神官であればしょうがないのかもしれないが…。

安心させるように向けた頬笑みは普通であれば卒倒ものであったが（ルシカはその破壊力には気付いてません）、少女もさることながら、その微笑みに対して何の反応も見せなかった。ただ「…あ。…はい」と不安げに瞳を揺らしすのだった。

ルシカはすらりと立ちあがり、少女を残して部屋を立ち去った。

本当は何も説明せずに、混乱もしているだろう少女を一人残していくことに不安を感じたが、トトゥロ大神官長の命ならばしかたがない。『ルシカは何も説明はしてはいけない』と言われている。そして起きたら知らせに来るようにと…だけ。

少女に何を伝え、伝えないのかはトトゥロ大神官長が決めるのだというのだから…自分は余計なことを言ってはいけない。

バタンッ。
扉を閉じ、軽く溜息をつく。
そして少女に出会ってからの自分の行動を振り返り、自己嫌悪に陥るのだった。

まるで、ケダモノだ…と。

はぁ…もう一度溜息をつき、トトゥロ大神官長のもとへと足取り重く向かうのだった。

少女は灰色の髪に蜂蜜色の目をした優しそうな青年が出て行った扉をしばらく見つめていた。
この少女、いやこの女性は何を隠そう、乙である。
少女と思われてはいるが、乙は立派な２１歳の成人女性である。しかし今現在、日本人特有の童顔さから１４、１５歳の少女に見られていた。
乙の年齢が発覚するのは、もう少し先のことであった…。

…なんだかとんでもないことを彼にしでかしてしまった気がする…。
はぁ…。と、乙は溜息をつき「まずは落ち着け！」と自分に言い聞かせた。

そして周囲を見回し改めて思う。ここはどこ？

あの青年の顔立ちは日本人ではないし、服装もいつの時代の人なのか…理解に苦しんだ。そしてこの部屋も、随分と贅沢な造りをして

いることに気付いた。わからないことだらけだが、まずは自分の記憶を整理することにした。ちなみに今の自分の服装はあの時のままだった。

えぇと。昨日は…仏像展にいった。よし、憶えてる。それで公園に行ってサンドウィッチを食べて…植物と話していたらいつの間にか夕方で。家に帰ろうと思ったら…思ったら…？
神社の裏手の森が、ざわめいていて…。

ごくっと唾を飲み込んだ。

これ以上思い出すのが、怖くなった。…なぜ？あぁでも、思い出さないと…。
ふぅ。と呼吸を整える。

…そう。ざわめいていて、誘われるように――入っちゃたんだ。奥へ。それで、見つけた。巨大な光り輝く木を。そうだ…それで思わず触ろうとしたら…
――人がいた。光り輝く人が！！！
そう。で、抱きついたんだ、私…そしたら、眠くなって……
気が付いたらここにいたんだ。

はぁ…と大きな溜息をつく。結局、なぜここにいるのかはわからない。唯一、原因としてあげられるのは…あの光の中の人だろうか？今考えると常識を超える、摩訶不思議な出来事だった。
う―ん。と考え込んでいるとノック音が聞こえた。

「はい」返事をすると、品の良い６０代くらいだろうか？老人が一人姿を見せた。ちなみに先ほどの青年はいなかった。

老人はベッドの傍まできて、近くにあった椅子に腰かける。そのゆったりとした上品な仕草に、乙の警戒心は自然と薄れた。
おもむろに、そして優しく話し出す。
「ご気分はいかがですかな。」
「…はい。大丈夫です」
「それは上々。さて、色々と聞きたいことがあると思いますがな。まずはわしの話を聞いていただきたい」
「……はい」
老人は微笑むように、目をやわらかく細めた。
彼の瞳の色は曇天を思わせる灰色で、髪の色も同じ灰色であった。前髪は後ろに撫でつけられており秀でた額には銀のサークレットが光輝いていた。そういえば、あの青年の髪色も灰色だったなと思い出しながら、老人の言葉を聞いた。

彼が言うには…
この世界はリリーネルシアといい、至高神ホロが創りだした世界なのだという。異世界??そしてここは、ワーグナー国にある中央神殿の客間であること。目の前にいる老人は、その中央神殿の神官でトトゥロという名で、ここの神官の長らしい…。そして、私は昨晩突然この世界に舞い降りたのだという。木を媒介?としてやってきたのだと。うーん。確かに、私は光る木を触ろうとしたらここにいたし…あの木が媒介?というものなのかな。そしてさらに驚くべきことに、私はこの世界の至高神ホロの愛し子なのだという…。どういうことなのか。ぶっ飛び過ぎて頭が痛くなった。

今だに納得はできないし聞きたいことも沢山あったが、先ほどからずっと気になっていたことを尋ねた――言葉について。なぜだか彼の話は聞き取れるし、私の言葉も彼は理解できているようなのだが…彼の話す口の形をみると、どうしても日本語を話しているよう

には思えなかった。
この摩訶不思議な現状について問うと、彼はあっさり「そのことですか」と、特に驚く様子もなく丁寧に話してくれた。

それは、あなたが「神語（しんご）」を話しているからです。

「神語」…？とは…？
彼は簡単な例え話を交えて、話してくれた。
簡単に言うと、私の話す言葉は誰にでも通じて、どの言葉も聞き取ることができる耳を持っているのだという。つまりは、（地球風に言うと）アメリカ人とフランス人とイタリア人の3人に同時に私が話しかけても、3人に正確に通じるし、彼らが話す英語も仏語も伊語も聞き取ることができるのだという…。
俄かには信じられなかった。
がしかし、それについては思い当たる節があった。

…そう。
私は“意識”をすれば、植物や動物と会話ができるのだ。今も彼の話を“意識”しながら聞いているし、もしかしてこのことが…その言葉が「神語」なのではと――
そしてその推理は正しかったようで、神の愛し子だからこそ…なのだという。

今、乙の頭の中はパンク寸前だった。一度にこんな不思議な話をされて、信じられるはずがなかった。
苦しそうに顔を歪めた乙に、トトゥロは穏やかに言う。
「全てを一遍に理解する必要はないんじゃよ。時間をかけて…な」
と。

おぉ！と何かを思い出したのか声をあげた。

何事かと見やれば、彼はやわらかい笑みを乙に向けて言った。
「わしとしたことが、失念しておった。名を、そなたの名を聞いておらなんだ。お聞かせ願えるかの」

――そういえば…。
乙も今更ながら気付いた。彼は最初の段階で名乗ってくれたのに…失礼だったかな?と思いながら、無意識のうちに背筋を伸ばした。

「私の名前は、速水乙(きのと)です。速水が姓で、乙が名です」
はっきりと乙は言う。
その凛とした涼やかな声は部屋に響いた。

漆黒に輝く瞳が、奥底でキラッと強く煌めいたことにトトゥロは気付いた。

あぁ…強い光を感じる。

きっと――きっとこの少女は、真っ直ぐに己の道を歩んでいくのだろう。
確信にも似た思いがしたのだった。

きっと大丈夫だと。

第7話　この世界（後書き）

ルシカの言う”あの男”とは・・・？
はい。男その2ですね！もう少し先で出てきます。

第8話　理解（前書き）

祝い！
おかげさまで初投稿から6日経ちました。
なんとＰＶ1万アクセスを超えました。ありがとうございます。すごくうれしいです。

第8話　理解

私は先ほどまでのトトゥロ大神官長とのやり取りを反芻していた。

1．この世界はリリーネルシアといい、至高神ホロが創りだした世界。

　つまり地球ではない、異世界であること。

2．今いるのは、ワーグナー国の中央神殿。

　彼の私に対する待遇を見る限り、優遇されているみたい。

命はひとまず安全…？

3．私はこの世界の神、至高神ホロの愛し子である。

　神の愛し子であるために「神語」が話せる。植物たちと話せるあの力である。

…しかし、その“神の愛し子”とはいったい？

何のことだかわからない。それに、なぜ私がこの世界に来てしまったのか。そのことは愛し子ということに何か関係があるのか…？とトトゥロ大神官長に聞いた。

しかし彼は、少し考え込むように口を噤んだ後、…それはあなた自身が最も理解していることだと思いますが――と前置きして静かに話しだした。

「…それはきっとあなたが、至高神ホロの愛し子であるからこそ、この世界に舞い降りることができたのではないかと思われますな。なぜなら、この世界は至高神ホロが作りし世界であり、彼の御方が認めた者でなければ――異世界から舞い降りるなどという荒技は夢にも叶いませんじゃろう…。」

私は顔を歪ませた。
神の愛し子なんて…知らない。私は知らない…。
…わからない。それにこの世界に来たのは私が原因ということ？？？

そんな私の顔を見ながら、それに…と彼は続けた。
「それに…やはり元の世界で、この世界に舞い降りるきっかけなるものがあったと思いますが。……やはりあなた自身が最も理解していることだと。」
わしはその場にはいませなんだしな―。と少しおどけるように言った。

そう。そうなんだ……。
彼は『地球で“何かあった”から、私がここに来たと。この世界は、私に対して何の働きかけもしていないのだと、来た原因は私にあるのだと』…そう言ったのである。だからその答えは自分で探すしかないのだと…。

暗くなる思考。
思わず俯き、無意識のうちにシーツをギュッと握りしめる。

それを知ってか、ひとまず話はここまでだと彼は言った。そして付け加えるように、もしさらに聞きたいことがあるならば…朝食を食べた後にでも、それを持ってきた者に聞くのがよいとも。

あぁ。
…彼は「これ以上私に話すことはない」と暗に告げたのだ。
私はそのことに少なからず動揺したものの、彼は忙しい人なのだ…と無理やり自分を納得させた。
そうしなければ、見放されたと思ってしまいそうだったからだ。彼

に。それはただの甘えでしかないのかもそれないが…。

だから、無理やりにこりと微笑んだ。

「わかりました」と――きっと歪んだ笑顔だったと思う。

それでも彼は、満足そうに灰色の目を細めて微笑んだ。

それでは…とスッと立ち上がり、白いローブをひらめかせながら退出していった。

乙は彼の後姿をぼんやりと眼で追い彼とのやり取りをじっくりと反芻するのだった。

◆◆◆

広い大理石の廊下をコツコツと足音が響く。

朝の柔らかい日差しは、時間が経つごとに一段と強さを帯びていく。

その光が瞳に入り込み、とろけるような蜂蜜色の瞳が濃厚な光を反射させるようになる。

肩口で切りそろえられた曇天を思わせる灰色の髪は、動きに合わせてさらさらと揺れた。

その身にまとうのは、白色の絹でできた生地に銀糸の刺繍が施された、ゆったりとしたローブ。

――ルシカである。

その手には、食事を持っている。

彼の向かう先は…今朝、思わず口づけを落としてしまった少女のも

とで、トトゥロ大神官長の命により朝食を持って行く途中である。
ちなみに食事といえば…ルシカは今朝起こした自分の神官たりえぬ行動に反省し、5日間の断食を自らに科すこととしたのだ。戒めも兼ねて…。

そうこうするうちに、少女の扉の前まできた。
ルシカは、一つ呼吸を整えやさしくノックをする。

…反応がない。
もう一度するが、やはり反応がない。
…これは?と訝しみ、入りますと断わりをいれて部屋に入る。――いない。

ルシカは食事をテーブルに置き、隣の部屋の寝室に向かう。てっきり起きて、ソファーにでも座っているかと思っていたのだが…まだ寝室か――?

そして寝室につながる扉をノックし、反応を待つ。が…ここでも反応がない。
……。

もう一度扉を叩こうとして、ルシカは体をビクッと硬くさせた。
扉の向こうで…ざわめきが聞こえる――!

っっっ!?

突進するように勢いよく扉を開け放つ。
刹那。
心臓が止まるほどの衝撃を覚えた。

いや、一瞬止まったと思う。
なぜなら、少女が窓に足をかけ身を乗り出し、今まさに飛び降りようとしているのだから――。
「！！！」
ルシカは走り出す。
部屋がとても広く感じる。
全てがスローモーションのように揺れ動く。
ふぁさっと少女の漆黒の髪が風に踊り乱れる。

「ッッッ！！！」

少女に腕を伸ばし必死に絡みつく。
猛然と走る勢いそのままに。ぶつかるように。抱え込む。

――ドォォオオオン！！！

派手な衝撃音。
ルシカは窓辺から少女を引きはがし己の胸の中に抱え、勢いよく床に倒れこんだのだ。
その時に小さいテーブルや椅子なども一緒に巻き込んだため、激しい音が部屋中に響き渡った。

受け身を取り損なった背中が痛み、呻き声をあげそうになったがすんでのところで押しとどめる。
腕の中にすっぽりと納まるやわらかな少女の身体を感じる。思ったよりずっと華奢な身体だった。強く抱きしめたらこのまま折れてしまいそうな…
スッと彼は蜂蜜色の双眸を押し開く。
――少女は本当に自分の胸の中にいるのだろうか、怪我などしていないだろうかと。

うっっっ！！！

ルシカは思わず呻き声をあげた。
狼狽という名の。
それもそのはず、少女は彼の腕の中にいるにはいるが…床とルシカに挟まれるようにいた。
隙間など皆無で密着して……まるで押し倒しているようで。
目の前には少女の美しい顔があり、お互いの吐息が自然と絡まった。
あのときよりもさらに深く。

少女の長くつややかな漆黒の髪は、床に孤を描き散り、少女の白く細い首や華奢な身体に絡まり、ついでにルシカの身体へも絡まりついていた。
その妖艶な光景に一気に彼の頭は…爆発した！ように見えた。
なぜなら、彼の顔は真っ赤に熟れたりんごのように色づいていたからだ。

そして彼は心中でそっと呟く。
断食は5日から7日に増やそうと……。

せめてもの救いは、少女の大きな漆黒の瞳が閉じていることだった。
いきなりのことで目を回してしまったのか、愛らしく「うーん」と小さく唸っていた。

第8話　理解（後書き）

ルシカは不可抗力の末、断食修行7日になってしまいました。
まぁ、神官ならしょうがないかな?
ルシカ、揺るがない精神を鍛えてください（笑）
…それにしても今回驚いてばっかりのような気がする。

第9話　願い

う―ん。
瑞々しい薔薇色の唇から、愛らしい声が漏れる。

ルシカはそっと気付かれぬように、悩ましげな吐息をもらし少女から身体を離す。
胸の中に閉じ込め勢いよく床に転がったためか、少女の漆黒に輝く長い髪が彼に絡みついている。
少女の白磁のごとく白い身体に染まるのは、夜闇を切り取ったような漆黒色の髪と双眸。

闇から生れし至高神ホロの躰は、漆黒色。
そのため漆黒色は神の色彩であり、只人である人間の身には決して現れることのない色。
それほどまでに尊い色をその身に染める少女。

神官であれば…神に仕える神官であるからこそ、目を奪われてやまない色。

神官がその色彩を帯びた少女をその瞳に映したのなら…
どれほどの感動に心が痺れるか――きっとこの少女はわからないであろう。
いや、わからなくてもいいと、ルシカは思う。
そして自らの存在価値も尊さも、わからなくていい。

自らの価値の尊さに押しつぶされるくらいなら、そのまま何も知らないでわからないままでいい。

何も知らぬあなたでいいと思う。
…苦しむくらいなら。

それに…私があなたを守りますから。

だから、何も私に聞かないでください。
聞かれたら私は答えなければいけない。答えれば、あなたは知ることになる。知ることになれば、きっと苦悩する。だからそうなったら…今の私はあなたを支えることも守ることもできない。
そう。今の私はトトゥロ大神官長の命で動いているのだから。彼の人の命には逆らえない。
『真実のみを口にすること』との命を。
これは暗に少女を励ますだとか勇気づけるだとか、話を聞くことさえも禁じているのである。

だからきっと相談にも乗ってくれないそっけない私は、あなたにとって私は疎ましい存在、憎き存在となってしまうだろう…。

だから。
あぁ、だからお願いです。
私に何も聞かないで――聞かないでください！

――――――私の、愛しいひと……。

床に倒れている少女の身体を抱きあげ寝室から移動し、隣の部屋へと向かう。
ルシカはソファーに少女を降ろし、無言で朝食の準備を行う。

…んっ。

少女――もとい乙（きのと）は、だんだんと目を回した頭が正常に戻りつつあった。

目を何度も瞬かせ、ようやく周囲を確認することができた。

朝食の準備を終え、相向かいのソファーに浅く腰掛けこちらを見る青年と目が合った。

その青年は曇天を思わせる灰色の髪に、濃いとろりとした蜂蜜色の双眸をしていた。

…目を覚ました時に見た人だ。と思った瞬間、その青年の口からとんでもない言葉が漏れた。

「あなたは、自殺するつもりだったのですか」

「！」

乙は“自殺”という単語が出てきたことに驚き、またその怒気を孕む強い言葉に目を真ん丸くしてしまった。

青年の瞳を覗き込むと酷く悲しげに、そして真剣な色を湛えていることに気付いた。

――自殺だと、本気で言っているの…？

「…ち、違います。そんなことはしません」

「では…ではなぜ窓から身を乗り出し、飛び降りようと？」

そう言ってルシカはますます悲しげな色を瞳に濃く湛えた。

「ちちち違うよ――」と乙は内心焦り、自らの行動を振り返ってみたら…彼が言うこともなんとなくわかる気がしたのだった。

乙は窓枠から足をかけ身を乗り出していたのだから。

それでも…乙がいたのは2階の部屋で飛び降りても死ぬことはないのだが、それを自殺と勘違いするとは…

…心配されている？

そう思うとほんの少し、胸の中にある不安が薄くなったような気がしたし、とてもうれしかった。

彼の蜂蜜色の双眸を見つめ、乙は正直に答えた。安心させるように。

「飛び降りようとしたのではなく、まして自殺なんてしようとは思っていませんよ？私はただ、話がしたかっただけです。あの…。外にいる植物たちと。彼らと話して、理解したかったんです。…トトゥロ大神官長さんから聞いたことが…本当なのか。確認したかったんです。彼らは決してウソはつかないから…疑うつもりはなかったんですが、それに少し身を乗り出し過ぎましたね」…心配をおかけしましたとやわらかく微笑んだ。

少しばつが悪そうに。

ルシカはそんな乙の話を聞き、自殺ではなかったということに安堵すると同時に青ざめた。

少女の自殺を止めるべくして行った決死の行為は無意味であったというそれに。怪我はなかったが、目を回させてしまった…それに寝室はめちゃめちゃだ。

あぁ…何ということを。

乙はいきなり青ざめてしまったルシカの表情を見て「これはまさか…あの時のことを悔やんでいるのだろうか」と思った。

実際には、誤解を生むような行為をしてしまった私がそもそも悪いのだから、彼が気に病むことはないのだけれど…真面目そうな彼は後悔するのだろうなと思い、彼が謝罪などの言葉を言う前に慌てて言った。

「あの！さっきは、ありがとうございます。あなたは…自殺しようとする私を必死に止めようとしてくれたんですよね。いえ、あの。…誤解させるようなことをした私が悪いんですから――」

――だから謝らないでください。

きっぱりと言う乙。

その様子を見たルシカは、内心驚いていた。

まさかルシカが青ざめた内容をいち早く察しただけでなく、「気に病むことはないのだ」とも言うのだから！

そんな少女の聡明さと心の温かさに心がふるえたのだった。

あぁ…なんて……。

ルシカはその端正な甘い顔立ちにやわらかい笑みをたたえ「…わかりました」と呟き、今の今まで名乗りを忘れていたことに気付いた。

こんなところは上官であるトトゥロと良く似ているのだった。

「――紹介が、随分と遅くなってしまいました…申し訳ありません。改めまして、私はワーグナー国の中央神殿に仕えております、第一神官のルシカと申します。当分の間は私があなたのお世話をさせていただくこととなりましたので、何かございましたら遠慮なくおっしゃってください」

それに応えるように乙も言う。

「…ルシカさん。……わかりました。これからよろしくお願いします。私も遅くなりましたが…私の名前は速水乙です。速水が姓で、名が乙です」

紹介を終え、それぞれが相手の名前の響きを確かめ合う。

…キノトというのか…変わった名だが。あなたらしい名です――
とルシカが思っていた矢先、少女には決して聞かれたくないことを
聞かれてしまった。

「…ルシカさん教えてください。この世界について、私について――」

「！！！」

ルシカの胸がキリキリと痛んだ。何も聞かないでほしいとあれほど
願ったというのに！！！
私には何もできないのだから！
しかしそのような動揺は一切顔には表わさずに…彼は何の事でもな
いように言う。

何を知りたいのですかと。

乙は長い漆黒の睫毛を僅かに下げながら聞く。

私の“愛し子”としての立場について。そして…
――私は元の世界に戻れるのですか？

第9話　願い（後書き）

ルシカ思わず心の声出ちゃいましたね。…神官なのに。

願いというタイトル。だれの願いでしょうかね…

次、ルシカの言う”あの男”出てきます！

はい。男その2です。どんな人か楽しみ～ワクワク

第１０話　午後の嵐

乙はルシカに聞いた。
「私の“愛し子”としての立場」と「元の世界に戻れるのか」ということを。

その問いを聞いた瞬間、ほんの一瞬だけ、明らかにルシカの表情は硬さを増した。しかし乙本人は、彼から少し視線を下げていたので、その表情の変化には気付かなかった。そしてルシカもまた、気付かれぬようにすぐに表情を戻し、話しを切り出した。

「…わかりました。まずはあなたの立場についてお話しましょう。あぁ……その前に話の腰を折るようですが朝食をお召し上がりください」
乙の目の前に並べられた朝食を手で示し促した。

その気遣いを嬉しく思ったが、乙はその時朝食を食べる気分ではなかった。
そして…“あること”を心に決めていたため、それを決めるまではいくら勧められても食べる気は全くなかった。だから失礼かとは思ったが、丁寧に朝食はいらないと断った。
ルシカも特にそれ以上は勧めなかった。しかしその蜂蜜色の瞳には、悲しげな色が浮かんでいたのだが…乙は視線を下げていたためそのことにも気付かなかった。

「……では、お話いたしましょう。基本的なことから」

「はい」

漆黒色の瞳と蜂蜜色の瞳がぱちりと合う。
部屋には、静かな緊張感が漂っていた。

「…至高神ホロがリリーネルシアを創造したということは、聞いていますね。“至高神”ということですから、ホロ神がこの世界の“唯一の神”として在られます。ということは、神はホロ御一方（おひとかた）ということになります」

「…はい」

「またこの世界には精霊というものがいますが、これらは至高神ホロがこの世界を創造する際に、自身の躰から生み出した5つの力からやがて生まれたものなのです。この力というのは、木、火、土、金、水の5つのことです。これは至高神ホロが闇から意識を持ち、命をも持つこととなったのと同じく、5つの力がそれぞれに意識を持ち、命をも持つこととなった…それを精霊といいます。精霊は世界に沢山溢れていますが、そのほとんどは自らの属性の近くに在るんです」

――ほら部屋の外に見える庭園にも、多くの精霊がいますよ。木の中や風の中などにね。

彼は視線を窓の外の庭園へと移した。

つられるように乙も見遣る。しかし今の彼女には、庭園にいるという精霊をゆったりと見る余裕はなかった。なぜなら、先ほどから至高神ホロについて話すばかりで答えを言ってくれているようには思えなかったからだ。

確かに…私が“神の愛し子”と言うなら関係がなくもないのかもしれない。けど――

早く聞きたかった。

俯く乙の余裕のない表情を見てか、ルシカは軽く息をつき続きを話しだした。

「ここまでは理解できたようですね。では本題に入ります。」

乙は再び顔を上げ、彼の言葉に耳をすませる。

「あなたは、この世界の至高の神であるホロの“愛し子”です。そして…創世神話から現在に至るまで“神の愛し子”は…一人として存在していません」

「！！！」

「また、精霊たちにも極稀に“愛し子”が生まれますが、最近の記録でも今から１００年も前のことになります。…それほど“愛し子”という存在は特別ということです。神においても精霊においても…」

「！！！」

「そして“愛し子”ではありませんが、神や精霊から“加護”を受ける人もいますが、これもやはり希少な存在です。わかりますか？只人である私たちが、神や精霊と関わることの希少さを。」

「……。」

ルシカの話は乙の想像をはるかに超えていた。

“神の愛し子”と呼ばれる存在が、どれほど貴重で希少であるか！！！

事の重さに驚愕し、声すら出せずに固まってしまった。

なんということか……

乙の痛ましいほどの姿にルシカはそっと目を伏せる。

そう。“神の愛し子”は尊い。言葉では表しきれぬほどに…。

――私は、私にはあなたに今かけるべき言葉を持っていない。いや、持ってはいけない。事実のみを伝えるのが、今の使命だから。

さらに追い打ちをかけるようにいう。

「あなたはこの世界の神の唯一の“愛し子”。したがってあなたの立場は…神に次ぐ高貴なる存在です。したがって僭越ながら、あなたの籍は中央神殿に属し、ワーグナー国国王が後見人となることであなたを固くお守りいたします」

「……」

「そして元の世界に戻れるのかとのことについてお話しいたします。…トトゥロ大神官長がおっしゃるには、限りなく不可能に近いということでした」

「……」

「――その理由としては『あなたが最もその理由をわかって…』」そうルシカが言葉を続けると、それを遮るように乙は「もういいです！わかっています！」とヒステリックに叫んだ。そして目をギュッと瞑り、手で耳を閉じ何も聞きたくないというように俯いてしまった。

白い顔は青ざめ苦痛に顔を歪めていた。体は恐ろしさからか小刻みに震えていた。

その様子を見て、ルシカは血が出そうなほど唇を強く噛み締めた。

――ッッッ！！！私は、何も。何もできない…あぁ！！！

ルシカは何も言わずに立ち上がり部屋を後にした。

嘆き悲しむ乙を慰めることもできないから……。

乙がルシカが出て行ったことに気付いたのは随分後のことだった。

◆◆◆

午後の日差しが降り注ぐ庭園。
大樹の木漏れ日の中でぼんやりと芝生の上に座る人影が一つ。
…乙である。

あの後、部屋でぼんやりと考えでいたが何の考えもまとまらず、むしろ余計に頭がぐちゃぐちゃしてしまったのだ。
あぁ。これじゃ駄目…と気分転換がてら部屋の階下に広がる神殿の庭園に降りたのだ。
それに…昼食を運んできたルシカと顔を合わせるのが辛かった、ということもあったが。

はぁ…。
胸の中で溜息をつく。
もう口で溜息をする気力さえもなかった。
それほど、乙は追い詰められていた。自らのもつ貴重さと希少さに…押しつぶされそうだった。そして考えようと思っても何も考えられないでいた。
常ならば漆黒に煌めく双眸も、今は何一つ映してはおらず虚だった。
これほどまでに美しい庭園の中にいながら心動かされることなく、

また植物たちと何も話すそぶりを見せない乙は……異常であった。
植物たちも懸命に話しかけているが、そのことに全く気付いていないのであった。

どれほどの時間をそうしていたか。
乙は背後に人が近づいていることに全く気付いていなかった。

「……い。…おい。」
「……」
「…無視か？おいっ。おいっ！――――聞いてんのか！！！こんのガキッ！！！！」
「！！！」

怒声を含んだ大音量が辺りに響き渡る。
ビクッ！と反応した乙であったが、驚いたのは何もその怒声にではない。いきなり目の前に逆さまになった青年の顔が現れたからだ。
ななな何…？？？驚きに目を見開き、勢いよく身体を後ろに引くが、ドンッと何かにぶつかり身を引くこともできなかった。それもそのはず、青年は乙の後ろに立ち上から覗き込むように上体を曲げていたからである。
どうすることもできずにそのまま固まっていると、ニヤッと意地の悪い笑みを彼は浮かべた。

…してやったり。とでもいいそうな顔で。

すると青年は上体を起こし、乙の目の前に歩いてきた。
そして芝生の上に座っている乙を上から見下ろし、ジロジロと値踏みするかのように遠慮なく見るのだった。

この事態をよく把握できていない乙ではあったが、さすがに見られているということに気付き、少々居心地の悪い思いをしていた。
長身の青年から送られてくる強い視線に耐えかねて、クイッと顔を上げ彼の視線を受け止めると漆黒の双眸と碧い双眸が見つめあった。

青年はだれもが思わず見惚れてしまうほどの容姿をしていた。
太陽の光を集めたかのような輝かしい金糸の髪を持ち、襟足だけ長く伸ばしたそれを一つに束ねていた。
秀麗な顔に浮かぶのは、快晴の突き抜ける空を思わせるような碧い瞳。
また白い肌は健康的に日焼けしており、鍛え上げられた身体をより一層際立たせていた。その身に纏う服装は、白いシャツに濃灰色のベストと濃紺色のズボンとラフな格好だったが、気取らないその恰好が彼の魅力を引き立てていた。

年頃は２０代半ばと思われる文句なしの美青年であった。
しかし乙は、異性に対する興味を特に持っていなかったということと、それどころではない己の心理状況から「この人だれ？」くらいにしか思っていなかった。

突然――ブワッと強い風が庭園を駆け抜ける。
乙の長い漆黒の髪が踊り狂う。反射的に瞳を閉じた乙。

刹那。

額にやわらかい熱を感じた。
何…？乙は瞳を開き確認する――――――っ！！！
声なき悲鳴をあげた。目の前に見えたのは、青年のたくましい首筋

と顎のライン。
そして…額に感じたモノは彼の唇であった。

再び驚きのあまり、勢いよく身体を後ろに引き彼から身を離す。
ちゅっと音を立てて額から唇が離れた。

今度は、青年が背後にいないので離れることに成功した。
だが…身を引いたことで、彼の顔を見てしまい失敗したと思うのだった。
彼はニヤッと意地の悪い笑みを浮かべ、上から見下ろしていた。
――顔が近い。
身を引ける距離というのには限界があり、まだかなり顔が近かった。
ますます硬直してしまった乙を面白がるように、さらに笑みを深くする。

「…なな何するんですか」
顔が引きつるのを感じたが、なんとか抗議することができた。

すると今度は少し意外そうに青年は乙を見た。
それもそうだろう。普通の女子の反応なら、秀麗な顔つきの美青年のドアップやデコチューにまず間違いなく赤面したあげく卒倒すること必死だ。当のやられた本人は、驚いた反応は見せたがそれ以上の反応は見せなかった。

それを青年は…うーん。意外に慣れてんのか。はたまた意味すら分かってないかのどっちかだな。と一人愚痴るのであった。
そしてその秀麗な顔から笑みを消し、スッと真剣な眼差しで乙を見た。

「お譲ちゃん。な―に悩んでんだか知らないが、根詰め過ぎんなよ」

…えっ？思わぬ青年の言葉に乙は驚いて目を丸くする。
それになぁ…。と一呼吸おいて、再びニヤッと意地悪く笑い言い放つ。
…嫌な予感。

「いくら神殿の中だからって安心しきって今みたいに無防備な顔してると、悪い男に食われちまうぞ」
――俺みたいな。
「！」

思わずビクッと反応してしまうとそれに満足したのか、青年は乙の頭をまるで子供にするようにぐしゃぐしゃと掻き乱したのだった。
呆気にとられていると、ハハハッと快活に笑い乙に背を向けて去っていってしまった。
もう青年の姿は見えない。

…なんだったんだろう。
途方に暮れる乙であった。
神殿の庭園を吹き抜ける風のように、いきなり現れたかと思えばいつの間にかいなくなってしまった青年は、いったい何者だったのか、何のために来たのか…。

謎だらけだった。

そんなことを思う乙は気付いていなかった。
今まで押しつぶされそうになっていた心が少しだけ軽くなっていた

ことを。

第１０話　午後の嵐（後書き）

きのとの立場は驚くべきものでした。
呆然とするきのと。

そして…男その２でました～プレイボーイ！
でも、きのとには全く効いていませんでした。…手ごわいなきのと。

第１１話　悲愴

夜の帳が落ちあたりは静寂に包まれる。
昼間は太陽の光で白く輝く大理石の廊下は、夜になり淡い月光に微かな輝きを反射させていた。
淡く輝く廊下にルシカの濃い影が伸びる。
その影は彼の心を映し出すかのように悲しみの色を湛えていた。

はぁ…
今日何度目かという溜息をつく。
彼の手には、手つかずのままの冷えた夕食があった。
…乙の夕食である。
しかし彼女は一切夕食に手をつけなかった。それだけでなく、朝食も昼食も食べていないのである。
そう、もう丸一日何も口にしていない、水でさえも…。

少しでも食べてくださいと言っても食欲がないと口を閉ざし、せめて水だけでも飲んでほしいと懇願しても頑として口をつけなかった。
そんな様子を見たルシカは、きっと何か理由があるのでは?と踏んではいたが、それがなんなのかは全く思いつかなかった。

頑なな様子の乙。
何かあるとは思うが、ルシカは何も聞けなかった。

――私でよければ話してください。
――お願いだから話して。

――支えになりたいのだから……ねぇ、キノト。

そう言えたらどんなにいいか。
しかしルシカはその言葉を言ってはいけない。
私は神官。トトゥロ大神官長の命には逆らえない。
彼の言葉が蘇る…『事実のみを話し、無用な慰めや励ましなど一切無用』

……。

彼の端正な顔には常の甘やかさは微塵もなく、悲痛と苦渋に歪められていた。
唇をグッと引き結び、彼は乙の部屋を後にした。

ルシカが去った部屋。
寝室のベッドの端に腰かけ、ぼんやりと窓の外に見える大きな月を見上げる。
乙の漆黒の双眸に淡い光が反射する。

地球にいたときと同じような月がそこに見える。残念ながら星の位置は違うようで、星座はわからなかったが。それでもその星の瞬きは同じだった。
郷愁。
次々に思い出が浮き上がり乙の心を掠っていった。

――もう1日経った。

この世界に来たのは昨晩のことだ。

その時の記憶はないが、目覚めたら朝だった。
そしてこの世界のことについて、トトゥロ大神官長という偉い人から色々聞かされた。
ルシカさんには自分から聞いた。
今思えば、自分から聞いたのにもかかわらず『もういい』って叫んでしまった。酷いことをした…。
午後には神殿の中庭に降りてぼんやりした。
そしたら不審青年が嵐のように過ぎ去って言った。誰だったんだろう。

ぼんやりと考える。

……お腹がすいた。

考えてみれば今日丸1日飲まず食わずだった。
最後に食べた記憶は、仏像展の帰りに公園で食べたサンドウィッチか。

……お腹がすいた。
でも、食べない。
どんなにお腹がすいても。
いや…食べられない。今の私には。

それは乙なりの決意でもあった。

『食べることは、生きること』――――昔どこかで聞いた言葉。

だから――――。
まだこの世界で“生きる”と決めていない乙は、食べられない。

元の世界に戻れないと言うなら、ここで生きるしかないのかもしれない。
でも…だからこそ、今だに心の整理すら済んでない自分は、そのまま流されてはいけない。物を食べればそのまま生きてしまう。
…だから食べない。
整理がつくまでは。納得するまでは。存在意義を見つけるまでは…

あぁ。見つかるのだろうか。

締め付けられる胸の痛みに思わず俯く。
その小さな背中は泣いているようにも見えるが、一滴の涙もこぼれてはいなかった。

ただ…目を虚ろに見開かせているのだった。

◆◆◆

朝が来た。
やわらかい朝の光が降り注ぎ、小鳥の囀る声がそこかしこから聞こえてくる。

乙は起きあがる。
いつの間にか寝てしまっていたようだ。
昨晩はずっと考え事をしていたが相変わらず頭の中はぐちゃぐちゃとしていた。
軽い頭痛がした。それに喉もひりひりと痛み、体は水を欲していた。

ちょうどルシカが朝食を運んできた。
そして酷く苦しげな表情をして、召し上がってくださいと懇願してきた。
…食べるわけにはいかない。

結局その日1日、何も口にすることはなかった。

◆◆◆

また、朝が来た。
曇天の空に太陽の光がさえぎられる。
薄暗い室内。

薄らと瞼を押し上げるが、目の前に霞がかかったように視界がはっきりしなかった。
昨日とは違い起きあがることができない。

身体を動かそうとするたびに、電流を流したかのような痛みが全身に走る。
口の中はからからで干からびているみたいだった。

ルシカが朝食を持ってくる。

「――――。」
彼が何かを言ったが聞き取れなかった。
乙が意識を手放したからだ。
…酷く、眠い。
そのまま眠りに就くのだった。

その夜。
彼の手には手つかずのままの冷えた夕食が握りしめられていた。
…乙の夕食である。
もう丸3日彼女は、朝食も昼食も夕食も何も食べていない。もちろん水も…。

朝からずっと寝たままだ。今もまだ寝むり続けている。

…ずっとこのままなのだろうか。このまま、何も食さず衰弱していくのだろうか。
それが…キノト、あなたの意思なのか？

蜂蜜色の瞳は、苦しげで切なげで…
ルシカは何もすることのできない自分に焦燥していた。
ギリッと唇を噛み締める。
いやな味が口の中に広がる。

――――自分の無力さの味がした。

第11話　悲愴（後書き）

愛しい人の支えになりたいのに…ルシカは何もすることができない。
切ないですね。

そして次、男その2が再登場します。

第12話　吐露

目に映るのは、漆黒の闇。
眠る意識が、ふっと浮上する。
重い瞼を押し上げて、暗い夜闇をぼんやりと見つめる。

……夜になった…んだ。

そう。乙は朝に目覚めてから起き上がることなく、そのまま引き摺られるように意識が闇に落ちてしまったのだ。
だから、一日中眠り続けていたことになる。
そっと身体を起こそうと身じろぐと、全身に電流が流れたような鋭い痛みが襲った。
「！！！」
美しい顔を苦痛に歪める。それでも唇を噛み締め、我慢して起き上がる。

…その痛みが、乙には悲鳴に聞こえた。
全身を襲うその痛みが、もう3日間何も口にしていない身体が告げる…最後のシグナルのように。
空腹感を通り越した胃はもう何も訴えてはこなかったが、水分を取っていないために喉はカラカラで身体が干からびているようだった。
そして僅かに動くだけでも、全身に電流が流れたような痛みが襲った。

シーツから裸足を抜き取り、床に降り立つ。
身体がビリビリと痛んだが、かまわずに隣室のバルコニーへと移動する。

しんと静まりかえる闇夜は暗く、明りは天から降り注ぐ欠けた月の光だけである。
淡く白い清廉な光に導かれるように、バルコニーの端までゆっくりと移動する。
冷たい夜の風が乙の身体を撫でる。
白い肌は徐々に体温をなくし、青白く変化していった。
その陶器のごとくすべらかな青白い肌を淡い月光が包み込む。まるで乙自身が発光しているかのようだった。
漆黒の双眸は空に浮かぶ欠けた月をその瞳に映しだし、瞳と同じ漆黒色の髪は夜闇と同化するかのように妖しく揺れていた。

凄然たる美。
もはやこの世のものとは思えぬほど。
神々しくもあり儚くもあり、妖艶でもあり清廉でもあり…
そしてその瞳に宿るのは、切望だった。
ほそい腕を空に向かって突き出す。

…帰して。

かすれた声で呟く。乙の悲痛な心の叫びであった。
……つ！！！
求めるように突き上げていた手を降ろし、自身を抱え込んだ。強く。
強く。
固く瞳を閉じる。痛みを我慢するように。

…どれほどそうしていただろうか。
先ほどから乙を見上げる一対の目があることに全く気付いていなか

った。
そしてそれはしばらくすると、乙がいるバルコニーの近くに生える木に苦も無く登り、あっという間に2階のそのバルコニーに降り立った。
カツン――――ブーツのかかとが高らかに鳴る。
乙は気付かない。
そのことに内心苦笑しながら、背を向ける乙に近づく。

「…よう。お譲ちゃん」

乙に向けて明るく声をかける。その瞬間、ビクッと肩を震わせ声がした方へ半身を捻ると、その人物とひたりと目が合う。漆黒の双眸と碧い双眸が見つめ合う。
だれ…？
乙は僅かに思案し記憶を手繰り寄せる。
以前にもこうやって見つめあった記憶が…？そこではっと気付く。

「……昼間の？」

呟くと、「正解」と嬉しそうに青年は破顔した。

そう。この人物こそ、一昨日神殿の庭園で出会った青年なのである。
秀麗な顔は少年のように破顔し、碧い瞳は夜闇の中にあっても快晴の突き抜ける空を思い起こさせ、太陽の光を集めた襟足の長い金糸の髪は淡い月の光に照らされ光り輝いていた。
白いシャツはボタンが3つ外され、無駄なく鍛え上げられ引き締まった身体が見え隠れしていた。

乙はなぜここに青年がいるのか、その疑問を口に出そうとすると、それを遮るように彼が話しだした。

「…弱ってるな。何かあったか？
あんまり根を詰めんなっていったろ？お譲ちゃん。…ガキは……
笑ってろよな」
またニカッと破顔した。
その晴れやかな笑顔を見て、乙の中で何かにひびが入った。
そしてそれは、ガラガラと音を立てて崩れ落ちた。
「――――ッ」
その衝撃に耐えきれずに身体が膝から地面に崩れ落ちる。
パシッ。
すんでのところで青年が乙の身体を胸に抱き込む。
カタカタと小刻みに震えるか細い身体を感じ、さらに強く抱きしめる。安心しろとでも言うように。

しばらくすると、青年の胸の中に抱かれていた乙は再び震えだした。
――――泣いているのだ。
この世界に来てから不安と緊張とで押しつぶされそうな日々を過ごしていた。しかし決して泣くことはなかった。泣けばすっきりしたかもしれないが、涙は一滴も出なかった。それなのに、今大粒の涙がとめどなく溢れだしていた。何かが壊れたかのように、ポロポロ、ポロポロ…
なぜなのか…
良くわからない。
でも、青年の晴れやかな笑顔がきっかけとなったのは確か。

乙は青年の胸の中で縋りつくように泣きじゃくった。
震える背中をなだめるように、青年は大きな手で優しくさすった。
何度も何度も…。

すると乙は、心の中に渦巻いていた気持ちを吐きだした。
少しずつ。

自分にわからせるように…

わ…私、わかってた。全部。全部…。
この世界に何で来たかも。
全部全部。
んっ…ひっく。うぅ……。
も、もも…もし、この世界に私を連れてきたのが、だれかわかってたら…
連れてくる意味があって私を連れてきたんだから。な、何か理由があったからなんだっよ。
理由があって連れてこられたなら……私は説明聞いてさ。それで納得とかもできたと思う。
――怒ると思うけど。でも必要とされてるって。
この世界に存在する意味も見つけられるから…。

…でも、違う。本当はそうじゃない。
だ、だれも私を連れてきてない…。だれも。なのに、私はここにいる…。
それじゃあ、存在する意味がないよね…それは、必要がないってことで…。

それに――それに、それに！
私の家族。
私の家族は何かおかしかった。今考えると…皆は知ってたんだよ。
そう、私が違う世界に行くのを…。
そうじゃなきゃ…あの朝、何で『行っておいで』とか『怪我しないで、がんばれ』とか。
知ってたから、言ったんだよぉ――。
う…うぅ。ん……ひぅっ…。

なんで？
ど、ど、どうして。言ってくれなかったの？？？止めてくれなかったの？？？
わ…わた…しって…
――いらない子だったの？？？
――捨てたの？？？

あぁ…あ…うぅ。
ううん。ううん。ち違う、違うの……。
だれも何も悪くない。何にも…だって。
本当は…。
本当は本当は、全部…

――私のせい。

私が選んだこと。
知ってる。知ってるんだ。全部、全部、全部全部全部全部全部全部全部全部全部！！！

私がこの世界に来たのは…

――あの人に会いたかったから。…あの人に！

ずっと。ずっと、ずぅ――と、会いたかった。あの人のもとに行きたかった。

だから…あの人のいる世界に来た。
だから、あの時。あの人の手をとった。つかんだ。
そう…だから私は今、ここにいる。
誰のせいでもない……。
…家族だってそう。
優しい家族だもん。私が、行くか行かないか、それを選べるように。
心のままに選べるように…何も言わなかった。
そう。私の意思を尊重してくれたんだよ…自由に、ね。
だから…逆。逆なの。わ…わ…たしが。

――家族を捨てた。

捨てたんだよ。
私が。

私は、あの人のもとに行きたかった。
あの人に逢えた瞬間、わかった。一度も会ったことなんてなかった。
けど…わかった。私たちはずっと、離されてた。一緒にいるのが普通なのに…。
……やっと逢えた。
もう。離れたくなかった。絶対に。
だから…私はこの世界に来た。あの人のいる世界に…。

――ただのわがまま。

はぁぁぁ…。
わかってるよ。
だから、私には…この世界に存在する意味はないって。
だって、ただのわがままで来たんだから…。

…でも、でも見つけるよ。
きっと。存在する意味を…。そうしないと、皆に申し訳ないもん…。

だから――――精一杯、生きるよ。
生きるよ。

――――――――自分らしく。

嗚咽を噛み殺し、乙は自らの心の内を吐露した。
「…ずっと、わかっていたこと」と。
しかしそのことを受け入れてしまうには、辛すぎた。
いきなり違う世界にきて…さらに自らの“神の愛し子”という尊さにも！
だから、見えないふりをした。誰も頼ることのできないこの世界で。
…そうすることでしかできなかったのだ。
しかし、会って間もない青年の笑顔を見て、心の中にあったつかえが取れたような気がした。
なぜだかは分からない…。

青年は乙が吐露する間ずっと「…うん、うん」と促すように、ただやさしく聞いていた。
何も聞かずに、ただただ聞いていた。
そんな乙は泣きつかれ、しゃべり疲れ…いつしか眠ってしまった。
青年の温かな胸の中で。

おもむろに乙を抱き上げ青年は歩き出す。寝室へ。

広いベッドの上に優しく降ろす。
白いシーツに漆黒の髪が流れ、その上に輝く金の髪が落ちる。
漆黒の夜闇の中に浮かぶ月のようであった。

青年は、吐息がかかるほど間近に乙を見下ろす。
乙は目を赤く腫らし泣き疲れた顔をしていたが、その表情はとても穏やかだった。

じっと見つめる。
……――――――。

青年は乙の額に口づける。そして言葉を紡ぐ。加護の言葉を。

「…御光(みひかり)があらんことを」

そして付け加えるように…

「…漆黒の愛し子に」

そう言い終わると、踵を返し寝室を後にした。

夜空には、淡く輝く月が見守るように浮かんでいた。

第12話　吐露（後書き）

きのとがこの世界に来た理由がわかりました。
苦しいことを認めるのはつらいことです。頭では分かっていたことですが、心が追いつかなかった…ということです。

次で?章は終り。

第１３話　優しい光（前書き）

？章最後！

第13話　優しい光

「ここはどこ？」
上下左右どっちがどっち？
今、乙はやわらかい光の中にいた。
「どこ？」
わからない。でも頭のどこかでわかっていた。
そう。きっと振り返ればいるって――あの人が。

…いた。

やわらかく微笑んでいた。
乙もそれが嬉しくて、花がほころぶような笑顔を向けた。
どちらからともなく歩み寄り、見つめ合う。

『…愛しい子。私の唯一の子。私の名は、ホロ。私に教えておくれ、愛しい我が子の名を』

脳に直接語りかけてくるような不思議な声は、男性のようであり、女性のようであり。乙の脳に優しく響いた。

「ふふふ。私の名前は速水乙だよ」
『…キノト。キノト、キノト、キノトキノトキノト。あぁ…どんなにか焦がれたことか。愛しい子。やっと逢えた』
「わたしも。逢えてうれしい。すごく、すご――――く」

『私はキノトが生まれるのをずっと待った。それこそ気が遠くなるほどの時間を。そしてやっと生まれた。キノトが。しかし…生まれいでた先は、私の創りし世界ではなかった。必死になって探すと…なんと“地球”にいた。すぐにでもわが胸に抱き帰らんとしたのだが…キノトの世界の神々が抵抗してね。愛しい我が子を横取りしようとするのだよ。あぁ…阿修羅め、乱暴に攻撃しおって』

はぁ…と嫌な記憶を思い出したように顔をしかめた。

その事実に驚きつつもホロが子どものように悔しがる姿を見て、なんだかくすぐったいような気持ちになった。

…阿修羅って。ふふふ。やっぱり暴れん坊なんだ。

『…無理にでも、それこそ地球を更地に変えようとも、キノトを連れて帰るつもりだった。しかし、キノトを生んだ母御や家族の悲しむ姿を見るとなれば…無理強いはできないと思った。あぁ、だから断腸の思いで…私は…キノトを見守ることとしたんだ。時が来れば、私とキノトは繋がることができるから。強い絆で結ばれている私たちは、いつか、きっと逢える。――そうして、出会った。来てくれた。私のもとに！！！』

歓喜に打ち震えるように言った。

キノトは初めてホロと出会った時のことを思い出す。

あの日…森の中へ誘われるように行くと、大きな木が淡く白い光で輝いていた。

そして…腕が伸びてきて…

「あのときの人は、やっぱり…ホロだったんだね」

『そう。あの日、あの場所で全ての条件が揃い、キノトの世界に行くことができた』

異世界の神が、異世界に舞い降りることはかなりのリスクを伴う。
そのため、最も影響が少ない時に逢いに行ったのだ。それがあの日だった。

――やっと逢えた。

思いは一緒。
ずっと焦がれていた2人。

――うれしい。

ギュッと抱きしめ合う。長い間、離れ離れになっていた時を埋めるように。強く、強く。
光が溢れる。
そしてあることに乙は気付く――ホロの躰が漆黒色であることに。
ホロはその身から溢れる白光に包まれているため、てっきり白光色の色をしているのだと思っていた。髪も肌も。瞳はより強い金色で。
しかしこのように抱きしめて、すぐ近くで見たら違ったのだ。髪も肌も瞳も闇を切り取ったかのような、漆黒色。

そして思う…私と一緒だぁ。

乙の髪と瞳は、ホロの色なのだ。
日本人特有の黒目黒髪ではない、まして家族の遺伝などでもない。
乙は“漆黒色”の瞳と髪なのだ。
（ちなみに乙の家族は、茶目茶髪の色素が薄い家系だった。）

ホロの愛し子たるものがホロより受け継いだ色。

――――あぁ。うれしい。

ギュッとさらに抱きしめる。それにホロも応え、一寸の隙間もないように強く抱きしめる。

「ねぇ、ホロ。私はこの世界でどう生きる？」

…って、聞きたかった。

けど、そんなことを聞いてはダメ。甘えすぎ。

それに…きっとホロは答えてしまうから。

それではダメだ。

だって、自分で見つけるって決めたんだから。

存在する意味を見つけるって。

自分らしく生きるって。

「ホロ。私、この世界で生きる。精一杯。だから…見守っていてね」

見守って――――これは私のわがまま。でも、これだけは。これだけだから！

ホロを見上げる。

するとやわらかく微笑むホロの瞳と出会う。
漆黒の双眸が見つめ合う。

『もちろん。見守らせておくれ。愛しい子――漆黒の愛し子』

光が溢れる。

――ぅん。
ゆっくりと瞼を押し上げる。…夢？

今は夜と朝の狭間。
夜が終わろうとして、朝が始まろうとする瞬間。
窓の外には雲ひとつない群青色の空が広がっていた。

ホロ…。

乙は、美しく微笑む。

また逢える？

…いつでも。

ホロの声が聞こえた気がした。
うれしくなって、声を上げて笑った。

その瞳は希望の光に満ちて煌めいていた。
今後乙は“漆黒の愛し子”として、この世界で生きる。
眩いほどの光を放ち、強く強く生きる。

至高神ホロの唯一の子――キノト。

世界が言う。

「「「漆黒の愛し子に御光があらんことを」」」

第１３話　優しい光（後書き）

？章終了！
きのとがトリップしてからこの世界で生きることを決めるまでを描きました。
花垣も応援します「御光があらんことを」

次はおまけの回を挟みます。
内容は、きのとの家族のことです。生まれた時、成長する時、見送る時を描きます。あとホロＶＳ阿修羅もちょこっとだけ（笑）

そしたら？章です。
？章のタイトルはズバリ「群雄割拠（仮）」です。
あぁ…なんかあからさま過ぎかもしれません。
きのとが心配だ…

回想録　～誕生から旅立ち～

「美咲さん、美咲さん」
「なんですか？誠司さん」
「あの…お話したいことが…」
「…まあ。実は…私もお話したいことが…」
「あ。なら、先にどうぞ…」
「いえいえ。誠司さんこそお先にどうぞ…」

……。

互いに無言で見つめ合う。
そしてどちらともなく目をそらし、ぽっとほほを染める。
コホンッと気まずい雰囲気をごまかすように誠司は咳払いしつつ、
なら…と言葉を続ける。
「なら…。同時に言うってことでどうでしょうか」
第三者が聞いたら突拍子もない提案に思えるが、美咲は「それはいいかもしれませんね」と笑顔で答えるのだった。
互いに話したいことを同時に言う…
この手法で、互いの話す内容がシンクロする確率は極めて低いようにも思うが…特に拘っていないようで「名案だ！」と2人は面白そうに笑うのであった。

「では…せーので、いきますよ？」
「…はい」
幾分か2人は緊張をしながら、相手を見つめ返す。
「「せーの」」

「「今晩、子づくりしない（しませんか）」」

……。

互いに目を丸くし相手を見つめる。

“まさか相手も同じことを思っていたなんて…”

普通であれば今頃“羞恥”に顔を染めるであろう。なにせ、互いに“今晩子づくりしたい”ということを口にしたのだから。しかし当の2人は神妙な顔つきで相手をじっと見つめていた。

…あぁ。やっぱり。

互いに妙に納得した顔をしているのだった。

それというのも、今日一日中感じていたことなのだ。

「今日、子づくりしないと…」と。なぜかはわからないが、そう感じて仕方なかったのだ。

神妙な顔つきでどちらからともなく歩み寄り、仲良く手を取りつつ夫婦の寝室へと向かった。

2人が一晩中愛し合ったことは言うまでもない…

速水誠司と速水美咲は近所でも評判のおしどり夫婦である。

誠司の家は平安時代まで遡ることのできる由緒正しい神社の家系であり、そしてその分家の子でもある昔からの幼馴染の美咲と恋愛結婚で結ばれたのだ。結婚した当時は互いに高校を卒業したばかりの

１８歳という大変な若さだったが、周囲の不安をよそに結婚生活は順調そのもので、翌年には待望の赤ちゃんも授かった。赤ちゃんは一卵性双生児の双子の男の子で、喜びも2倍であった。夫婦は双子の兄を透、弟を遥と名付けた。
双子はすくすくと育ち、もちろん夫婦仲も円満。
周囲もうらやむ、絵に描いたような家庭であった。

そして時は経ち、夫婦が２９に、双子が１０になったとある日。
突如として異変は起こった。
いきなり「今晩、子づくり！」と思ったのだ。
はて？なぜか…？
夫婦仲はとてもいい。毎晩…とはいかないが、やることもやっている。
なのに、突然そう思ったのだ。しかも“今日でないとだめ！！！”と強く思ったのだ。
そして相手にその旨を告げると…相手もまた同じ気持ちでいるのだから、ますます不思議であった。
とても…不思議ではあるが、難しいことはあまり考えずに「では、愛をはぐくみましょう」と2人は一晩中愛し合ったのだった。

そして１０日ほど経ったころ、美咲は自分の体の異変を感じ取った。
「？？？」
なんだか…お腹が…変。――――変と言うか…温かい？
無意識に下腹をさする。そして漠然と理解するのであった。

――――子どもができた…。

「！！！」
すぐさま妊娠検査薬を使うが、反応は陰性だった。

しかし美咲はわかっていた。絶対に妊娠していると…確信を持っていた。
実際、１週間ほど経ったのちに再び検査し直すと陽性だったのだ。

それを確認すると、すぐさま夫である誠司にそのことを告げた。
すると誠司は美咲と全く同じ考えを持っていた――やはり…あの夜の…子どもだろうか？と。
そう。美咲もそう感じていたのである。
…突然あの日に感じた思い。
…そして今妊娠しているという現実。
もしや――神のお告げ…
夫婦は確信を持っていた。

あぁ。この子はきっと…

そして１０ヶ月後。
赤ん坊が初めてこの世で産声をあげる。
とても元気な声だった。
家族４人で生まれたての赤ちゃんを囲んだ。
新しい家族が増えたことに双子の透と遥も大変喜んだ。

それと同時に…家族全員が感じた――

この子は、違うと。
何が？
命の輝き…？まとう空気…？
はっきりとは誰もわからなかったが、家族皆が感じたのだ。

そしてきっとこの子は――

この子は？
きっとこの子は…いつか旅立っていくだろう。
この世界から。
どこへ？
わからない…けど。きっと、いつか。いつの日にか…
だから、それまでは。その時までは――持てるだけの愛を捧げよう。

家族はそう思った。そして誓ったのだ。

一生分の愛を、と。

◆◆◆

速水家に誕生した女の子は、乙（きのと）と名付けられた。
乙と言う名は、なんと陰陽五行説からつけられているのだ。
五行説の木火土金木水の“木”。その陰陽である甲・乙の陰の“乙”を名としたのである。
神社の子でありながら、陰陽道の基本ともいえる陰陽五行説から名が付いているということは、かなり異例なことであったが両親は全く気にしていなかった。
なぜなら心のどこかで確信していたからだ。
この子は、“乙”という名があっていると…
そしてこの子は、神社の子だからと言ってそれに縛られることもな

いのだと、もっと広く世界を見ることが必要なのだと…

乙は両親や双子の兄の愛に包まれ、自由にのびのびと成長することとなる。

乙が中学3年生の時。

高校の進路は?という時に、家族の期待通りに広く世界を見る決断を自らで下した。

「私、クリスチャン系の高校に行きたい」と。

もともと神社の子だったため、そっち方面の知識は幼いころから自然と身についていた。だからこそ乙は、違う世界のことも学んでみたいと思ったのだ。

そのことに家族は応援こそすれば、反対などしなかった。

だが、“自由に”と言っておきながら、特に父と双子の兄はあることを画策していた。

それは…乙を女子高に入れることだった。もともと乙は小中一貫の女子高に通っていたのだが、実はこれも彼らが画策したことであった。

というのも「かわいい乙を狼のなかにやることはできない」と猛烈に反対したためである。

幼いころからずば抜けてかわいらしい子どもであったことから、父や双子の兄は心配して「学校は女子高だ!」と乙を小中一貫の女子高に入れたのだ。

そしてさらに美しさに磨きがかかった乙に、さらに不安を募らせ「高校も女子高だ!」と、さりげなく乙に「この高校なんか、いいんじゃない?」とすすめたのだ。

さらに、乙が高校3年の時。

大学の進路は?という時に、またまた広く世界を見る決断を下した。

「私、国文学の仏教について学びたい」と。
そしてますます美しさに磨きがかかった乙に、さらに…さらに不安を募らせ「大学も女子高だ！」と、さりげなく乙に「この大学なんか、いいんじゃない？」とすすめたのだ。
よって、乙は自分の意図せぬままオール女子高の学園ライフを過ごしてきた。

父や兄は乙を超～過保護に育ててきた。
それも…まぁ…しょうがないことかもしれない。
全く自分の容姿に自覚のない乙を心配しての行動であったから…。
なにせ幼い時から、女子の中で生活してきたことで御洒落をしたり、男性の目を気にしたり…ということがなかった。そのため、容姿に関してかなり鈍感だった。さらに悪いことに、男性とあまり接してこなかったせいか“世の中の男性＝父や兄”という方程式が成り立っており、男性に対する危機感というものがないばかりか“人類みな兄弟”的思考でいた。これでは…危なすぎる。
だから何度となく、乙は変な輩に目をつけられたりしていた。鈍感すぎる行動のせいで…。
しかし乙自身はその事実を知らない。なぜなら、双子の兄が秘密裏に動いていたからだ。具体的に何をしていたのかは…黒過ぎて言えない。ただ、乙に色目を使った輩はまず間違いなく、目が虚ろになってしまったということ…。怖っ！！！

そんな乙を守るため、超過保護に育ててしまったのだ。
したがって父や兄がそうすることも…仕方がなかったのかもしれない。
母も渋々容認していたし…。

大切に大切に育てられてきたのでした。

◆◆◆

乙が２１歳の時。

五月晴れのある朝。
父と母、双子の兄があることを感じた。
それは明け方、不意に目を覚ました時に感じたのだ。

あぁ…乙が今日旅立つ……

そしてそれは、生まれたときに感じたことでもあった。
この子はいつかこの世界ではないどこかへ旅立ってしまうと。

もしその日が来たら、いつもと変わらぬ日常のなかで静かに見送ろう。
そして…そのことは言わないでおこうと。
乙が自由に、思うがままに選べるように…

…行くか行かないかを。

だから私たちは、何も言わないし何もしない。
そう、家族で約束したんだ。
だけど、せめて行ってしまう前に乙の大好物を食べさせたい。
朝から、ハンバーグは重いと思うけれど…食べてね？

これが、家族ができるせめてものこと。

…乙が今日旅立つ。

今日一日は、家で家族とともに過ごすものとばかり思っていたら、
大学のレポートのために仏像展を見学に行くという。
本当は止めたかった。
いつ旅立ってしまうかわからないのに…出かけるだなんて…
でも、家族で決めたことなんだ。
“変わらぬ日常の中で”と。

「行っておいで」
――うん。
「でも、怪我とか病気とかしないでね」
――うん？
「心配し過ぎ。だって俺の自慢の妹だぜ」
「そうそう。乙は乙だもんな。かんばれよ」
――――う…ん？

乙は不思議そうな顔をしていたが、構わず言う。
仏像展を見に行くくだけなのに…と、会話が成り立っていそうで成り立っていないことに困惑しているようだった。

旅立つ乙に言えるのは、この言葉くらい。
本当はもっと言いたいことは一杯あったけど、これ以上言ったら…
きっと何かあるってわかってしまうから。
ごめんね。
それに、笑顔で送り出したいから。

しんみりしちゃダメだから。
ごめんね。

愛してる。
愛してるよ乙。

ずっと、ずっと。私たちは家族だから。

いつでも帰っておいで。

ここは、あなたの家だから。

いってらっしゃい。

そう、笑顔で送り出すよ。

笑顔で送り出された乙は、自らの意思で選びこの世界を旅立つこととなる。

家族の愛を胸一杯に感じながら。

回想録　～誕生から旅立ち～（後書き）

きのとの温かな家族です。
そんな中できのとは育ってきたのです。

今後、どのような行動を起こしていくのでしょうか？
もう双子兄がいないから、悪い輩が来ても守ってくれないぞ！！！
生き抜いて！きのと！！

回想録　～ホロＶＳ阿修羅～

至高神ホロ。
リリーネルシアを創りし至高の神。
人々から厚く敬われる崇高なる神。

しかしそんな至高神ホロにさえ…嫌いなヤツはいる。

犬猿の仲。
２人が顔を突き合わせる場面を見た者は、もれなくこう思う。

しかしそんな噂を耳にすると、ホロもその者も共にこう言う。

『『そんな仲というだけで吐き気がする！！！』』
『『ヤツとは何の関わりもない赤の他人だ！！！』』

共に、一向に歩み寄る気はさらさらないのであった。

はぁ…。
あの日は忘れたくとも忘れられない特別な日。
乙に初めて逢った喜ばしい日でもあり、同時に嫌なヤツにも出会った最悪な日でもあるからだ…

◆◆◆

ある日のこと。
至高神ホロは悠久なる時の中で、自らの愛し子が生まれることを予

感した。
以前から子がほしいと願っていたのだが、それがやっと現実のものとなりこの世に生まれい出てくることとなったのだ。
待ちに待った我が子がやっと…ホロは歓喜に打ち震えるのだった。
まずは我が子を胸に抱いて、沢山頬ずりして、色々な服を着せて、それからそれから…思いは膨らむのだった。
しかし残念なことに、ホロが我が子と過ごそうと考えた予定は脆くも崩れ去ることとなる。
運命の悪戯か…はたまた誰かの差し金か…
それは神である者にもわからない…

…ホロは焦っていた。
愛し子が生まれたことが分かったのだ。だから迎えに行こうと思ったのに…どこにもいないのだ。
ホロが創りしリリーネルシアには…いないのだ。
半狂乱になりつつ隅々までくまなく探したのだが、やはりいないのだ。
『なぜ!?どこにいるのだ!?』
至高神と人々から厚く崇め奉られる神とはいえど、今はただの親であった。
子どものためならなりふり構ってはいられない。
探さねば!!!と。
手っ取り早く地上に舞い降り探したかったが、そうなれば強い神気の影響を受け悪ければ何人も住むことのできぬ死地になってしまう。
だからなけなしの理性でもって自らを制し、天界より力を揮うことにしたのだ。それでも隅々まで探査の念を飛ばしたことで、リリーネルシアは過度の神の干渉によりバランスを崩してしまった。
――天候不順による食糧危機。
人々はそれを神の怒りととらえ、日々清廉に生きることを神に誓い

許しを乞うたのだった。
まぁ…怒りというか…ただ子を思う親の暴走だったのだが、被害がそれだけで済んだことは奇跡に近かった…。

しばらくしてホロは、この世界には愛しい我が子が“いない”と結論付けた。なぜいないのかはわからなかったが。それでも一刻も早く探さなければならない。
…この世界にいないということは、ならば…違う世界にいるのか…
よし！！！
思い立ったが吉日。
すぐさま異世界へと探査の念を飛ばした。
だがいくら神とはいえど、異世界に力を発し干渉するということは容易ならざることであった。それでも、人の時間に換算すれば一刻ほどの後に…見つけたのだ。
愛しい我が子を！！！
我が子はなんと“地球”という世界にいた。
だが…何と面倒な場所にいるのか。ホロは思わず奥歯をかみしめた。そうホロが思うのも無理はない。なにせこの世界には…神が沢山いるのだから。
ホロが創りし世界リリーネルシアは、唯一の神としてホロがいるだけ。なのにこの世界は多くの神々がいた。さらに、我が子がいる日本国には…八百万（やおよろず）の神々がうようよといるのだから厄介この上ない。

はぁ…。
溜息をつきながらも『まずは接近！』と、リリーネルシアの天界から念を飛ばし愛しい我が子を垣間見る。
まだ生まれたての、真っ赤な我が子を。

…あぁ。やっと逢えた。

私の愛し子…。

ずっと焦がれていた子は美しく珠のように輝いていた。
ホロは念を飛ばし垣間見るだけではなく、直接胸に抱こうと無意識のうちにこの世界に舞い降りようとしていた。舞い降りた際にどれほどの被害が出るのかということは考えずに。ただただ我が子を求めたのだ。

ぐっと力を集め、今まさに意識のもとに身体を持っていかんとした瞬間――――

バッチン！！！

何かがホロを攻撃してきた。
それもありったけの力と、ありったけの殺意を込めて。

『！！！』

まともに攻撃を受けたホロは身体を持ってくる前に弾き出されてしまった。
『なにやつか！！！』
ホロは臨戦態勢に入り、相手を見据える。
『あぁ？テメェ…なにやつってか？こっちが聞きたいわ！勝手に異世界から殴りこみやがって！！ふざけるなぁぁァアアッ！！！』
怒気も露わに姿を見せたのは、三面六臂の阿修羅である。
『お前わかってんのかよ。帰れ、すぐさま帰れ。このくそ野郎！！！』

――――ブチンッ。

ホロの中で何かが切れた。常の柔和な面差しが一瞬にして憤怒の形相になり、目は相手を射殺すような殺意の色を宿した。
『…先ほどから黙って聞いておったら。…貴様。誰に物を申しておる…雑魚の分歳で私に意見するか！』
『はんっ！何様だか知るわけない。いいや知りたくもないな！』
『雑魚が。貴様を滅さずにいるのは取るに足らんからだ。命拾いしたと思い、疾く立ち去れ！』
『…っ！！なんだとこらぁ？コケにしやがって！ここは俺たちの世界だ！！テメェが出てけ！』
『いいや。私はこの世界に用があるのだ。それが済むまでは退くことはできん！』
『用だと？！あぁ？！んなもんどうだっていい！！テメェがいるとバランスが崩れんだよ！』
『そんなことは関係がない』
『関係ないだと！！…それでも神かよ！！』
『そうだとも。私は神。だがこの世界の神ではない。よって、私がこの世界のことを気にかける必要もない』
『…っ！！なんつ―やつだよ！！ふざけんな！！！』
『ふざけてなどおらん、いたって真面目だ。私の用が済めば良いのだ』
『あぁぁアアア――――！！！！ヤメだヤメ！！！！テメェと話してても埒が明かねえ。こうなったら実力行使といこうじゃねぇか！！！覚悟しろ！！！くそ野郎！！！』
『あぁ。望むところだ！後悔するんだな！！雑魚が！！！！』
矢継ぎ早にののしり合い、互いにギッと相手を睨め付け臨戦態勢に入る。

――――――――！！！！

両者が飛びかからんとした刹那。

パンッ――と手を打ち鳴らす音と気の抜けた声が辺りに響く。

『は～い。そこまでぇ～』

ピリピリとした空気の中で異様なまでの気の抜けた声。

限りなく場違いな声に2人…2神はこれを止めた相手を睨みつける。

『『……』』

『あはは。そんな顔しないでよ～。喧嘩なんかダメダメ。阿修羅も、せっかく止めたのに自分から喧嘩売るなんて…バランスを崩すどころか、世界を壊すつもり？』

阿修羅は正論を言われてバツの悪そうな顔をした。

『わかればいいよ。あぁ、あなたもね。もう少し冷静になってね』

ふふふっと笑顔を向けながら言う。

ホロはじっと観察するように相手を見つめる。その視線に気づいてか、ああそうだ！と何かを思い出したかのように再びしゃべりだした。

『自己紹介が遅れましたね～。私は四天王の毘沙門天。多聞天ともいって“よく聞く者”との意味をもつよ。で、こっちにいるのが阿修羅、八部衆の一人。私の配下の八部衆の夜叉がねぇ～同僚の阿修羅が暴れてるって報告するから来てみたんだぁ。そしたら…こんなことになってるしさ～』

話を遮るように阿修羅が割り込む。

『ち、違う！俺はこいつを止めるために…暴れてなんかいねぇよ！！』

『はいはい。後で君のことはゆっくり聞くからねぇ。では…あなたは一体どちら様？』

人畜無害です的な顔でいきなりホロに話を振り仰ぎ見た。

『……』

ホロは内心「ここまで来て言わないわけにもいかないか…それよりも早く我が子を抱き連れて帰りたい。この場は相手に合わせるのが

得策」と思い平静を保ちつつ話しだした。
『…私は、リリーネルシアを創りし神。至高神ホロ。…用あってここに来た。案じずとも済めば疾く帰る』
『…う～ん。その用っていうのが…問題なんじゃ？それが何なのか教えてくれないかな～まぁ、何となくわかっちゃってるけど』
ニコッと笑いながら毘沙門天は言うが、目は「さっさと吐いちまえ」と全く笑っていなかった。
黒いヤツ…と内心溜息をつきながら、しょうがない…とここに来た訳をいやいや話すのであった。

――――。

一通りの話を聞き理解したのか、毘沙門天は顎に指を当てしきりに頷いていた。
『そうかぁ～。いやね、なんだか不思議な気配の子どもがこの世界に生まれてね、誰の子かと思ったら…そう君の子かぁ～。』
うんうんと何度も頷く。
『でもね。だからって、いきなりこの世界に来ちゃだめでしょ。あなた至高神っていうくらいだからかなり力あるし…この世界に身体ごと来るなんて――――この世界壊す気？』
目を細め咎めるようにホロを見つめる。
『…そうなろうとも。この世界を更地に変えようとも、私は愛しき我が子を連れて帰る』
『ふ～ん。この世界がどうなろうと関係ないってか。いいね、その精神。ゾクゾクするよ。…まぁ、こちらとしてもあの赤子と帰りたいっていうなら素直にお渡しするよ～。もともと君の子だし。…でも、こちらの世界に被害をもたらすことはお断りするよ。…それに部下の報告では、ある条件が揃えば最低限の被害のみで、あなたは

この世界に干渉することが可能だとさぁ～。つまり条件が揃えば身体ごと来ることができるし、その時に子どもを持ち帰ることも可能だってこと。どう？こっちの方がいいんじゃない？…至高神ホロ』

『……』

毘沙門天はわざわざ最後に“至高神ホロ”と付け加えるように言った。この言葉は「あんたも神なら最善の策を選べ」と念押しする意味を含んだものだった。

ギリッと奥歯をかみしめる。ここまで来た。やっと我が子を抱けるところまで来た…それなのに、それすらできないことにホロは苛立っていた。至高神ホロともあろうものが…自らの力のなさに胸が痛んだ。

そんな辛そうな表情を見た毘沙門天は…慰めることもなくさらに追い打ちをかけた。

『…それにね。その赤子は、人だ。神じゃない。だから人の世で生きることが、その子の幸せにもつながる。あなただってそれはわかってるだろう？どっちにしろ向こうの世界に行ってから、人の世で育てようと思ってるんだろう？なら…この世界で成長しても同じことだと思うなぁ～。…至高神ホロ』

『……』

『それに、見てみなよ～。あの子どもの家族。…何かしら感じ取ってるみたいだよ。普通の子じゃないってね。あの家で成長するなら安心かもね～。そう思わない？至高神ホロ』

『……』

『あっ！それにね。ふふふ…。あの子本当に可愛いし、不思議な気配持ってるし。…他の神もかなり興味持ってくれてるし、気に入っちゃってるみたいだよ！だから安心して我々に預けなよ。決してあの子が傷つく様なことにはならないからさ。ねぇ？…至高神ホロ』

『……』

はぁ……。
内心で盛大に溜息をつく。ここまで言われてしまえば…反論はできない。この世界の神々が全力で、我が子を守り育てるというのだから、危険はないといえる。だが…それまでは私は愛しい我が子を子の胸に抱くことすらできない。
はぁ……。我慢…するしかないのか…。
その瞳に悲痛な色を湛えて、決断する。
本当は嫌だ。でも…それしか道がないのも確か。
身も心も引き裂かれる思いで言う。

――――我が愛し子を頼むと。

毘沙門天は晴れやかな笑みで、了解いたしましたぁ～と人ごとのように言った。
その態度に内心呆れつつ、ずっと沈黙を守っていた阿修羅をふっと見たら…我が子を凝視していた。
その様子に先ほどの毘沙門天の言葉が蘇る“他の神もかなり興味持ってるし、気に入っちゃってるみたい”
…よくよく周囲を見回してみると、物陰に隠れながらかなりの神々の目が我が子に降り注いでいた。

…はぁ……。
我が子ながら、その魅力に脱帽した。
こうも神々に気に入られてしまうとは…と逆に心配になるホロであ

った。

だがいつまでもここに念を飛ばし続けるわけにはいかない。
実際、少しではあるがこの世界のバランスが崩れかけていることに気付いていた。まだ少しで済んでいるのは、おそらくこの世界の神々が何とか調整しているからだろう。

…名残惜しいが、そろそろ去らねばならない。

ホロは毘沙門天を見つめる。
そして、もう一度言う。

『愛しきわが子を頼む。私が迎えに来るその時まで』

そう言い残し、白光とともに姿を消した。

その姿を静かに見送る毘沙門天。
…やっといったか。と吐息とともにぽつりとこぼした。

実際、ホロが強行手段に出たら…この世界の神総出でも勝てたかどうか怪しかった。なにせ相手は世界そのものの力を持っていると言っても過言じゃない存在…いやそうだろう。“世界を創った至高神

”といったのだから。
力の差は歴然であった。
平和的に解決できてよかったと心底思うのであった。
……少しばかり、世界のバランスが崩れてしまったが…治せないわけではない。

そう思えば上々な出来だと思い、去って行った虚空を見つめる。
…いつか来る時まで、大切に守り育てるよ～至高神ホロの愛し子を。
少し目を細め、誓うのであった。

気分が良くなり、忘れていたことを思い出す。

――はい。さ～てと。いっちょいじめますかぁ～。
ニヤリと不敵な笑みを浮かべ、阿修羅を振り返る。
『阿～修～羅～君。君の責任は…どう落とし前つけよっかぁ～？』
『ギィィイイヤアアア――――！！！！！！』

空には阿修羅の絶叫が響き渡っていた。

阿修羅は思うのだ。
あいつさえ来なければ…俺は……と。

◆◆◆

ある日。
仏像展ということで、人の見世物状態になっていた阿修羅は人ごみ

の中でふと見つけた。
美しく輝く女性を。
その女性は熱心にこちらを見ていた。

…乙だぁ。

自分からは何度も様子を見に行ったりしていたが、向こうから来るなんてことはなかった。
まぁ。当然だが…。

うれしくなった阿修羅は、ふっと微笑んだ。

常人には見えるはずもない笑顔であったが、乙は気付いたようだった。
えっ！？
大きな漆黒の瞳を何度も瞬かせていた。
その様子に阿修羅はとてもうれしくなった。
しかし…今日で乙ともお別れ。
今日はあの神が迎えにくる日だ。胸糞悪いが、約束だからしょうがない。
でも、最後に乙の愛らしい表情を見ることができて本当によかったと思う。

ありがとう。

ありがとう、乙。

元気でな…

届かない声を吐息にのせ阿修羅は言う。

――この子に幸多からんことをと。

美しく微笑む乙を最後までずっとずっと見つめるのだった。

いつまでもいつまでも。

回想録　～ホロＶＳ阿修羅～（後書き）

コメディー風にかけたでしょうか？個性豊かに3者を書けて楽しかったです。
毘沙門天が…黒いし、ドＳ！！　阿修羅がいじめられてましたね～（笑）
ホロはきのと至上主義的なところあり。

２０００字くらいの小話にしたかったんですが…なんと５７００字いっちゃいました。本話より長くなるおまけ話…過去最長の文量です。

次は？章ですが、その前に？章を全話改正すると思います。

第1話　お披露目（前書き）

？章スタート！！！

第1話　お披露目

速水乙（きのと）２１歳。

乙がこの世界、リリーネルシアに舞い降りてからちょうど1カ月が経った。

その間、神殿内で人目を避けてひっそりと生活してきた。

というのも乙は至高神ホロの唯一の愛し子であり、“漆黒の愛し子”と呼ばれる神の次に尊い稀有なる存在であり、おいそれと存在すら明かすこともできない。そのため、今まで一部の極限られた者と接し限られた範囲内で生活してきたのだ。

制限される生活は窮屈で息が詰まることには違いないが、本人は特にそう感じることもなく「日々を有効に有意義に過ごそう！」と自ら希望して言語習得に向けて日々勤しんだのだ。

なぜかというと、乙は“神語”を話すことができるため意思疎通に関しては何の苦もなかったのだが、読み書きに関しては…やはりだめだった。よってこれから生活していく上で必ず必要となってくるであろう読み書きを習得しようと決め黙々と勉強してきたのだ。

乙の学習意欲が高いことやルシカやその上司であるニース神官長の教え方が大変上手であったこと、さらには元々ワーグナー国で使われる文字は英語のアルファベット表記によく似ていたことも相まって、メキメキと上達していったのだ。

そのため今では簡単な本なら、そう時間をかけずに読むことができる程にまで上達していた。

また1カ月みっちりと言語を勉強したことで乙に更なる学習意欲がわいたことは言うまでもなく、もっともっとワーグナー国ひいてはこの世界について学びたいと強く強く思ったのだった。

このように乙は大変充実した日々を過ごしてきた。
また何日かに一度は必ずトトゥロ大神官長自ら会いに来ては、他愛無い話はもちろんのこと乙の処遇についても色々と話しながら楽しく過ごしていた。
以前はそのようなことに関して全く何も話してはくれなかったが、だんだんとこの世界に馴染み乙の心にも余裕が出てきたことで、話してくれるようになったのだ。

「この国で自由に思いのままに生きることができるように…」

トトゥロは乙の今後のことを鑑み、神殿上層部や国王や大臣らと慎重に協議を重ねたのだった。
その結果、乙は表向きにはトトゥロの遠縁の娘ということとし、至高神ホロの愛し子である“漆黒の愛し子”であるという事実は神殿や国の上層部に位置する極限られた者のみが知ることとし、またいずれ時が来たらその他の者たちへも知らせるようにすると決めたのだ。

ちなみにその“極限られた者”というのは…
中央神殿では大神官長、神官長3人（ドロリア、パル、ニース）、第一神官15人（ルシカ、他）。
ワーグナー国では、国王陛下と王太子殿下、宰相と大臣10人である。

ようやく正式に乙の処遇が決まり、乙の心も安定してきたということで、ずっと先延ばしにされていた神殿や国の上層部に位置する者たちとのお披露目の日を今日迎えることとなった。一応表向きには、トトゥロの遠縁の娘である乙を国王陛下に目通りさせるというものだった。

また乙の事情（漆黒の愛し子であるということ）をくみ、お披露目は非公式ということで進められる手筈となっていた。

しかしなぜ、非公式にも関わらず“表向きの理由”をわざわざ作りこんな回りくどい方法をとるのか…疑問も湧く。

…だが仕方がなかったのだ。

なぜなら国や神殿の上層部に位置するものが王宮に“一堂に会する”ということは嫌でも人の目を引く。なんせ彼らは公人であり「王宮に行く」という行動一つでも、大勢の使用人たちや王宮の者たち他の貴族連中に“バレる”し、王宮でそれも非公式で“何か”をするとなれば噂が自然と広がるわけで…日々の生活に刺激を求める使用人たちの良いカモである。また妙な噂も立ちかねない。

例えば、「非公式で国や神殿の上層部が集まってた…内容は秘密らしいよ！」「これはなにか悪い知らせ？」「もしかして…また戦争とか？」「私、〇〇様が真っ青な顔していたの見た」「じゃあやっぱり！」「〇〇って噂本当だったの？」「そうそうこの国経済状況悪いらしいよ」「うっそ！」「私の御主人がこのごろ景気悪いって言ってた」「やっぱり？非公式で何かとんでもないことやってたんだ！」…云々。

非公式ということで関係者以外を締め出すことはできても、どのような関係者が集まったのかという事実を消すことは容易でないし、またどのような内容なのかも表向きにでも知らせておかないと、逆

に変な噂も立ってしまうのだ。
よって一番簡単にこの場を収めるために、“トトゥロの遠縁の娘の目通り”という理由を出したのだ。

だがここでまた一つ疑問が…その理由で本当に大丈夫なの？ということ。
しかしこれが意外に大丈夫なのだ。
なにせトトゥロは大神官長となって久しく、その名声は各国にまで轟いている。そのため色々と“探り”を入れられたりもする。彼の出身は？家族は？血縁者は？…それを盾に脅すことはできるか？といった具合に。
だがトトゥロについての情報はそう易々とは入手できない。それというのも彼自身が“力”を用いて誰にも探りを入れられないように強力な目くらましをかけているからだ。また以前にも今回と同じようにトトゥロの縁者を紹介したこともあった（もう少し小さい規模ではあったが）
だから乙を遠縁の娘としてもばれることはないし、国や神殿の上層部へ“お披露目”という理由でも特に怪しまれないのだ。

そしてその非公式という場でも一応表向きの内容に乗っ取って皆が“演じる”ということも決まっていた。
関係者以外締め出すというのだからそこまでしなくともいいのではないかと思われる。
しかしこれも…仕方がなかったのだ。
ここは陰謀渦巻く王宮。どんな者たちが潜んでいるとも知れない魔窟。
非公式といえども、どこからか覗かれるとも限らない。特に間者たちに。
だが本当に誰にも聞かれたくないとするなら“力”を使って部屋自体に結界を施し外部から干渉できないようにすることもできる。（ち

なみに“力”というのは、至高神ホロより生まれいでた“木火土金水”の力の片鱗のことで、神官であれば程度の差こそあるが修行によって全員使用することができる）

しかし残念なことに“結界を施した”とわかる者には気付かれてしまうので、これまた余計な詮索を招くこととなる。噂以上に厄介なことに…。

そう、渦中の乙の身が危なくなるのだ。結界を施すほどの重要な人物だと…。

よって、もし覗かれたとても大丈夫なように念には念を入れて皆が“演じる”こととしたのだ。

この様に言うに言われないもろもろの事情がある中で“お披露目”が行われるのである。

「……」

「ふふふ。…キノト、そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。私が付いていますから」

「……」

「それに、今回はそう形式ばったモノではないですし。まぁ、人数も３０名ほどですし気負わないでください」

「……」

「国王陛下も大変気さくな方ですから。それに神殿の者なら見知った顔もありますでしょう？」

「……」

「…キノト？聞いていますか？…キノト！」

「…は…はぁい」

緊張のためかルシカの呼ぶ声に思わず変な声を出して返事をしてしまった。

今、乙とルシカはこれからお披露目が行われる王宮の広間へと続く、重厚で優美な装飾の扉の前に立っている。

…というのも今を遡ること5日前。

トトゥロから「ワーグナー国の国王陛下や大臣、神殿上層部の者たちにキノトをお披露目する」ということを話のついでとばかりに言われたのだ。

突然のことに驚き乙は「無理です――――!!!」と焦った。

何せ国王だとか、国の上層部に位置する人だとか…今まで生きてきた中で聞いたこともないような“すごい人たち”に自分が“お披露目”されるなんて…

日本でごくごく普通の一般市民として生きてきた乙にとっては、考えすら及ばない未知の事柄であった。

しかしそんな乙の反応を見越してか、トトゥロは淡々と「あなたは神殿に籍を置き、国王陛下を後見人としておられるのじゃぞ?それなのに挨拶もしないとは…まさか言わんじゃろうのぅ???」からかいを含んだ優しい眼差しを乙に向けた。

そう言われてしまえば「はい」としか言えず、渋々ながらも了承してしまった。

…まぁ、挨拶はしないとね。日本人としての基本だし…とぶつぶつ独り言を言っていた。

そんな2人の様子を見ていたルシカは「大神官長のあの顔には気をつけないと…」と心の中で身を引き締めたのだった。

…本来ならば神の次に尊い乙に脅しまがいの言葉を投げかけること

は不敬に当たるだろう。だが乙たっての希望で「普通の人と同じように接してほしい」と頼んだのだ。もちろんトトゥロも無闇矢鱈と傅かれ敬われ、息も詰まるような生活をさせたいとは思っていないし、乙の自由に生活させたいと思っている。だから乙の希望を受け、そう接しているのだ。…愛しい我が子のように愛情を持って。

了承した乙はその後、一通りの作法などを教わりつつ、お披露目のためのドレスの採寸などを行ったりと常とは違うめまぐるしい日々を送ったのだった。

そして本番を迎えた今、大いに緊張しまくりの乙は扉の前にルシカとともに立っていた。

そんな緊張する乙を見て、ルシカはそっと乙の頬を両の掌で包み込んだ。

「大丈夫ですから…さあ、私を見てください」

ふふふっと乙を見て微笑み、大きな漆黒の瞳を覗き込んだ。

緊張に揺れる双眸の中にルシカが映り込んでいた。

「…そう、そうです。何も緊張などする必要はありません。…ありのままのあなたで」

――大丈夫。

優しく微笑むルシカを見て、頬を包み込む温かな掌を感じて…

乙は少しずつ落ち着いていった。

漆黒の瞳と蜂蜜色の瞳がやわらかく絡み合う。

「…うん。ありがとうルシカ」
固い花がほころぶようにやわらかく微笑んだ乙にルシカは一瞬見惚れてしまった。
今の状況を忘れてしまうほどに…。
思わずふにゃけてしまった顔をあわてて引き締め、少し名残惜しそうにしながら薔薇色に染まる頬から手を離した。

「…では、いきましょう」
「はい」
しっかりと前を見据え、歩き出す。

重厚な扉がそれに合わせ音もなく開く。

パッと開いた瞬間乙の目に飛び込んできたのは、奥へと一直線に伸びる目にも鮮やかな緋色の絨毯とその少し離れた脇に居並ぶ人々。
向かって右側に宰相と大臣たちが、左側には神官長と第一神官たちが。
そして緋色の絨毯の向かう先には、悠然と椅子に腰かける…国王陛下とその脇には、トトゥロ大神官長が。

臆することなく真っ直ぐ歩き、乙は国王陛下の前で止まり優雅に一礼する。
その所作に合わせ、麗しいドレスがさらさらと動く。

今日の乙の装いは、淡い空色のシンプルなドレスで首元はレースに覆い隠され腕も長袖という大変露出度の低いものであり、閉塞感ある固さを漂わせていたがそれが逆に“尊さ”や“不可侵”といった

イメージを湧かせ、乙がただの“娘”でないことを言外に物語っていた。
…もちろんこの広間にいる者は、乙がただの娘でないとわかっている。

また、乙は5日間という短い間で身につけたとは思えない、皆が見惚れるほどの完璧な礼をして見せたのだ。
練習では乙の呑み込みが大変早かったことや元々備わっていたのだろうと思われる洗練された身のこなしにより、難なく完璧な所作の礼を身につけたため指導をしたニース神官長やルシカを大いに唸らせた。「まさかここまで！！！」と。
まぁ、それはそうかもしれない。
何せ乙は由緒正しい神社の子として育ち、幼いころから礼儀や作法に関しては大変厳しく躾られてきた。その甲斐あって、全く知らないこの国の所作にも意外にも早く対応することができたのだ。

礼をし終え、スッと瞳をあげる。
…なんと国王陛下を正面から見据えたのだ。
「！！！」

普通であればこの様な場で、国王陛下ともあろう御方の目を見るなどあってはならないことである。（まぁ、今は演技中ではあるが…）しかし乙はそのことをすっかり忘れた…のではなく、あえて目を合わせたのだ。
――瞳を見たかったから。
のちに乙はこう語った。ただ瞳を見たかったのだと…。

フッ。
その様子を見た国王は、口元を緩めた…おもしろいと。

本来であれば、上座に国王が座することは間違いなのである。なにしろ乙は神の次に尊い“神の愛し子”なのだから。しかし今皆が演技中で、乙も国王より低い身分の役を演じているはずなのだが…それを無視して興味本位で目を合わした。

…国王が乙をおもしろいと感じるのも無理はない。乙のために心を砕いて皆が“演じて”いるのに、それをあっさりと当人が壊してしまうのだから。

国王はおかしそうに乙を見据えたまま口を開いた。

「我が名はルドルフ・ウル・ワーグナー、このワーグナー国の王である。そなたのことはトトゥロより聞き及んでおる、遠縁の娘であるそうな。…名を申してみよ」

「はい。お初に御目にかかります。私は速水乙と申します。姓は速水、名は乙です」

「ほぅ、キノトというのか。なかなかに変わった名であるが、良き響きだ」

「ありがとうございます」

良い響き…そう褒められ思わずにっこり笑ってしまった。

その様子を見ていたルドルフは、つられるように茶色の瞳を笑みに細めた。

ルドルフは賢君として名高く国内はもとより各国にまでその名声は轟いていた。

また短く切りそろえられた金髪に肥沃な大地を思わせる茶色の瞳、精悍な顔つきで程よく筋肉のついた逞しい体つきの美丈夫であった。

そのため御歳４８になるが、類稀なる知性と美しさから国内外問わず未だに結婚の御誘いが絶えないという、大変な魅力の持ち主の国王であった。

「フフ。…トトゥロには世話になっておる。その血縁とあらば、我は心から歓迎する。…して、キノトは今何か望むことはあるか？我が叶えてやろう」
「「「！」」」
皆一堂にえっ？と思った。なにせ突然予定に無いことを国王が言いだしたのだから。
「…はい。ええと……」
「遠慮せずに何でも申してみよ」
「…えぇ。……。あ、あの、私はこの国に来てまだ日も浅くて、何も知りません。だから…この国について、この世界について沢山学びたいです。…それが今の望みです」
漆黒の双眸が奥底できらりと輝いた。

…学びたいとな。
ルドルフは驚いていた。今臨むことが勉学とは…と。
女性が勉学に勤しむことは…この世界ではそうそうないことで、この目の前にいる娘は…いや少女は「知らないことばかりだから学びたい」と言ったのだ。
ルドルフはますますおもしろいと瞳を細め、何か閃いたようにクイッと口の端を上げた。

「そうか。なればこの王宮にて学べばよい。教師を付けよう。…そうだ、いっそのこと王宮に住めば良い」
「…えぇっ！？」
「ほほう…。陛下、それは良い案ですな。わしも賛成じゃ。…そう、王宮と神殿に両の居室を用意し好きに行き来できることとすれば――いかがでしょうかな」
「うむ。トトゥロの案に我も賛成である。良いかな、キノト」
「……」

いつの間にか国王の提案にトトゥロも加わって言った。
2人のキラキラとした視線に押されるように「…はい」と返事をしてしまった。

「おおそうか。では早速部屋を整えさせよう――」

そう言った瞬間、ドンッと扉が開く音とともにブーツのカツカツという軽快な音が広間に高らかに鳴り響いた。
皆が息をのんで一斉にその方向を向く。まさか誰かが侵入してくるなんて!!!
緊張で張り詰めた広間に、それを打ち破る陽気な声が響く。

「ワリー、ワリー。遅くなっちまって」

言葉ほどには悪いとは思っていない風に話すその人は…

「あ!あなた!」

乙は思わず声をあげてしまった。何せそこにいたのは…あの嵐のように過ぎ去る不審青年だったのだから。
一回目は神殿の庭で会い、二回目は乙の部屋のバルコニーで会った…あの青年!
前と同じようにだらしなく着崩した格好で現れた青年は、声を上げてしまった乙の方を振り向きながら近づいてきた。
「ん?お前は……」
「…なんだ、2人は知り合いだったのか?」
ルドルフはそんな2人の様子を見て問うたが、それを慌てて乙は「違います!!」と否定した。

そう特に知り合いということでもなく、ただ2度会っただけなのだからと。

すると青年は乙の隣に立ち、ニヤッと笑いとんでもないことを言った。…広間にいる全員に聞こえるほどの大声で。

「つれないな～俺とおまえの仲だろぅ？真夜中のバルコニーで抱き合った～」

「！！！」

「はぁ。あの熱～い夜を思い出すと…今でも体か疼く」

「…本当なのか？」

うっとりと記憶に浸るように言う青年を見て、半信半疑ながらもルドルフは問うた。

青年の言葉を信じるとすれば…2人はもう男女の関係なのだと、そう言っているように聞こえる。しかし青年の様子を見ると演技だろうと思われるのだが…乙の反応があからさま過ぎる。

なにしろ目を白黒させて、顔をりんごのように真っ赤に染めているのだから…。

「ちちち違います！！！！」

そう乙は叫んだが、それを１００％信じる者はいないだろう。

…何せ真っ赤だから。

それに目じりにうっすらと涙も浮かんでいるような…。

プッ。プハハハハハハハハハハ――――

青年はいきなり豪快に噴き出し、乙の頭をぐりぐりと撫でまわし始めた。

「おもしれ―。…んにしても、初心だよな～。てか、ガキだよなお前。ププププププ」

――からかわれた。

乙は一気に不機嫌になり口をへの字に曲げた。

「…ガキガキってからかって！」
「あぁ？ガキだろどう見ても。こんなくらいですぐ動揺するし」
「ガキじゃありません！」
「いや、ガキだ」
「違います！」
「ガキだ」
「違う！」
「ふうん。…なら、何才なんだ？言ってみろ！」
「２１です！！！」
「……」

ヒートアップした２人の応酬は突然途絶えた。
それを不審に思い青年をうかがい見ると、目を見開いて乙を凝視していた。
「？」
状況が分からずに、答えを求めるようにそばにいるルシカを見ると、彼もまた同じように目を見開いていた。
なななんで――？ますますわからなくなった乙は周りを振り返る。すると、皆動きを止め目を見開き乙を凝視していたのだ。

「へ？」

思わず気の抜けた声が乙の口から洩れた。

どうやら乙は本当に理解できていないようだった。
この広間にいる皆が、乙の２１歳という年齢を聞いて「１４、１５歳じゃないの？？？」とあんぐりと驚いていることに。

しばらくしてどうにかその衝撃から立ち直った青年は、その動揺を隠すように無理やり口に笑みを刻んだ。

「…へ、へえ。そ、そうか。２１か…」
「？そうだよ…。ガキじゃないでしょう」
「……なら…」
「なら…？」

青年はまた何かを閃いたようにニヤッと意地の悪い笑みを乙に向けた。

「なら、大人ってことだ。だったらこのくらいのことで騒ぐなよ――」

そう言った瞬間、その逞しい腕を乙の細い腰に巻きつかせ自身に引きよせた。
ぴったりとくっついた青年の身体からは太陽の匂いがした。
そして顎をクイッと持ち上げられ、顔が青年に向いた。

漆黒の瞳と碧い瞳が絡まり合う。

乙はその瞳に引き込まれるような錯覚に陥っていた。
自分とは違う碧い瞳に。
その碧く輝く瞳は夏の突き抜ける空のように清々しくて――ずっと見ていたい、その世界に近づきたいと無意識に思っていた。今の状況を忘れて…。

すると乙の願いが通じたのか、碧い世界が目前に広がった。

……え？

乙は唇に熱くてやわらかい何かを感じていた。

…な、なに？

ピリッと身体が疼いた。
触れた何かを確認する間もなく、その熱は一瞬の後には過ぎ去ってしまった。

そして目の前にあるのは…ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべている青年の顔。

「…ごちそうさま」

青年は確かにそういった。
もしや…

――キスされた。

自分が何をされたのか分かった乙は、羞恥と憤怒で先ほどよりもさらに真っ赤になった。

しかし同時に混乱もしている乙はすぐに青年に言い返すことができずに、口をパクパクと池の鯉みたくさせてしまった。

そんな様子の乙を満足に見やり青年は「それじゃ～なぁ～」と颯爽と扉へ向けて歩いていった。

広間に残された人々は唖然としたまま固まっている。
こんなことが起こるとは…。

その中で、いち早く気持ちを立て直したのは国王であった。
彼は、はぁ～と盛大に溜息をついた。

まさかこんなに大勢いる広間で…
なにも今この場で…

片方の手で顔の半分を覆い隠し、それはそれは申し訳なさそうに乙に言った。

「……我が愚息がすまないことをした」

そう。
青年はルドルフ国王の第二王子、クロウリィ・ヘルナ・ワーグナー

だったのだ。

乙のお披露目は、大波乱の中で幕を閉じた。

第1話　お披露目（後書き）

お待たせいたしました。
？章スタートです！甘くしていきたいな～と思っています。
基本、甘い要素を1話ごといれていきます。

今回文字数８２００字いっちゃいました。
最長記録更新！

第2話　騒ぎのその後

お披露目の後、控室に戻った乙にルドルフ国王が土下座の勢いで謝ってきた。

「キノト！！！本当にすまなかった！！！」

と蒼白な顔をして膝をつき深々と頭を下げた。

「……」

怒り心頭な乙は無言でそっぽを向いている。

「…皆の前であのような。…我が愚息が、本当に申し訳ないことをした」

さらに深々と頭を下げる。

「……」

「はぁ。…あやつは、少々変わっておってな…。親である我が言うのも気が引けるが…」

「……」

「…そんなことは関係ないな…。貴女の怒りはもっともであり、無礼を働いたのは紛れもない事実。よって、処罰等は貴女の一存にお任せする」

「…え？」

乙は“処罰”という不穏な言葉を聞き思わずルドルフを見た。

するとルドルフは至極当然と言ったように頷いた。

「不敬を働いた責により、愚息にどのような刑を負わすとも構わぬ。それが……死罪でも」

「！！！」

死罪――すなわち命をもって償うこと。

まさかそんな…。血の気が引いた顔でルドルフを見る。
ひくっと引き攣った乙の顔を見たルドルフは、その表情を違う意味にとらえた。…手緩いと。

「…もちろん、それだけでは足りぬことは重々承知しておる。…しかしこの国の行く末を憂うと…」
悲痛な面持ちで乙を見上げ、言う。

「…我が愚息の命と我が命2つをもって、償いとしたい…」

それをもってもまだ足りぬかもしれんが…どうか…怒りを鎮めてほしい…。
そう言ってルドルフは両の手を床につき、頭をも床につけ平伏した。

その国王の姿に乙は眼を見開く。
身体がピリピリと痺れ震えた……慄いたのだ。
彼の覚悟に…そして、国を背負うものの責任に。

ピン――と空気が張り詰めていた。

この控室には、乙とルドルフとトトゥロの3人しかいない。

呼吸さえ憚れるほどの緊張感……。

急すぎる展開にどう言っていいかわからず唖然とする乙は、ギシギシと油の差していない機械のように首を巡らせトトゥロを見た。

…ど、ど、どうすれば…。

蒼白な顔をしてしまった乙や平伏したままのルドルフを見て、トトゥロは助け船を出した。
「…まあまぁ、御二人とも落ち着くのじゃ。ルドルフ国王…キノトがどうしてよいか困っておるぞ…のう？」
乙に確認を取るように言う。
その言葉に首を上下にブンブンと思い切り振り、跪くルドルフに「立ってください」と近寄り手を取った。
予想外の乙の行動に驚いたのと同時に、ルドルフは自身の不甲斐無さに苦笑した。
気遣いをさせてしまった…。
ゆっくりと立ち上がった2人を見て再びトトゥロが口を開いた。

「…さて、キノト。そなたはどうしたいのじゃ？刑を与えるか？」
「！！！」
「そなたにはその権利があるでな…」
「…いえ。あ、あの…私は、そんなこと望んでいません…」
「では如何するのじゃ？」
「……な、なにも？…よくわかりません。あ！でも、クロウリィさん？に…できれば謝ってほしい…かな…？」

自信なさげにトトゥロを上目使いで見る。
…謝ってもらうのって…ダメなのかな～？と思いながら。
その様子にトトゥロは笑みを浮かべ、ルドルフは驚きに目を見張り思わず口に出てしまった。
…そ、それだけ……？と。
彼が思わず発してしまった囁き声を聞いたようで、
「…あ…はい。…あの、そこまで大袈裟なことではないと思いますし。…それに悪いのはルドルフさんではなくて、クロウリィさんですから」

彼が謝ってくれたらそれでいいです――――とにこやかに言った。

すると、乙の頭の中に思い出したくもないのに、先刻キスされたときの映像が勝手に流れだしてきた。

強く引き寄せられる腰。
上向かせられる顎。
迫る碧い瞳。
…そして熱くやわらかい唇。

わっ！！！と真っ赤になって慌ててしまった。
そうかと思えば、途端に不機嫌そうにムッと美しい顔の眉間にしわを寄せた。

乙のころころと変わる表情を見つつ、ルドルフは思った。
…貴女はなんて、心の広い、そして心の美しい御仁なのか…と。
ただ、謝罪してくれるだけでいいと言ったのだから。

「…では、キノト。特に処罰はないがクロウリィ殿下が誠意をもって謝罪することを条件とする、ということで如何かな？」
「はい。…あ、でも“条件”という縛りは無くていいです。やっぱり、自主的に謝罪をもらってこそ意味があると思うし…でないと強制しているみたいで…それじゃ、心がこもらないというか…なんというか…」
「…承知した。我から愚息にきちんと言おう」
「ということで、両名ともそれでよろしいかな？」
「はい」
「もちろんだ」

「では、このことはこれ以上の議論はなし。これより先、如何なる変更も許さぬ。…よろしいな？」
「「はい」」

こうしてお披露目の騒動は幕を閉じたのだった。
乙がルドルフに、ルドルフが乙に好意をもったのは言うまでもない。

◆◆◆

それから3日。
今まで一部の極限られた者と接し限られた範囲内で生活してきた乙だが、もうそんな必要もないため神殿や王宮などを自由に行き来できるようになった。

特に、乙は神殿の礼拝に気兼ねなく参加することができるようになったことをとても喜んでいた。
以前はこっそり隙間から覗いているしかできなかったが、今は堂々と参加することができるようになったからだ。
これほどうれしいことはない。

中央神殿では午前と午後にそれぞれ一回ずつ礼拝が行われる。

その礼拝は、一般の市民も貴族も誰もが参加することのできるもので（席は分けられているが）、多くの人々がそれに詰めかける。特に中央神殿は王宮に隣接していることからも、時々王族もこっそり参加をするため（しかし王族席に座るからバレる）、滅多に見ることのできない尊い御人をも拝顔することができるとあって、地方からわざわざ拝礼目当てにやってくる程人気なのだ。

今日、乙は午後の礼拝に参加した。

というのも今日の礼拝を取り仕切るのがルシカだと聞いて、急いで参加したのだ。本当は神殿内にある図書館で本を借りようと思っていたのだが…。

ではなぜ急いで参加したのかというと…理由は二つある。

第一にルシカの聖書を読む声は、山より沸き出でる清らかな流水のようにさらさらと心の中に入ってくるようで、聞いていてとても心地よいのだ。初めて聞いた時に即ファンになり、以後ルシカが礼拝を取り仕切る番のときには必ず参加しているのだ。

そして第二に、ルシカの機嫌が…とっても悪いからだ。

このことは他の神官から教えてもらったことで、そのあとで乙も何回か彼の姿を見かけたのだが、決まって不機嫌な様子をしていた。

原因はというと3日前に行われたお披露目会だそうで、ルシカはクロウリィが乙にキスしたことに大層怒っているというのだ。なんでも、ルシカとクロウリィは幼馴染で歳も２４と同い年だったため、小さい頃から神殿や王宮で遊びまわっていた仲なのだという。だからこそ、友人である者が起こした暴挙に怒り心頭であると同時に、彼の突発的な行動を起こす癖を知っていながらそれをルシカが防げなかったということにもとても怒っている…というのだ。

で、今ルシカの機嫌がとっても悪いのだ。

さらに間が悪いことに、３日間色々とルシカが忙しかったためまともに話すこともできなかった。

だから、ルシカに…

「私はそんなに怒ってない」

「ルシカは悪くない」

――と言うことを伝えられなかった。

乙のことを思い怒ってくれるルシカに…。

だからルシカが礼拝を終えた直後に会いに行こうと思い参加したのだ。

――礼拝終了後。

居室に戻ろうとするルシカに会いにいった。

ルシカは乙が礼拝に参加していたとは知らず、また自分に会いに来たということにとても驚いていた。

…私のためにわざわざ?

ルシカの顔に自然と笑みが浮かんだ。

それを見た乙は、ルシカにはっきりと告げた…。

「私はそんなに怒ってない」

「ルシカは悪くない」

そして

「私のために心配してくれて、ありがとう」

と…。

またお披露目の後、控室でルドルフやトトゥロと話し合った件についてもルシカに話した。
ルシカなら信頼できるから話しても大丈夫だと…

その時のことを（国王が平伏するほど謝ったとか、死刑も厭わないほどだったとか…）話して聞かせたところ、ルシカの顔が見る間に蒼白になっていった。
その様子を見て思わず…話さない方がよかった?せっかく機嫌を直してくれたのに、失敗したかな…と。
乙はルシカに全部知ってもらいたいと思い話したのだが…逆に話をしたことで心配させてしまったことに申し訳なくて悔やんだ。

…まぁ、ルシカが心配するのも仕方のないことなのだが。
何せ一国の王が、自らの命を差し出すというところにまで発展した話なのだかから――
もしそれが実行されたなら、乙の命が危険にさらされる可能性も少なからずあるだろうから。
あらぬ噂を流されたり、王族信奉者に命を狙われたり等々。
その様な諸々の可能性があることを乙がどこまで分かっていたのか！
…いや、良く分かっていないだろう。
控室での件は、乙が思っている以上に重大で危険性を孕むことだったのだ。

乙から告げられた話に驚き目を見開いていたルシカは、しばらくして震える唇から言葉を紡ぎ出した。

「…そのようなことがあったのですね。私は何も知らずに…一人で腹など立てて。馬鹿らしいです」
「そんなこと！」
「いえ、そうなんですよ…。でも良かった。穏便に事が運んで…」
ルシカの瞳が今にも泣きそうにうるんでいたが、それを隠すように無理やり微笑んでいた。

…あぁ、ルシカは何も悪くないのに、そんな顔しないで。

悲痛に歪む顔はあまりにも痛々しくて…
無意識のうちに手を差し出し、ルシカの大きな手をつかんだ。

「！」

いきなり乙に触れられたことで、ピクッと反射的に身体が動いた。
その様子にクスッと笑い、ルシカを仰ぎ見た。

「ありがとう」

いろいろな気持ちを乗せたありがとう。
いつも支えてくれて。
いつも心配してくれて。
いつも励ましてくれて。
いつも、いつも、いつも、いつも……

晴れやかに微笑む。

ルシカはその言葉の意味を理解したようで、

「私こそ、ありがとう」

と、乙にやわらかく微笑み返した。

その言葉にくすぐったさを感じて、乙はクスクスクスと鈴が転がるように軽やかに笑った。

クスクスクス。

2人は顔を見合わせ笑い合った。

人の掌の温かさを感じながら――

第3話　双子

乙は神殿の庭園を歩いていた。
この広い庭園を散策するのが日々の日課となりつつあった。

午後の傾いた日差しがさんさんと降り注ぎ、程好く吹き抜ける微風が木々の梢や花々を揺らしていく。
…気持ちいいな。
のんびりと散策していると、ささやき声が聞こえてきた。

…キノト、キノト、キノト
…キイテ、キイテ、キイテ

「ん？何？どうかしたの」

それは乙のそばにある草花たちの心配そうな囁き声だった。

乙は日本にいる際には“意識”して草花たちと神語を使用して会話していたのだが、この世界に来てからは日常的に神語を使用しているため、知らず知らずのうちに“意識”せずとも草花と会話をすることができるようになっていた。だから今のような小さな囁きにも反応することができ、さらに言葉に浮かぶ感情さえも読み取ることができるようになっていたのだ。

…アノネ、アノネ
…ムコウニイルノ、イルノイルノ、カナシソウ
…ダイジョウブカナ
…カナ、カナ

…シンパイ
…シンパイダ、シンパイダ

…キノト、キノト、キノト
…アノヒトダイジョウブカナ

「……」

乙は困ってしまった。こんなにも切実に悲しげに訴えてくることに。
その人のことが余程心配なのだろうと思われた。
だから「大丈夫。見に行くからね」と、少し微笑んで草花たちが導く方へと歩き出した。

…コッチ、コッチダヨ

少し歩いたところで、木々の間から白く輝く何かが見えた。

「？」

ぴょこっと木々の間から顔を出しそれを垣間見た。

「あれは…」

そこにいたのは…ニース神官長だった。

この世界に舞い降りた最初の頃に、３人の神官長をトトゥロより紹介された。その中で最も若かったのがニース神官長だった。聞くところによれば、彼はワーグナー国中央神殿史上、最年少の２５歳で神官長に就任した若手のホープでありルシカの師でもある人なのだ。

（現在３５歳、他の神官長はともに５０歳。トトゥロは６０代…？）

…ちなみに中央神殿において、トトゥロ大神官長の次に位が高いのが神官長であり、その次が第一神官、第二神官、第三神官と続き以下は神官見習いとなっている。したがって２４歳という若さで第一神官を務めるルシカもまた若手のホープといえる。

乙の身の回りの世話をしてくれたルシカとその師であるニース。

彼らは1カ月間、ひっそりと人に知られないように生活をしていた乙にとって、数少ない“接してもいい人”で色々なことを教えてくれたのだ。そういう経緯から、ルシカは勿論のことニースとも大変仲良くなったのだ。

その彼が陽光を背に佇んでいた。

線の細い痩身を纏う衣は、薄い灰色の長衣と白地に金糸の刺繍が施されたゆったりとしたローブ。曇天を思わせる長い髪は腰まであり絹のローブの上でさらさらと風に揺れ、瞳は閉じられ長い睫毛が母性を感じさせる美しい顔に影を作っていた。

悲しげな表情で俯き、今にも儚く消えてしまいそうな様子だった。

「ニースさん？」

心配になって思わず駆け寄ると、今気付いたようにはっとして顔を乙に向けた。

「…どうかしました？」

ニースの顔を覗き込むと先ほどまでの儚く消えてしまいそうな危うさはなく、おかしそうに口元に笑みを浮かべていた。だがその笑み

は少し自嘲を含んでいた。
人の存在に気付かなかったばかりか、自分の表情が容易く読み取れるほど思考に耽っていたということに…。

「…いえ。…キノトは。…今日も庭園を散策ですか？」
「…あ、はい。さっき礼拝に参加してきたんです」
「礼拝ですか。今日の午後は確か…ルシカが担当でしたね」
「そうです！私、ルシカの声のファンなんです。ルシカの聖書を読む声は優しくて…本当にきれい！」
「ふふふ。ルシカに伝えておきましょう。喜びますよ。」

にこりとやわらかく微笑むニースに、先ほどまでの自嘲するような笑みは浮かんでいなかった。

「あ！そういえば、ニースさんは礼拝で聖書を読んだりしないんですか？きっときれいなんでしょうね！いつか聞いてみたいです」

にこっと破顔した乙を見て、クスクスとニースは笑い出した。
その様子に安堵した乙はニースに言った。

「は―。良かったです！」
「？」
「何だが、元気なかったから」
「……」
「でも、今は元気になったみたいだし。…皆もすごく心配していたんですよ？」
「…皆とは？」

皆…それほど多くのものに先ほどの自分が見られていたのか？と思い苦笑した。

しかし乙がもたらした答えは、予想と全く違っていた。
はい！この子たちが心配して――と示した先には…

「植物？」

思わず聞き返してしまった。
そうです！と嬉しそうに微笑んでいる乙を見て、そう言えばと思ったのだ。この方は植物と話ができるのだと。

乙は一つの花を手折っていた。

「…この子が、すごく心配しています。悲しそうだって。心配だって。…この子があなたの傍にいたいから、自分を摘んで渡してほしいって。…受け取ってくれますか？」

小さな小さな白い花。

「はい」

手を伸ばし乙から“自分を心配している”という小さな花を受け取った。
そっと顔に近づけると、やわらかく広がる花の香りが鼻腔をくすぐった。

「…ありがとうございます」

ぽつりとニースからこぼれた言葉は囁くように小さくて…そのことに不安になった乙はニースの顔を見上げる。
彼は今にも儚く消えてしまいそうな、それでいて酷く悲しげな表情をしていた。

大丈夫だろうかとニースの顔を見ていると、その視線に気づいたのか乙に顔を向けた…瞳は閉じられたままで。

フッと微かに頬笑み再び乙に「ありがとう」と言った。

…聞かずにいてくれて。

乙は相手が聞かれたくない踏み込んでほしくないということには、決して踏み込んでこない。それればかりかこうして傍にいて相手を無条件で包み込む。そのことがどれほど人の心を救い穏やかにしているか…自覚はないだろう。いや、だからこそ良いのだ。

だからこそ…多くの者が乙に心を許し無防備になってしまう。

…ニースもその中の一人である。

ニースはふと思い少し躊躇いながら乙に言った。

「…私は、この通り生まれつき目が悪く、物を見ることが叶いません。…貴女のそのお顔も姿もなにも」

そう、ニースは生まれつき目が見えないのだ。だからニースの瞳は常に閉じられている。

そのことを乙は初めて会った時に教えられた。

しかし目は見えないが日常生活には全く問題なく、第六感が通常の人よりも鋭く優れているためモノを感じ見分けることができるのだという。

「…失礼なこととは思いますが、貴女の、そのお顔を…この手で拝見させていただきたいのですが…」

ニースはより具体的に見たい時、触診のように手で直に触れる。そうすると、不思議と頭の中に色彩を伴って見ることができるのだと

いう。
乙はニースの問いに頬笑みながら頷いた。
ニースは少しほっとしたように口元を緩め、一歩乙に近づいた。
一呼吸おいてスッとニースは手をあげ、乙の頬を包み込んだ。

細く繊細な指が乙の陶器のようにすべらかな頬を撫でる。
くるくると円を描くように指を這わせ、目元に行きつく。
中指で瞼をなぞるようにス―と移動させ、目じりを軽く押す。
それに刺激されて乙の閉じた瞼がピクピクと震えた。

スッと通った美しい鼻梁を撫でる。
そのまま顔の輪郭に沿うように上から下へと指先が這う。
乙の小さな顔ではすぐに下へと行きついてしまった。

ニースはその細い頤を何度も確かめるように指を行き来させる。
そしてふと指を止め、乙に囁いた…目を開けてくださいと。

その言葉に素直に従い瞼を押し上げる。
漆黒に彩られた瞳は、顔を触れられる心地よさにとろんと潤んでおり、何とも言われぬ艶やかさを湛えていた。

ニースはそんな乙の艶やかさに気付いたのかはわからないが、心もち緊張した様子で指を這わせる。
―――唇に。

薔薇色に染まる唇は瑞々しい果実のように熟れている。

そっと親指でゆっくりとなぞる。

最後に人差し指でぽんと軽く唇に触れる。

…ありがとうございました。

そう言ってさっと一歩後退し乙と距離をとる。

乙も、どういたしましてとにっこり笑う。

クスクスクスと2人で笑っていると…

ガザガザガザ――――

後ろの茂みから草をかき分ける音が聞こえた。

「？」

乙は振り返りだんだんとこちらへ向かっているような音の正体を確かめるように、目を凝らしじっと見据えるとそこに現れたのは…

陽光を浴びて一際強く輝く燃えるような朱い髪が見えた。その印象

的な髪は短く切られ、精悍な顔立ちに鋭く輝く瞳は深い森を思わせる深緑色で、日焼けした褐色の肌が無駄なく鍛え上げられた逞しい男性であった。
そして一睨みで獲物を捕らえられそうなほどの、凄みのある存在感を漂わせていた。

するとその男性はこちらに気付き驚いたように声を発した。
…ニース。
そしてすぐ背後からも同様に驚いたような声を発した。
…ミハ。

知り合いだろうかと思わず2人を交互に見ていると、ニースがその男性を気遣うように声をかけた。

「…ミハ。休んでいなくてよろしいのですか」
「……あぁ」

そう言いながらミハと呼ばれた男性は少しずつ近づいてきた。右手に松葉杖をつきながら。
怪我でもしているのかな?と、ちらっと足を見たがズボンではなく長い衣を着ていたので、足の形もはっきりとはせず足元さえも見えなかった。
再び視線を彼らに戻しじっと見つめた。
…何か、2人って――
乙のじっと見つめる視線にニースが気付き彼を紹介した。

「キノト、こちらはワーグナー国の大臣であられる方です。先日のお披露目の際には出席しておりませんでしたから、会うのは初めてとなりましょう?」
「はい。初めまして、私は速水乙といいます。ええと…トトゥロ大

神官長の遠縁の娘ということで、今神殿や王宮で御世話になっています。…今後とも御厄介になるとは思いますがよろしくお願いします」

「…あぁ。事情は聞いているから、そう改まらなくていい」

「あ！そうですか。…では、私に対しても普通に接してください。キノトと呼んでくださいね」

「……了解した。…私の名はミハ・ロード・ガーバントだ。ミハと呼んで構わない…今療養中でな、神殿で厄介になっている」

「療養中？」

「…足がな」

「……そうですか」

ミハが言いにくそうにしているのでそれにはもう触れないでおこうと思い、先ほどから気になっていることを口にした。

「…あの～。なんだか2人は、似てますよね…雰囲気が！それに、良く見ると顔立ちも似てますよね。御親戚か何かですか？」

「「！！！」」

似てると言われた2人は驚いたように目を見開いた。

初対面でそう言われることは、今ではもうほとんどないからだ。

…纏う雰囲気は全く違う。

一言で言うならミハは鋭く、ニースは柔和。

それにミハは燃えるような短い朱い髪に深緑色の瞳で、逞しく鍛え上げられた褐色の身体。

ニースは曇天を思わせる長い灰色の髪に瞳は常に閉じられていて、痩身で線の細い身体。

2人の容姿は全くと言っていいほど似ていない。

それなのに、乙は2人の雰囲気も容姿も似ているというのだから、2人が驚くのも無理はない。

ミハは思わずどこが？と不思議そうに聞くと、乙は至極当然とばかりに言った。

「確かに身に纏う色彩とかは全然違うんですけど…ほら！身長は全く一緒だし」

「…身長って……」

「あはは。そう！そういう“素”の時の表情は全く一緒ですよ。とっても穏やかで、優しそうな。…それに顎のラインとか目元とか鼻とか、顔の造作は全く同じのようですし！やっぱり2人は似てますよ！」

ニカッと破顔すると、ミハとニースは驚いて互いの顔を見合わせた。そして少し複雑そうな表情を浮かべ、確認をし合うように目配せしていた。

何だろう？と不思議そうに乙が2人を見ていると、ミハが意を決したように乙に向き直って言った。

「私とニースは…兄弟だ。……双子の…」

「え！？」

親戚かと思ったら実は双子と言う事実に驚いて思わず声をあげると、2人は明らかにビクッと身体を震わせ緊張したように見えた。

しかし乙はそんな2人の様子には気付かずに、おもしろそうにクスクスと笑っていた。

予想外の乙の反応にミハとニースは互いに顔を見合わせ、困惑の表情を浮かべた。

「…クスクス。ふふふ。…双子？もしかして一卵性双生児？」

「「……」」

「うーん。…やっぱりよく似てるから二卵性っていうより、やっぱ

り一卵性って感じかな？」

「「……」」

「それにしても双子って見えませんね、親戚くらいかと…ふふふ。私の双子の兄たちはそっくり同じなのに！コピーしたように同じなんですよ！…双子って、羨ましいな～」

クスクスとおもしろそうに笑いながら言う。その笑顔は晴れやかで、それ以外の意味は含まれていないように見える。そして少し懐かしそうな眼差しでミハとニースを見上げた。

そんな様子の乙に驚きつつ、ミハは“私の双子の兄たち”という言葉に引っ掛かっていた。

「…キノトの兄も…その…双子なのか？」

恐る恐るミハが聞くと、はい！とっても似てますよ！と嬉しそうに言った。

無邪気に言う乙に、ミハは答えを急くように聞く。

「き、気味悪くないか？…双子は似すぎていて……」

「？」

「良く言うだろう…双子は、凶兆の、前触れ…なんて…」

「？？」

思わず乙は、キョトンとしてしまった。さらに凶兆の前触れなんて…聞いたこともなかったから。

この世界ではそうなのかな？と思いながらもあっさりと言った。

「私はそう思ったことは一度もないですし、確かに双子って似てるけど…違いますから。それぞれ自分らしく生きてる一個人だから」

――ただの兄弟と同じでしょ？

事も無げに言った乙に、ミハとニースは息を呑んだ。
…ただの兄弟だと。

今まで、双子と言うだけで周囲の人間から侮蔑にも満ちた目で見られてきた。
2人は“双子”という呪いにかけられていたのだ。
だから2人は…“双子はやめよう”と思ったのだ。
性格や容姿…変えられるところはすべて変えた。
だから今、双子とは全く思えないような対照的な見た目になっているのだ。

…それなのに目の前にいる乙はそんなことお構いなしで、「2人は似てる」「双子は羨ましい」とまで言う。
こちらの価値観などお構いなしで、無邪気にあははと笑っているのだから…。

不思議なヤツだ。

ミハはやわらかく微笑む。
その隣でニースもまたやわらかく微笑んでいる。

ミハは思う。
乙は相手を無条件で包み込む。
そしてそのことがどれほど人の心を救い穏やかにしているか！…自覚はないだろう。いや、だからこそ良いのだ。
だからこそ…多くの者が乙に心を許し無防備になってしまう。

ミハはニースを見る。
人と距離を取りがちなあのニースが、乙と馴染んでいることに驚く。
不思議なヤツだ。

ミハはおかしそうに乙を見る。
…もうミハもニースと同じく、乙に心を許す一人となっていた。

ミハとニースが乙に対し同じような思いを持ったことは言うまでもない。

第3話　双子（後書き）

ミハ出てきました～
大人の色香を出していきたいな。
これから立て続けにでてきます。

第４話　不思議な青年１

乙はルドルフ国王が言ったように、王宮にも正式に居室をいただき王宮と神殿とを行き来しながら生活していた。
主に王宮では教師に国のことや世界のことについて学び、神殿では礼拝に参加したり神学を学んでいる。

また乙には、３名の優秀な侍女が付いた。本当は１０名ほど付けるという話だったが、乙がいらないと断固拒否したため３名で落ち着いたのだ。
ちなみに乙に仕えることとなったこの侍女たちは、王宮に仕える侍女の中でも１位２位を争うほどの優秀な侍女であり、護衛としての能力もあわせ持つ生え抜きの侍女たちであった。

――ある日の昼下がり。
乙は王宮の３階にある自室を目指して歩いていた。

後ろに古参の侍女マリーを連れながら。
彼女は今年４０歳になったばかりだが、子供３人を育て上げた包容力からか「私のお母さんみたい！」と乙が最も懐いている侍女であった。

そんな乙は上機嫌に、礼拝で歌われた讃美歌のメロディーを口ずさんでいる。

ただの遊びで口ずさんでいるだけなのに…それはとても凛とした響きをもっており、乙の形の良い唇から溢れ出る歌に耳を傾けていたマリーは、ほぅと感嘆しながら聞いていた。
「お戯れで口ずさんでいるだけなのに、なんてきれいな声なんでしょう」と…。

…マリーは大変よくできた侍女である。
例え乙の歌声に、少し注意力が低下していたとしてもだ。

だが、そうでなくとも次に起こることに対処できた者がいるとは思えない。

上機嫌で歌っていた乙が、階段を登りきったまさにその時――

上から…

「！」

マリーが眼の端で何か降ってきた？と確認した時には既に遅く。

おわぁあ！！！
きゃああ！！！

二つの悲鳴と体がぶつかった鈍い衝撃音。

そして階段をガタガタと縺れ合いながら転がり落ちる音。

「キノト様――――！！！」

マリーが真っ青になり悲鳴をあげる。

階下を見ると…

上から降ってきた何かにぶつかって階段を転げ落ちた乙と、その上に覆いかぶさるように乗っかる何かが…。

その何かは白い外套にすっぽりと覆われているため、マリーからはそれが何であるかは判別できない。

「う～んんぅ…」

乙のうめき声が聞こえて我に返ったマリーは、すかさず乙の元へかけ下りる。

「キノト様――――！！！大丈夫ですか！！！」

転げ落ちそうになりながら駆け寄り、乙を覗き込む。

だ、大丈夫～と弱々しく言いながら、未だに自分の上に覆いかぶさっているものをチカチカする目で見る乙。

「？」

その何かは白い外套にすっぽりと包まれていたが、乙は自分の体に伝わる感触から…たぶん人？と思った。

なぜたぶんなのかというと、乙の胸にもふっと顔を埋めているから

で…顔が見えなかったからだ。
乙は恐る恐る、あの～と声をかける。
…そろそろどいてほしいな～。
そんな乙の探るような声を聞いてか、それはもぞもぞと動きつつ、いきなりガバッ！と顔をあげた。
「…」
「…」
2人は互いに見つめあった。
乙の上に乗る何かは、予想通り人だった。
目深に被るフードの中から見える顔から推測するに、10代後半くらいの青年に見えた。
だが乙は幾分か疑問に思った。
「それにしては、随分と幼さの残る顔をしている気が…」と。
しかし乙に覆いかぶさっていることから予想すると…やはり乙の身長160?よりも10?くらいは大きいと思われたし、何よりも男性の平均身長からするとやはり10代後半くらいの年齢と思われたのだ。
…それにしても、と。
はぁ、と心の中で溜息をつく乙であった。
なぜなら青年は乙を無言で凝視したまま動こうとしないのだから。

…そろそろどいてくれないと、潰れるよ～。
それに階段から滑り落ちたときに、軽く頭を打ったようで右耳の上あたりがズキズキしていた。

「…あの～。…どうかしました？」
「……」
「…もしも～し。聞こえてる？」
「……」
「…どこか打った？」
「……」
「…あ～。あなたのこと言ってるんだけど…？」
「……え？」

何度目かの問いかけのあとで、やっと青年は気付いたようで思わず素っ頓狂な声をあげた。

「ぼく？？」
「…そうだよ。…私の上に乗ったまま、動かないから」

目を真ん丸にしながら乙に問う青年に、思わず苦笑した。
内心「わかってなかったの…？」と思いながら。

すると青年は周囲をキョロキョロしながら上を見上げ、次に階段を見て、最後に乙を見た。
まるで、落ちた経緯を確認するかのように…。
それを優に3回も繰り返した。
そしてようやく自分がなぜ乙の上に乗っているのかを納得したようで、驚いたようにあわあわと狼狽しながらやっと乙の上から降りたのだった。

青年が降りてくれたことでやっと身体の上から重みが無くなり、ふぅと息をつきつつ上体を起こした。
ズキンッ。
起きた弾みに頭が揺れたためか、落ちる時に打ち付けた頭に痛みが走った。

痛ッ――――。
右耳の上あたりに手を当て、顔をしかめる。
すると青年は心配そうに乙の顔を覗き込んだ。

「だ、だ、だ、だいじょうぶぅ？おねぇしゃん」
「？」
「ぼ、ぼ、ぼぼくのせいだよね」
「！？」
「あの…ご、ご、ご、ごめんなしゃいいぃ。」
「……」

そう必死に話す青年に乙は愕然とした。

なに、今の、話し方……。

乙が思うのも無理はない、何しろ、その話し方はまるで…

幼児。

っっっなぜ…？
彼は、こんな幼い喋り方をするの…？

乙は突然のことに目を大きく見開いて青年を凝視した。

一方その青年は乙の反応がないことに不安になったようで、その大きな茶色の瞳にうっすらと涙を浮かばせていた。
だがそんな泣きそうな様子には乙は全く気付かず、ひたすら「なんでなんでなんでなんで――――？」と疑問をループさせていた。
乙はこの時かなり動揺していたのだ。

「お、お、お、おねぇぇしゃ、しゃん。…ヒック。ねぇ、だいじょう、ぶぅ？ヒック…うぅ」
「……」

泣くのを我慢するように青年がしゃっくりをあげながら再度問うた。
だがやはり乙は、疑問をエンドレスにループさせていた。

すると青年は涙を我慢できなくなったのか…

うわぁぁぁあああんんん！！！！

と大声をあげて泣き出してしまった。

「えぇ！？」

そのあまりに大きな泣き声に、はっと意識を戻した乙は…やはりまた目を大きく見開いて青年を凝視した。
…ちょ、ちょっと―。やっぱり、子ども！？こんな泣き方するなんて…。

えぇぇぇぇえええんんん！！！！

どんどん青年の泣き声は大きくなっていく。

乙は、どうしよう…と困惑した。
だけど、あまりにも青年が悲しげに大声をあげて泣くものだから――。

…無意識に身体が動いていた。

そっと青年に腕を伸ばす。

きゅっと抱き締める。

その白い外套に覆われた、大きな背中を優しくさする。

そして耳元にそっと囁きかける。

…それはまるで子どもにするように。

ごめんね。
心配かけたよね？
大丈夫だから。
…もう、泣かないで。

優しく優しく――。
すると青年が泣きながらも甘える子どものように、乙に自身の身をすり寄せてきた。

そしてグズグズと泣きじゃくりながら、

だいじょうぶ？
おねえしゃん、だいじょうぶぅ？

と聞いてくる。

健気な姿に優しく微笑みながら、乙はあやすように背をさすり「大丈夫だよ」と優しく囁いた。
何度も何度も――――。

…どれほどの時間が過ぎたか。
ヒックヒックと身体を揺らしながらも、落ち着いたのか徐々に泣きやんできた。

乙が様子を見ようと、青年から少し身体を離し顔を覗き込んだ。
やはり青年は泣いたためか少し目が腫れていた。
未だに大きな茶色の瞳をうるうるさせていたが、涙がこぼれ落ちることはなかった。

そのことに安心し、にっこりと笑いながら青年に言った。

「お姉ちゃんは大丈夫だよ。君は大丈夫？怪我ない？」
「うん。ぼくはぁ、ないよ」
「そっか、良かった。…あ、でも廊下を走ったらだめだよ。誰かにぶつかって怪我をしちゃうかもしれないからね」
「うん。わかったぁ～。もう、はしりゃないぃぃ！」
「うん。いい子ね」

くしゃくしゃと頭を撫でると、青年はキャッキャッとうれしそうに笑った。

少し2人でじゃれていると、その拍子にはらりと青年の外套のフードが後ろに落ちた。
すると眩いばかりの金色に輝く髪の毛が顔を出した。
さらさらと肩口で切りそろえられた柔らかそうな髪が、少し不健康そうな青白い顔にかかった。幼さが残るものの、やわらかい端正な顔立ちをしていた。

「……」

乙は現れた青年の顔にドキッと胸を高鳴らせた…のではなく、「誰かに似てる」という感想をもっていた。
普通の女性の反応としては、いささかずれている乙であった。

誰だろ?と思いながら青年を見ていると突然、あっ!と青年が声をあげた。
「?」と思い小首を傾げ青年を見ると、少し慌てたように階段の上を仰ぎ見た。
つられるように乙も上を見上げるが、そこには誰もいなかったが微かに人の足音がこちらに向かってきているのが分かった。
…そういえば、マリーはどこにいったんだろう。
先ほど、マリーは階段から落ちた乙の側に駆け寄った…それは気付いたが、いつの間にかいなくなっていたのだ。
あれれ?と疑問に感じていると、青年は慌てたように立ちあがった。

「あ、あ、あ!ぼく、ぼくいかなきゃ!」
「そうだね、誰か心配してるかもね?」
「うん。…あ!そうだぁ~!ねえねぇ、おねえしゃんのなまえはぁ?ぼく、ぼくねえ、カサルアだよ!」
「カサルアね。私の名前は乙だよ」
「…キ、キ、キノト?」

「そう。キノト」
「キノト！」

良く言えましたというように、ニコッと笑った乙に嬉しくなったカサルアは、キノト、キノトと満遍の笑顔で何度も名前を呼んだ。
乙はクスクス笑いながら立ちあがり、カサルアと目線を合わせる。
やはり、カサルアの方が乙よりも少し背が高いようだ。少しだけ顔をあげながら、キノトと名前を連呼するカサルアに問うた。

「…行かなくても平気？」

すると、あっ！と声をあげて「いかなきゃ！！」と慌ただしく身体を反転させ、階段を駆け上がっていった。

…あ―。また走ってる―。
と苦笑しながら青年を目で追った。
すると青年は勢いよく階段の中ほどで止まり、乙に振り返った。

ジッと乙を見つめる。

何だろう？と乙も青年を見つめていると、青年はニカッと笑いながら階段を下りてきた。
パタパタと乙に近寄り、嬉しそうに言った。

「キノト！またぼくとあってくれる？」
「…えぇ。私でよければ」
「ほんとにぃぃ！やったぁ！ぼく、ぼく、うれし―！ぜったいだよ！ぜったいだかりゃね！！！」
「ふふふ。はい、絶対ね？」

嬉しそうにニコニコ笑うカサルアに、乙の頬にも自然と笑みがこぼれる。
じゃあね！とまた元気よく走り出そうとしたカサルアであったが…
予想外の行動をした。
…なんと。

チュ。

乙の頬にキスをしたのだ。

え？突然ことに乙が目を真ん丸にしていると、悪戯が成功した子どものようにカサルアは無邪気にニコニコと笑っていた。
そして乙が何かを言う前に、ばいばい！！！と手を振りながら階段を駆け上がって行ったのだった。
目をぱちぱちしながら呆然とする乙。
そして、やはり普通の女性としてはこれまた違う反応をしていた。
…子どもって、イタズラ好きだな～と…。
のほほんとした感想をもっていた乙は、ふと背後から視線を感じ振り向いた。
さっと何か黒いものが眼の端に映った気がしたが、そこには何もなかった。
なんだろう？と思いながら、得体の知れない奇妙な何かに体の底がジリジリと疼く感覚を味わった。

第４話　不思議な青年１（後書き）

カサルア登場！
彼がだれかは、次までのお楽しみです。
誰だかわかってしまう人もいると思いますが（笑）

そして以前言ったように、もう一人の登場人物が・・・
誰でしょう～

第5話　不思議な青年2

「キノト――！ごほんよんでぇぇえ――！」

ニコニコと満遍の笑みを浮かべながらカサルアは言う。
肩口で切りそろえられた柔らかそうな金色の髪を振り、肥沃な大地を思わせる茶色の瞳を嬉しそうに細め、乙に甘えるように抱きつきながら。

「ええ。それじゃ…これなんかはどう？」

モフモフとした絨毯の上に2人で座りながら、乙はそこかしこに散らばった絵本の中から一つを取り出す。
―精霊と男の子が友達になる物語だ。

「ええ――。やだぁぁあ――。それぇ、まえにぃよんだもん！ちがうのがいいよ――ぉ！」
「う～ん。…それじゃ、これは？」

ズイッと出したのは、今日のために王宮の図書館から借りてきた何冊かの絵本の一つだ。
―勇者が魔物退治にいく物語だ。
その表紙の絵を見たカサルアは食い入るように見つめ、うん！と嬉しそうに頷いた。
よんでぇ、よんでぇ――！と乙をせかすカサルア。

――なぜこの様なことになっているかというと。
それは今から5日前にさかのぼる。

乙とカサルアの階段転がり事件が発生した次の日である。
王宮の居室にて乙がのんびりと本を読んでいると、カサルアに仕えているというサオという侍女が訪れた。

…昨日、カサルアが乙のもとを去って行ったすぐあとに、マリーがサオを連れて現れたのだ。（サオはマリーと同年代である。いつの間にかいなくなっていたマリーは、実はカサルアに仕えている侍女を呼びに行っていたのだ。）
その時、サオは慌てた様子でカサルアの非礼を詫びつつ、再びカサルアを探すために猛然と去っていってしまったので、改めて昨日の非礼を詫びに乙のもとを訪れたのだ。

「キノト様、昨日はカサルア様がぶつかったために階段を転げ落ちてしまったと…。本当に申し訳ありませんでした。私どもがカサルア様から目を離さないでいたら、この様な事には…。本当に申し訳ございませんでした」

サオは苦しそうに言葉を紡ぎながら、深々と頭を下げた。
侍女としての不甲斐無さを悔やむように唇をキュッと引き結びながら。
その様子に、乙は何も気にしていないというように朗らかに言った。

「いえ、大丈夫ですよ。怪我とかないですから。…あ！カサルアは怪我とかしていませんでした？」
「はい。何もお怪我はなく大変元気でいらっしゃいます。…キノト

様にお怪我がなくてようございました」

ほっと息をつくサオであったが、すぐに何か言いにくそうに顔を歪めた。

どうしたのかな?と乙が不思議そうにサオを見ると、その視線に気づいたサオはますます言いにくそうに顔を歪めた。

そして何かを吹っ切るように軽く息をつき、乙に顔をあげた。

「…突然のことではありますが、キノト様に折り入ってお願いしたいことがあります」

「?」

「……カサルア様と遊んでいただきたいのです」

「……へ?」

言いにくそうに何を言うかと思えば…。

乙はまさか遊んでほしいとお願いされるとは思っていなかったので、思わず気の抜けた声を出してしまった。そしてその声を“否”ととったサオは慌てて付け加えた。

「!…じ、実は!カサルア様がキノト様とどうしても遊びたいと…その…ぐずって、いえ!お嘆きになられまして。…なので、どうか遊ぶまでも来ていただけないかと思いまして…」

お願いにまいりました――とまたも深々と頭を下げた。

そう話すサオの声色に乙は疲れの色を感じ「カサルア…ぐずってるんだ…」とサオの心労を思い少しだけ同情した。なにせ子どもはぐずると宥めるのがなかなかに大変であるから…。

乙は内心少しだけ苦笑しながら、やわらかい笑みをたたえて言った。

「私もカサルアに会いたいなって思いますから。私でよければ――

―」

「…よろしいのですか？」

「はい。それにまた会おうって約束もしましたから」

「左様でございましたか！！」

「あ！そうだ。…その前に、カサルアについて一つだけ聞きたいことがあるんですが？」

乙がそう質問をするとサオは途端に緊張したように顔を引き締めた。その反応に困惑しながらも乙は、遊びに行くならまずあのことについて聞いておかないとな～と思っていた。

「…な、何でございましょうか？」

「あの。…カサルアって……」

「……」

ゴクッと喉を鳴らすサオ。

だが、乙が次に言った言葉はサオが予想しているものではなかった。

「……カサルアって……何の遊びが好きですか？」

「……え？」

「？…いえ、あの、折角遊びに行くならカサルアが好きな遊びをしたいな～って思うので、何かこちらで準備できるものがあるならそれを持って行こうと思ったもので…」

…迷惑でしたか？

乙はサオが目を見開いてこちらを凝視しているので、だんだんと声が小さくなりつつしょんぼりとしながら言った。

しかし、当のサオはというと…“カサルアについて一つだけ聞きたいことがある”という問いに、まさかその様なことを聞かれるとは思っていなかったので侍女らしからずぽかんと呆けてしまったのだ。

…遊びについて？

そしてサオは思った。他に気になることはないのだろうかと。
いや、普通であればまず間違いなく気になることなのだが、乙はそのことよりもカサルアの好きな遊びの方が気になるようで…。
サオは思わず聞いてしまった。

「……あの。失礼ですが、キノト様は……カサルア様がどのようなご身分の方であるかご存じでいらっしゃいますか？」
「え？いいえ？」
「…知りたいとは思われないのですか？」
「あ――。確かに、気になりますね。まぁ、どちらでも構いませんが」
「……」

何ともなしにいう乙にサオは驚いてしまった。
相手の身分が気にならないなんて…！
目を見開きながら乙を凝視しつつ、さらに質問した。

「…では、キノト様は。カサルア様のご様子について…その…何か思われませんでしたか？」
「え？う～ん。…そうね～。しいて言えば…」
「…はい」
「…顔が青白くて、少し不健康そう？に感じました。…そうそう！遊ぶなら、外よりも内で遊んだ方がいいですよね」
「…そ、そうですね。室内の方が…」

サオは顔を引きつらせながら力なく答えた。
内心、そういうことではないのに…と思いながら。
その様子を、後ろに控えていたマリーはニコニコとしながら見守っ

ていた。
キノト様は、どこまでいってもキノト様ね～と思いながら。
なかなかサオの言葉の意味に乙が気付かないので、今度は率直に質問することにしたサオであった。
自分の仕える主について、そう口で表すことを後ろめたく感じながら…。

「…キノト様。カサルア様の御様子がおかしいと思われませんでしたか？」
「？」
「…カサルア様は御歳２５歳になられます。もう立派な青年なのです。…しかし、そうであられるのにもかかわらず…子どもの様な話し方をなさっていると――」

そう言って目を伏せるサオは、乙が息を呑むのを聞いた。

「…そして、カサルア様は…ルドルフ国王の御子である、カサルア・リリナ・ワーグナー殿下でございます。一つ下の弟君がクロウリィ殿下でございます」

サオは、再び乙が息を呑むのを聞いた。

その様子に、サオは苦笑した。
この国について学んでいると聞いていたので、“カサルア”という名の者が第一王子であることは知っていただろう。…でも、その王子が階段で衝突した“カサルア”という人物と同一人物であると誰が気付くであろうか。否、気付かないであろう。
それに、カサルア様の心と体の年齢が合っていないこと――少し幼さは残るが青年の風貌でありながら、子どもの心をもっているこ

とは、王宮の極秘事項であり知っているものも数少ない。それどころか、外部の者に知られればとても厄介なことになる。だから、カサルア様は王宮の最奥で隠れて過ごしているのだ。…彼の身を守るためにも。

サオは、はぁ―と溜息をつきつつも「どうかカサルア様をお嫌いにならないでください」と願った。

どんな事情があるにせよ、カサルアが人に興味を持ち“会いたい”と欲したのは乙が初めてだったのだから。

ほとんどの時間を幻影に囚われ過去に生きるカサルアが、今を生きる乙に興味をもった！そのことがいかに凄いことか…。

だからサオは、ルドルフ国王等に王宮の極秘事項でもある“カサルア”と乙を会わせたいと話し、なんとか説き伏せ了承を得たのだ。

きっとこれが、何らかの転機にもなると…。

だから、乙にはぜひともカサルアにふつうに接して会ってほしいと思っているのだ。

…まぁ、乙の驚愕ぶりを見ればそれがどれほど困難なことであるかは分かるが。

なにせ、この国の王子である者と遊んでほしいと言っているのだから…普通であれば恐縮し、辞退もするだろう。さらにカサルアは精神を病んでいる。

こうも厄介な相手と誰が遊びたいと願うか、そして普通に接することができると言うのか…。

最低限必要なことを伝えたとはいえ、なんと勝手なことを…とサオは自嘲気味に笑い、ふと乙を見る。

その乙はというと…。

形の良い唇に人差し指をあて、何か考え込むように俯いていた。
するとサオの視線に気づいたのか、顔をあげて目を合わせた。
そして、あ～…と言いながら、ぽつぽつと言葉を紡いだ。

「…だから、だったんですね。」
「……？」
「カサルアの顔――」
「……」
「誰かに似てるな～って思ったんですけど…まさか兄弟だったなんて！」
「…え？」
「あはは！あの、明るく笑った顔はすごくよく似てますね！…それに、カサルアがクロウリィのお兄ちゃんだなんて！２５歳には見えませんね～。本当に、逆じゃなくて？」
「……は、はい。」
「クスクス。お兄ちゃんか～、カサルアが！」

クスクスと鈴が転がるように笑う乙に、サオは面食らってしまった。
明らかに不思議な“カサルア”という存在について、特に何も感じていないような乙の様子に。
だから聞いてしまった――キノト様は、気にならないのですか？カサルア様の御身分や“あの御様子”について！と。気にならない者はいないだろうと。
それに対する乙の答えはそっけないものだった。
一言、はい――と。
その様子に、力が抜けたサオはかすれた声で、どうして…と口から言葉がこぼれ出た。
乙はサオの鬼気迫る様子に圧倒されながらも、はっきりと言った。

「…何となく、あなたの言いたいことはわかります。…でも。私は、彼は彼でしかないと思っていますから」

「！」

「そう…カサルアはカサルアの何者でもないですし。今私が見ている“カサルア”でいいんです。過去に何があろうと…それって自己満足ですかね？」

最後は苦笑しながら言った。

サオは思った。

…私は、カサルア様を一度でもそう見たことがあっただろうかと――。

そして、カサルア様は何と素晴らしい方に巡り合えたのだろうかと――。

ポロリと一粒涙を流した。

サオは、何かを断ち切るかのようにパッと顔をあげ、眩しそうに乙を見て言った。

――さすが、トトゥロ大神官長様の血筋のお嬢様であられますね、と。

え？とサオの言葉が小さ過ぎて聞き取れず乙は聞き返したが、サオは笑顔で何でもありませんと言った。

「はぁ～。では、キノト様！ぜひ、ぜひともカサルア様と遊んでくださいまし！」

「へっ？…クスクス。はい、ぜひ」

「そして、先ほどのことはぜひとも内密にお願いいたします」

「？？はい、わかりました」

――――ということで、カサルアと遊ぶことになったのだった。

カサルアの居室では、よんでぇぇえ――――！よんでぇぇぇえええ――――！と乙に甘えるカサルアの声が木霊している。

その甘える様子にクスクス笑いながら、絵本を読み始めた乙であった。

「では～はじまり、はじまり。むか～し、むかし。あるところに勇者に選ばれた青年がおりました――――」

「うんうん！」

乙とカサルアの中睦まじい様子に、控えているマリーやサオ、他の侍女たちが嬉しそうに頬笑んでいた。

それと同時に侍女たちは、乙に感心もしていた。

と言うのも、カサルアはなかなかに繊細な心をもっており、ちょっとしたことが引き金となり情緒が不安定となってしまうのだ。常ならば3日に1度は感情が爆発してしまっていたのだが、カサルアと乙が遊んだ5日間、それが1度もなくとても穏やかに過ごしているのだ。

乙の面倒見がよいこともさることながら、“カサルア様とキノト様は相性が良い”と侍女たちは感じていた。

そして何よりも、カサルアの表情が平素よりも生き生きとしていることに侍女たちはとても喜んでいた。

そんな2人を侍女たちが柔らかく見つめている中で、絵本はクライ

マックスへと突入していた。

「でたな、魔物め！僕が成敗してくれる！」
「ハハハ！勇者ごときが、私を倒せるというのか！」
「この剣を見ろ！」
「な、なに！？その剣は…まさか」
「そうだ。これこそ伝説の剣！おまえを倒すことのできる剣だぁあ！！！」
「く、くそう！！！」

「ゆうしゃぁ！！かぁっこいい！！」

乙は絵本の中で勇者や魔物の声真似をしながら、実に上手く読んでいた。
ドバババ。
キンキン。
ヒュ―ンドンッ。
と言った効果音も入れ込み、臨場感を出しながら。
カサルアもそんな乙の巧みな話術にすっかり夢中になり、途中で声をあげたり、応援したりしていた。

「…魔物よ。村を襲い人々を苦しめたこと、あの世で後悔するんだ！」
「コノオォォォオオ！！返り討ちにしてくれる！！」
「ハッ！」
「うぁぁぁぁあああ！！！」

「やったぁぁぁああ！！！ゆうしゃ、ゆうしゃ！しゅごい、しゅごいい！！！」

「う、う、う…や、やられたぁ～」

物語は最高潮に達し、カサルアは興奮したように頬を上気させ、腕を振り上げていた。
そして、乙は魔物の断末魔の叫びを低いしわがれ声で言った。

「く、く、くそう…お前など、いなければ…」

「こうして、勇者の活躍により村から魔物はいなくなり平和となったとさ。めでたし、めでたし！」

パンッと絵本を閉め、どうだった？と言いながらカサルアを見る乙。

…しかし。

カサルアは、真っ青な顔をしていた。
普段から青白いカサルアの顔はさらに青白くなり、目は焦点が合うことなく虚空を彷徨っていた。
それはまさに、幽鬼のごとき表情で…。
乙は眼を見開き、固まってしまった。
するとカサルアの様子を見た侍女たちが一斉に息を呑んだ。

そして、その微かな音を合図とするようにカサルアが…

……発狂した。

うわぁぁぁぁあああんんん！！！！と大音量で泣き、いやだぁぁぁあああ、いやぁぁぁぁあああ！！！と喉が嗄れんばかりに叫び出す。

自分の手や足、動くものすべてを振り回し、近くにある物をなりふり構わず破壊しだした。

突然のカサルアの豹変ぶりに、乙は驚いて動けずにいた。

何で…。何が…引き金になったのか。

苦しいほどのカサルアの叫びに乙は動けずにいたが、いつの間にか乙の側にマリーが来ており「ここを出ましょう」と言って手を引いていた。

マリーの手に引かれヨロリと立ち上がったが、未だ発狂し続けるカサルアを見て乙の足は止まった。

そして、マリーの制止の手を振り切りカサルアに近寄る。

「カサルア！」

乙は手を伸ばしカサルアに抱きついた。

暴れる身体を拘束するように、この温もりがカサルアに届くように。

しかし…

「いやぁぁぁあああああ！！！」

突き刺すような甲高い声をあげて、その細く弱々しい身体からは想像ができないような力で乙を突き飛ばした。

ドンッ！
ガタガタッ――――カッッシャーン！

突き飛ばされた乙はテーブルに身体を打ちつけ、その衝撃で紅茶の入ったカップやお菓子を入れた皿が床に落ち音を立てて砕け散った。
キノト様――――！と侍女たちの乙を呼ぶ叫び声が部屋中に響き渡った。
乙はヘナヘナと絨毯の上に座り込み、打ちつけた脇腹を押えていた。

すると――――ドンッ！！！

重い扉を蹴破るように誰かが入ってきた。

「何があった！！！」

鋭い声をあげ、大股に闊歩する。
乙は痛みに耐えながらもその声の主を目の端に映した。

――――クロウリィだ。

そうとわかると乙は安心したような泣きたいような、ぐちゃぐちゃとした気持ちになり顔を歪めた。

部屋に入ってきたクロウリィは、カサルアをその目に捉えつつサッと室内を見回した。
…あちこちに物が散乱し、壊れ、ぐちゃぐちゃとした絶句するほどの異空間。

そして、カサルアからほど近いところでテーブルに背を預け蹲る乙が、泣きそうな顔をしながらクロウリィを力なく見つめていた。

チッッ！！！

強く舌打ちしつつ乙のもとに近寄る。

何の前触れもなく乙のほっそりとした腕を掴みあげ、乙を無理やり立たせた。

「お前が悪い！何も知らないくせに、知ったような顔をして！興味本位で顔を突っ込むな！！」

「！」

「目障りなんだよ！」

怒気も露わにクロウリィは乙を責め立てた。

金色の髪は今や怒りに燃えるように荒々しく輝き、碧い瞳は温度のない深海の様に冷え切り乙を睨みつけていた。

常とのあまりの変化に、漆黒の瞳は不安に揺れた。

何も言えずにいる乙に構うことなく、グイッと手首も掴み捻りあげるようにしながら、引き摺るように扉に向けて歩き出した。

「！」

「出ていけ！お節介もいい加減にするんだ！！！」

「いッ！！」

「…そんな怪我までして！中途半端に顔を突っ込むからだ！！」

「…」

「もう二度と来るな！！！」

扉を足で蹴り開け、乙を廊下に突き出した。

バランスを崩した乙はペタリと崩れるようにその場に倒れ込んでし

まった。
するとすかさずマリーが乙の側にしゃがみ込み、その華奢な肩を抱いた。
そして、マリーは挑むように無言でクロウリィを見据えた。
そのことにクロウリィは何も言わず、乙に冷たい視線を投げつけた。

――バタンッ。

重い音を轟かせながら扉が閉まった。
その音を聞きながら、呆然とする乙。
…あぁ、痛い。
今になってクロウリィから言われた言葉が、鋭利な刃物となって乙の心を切りつける。
…心が痛い。

チクリ。
痛みが走った。
そっと右手首を見ると、赤紫に鬱血した手形が白い肌に咲いていた。
手首を掴まれてできたその痣に、そっと自分の手を重ね合わせる。
そして思う。

…私は、いったいなにを。

閉じた扉のからは、未だにカサルアの泣き叫ぶ音が聞こえていた。

第5話　不思議な青年2（後書き）

発狂したカサルア・・・本章の核となります。
クロウリィは、一体何に対して怒っていたのでしょうか。

そして、物語は本格的に動き出します。

第6話　過去

乙は神殿の中庭をとぼとぼと歩いていた。
どこに行くわけでもなく、ただ歩いていた。
そんな乙の元気のない姿を見て植物たちが声を潜めて心配していたが、その声に気付くこともなく通り過ぎていく。

…昨日のことが頭から離れないのだ。
カサルアの発狂。
クロウリィから言われた言葉。
考えても考えても答えが見つからず、心がズキズキと痛んだ。

あの後、どうなったのかとマリーに聞くと、カサルアの発作はよくあることでしばらくしたら落ち着いたのだという。サオもあまりお気になさらずに、また来てくださいと言っていたとのことだ。
乙は“よくあること”という言葉に引っ掛かりを覚えた。
…ならばカサルアは頻繁に、声をあげて泣き叫び暴れていること言うことになる。乙には、カサルアがまるで何かから逃げるように暴れているのでは?と感じていた。

はぁ…。
ため息をついても何にもならない。
あんなことがあって、カサルアについてもっと知りたいと思った…
でも、カサルアについて詳しく教えられないのだとサオにもマリーにも言われてしまった。

はぁ…。
もう何度目かもわからないため息をついた。

スッと見上げた午後の空は薄雲に覆われくすんでいた。
まるで自分の心のよう…。

ぼんやりと佇んでいると、不意に声が聞こえてきた。
「？」
何だろうと首を巡らすと、強烈な色彩が乙の眼の中に飛び込んできた。

鮮やかな朱い髪は短く切られまるで燃えているように荒々しいが、精悍な顔に浮かぶ瞳は深い森を思わせる深緑の色をたたえ、その対照的な動と静の強烈な色彩をその身に宿していた。そして室内から窓の木枠にその無駄なく鍛え上げられた逞しい褐色の体をもたせかけ、乙に声をかけていた。

――ミハだぁ。
そうとわかると乙は嬉しそうに微笑み、ミハのもとへと近づいて行った。

ひたりと漆黒の瞳と深緑色の瞳が絡み合う。

「キノト。散歩か？」
「…あ、はい」
「？…どうした、元気がないようだが」
「……」
「…何かあったようだが、まあこんなところで立ち話もなんだし」

こっちにおいで――と言い、返事を待たずにグイっと乙の体を持ち上げ、窓を飛び越えてミハの居室に降り立たせた。
突然のことに目を白黒させて驚きつつも、日本人の性か「お邪魔します…」と礼儀正しくお辞儀した乙であった。

意外にも冷静なその様子に、ミハがプッと吹き出したことは言うまでもない。

「落ち着いたか？」
「？」

今、２人は神殿内のミハの居室で相向かいのソファーに座りながら紅茶を飲んでいるところだ。

「…自覚なし、か？さっき庭園でキノトを見たとき、かなり酷い顔してたぞ？」
「酷い…？」
「あぁ…。生気がなく、ぼんやり空を眺めていた」
「……」
「まるで、今にも消えてしまいそうだった――」

だから声かけたんだ、乙が消えてしまわないように…な？と最後は少しおどける様に言った。
その言葉に乙は、申し訳なさを感じていた。
…ミハに心配をかけてしまった。
しょんぼり俯いてしまった乙にミハは苦笑した。そして、安心させるようにやわらかく微笑みながら乙を見つめた。

「キノト。何があったか知らないが、そう思い悩むな。そんな顔してると、いい考えも思い浮かばないぞ？」
「…そう、で、すか、ね？」
「あぁ、そうだ」

「…そうです、か？」
「そうだよ」
「…そうですね」
「あぁ」

力強く言うミハに乙は頷きぎこちないながらも顔をあげ、心の中で気になっていたことを問うた。

「…あの、突然ですけど。…その。…私って、お節介ですか？」
「…は？突然だな」
「す、すみません」
「う～ん。お節介は、いらぬ世話を焼くってことだよな…。私が思うにキノトは、怖いもの知らずだと思うぞ？」
「怖いもの知らずぅ？」

乙はなんだか豪胆だと言外に言われているようで、思わず言葉尻が不自然なほど上がってしまった。
そのおもしろい声にククククッと笑いながらミハは説明した。

「もちろんいい意味でのな」
「いい意味…」
「そうだ。自信に満ちて、何ものをも恐れずにしっかり地に足をついている…キノトはそういう芯があると思う。そしてそれは、誰もが持てるものじゃない。キノトの長所だよ」
「長所…？」
「あぁ。お節介っていうのだって悪いことじゃない。むしろ、他人のことを気遣うことができるってことだ。…これも長所だよ。まぁ“お節介”という言葉があまりいいように聞こえてこないがな」
「…なんだか不思議。ミハに言われると、とってもいい言葉に思えるから」

「人徳かな？」
「あはは っ！そうかも」

あはは っ――とミハと笑っていると、先ほどまで淀んでいた心が不思議と晴れていくのを乙は感じた。
そんな柔らかくなった乙の表情に安堵しつつ、ミハは少し温くなった紅茶を啜った。
そして何かを考え込むように目を閉じた。
ふと考え込んでしまったミハに、どうしたのかな？と思いつつ、折角なのでミハの顔を眺めていた。

…やっぱり。
乙は改めて思った。
ミハとニースは、双子の兄弟なんだと。
その身に纏う色彩や体格や物腰、性格は真逆といってもいいほどで、全く似てはいない。しかし、時折見せる素の表情やよく見ると同じ顔の造作などは大変似ている。
今、こうして目を閉じているミハは、生まれつき目が悪く常に目を閉じているニースと全く同じ表情をしている。

かなりジロジロとミハを観察し熱い視線を送っていたのを目が閉じていてもわかったのか、ククククッと面白そうに喉を鳴らして目を開いた。

「そんなに熱く見つめられると、体が焦げてしまいそうだ」
「え！？目を閉じてたのに…わかってたんですか？」
「ククククッ。あぁ、あれだけ熱心に見つめられたらな」
「あ～。すみません」
「で？観察結果は？」
「ぷっ…。はい、ええとですね。結果は、やっぱりミハとニースは

双子の兄弟なんだな～って思いました！」
「……」

ミハは思わずビクッと震えた。
まさかそう言われるとは思っていなかったからだ。
でも…。
不思議と嫌とは思わず、むしろその逆の思いを感じていた。
長年、双子というだけで忌み嫌われていたため、常ならば“双子”という言葉を聞くだけで恐怖と嫌悪を感じその言葉を吐いた奴を睨め付けていたのに…それが、乙が言うとなぜか“双子”という言葉が至上のものと思え、誇らしくも感じるのだから――。
やはり、乙がミハとニースを曇りのない眼で見て、そして受け入れてくれた初めての人物であるからだろう。
ミハは太陽のようにニコニコと笑う乙に慈愛に満ちた笑顔を向けた。

「ありがとう、キノト。」
「???変なの―。ありがとうってなんで？」
「双子である、私たちを認めてくれたからさ…」
「ふつうだと思うよ？」

不思議そうに首を傾げる乙をこれまた愛しそうに見つめつつ、ミハは思った。
…話そう、と。
きっと、乙にはそれを知る権利がある。

「…キノト。…私たちは、キノトに救われたんだ。…初めて神殿の中庭で会った時に」
「え？」
「…あの時、キノトは事もなげに言ってくれた。双子も“ただの兄弟と同じ”…その言葉がどれほどすごい言葉であるか。どれほど欲

してきたか。どれほど救われたか…！」

突然の血を吐くような吐露に、胸を締め付けられる。

ミハの言うことがとても重い言葉であると、乙は感じた。

そして、この世界では双子というのはそれほどまでに…？と。

「……。…キノト。…だから、君に話そう。私たちの過去を――」

震えそうになる唇を噛み締め、ミハは言葉を紡いだ。

＊＊＊

この世界では、双子は凶兆の前触れとされ忌み嫌われてきた。

人は皆異なる己自身の顔を持って生まれてくるのに、どうして双子は同じ顔を持って生まれてくるのか。

それも寸分違わぬほどに。

その不可思議さ気味悪さから同じ顔を持った双子は嫌悪されてきた。

しかし同じ双子でも、違う顔を持って生まれてくる兄弟もいる。その双子は“一度に二人の子供を授かるなんて、なんと縁起の良いことか”と大勢から祝福を与えられる。

天と地ほどにも差のある“双子”。

双子…。

顔が似ているだけで、人であることには何の違いもないのに。

この悪しき考え方は、今もまだ人々のなかに深く深く根付いている。

＊＊＊

ガーバント子爵家は、貴族ではあるがそれほど裕福な貴族ではなかった。
貴族といえど、爵位は子爵。家族は小さい領地の中で、慎ましやかに生活していた。
そしてうれしいことに、奥方の腹の中には子供が宿っており近々出産という時であった。
しかし、少し不安なことがあったのだ。それは…奥方のお腹が異常に大きいことだった。
奥方は、もしかしたら…。と思っていた。
また医者も奥方と同意見だった。

そう。
…お腹の子は、1人じゃない…2人だと。
双子を産むことは、出産にかかる母体への負担が数倍増すことにもなるし、それに加え、もし、“顔が同じ双子”が生まれてきたら…
そのリスクは計り知れない。
けれど、夫婦はどのような子どもが生まれてこようとも、せっかく授かった命なのだから自分たちの手で守り育てようと考えていた。
程無くして生まれてきたのは、朱い髪に深緑色の瞳をもつ瓜二つの顔の双子であった。

両親はわが子に訪れるであろう辛い現実を思い涙した。
そして、何としてでもわが子を愛し守り抜こうと夫婦は決意したの

だった。

生まれ出でた子供は、ミハ・ロード・ガーバントとニース・リラ・ガーバントと名付けられた。

双子が生まれたら、凶兆。

だから双子は、引き離されて育つ。それか…生まれた瞬間に一方を殺してしまうのだ。

しかし、どちらの選択もせず双子を同時に育て上げるという夫婦に、親戚は猛烈に反対していた。「そのうち、禍が起きる！」「そのとばっちりを受けるなんて御免だ！」と散々言われ罵られたが、頑としてその主張をはねのけていた。

しかし悪いことに…数か月後、あることが発覚したのだった。

それはニースが外界に対して全く反応を示さないということだった。

…目が見えないのだ。

目の前でおもちゃを振っても、まったく反応せずにずっとぼんやりとしている。

夫婦はどうにか目が見えるようにとあらゆる方法を試し、医者や神殿を訪ねては治療を施したが全く良くなる兆候はなかった。

悲嘆にくれる夫婦であったが、このときを待っていたとばかりに親戚たちは「やはり双子は禍のもとだ！」「早急に離すべきだ！」と連日やってきては説得にまわった。しかし夫婦は頑として受け入れなかった。

けれどその後、元々あまり体が丈夫ではなかった奥方は、親族からのプレッシャーや日頃の心労も相まって体調を崩し寝込んでしまった。

どうにも宜しくない状況に陥っているガーバント子爵家の内情を知

り、今まで静観を決め込んでいた奥方の兄は「このまま双子がガーバント子爵家にいたら確実に不幸な身の上に置かれてしまうだろう…夫婦もまたしかり」と大いに危惧した。
したがって目の悪い弟の方を自らの家であるトリアナー子爵家の養子にしようと決断し、半ば攫う様にニースを引き取ったのだった。

＊＊＊

ミハとニースは8歳になった。
ガーバント家とトリアナー家と離れ離れに生活するようになってしまったが、2人は頻繁に会いとても仲良く遊んでいた。兄弟仲はすこぶる良かった。

ニースは養子として引き取られトリアナー家で生活をしているが、肩身の狭い思いなどはしておらず伯父やその家族から惜しみない愛を存分に受けていた。ミハもまた然りである。

また、すくすくと真っ直ぐに成長する幼い2人にこれ以上辛い思いをさせないために、大人たちは周りの害意から徹底的に守ってきた。…が、やはり全てを遮断することは不可能で時折聞こえてくる噂話などから、2人は“双子”という存在についてだんだんと理解してきていた。もちろん、両親たちはそのことを問うと否定していたが…。

そしてある日、2人がいつものように遊んでいると、ニースがおもむろにミハに言ったのだ。
ニースは、今までそのことを一度も口に出したとはなかった。
きっとずっと感じていたことであっただろうに、しかし子どもなが

らにそのことは言ってはいけないと分かっていたのだろう。
それでも、不意に言葉に出してしまったのか、その言葉を初めてニースから明確に聞いたのだ。

『どうしてふたごなのに、ぼくだけめがみえないの？』

『どうしてぼくだけと―さま、か―さまとくらせないの？』

『ミハがぜんぶとったの？』

『……ぼくから……ぜんぶ……』

一言一言が、胸に突き刺さった。
ニースの言葉は真実の言葉。
今まで、ずっと目をそらしてきた事実。

ミハは幼いながらも感じた。

…そうだ、自分さえいなければと。

そんなことがあってから、ミハはニースと顔を合わせにくくなってしまった。
子どもながらに、もう会ってはいけないのでは…？と感じたのだ。
それは単に、ニースから逃げたいがための体のいい建前なのかもしれない。

これ以傷つきたくなくて…。
だから、会いたいけど会ってはいけないのだと自分を正当化させた。
そうは言っても幼い心では、なかなか割り切れず整理もつかない。
だから…ミハは荒れていった。
喧嘩である。
ギシギシと痛む心を身体の痛みで誤魔化すように。

また、そうやって家の外に出て初めて分かったことがある。
今まで自分は、大切に大切に家に守られてきたのだと。
一旦外に出て見たその世界は、知らない世界だった。知らない色をしていた。
皆がミハに嫌悪の視線を浴びせたのだ。
初めての感覚だった。
知らなかったのだ…。
こんなにも、双子というだけで忌み嫌われるなんて。
その苦しさを紛らわすようにより一層、喧嘩に明け暮れ荒れていった。

＊＊＊

相変わらずニースとは、ぎくしゃくした関係が続いていた。

１０歳になった時、両親からニースが神官になるべく自らその門をたたいたのだと聞かされた。
なぜ、神官なのか？
疑問もあったがもうすでに決まったことであり、自分に何ら相談もなく決めたニースに不満もあった。
だが、ニースのことを思うと…何も言えなかった。
神官になるということは、いろいろと制約がついて回る。
厳しい世界だし、神官見習い中は修行のため外界とは一切の接触を断つので親族ですら滅多な事がないと会うこともままならない。さらに、神官になるということは“家”を捨てるということである。
神の御前では家柄（爵位）などは関係がないということで、ニース・リラ・トリアナー（トリアナー家の養子になったので、その名を冠している）からただのニースとなるのだ。これは単に、神の御前では“平等”というだけではなく、政治と宗教というものを離すという意味合いも含まれているのだ。
だから神官になるということは、家を捨てるということなのだ。

こんなにも重大なことを、なぜ一言の相談もなしに決断してしまったのか…。
ミハは思った。
ニースは本当のところ、ミハという双子の片割れである者から逃れたかっただけなのではないのかと。
双子という呪いから逃げたかったがために、自らが“家”を捨てることで幕引きをしようとしたのではと。

…私さえいなければ。

ミハは深く自分を責めた。
ニースばかりが、全てを背負い込もうとしている。

自分は喧嘩に明け暮れ逃げていただけだというのに…。

何と自分は、罪深いのか。

自分は、ただニースを不幸にしているだけだ。

＊＊＊

数年後、１４歳になったとき…天変地異がリリーネルシアを襲った。
各国は混乱し、人心は惑い、戦争に飢饉があちこちで起こった。

そしてそんな中、ある流言が飛び交った。

“双子が災いを呼び寄せた”

その言葉に踊らされた人々は、魔に魅入られたようにその年に生まれた双子を悉く殺したのだった。
何の罪も無い、無垢な赤ん坊たちを。
しかしそれでも飽き足らず、人々は“神に双子を生贄に”と自らを正当化させ狂ったように殺戮したのだった。
今や双子は狩られる対象だった。

ミハの命が危ないと、両親は家の最奥に身を隠させ、嵐が過ぎるのをひっそりと待った。
また両親もミハもニースのことが気がかりだったが、神に仕える者の集団なのだからそんな流言には騙されないだろうと思われたし、会って元気な姿を見ることは叶わないまでもトリアナー家から定期的に送られてくる『ニースは無事』という知らせを聞いていたので

一先ずは安堵していた。

天変地異から2年ほど経ち、世界が安定してくるとミハも屋敷の外に出られるようになった。

それでも、人々は以前にも増して憎悪と嫌悪の入り混じった汚いものを見る目で“双子”であるミハを見てきたのだった。もちろん各国や神殿は“双子”は天変地異とは何の関わりもないと再三にわたり触れを出し指導していたが、それでもなお人々の心の奥底に深く根付いているのだった。

そしてその年、ミハは双子だというだけで価値がないものと扱われる世の中に嫌気が差し、己の力さえあればどこまでも高みへ登り詰めることのできる世界へと足を踏み入れたのだ。…軍隊である。

時を同じくしてニースは、その才能と信心深さから神官見習いから第三神官へと昇格したのだった。

2人は“双子”という呪いから逃れるために、自らを鼓舞し荒波の中で努力していったのだ。

そしてその頑張りは実を結び、2人は異例の出世を遂げていったのだった。

第6話　過去（後書き）

シリアスな内容です。

次話もこの続きからです。

第7話　過去から前進

私たちはがむしゃらに走った――。

そう言って遠くを見るミハの深緑色の瞳は、自然とその色を濃くした。

乙は彼の、彼らの過去を聞き“双子”という存在がこの世界でどれ程辛い立場にあるのかを知った。

だからか…。

だから、ミハとニースはこんなにも違うのかと。

違う環境の中で育ってきたから、同じ顔の造りをしているがその印象は全く違い瓜二つの双子であるはずなのに別人に見えるのだ。

そして、そうあることを2人は望んだのだ。

…呪縛から逃れるために。

ミハは再び乙に視線を戻し話し始めた。

＊＊＊

…がむしゃらに走った。

走って走って走って――周りから聞こえてくる雑音なんて軽く受け流して。

そしてその努力は報われた。
ミハは軍の？2である東方将軍に若干３０で任命された。
その年齢の若さもさることながら、そう高くはない身分である子爵でありながらの異例の大出世である。当然僻みもあったが、何より類まれなる強さや知力にそれ以上の人柄の良さから多くのものが慕い、その出世に皆が讃辞を送った。
いつしか、若い者や爵位の低い者の希望の星となっていた。

そしてニースもまた然り。
彼はワーグナー国中央神殿史上、最年少の２５歳で神官長に就任し驚くべき大出世を果たしていた。

東方将軍に神官長。

異例の大出世を果たした2人は当然皆の興味を引き立てた。
2人が双子であることも皆が知っていた。
いや、いつの間にか知られてしまった。
けれど、以前のように忌み嫌われたり嫌悪の目で見られることはなかった。それはつまり、“双子”という呪いから脱したということだった。

光り輝き上位に位置する大出世を“双子”が遂げたことで、徐々にではあるが“双子”という認識が変わっていった。
だからか、時たま2人には“双子”だという者からの手紙をよく受け取った。
『2人に力をもらった』
『双子である自分も、胸を張って生きたい』
『あなたたちは、私たち双子の希望の星です』等々…。
双子として生まれてきたがために辛い境遇に身を投じてきた者たち

にとって、2人は希望であり誇りでもあった。

ミハはそういった手紙をもらうととても勇気が湧いた。

ニースを不幸にした罪深い自分が少しだけ価値のある者に思えて…。

…でも、再び不幸は襲った。

ミハはいつしか“双子”という呪いが無くなったのだと思っていた。

しかしそれは大きな間違いだった。深く人々の中に根付くモノがそう簡単に無くなることはなかったのだ。無くなったとそう感じたのは単に、ミハが東方将軍という地位にいるため皆が面と向かって言わなかったというだけだったのだ。

皆心の中では思っていたのだ。

所詮は双子だと。

呪われた双子だと。

ふっとミハは言葉を切り、少し苦笑しながら言った。

その瞳に宿るのは悲痛な色だった。

「…1年前に病を患ってね。ほら、この右足さ」

そう言って、足を覆う様に掛けられていた膝掛を横にずらすと…そこにあるべき足が無かった。

ゆったりとした白い長衣の服を身につけているため形がぼやけ分か

りにくかったが、膝から下の足のシルエットが無かった。太ももの足の膨らみが突然無くなっているのだ。
右足が無い…。
乙が声もなく驚いていると、まるで安心させるように優しく言った。

「…病だ。珍しい、肉が腐る病だったんだ。」
「……腐る？」
「そう。足首に違和感を感じてな…医者に見せたら、早急に手当てする必要があると言われた。早くしなければ、毒が全身に回り命も危ない。だから、そのためには、腐った患部を完全に取り除く必要があって、足を切断するしか手はないのだと言われた…」
「…そんな…」
「あぁ。私もまさかと思ったよ。…私は軍人だ。これが戦場で足を失くしたというなら、まだ救いはあったのだがな…まさか病で足を失くすなど、軍人としてなんと不名誉なことであったか…」

ミハは苦しそうに言葉を紡いだ。その言葉からは力が感じられず、ほとんど独り言のようだった。
乙はミハの苦しみを知って心が痛かった。
痛くて痛くて、でも何も言えなかった。

「そして私は軍を退役した。…もはや以前のように戦うことのできない身体で、いつまでも軍人としてその位に居座ることは無意味だったからな。…だが、そんな私を不憫に思ったのか、陛下が大臣の職を私にお与えになった。…私は根っからの軍人なのにな」
「……」
「足を失った哀れな私に、皆は口々に言ったよ。“双子の呪い”だとね…。その言葉を聞いた瞬間、思ったよ。どこまでいっても自分は“双子”であり、皆心の中では呪いは無くなったと浮かれる私を嘲笑っていたのだとね」

「そんなことっ…」

「いや、そうなんだ。一度溢れた悪意はすぐには収まらない。…現にニースも、私のせいで色々と悪く言われてしまった。彼の目が見えないのは“双子の呪い”のためだとか、神官長になれたのも他の候補を呪ったからだとか…私のせいで、ニースが散々に言われてしまった。双子の呪いは無くなったと思ったのにな…」

感慨深そうに言うミハに乙は胸が締め付けられるように苦しくなった。

気付いたら乙は叫んでいた。

「違う！ミハもニースも、だれも、悪くない！双子の呪いなんて、そんなもの、ウソです！！」

ミハは突然大声で叫び出した乙に驚いたようで、目を大きく見開いた。

しかしそんな様子のミハには構わず、乙は必死に言葉を続けた。

「みんな、みんな勝手すぎる！呪いなんて、あるはずないのに。ニースの目が見えないのも、ミハの足が病気で失ってしまったのも、全部偶然なのに。呪いなんかじゃない！ただの、ただの偶然なのに…酷い！」

「…キノト……」

「双子の何が悪いの？私にはわからない！…私にも、双子の兄たちがいるの。兄たちは本当に仲が良くて、それがすごく羨ましくて…私も双子で生まれてきたかった！だからミハとニースがすごく羨ましい。それに双子って、一度に命が2つも授かるんですよ！…こんなにも素晴らしいことはないのに。みんな、みんな分かってない！みんな、勝手すぎる！！」

顔を真っ赤にしながら必死に言い募る乙に、ミハは少し泣きそうに顔を歪めながら見つめた。
やはりキノト、君は…。
乙は未だに興奮が収まらないのか、肩で息をしながら唇をキュッと噛んでいた。

「…キノト。人は噂とか慣習とか、そういったものに惑い囚われてしまう。…悲しい生き物なんだ」
「…」
「だから“双子”というものを虐げ、凶兆だと呪いだと囃し立て…それで自分がなんとか優位に立とうとする。そうすることで、簡単に自尊心が保たれる…簡単にな」
「そんなこと馬鹿げてる！」
「そう。だけど、それが現実だ。…そしてキノト。君はそんなこと関係なく、初めから私たち双子をただの兄弟と、ただの人間だと見てくれた。…あぁ。その言葉にどんなに救われたことか。…私たちは言葉にできぬほどの喜びを感じたんだ」
「……わ、私は、思ったことを、言った、までです」

ミハの言葉は乙の胸にスッと入ってくる。
荒ぶる心が自然と穏やかになるような、優しく温かく包み込むような言葉だった。

だから、少しだけ涙が出そうになった。
…悲しいのはミハのはずなのに、自分はただ思ったことを言っただけだったのに。その言葉が、ミハやニースを救っていただなんて…そんなこと思いもよらなくて。でも、その言葉がすごくうれしくて…。
乙は堪えるように美しい柳眉を寄せ、涙で潤む漆黒の瞳を揺らした。

そんな健気な姿にミハは穏やかに微笑み、朗らかに笑った。

「私たちは救われたんだ、キノトに。…でも、本当に私は臆病だ。なかなか前に進めないでいる。…ニースとも、何も、何も変わっちゃいない。…きっと、ニースは私を怨んでいるから」

「そんなことないです！そんなことっ！！」

「…いや、そうなんだ。私さえいなければ、ニースは…」

「勝手に決め付けちゃだめ！…ニースがそう言ったの？違うでしょう？それは、ミハが勝手に思い込んでいるだけです」

乙はミハが、いや…ミハもニースも過去に囚われていると感じた。そこから抜け出せずに、そして新たに傷付くことを極端に恐れているように見えた。実際に神殿の中庭で会った時、２人は互いに予期せぬ相手がそこにいたことでかなり動揺していた。…２人は、８歳のときからずっとギクシャクしたままなのだ。きっと心をさらけ出すこともしていないで、ただそうと勝手に思い込んでいるだけなのだ。

「…いや、そんな――」

「いや、じゃないです！…何も、２人は始まってないし、もちろん終わってもいない。２人はスタート地点に立ってすらないの！そこに立つことすら避けてるんです！だから、だから、まずそこに立って、きちんと２人で話し合ってください。今から始めるんです！」

「……始まっていない…？終わってもいない…？」

「そうです！相手の気持ちを勝手に思い込むんじゃなくて、ちゃんとぶつかって！きっと、きっと思いは伝わるから。…だって、２人きりの兄弟じゃないですか」

そう言って、フッと堪えていた涙を一筋流す。

キラキラと伝い落ちる涙。

美しい宝石のようだとミハは思った。
するとミハの身体は無意識に動き、相向かいの乙のソファーに座った。
ギシッ…と軋む音とともに、逞しく鍛え上げられた胸に乙を優しく包み込んだ。

「ありがとう、キノト。私たちのために、泣いてくれて。…そうだな、私たちは、避けていたんだな。…勝手に思い込んで。そんなことにも気付かなかったなんて」

自嘲気味に笑い、乙の長く流れる夜闇の様な漆黒の髪を撫でた。
まるで、自分を納得させるように。

「…ぶつかるのか…ニースと…」
「そうだよ。…ぶつかることって、すごく怖いことだけど。…立ち止まっているままじゃ、何も始まらないから」
「あぁ、そうだな。始めてみるよ。…スタートラインに立てるように」
「うん。…私も、始めてみようと思う」

乙はこの時カサルアのことを思った。
カサルアの闇を、孤独を理解したいと。
そして一緒に笑いたいと。

キュッと乙がミハの服を掴み、顔をあげる。

「一緒に、一緒に始めてみよう。勇気を出して」
「…あぁ。始めよう」

やわらかく朗らかに微笑み合う乙とミハ。

ミハは思う。
乙は本当に強いと、そしてその心がなんと美しいのかと。

…ありがとう、とミハが言うと、少し照れくさそうに笑いその瞳からまた一筋の涙を流した。

美しい宝石がまた頬を伝った。

それを見てミハは、その涙がもったいないと感じた。
だから自然とその伝う涙を、己の唇で止めた。
乙は突然のことに驚いて大きな目を真ん丸に見開いた。なにせミハの顔がいきなり近づいたと思ったら、頬に唇を寄せたのだから…。

大きく見開かれた漆黒の瞳の中には、白く白磁のごとくすべらかな頬に口を寄せるミハの姿が映っていた。
そのことに満足げにクスッと笑うと、次に涙が伝った跡を唇で拭い、目じりに溜まった涙をチュッと吸い上げた。
あからさまなチュッという音に乙はドキッとして、顔を真っ赤に染めた。

「あ…あっと、…えぇと…ミ、ミハ？」
「うん？どうした？」

消え入りそうなか細い声を出す乙に、何の事だかさっぱりといったように惚けてみせた。
そして優しく包み込むように身体を覆っていた腕を乙のほっそりとした腰にしっかりと巻き付け、髪を撫でていた手を髪の中に埋めて後頭部に這わせ上向かせるように手を動かした。

下から見上げてくる乙の漆黒の瞳は熱っぽく潤んでいた。

誘っているのか、ただ羞恥に潤んでいるのか…まぁ、確実に後者だろうが、おずおずといった様に上目遣いで見上げてくる乙にミハはやわらかく微笑んだ。
白磁のごとくすべらかな顔は、今や真っ赤な薔薇色に染まっていた。
ミハはその美しい花園に、いきなりキスの雨を降らせた。
…優しい親愛のキスを。

最初は小雨でパラパラと。
乙は恥ずかしそうに身を捩りながら、先ほどよりも真っ赤に頬を染めた。
その様子に満足しながら、瞼に、頬に、額に、目じりに、鼻に…沢山の雨を降らせた。
降るごとにそれは段々と激しくなり、仕舞には土砂降りになった。
チュッチュッと絶え間なく音が鳴り響く。

不意にミハはキスを降らすのを止め、顔を離し乙を気遣う様に伺い見た。
当の乙はというと、真っ赤に顔を染めながらもミハのキスの意味がわかるのか、照れながらも柔らかく微笑んでいた。
フッとミハは笑う。

「キノト。キスは嫌だったか？」
「……い、いやじゃなかった……けど、恥ずかしい」

無意識にキュッとミハの服を掴み顔を俯かせながらぼそぼそと言った。
クスクスと笑いながらミハは少し安堵した。…拒絶されなくてよかったと。

俯く乙の頭を撫でながら、キノト――と優しく名前を呼んだ。
恐る恐る顔をあげると、優しく目を細めた深緑色の瞳と出会った。

「…嫌なら、嫌だと言って」

そう言い終わるや否や乙の唇にミハの唇が重なった。
えっ？と思ったらもう離れていた。
一瞬のことだった。
ミハは口元に笑みをたたえながら、次の瞬間には再び乙の唇に口付けていた。
乙は状況が飲み込めずに目を白黒させていたが、ミハは構わず触れては離れ、触れては離れのキスを繰り返した。
そして再び不意にキスを止め、顔を離し乙を気遣う様に伺い見た。

「…キノト。…キスは…嫌だったか？」
「……い、いやじゃ、なかった」

少し掠れたような声を出すミハの問いに、乙は頬を染めながら反射的に思っていることを口に出してしまった。
そう、嫌ではなかったのだ。

乙はずっと女子高に通っていたため、男性といったら父や兄だった。
だからミハがキスしたり抱きしめたりすることは、父や兄が（もっぱら兄が）以前乙にしたキスやハグと同じものだと感じていた。どれもこれも、親しみのこもった親愛のもの。
なので、嫌だとは感じなかった。
もちろん、傍から見たらその感覚はかなりおかしいことなのだが…。
ある意味、兄たちが乙に悪い虫が付かないように固く固くガードしすぎて、男性＝父や兄という方程式を構築させてしまったことが裏目に出ている。異性からのキスは、どんなに親愛のものだとしても

普通はお断りするだろうに、方程式に従って乙は何も気にしていないのだから…。

ミハはそんな様子の乙にどこまで気付いているのかはわからないが、明らかに深緑色の瞳はその奥で熱っぽく煙っていた。しかし欲情し理性を失うというのではなく、その瞳は終始愛おしそうに優しく乙を見つめていた。

「…なら、もっと…いいか?」

掠れつつ低く響く声がそう乙に問うが、ミハは返事を聞かぬまま再び乙の唇に口付けた。

あっ…と小さく声をあげた乙であったが、その声はミハの唇に吸い取られてしまった。

先ほどと同じように触れては離れ、触れては離れを何度も繰り返す。チュッチュッと音を立てながら何度もキスの雨を降らせる。

そしてそれは次第に角度を変えて啄ばむようになった。

…少しずつ強く、激しくなっていく。

ミハは乙の果実のように瑞々しくやわらかい唇を一心不乱に貪った。

何度も何度も角度を変えて、時折唇を食ませながら。

そのうち、飢えた獣が食事にありつくように、赤く色づく唇を激しく喰らうように口付けた。

息も吐かせぬほどのキスの嵐。

乙はどんどん息が苦しくなり、空気を求めるようにミハの唇から逃げる様にもがいた。

腕をミハの逞しい胸板にあて距離を取ろうとして突っ張るが全くびくともしなくて、なんとか首を反らして唇が離れた瞬間に必死にな

って息を吸う。
けれど、ミハはそれを許さず直ぐに唇で覆ってしまう。
しかし、それだけではない。乙が口に吸った空気をミハは遠慮なく、唇を貪ると同時に吸い上げて奪ってしまう。

「……やぁ…ん……んぁ…はぁ……あ」

苦しくなって、やめてと言葉に出そうにも、その言葉をミハが吸ってしまうので言葉にならない。そしてさらに酸素不足に陥ってしまう。
だから、必然的に空気を強く求めてしまう。
ミハの口の中に。
自衛本能のように無意識にミハの口から空気を奪うように吸い上げる。
だがそれはミハにとってうれしい反応だった。乙にはそういう意識は全く無かっただろうが、ミハの口に空気を求めることでキスに応じている格好になるのだから。
必死に唇を動かし、唇を貪る。

互いに激しく求めるキス。

するとさらに繋がりを深めるように、乙の薄く開いた唇に熱くヌメルものを捩じ込んだ。
舌である。
んんん!!!
乙は口の中に入ってきた異物に驚き、声をあげるもくぐもって舌に絡めとられてしまう。
あまり力の入らない手で、トントンと力いっぱいミハの胸を叩き抵抗を試みるが全く通じない。それどころか、身体に回されたミハの逞しい腕にギュッと力をこめられ、隙間なく身体が密着してしまい

身じろぎすらできなくなってしまった。

酸素が薄くなり、激しいキスに翻弄され意識がぼ―っと遠のき始めた。

うまく働かない頭で、口の中を暴れまわる粘着性の熱いモノを自らの舌を使って押し出そうとする。

だがそうやって舌で押し出そうとする行動もまた裏目に出て、自分で舌を絡め積極的に応じているようになってしまった。

ぴちゃぴちゃ、と舌が絡まり合い互いの唾液をかき混ぜる音が室内に妖しく響く。

ミハが覆いかぶさるように乙と舌を絡め合っているため、乙の口の中には2人分の唾液が溜まっていた。喉に流れ込んでくる唾液を無意識にゴクゴクと嚥下していたが、止め処もなくそれは流れてくるため飲みきれない。咽そうになりながらも必死に飲み込むが、飲みきれず溢れた唾液が唇の端をツッ――と流れていった。

細い顎を伝い首筋まで流れる粘液を目の端に捉えたミハは、それを追う様に唇を離し舌を使って透明なその筋を舐めあげた。

はぁっ！と唇からミハが離れたことで胸一杯に息を吸うが、すぐさま唇は塞がれ先ほどよりも深く深く、より激しく唇を貪り舌を絡めとられた。

深く激しく。

乙はそれについていけず、フッと意識を手放してしまった。

ぐったりと力が抜けた乙を抱きしめる。

思った以上に激しく求めてしまったことにミハは苦笑しつつ、熱に耽った頭をフルフルと何度か振りその余韻を消し去ろうとする。
時折痙攣するように、ピクッと動く乙の身体を優しくソファーに横たえた。
華奢ではあるが女性らしい美しいラインをもった身体をそっと隠すように膝掛をかけつつ、名残惜しげに柔らかな白い頬を撫でる。

美しい。
フッと頬笑むミハはその柔らかい表情のまま、扉の方に目を向ける。

扉は閉めていたはずなのにいつの間にか開いていた。
否、ミハは知っていた。
扉が開く音も、人が入ってきた気配も、そして物陰でずっと見ていたことも…。
全て知っていて敢えて無視したのだ。

一見誰もいない空間に見えるが優秀な軍人であるミハには、気配でどんな人物がどこに隠れているのかといったことまでが手に取るように分かる。
だからミハは、朗らかに朝の挨拶でもするように言った。

「これはこれは。何のご用でしょうか?……クロウリィ殿下?」

「……」

すると、スッと物陰から姿を現したのは、ミハの言った通りクロウリィであった。

２人は無言で見つめ合った。
冷え冷えとした男たちの鋭利な眼差しが交差していた。

第8話　王宮の宴

「今日はルドルフ陛下の即位を祝う宴なんだよね？」
「はい、そうです。毎年陛下の即位を御祝いするのですが、今年は特に即位１０年を迎えられましたので、３日３晩国中で御祝いをするのです」
「へぇ～。国中で？ということは、街でも皆お祝いしてるんだね」
「ええもう。街も人もお祭り騒ぎでとても賑やかです」
「楽しそうだな…」
「興味があるようですね…街に行ってみたいですか？」
「うん！行けるなら行ってみたいな。私まだ街に行ったことないから」
「…ではトトゥロ大神官長にお伺いしてみます」
「ありがとう！ルシカ！」

乙とルシカはニコニコと笑い合いながら、王宮の大広間に続く廊下を歩いている。
今日からルドルフ国王陛下の即位を祝う宴が始まったのだ。
一日目の夜の宴では、国内の貴族や神官が王宮の大広間の集まり祝宴を挙げ、二日目、三日目は他国の貴族たちを招くこととなっている。

その一日目の夜の祝宴に2人は参加しようとしているのだ。

ルシカは神官の正装である、薄い灰色の絹の長衣に、白地の絹に銀糸の刺繍で縁取られたローブを羽織っている。
乙は白地に下にいくほどに濃くなる藤色のレースを何枚も重ねた、

ふんわりとしたドレスを身にまとい、首元には繊細な作りの銀と紫水晶でできたネックレスをそっと付けている。漆黒の長い髪は頭の上で複雑に結いあげられており、白い項が輝いて見えた。
乙のドレス姿は大変似合っており、大変美しかった。

しかし、今夜の装いに白地のドレスを着るのは…大変珍しい。

夜の宴であるにもかかわらず白地の淡いドレスを身にまとうなど、普通の貴族であるならまず間違いなく着てはこない。
…目立たないからだ。
だから皆、赤やピンクなど色の濃い目立つ色のドレスを身にまとうのだ。
けれど今夜の乙の装いは目立つためのものではなく、むしろその逆で神官の正装に合わせた白系のドレスを着て、その中に上手く紛れ込むためのものなのである。
というのも、普通に貴族たちの輪の中に紛れ込むことなどできるはずもなく、乙の容姿からもかなり目立ってしまう可能性が高いため、それならばとひっそりルシカたち神官の中に紛れて参加しようとしているのだから。
…まぁ、乙がこういった場に慣れていないため神官たちの中に紛れ込むのだが。

祝宴はすでに始まっていた。
2人は目立たないように、皆から遅れて大広間に入ろうとしている。
そのため廊下には警備のための衛兵しかいない。

やっと大広間に到着し、重厚な扉の前に立つ。

「では、入りましょう」

「はい」

グッ―…と重厚な扉が低く唸り声を上げ開いた。

すると一気に大広間から人々の話し声や品の良い音楽、色々な香水が混ざり合った匂いと熱気が流れ出してきた。

独特の雰囲気に少々気押されながらも、ルシカに背を押され歩き出す。

大きな大きな大広間。

そこに何百人という貴族がいる。

そして後ろの壁には神官たちがズラッと並んでいた。

神官は参加こそすれど、貴族たちのようにダンスをしたり食事をしたり…といったことはしない。

大広間の後方に並び思い思いに談笑しているのだった。

「やっと来ましたね」

ニース神官長が笑顔で2人を迎えた。

「只今参りました。…遅れてしまいましたか？」

ルシカがニースに挨拶しつつ、心配そうに聞いた。

「いいえ。ですが、少し遅かったので心配していたのですよ」

「あ～、ごめんなさい。私がドレスを着るのにちょっと手間取ってしまって…」
「ふふふ。今日のドレスも、大変お似合いですよ。キノトは何を着ても似合いますね」
「クスクス。ほめても何も出ませんよ」
「お世辞などでは…ねぇ、ルシカ。大変お似合いだと思いませんか？」
「はい。まるで花の妖精のように可憐で……美しいです」
「～～～。そういうことを真顔で言わないでよ。…恥ずかしい」

ポッと顔を赤らめた乙にルシカやニースはもちろん、周囲にいた神官たちが一斉に顔を赤くした。
普段人の美醜などに惑わされることのない神官たちだが、乙の愛らしい表情を見て不覚にも見惚れてしまったのだ。
ぼ～っと顔を赤くして呆けている神官たちを現実に引き戻したのは…2人の神官長である。

「まだまだ、修行が足りませんな」
「えぇ、全く。ニース神官長も…若いですなぁ～」
「「「!!!」」」

面白そうに言う2人に、神官たちの顔がサッと青ざめた。
何しろ“修行が足りない”と神官長たちが行ったその次には地獄のようなキツーイ、キツーイ修行が待っているのだから…。
アワアワとしだした神官たちを眼の端にとらえつつ、ニースは苦笑し「からかわないで下さい…」と、こちらに歩いてくる2人の神官長を少し諫めた。
しかしそんなことは意に介さず、依然として2人は飄々としていた。

「まぁ、あれだけ破壊力があったら…のう」

「あぁ。仕方がないですな～、儂らももう少し若ければ――…」
「御二人とも…！」

ニースは皆まで言わせず言葉を遮った。
2人は面白そうに首をすくめつつも、ニコニコと笑っていた。

そのテンポの良いやり取りを見ていた乙だが、さっぱり話についていけずにいた。
乙の頭の上には、？マークが大量に浮かんでいた。

「えっと…、ドロリア神官長とパル神官長？」
「あぁ、すみませんね。キノト様、ご機嫌麗しゅう」
「お久しぶりでございますな。なかなか儂ら2人はとは、会う機会がありませんでな」

ドロリアとパルとは最初の頃に紹介され面識があったが、忙しいのか乙とはあまり会う機会がなかった。
ドロリアは主に国内の神殿を統括し、パルは他国の中央神殿との協調役をしているため色々と忙しいようだ。その点ニースは、王宮に隣接するこの国の中央神殿を統括しているため比較的乙と会うことができた。
2人とはあまり会うことはなかったが、乙にとっては近所のオジサン的な存在で、こんな風に神官たちとテンポよく話すので面白い人たちだな～と思っていた。

その後、幾分か皆で談笑していたが、神官長ともなれば貴族たちとも色々と挨拶などもしなくてはならず、3人連れだって行ってしまった。

「それでは、キノト様。我等はもう行きますが、どうぞお楽しみくださ い」
「楽しまなければ損ですぞ」
「はい！楽しませてもらいます！」
「ほほ。…それでは、これにて」
「はい、またお会いしましょう」
「キノト、私も行きます。ルシカにあとは任せますから、では」
「はい。お仕事がんばってください～」

乙は3人に軽くお辞儀をして見送った。
ニースは最後にルシカに顔を向け、任せますと言い去って行った。

「忙しそう…」
「神官長ですからね」
「ルシカは？」
「私はただの第一神官ですから。ちなみに、祝宴に参加できるのは第二神官以上なんですよ」
「へ～、確かに…いつも見る人とかいないかも」
「はい。第三神官や神官見習いには、まだ刺激が強いので…」
「刺激？」
「う～ん。…まぁ、修行が足りないってことですよ」
「修行ね～。そういえばさっきも修行がなんだとか言って――…」
「楽しんでるか？」

不意に乙の言葉を遮るようにして、誰かが会話に入ってきた。
えっ？と思い声の主を辿って振り返ると……ミハが立っていた。
乙は思わず、ミハ――っ！と声をあげてしまった。というのも、一昨日聞いた時点では足の調子が悪いので行けないと言っていたからだ。

ミハはニッと笑いながら乙を見た。

「淡い色のドレスもなかなかいいものだな。キノトによく似合ってる」

「ありがとう！ミハも、すっごくかっこいいよ」

乙は嬉しそうにほほを緩め、ミハの装いを見た。

深緑色の裾の長いローブは金糸と銀糸の刺繍で豪奢に縁取られ、中に着ている長衣は萌黄色で金と深紅の複雑な模様が施されている帯で留めており、首や腕には太い金細工のアクセサリーを身に着けていた。

ミハの深緑色の瞳と燃えるような朱色の髪の色を基調とした装いだった。

普通ならば他の貴族と同じように礼服を着るところだが、右足が膝から下がないためパンツを履くとどうあっても不格好になってしまう。なので長衣という装いなのだ。

ミハの装いは大変かっこよかった。

先ほどから男女問わず貴族たちの熱い視線をミハは受けていた。

その視線から乙を上手く隠すように、ミハとルシカはさり気なく移動して壁を作った。

乙はいつもとは違うミハを嬉しそうに見つめていたので、そんな2人には全く気づかなかった。

「楽しんでいるみたいだな」

「はい。さっきまで、3人の神官長たちとお話していたんだよ」

「そうか…」

「ニースも、楽しそうだった…よ？」

「……フッ」

乙はいらない情報かとも思ったがニースのことを話した。
ミハはそんな乙の気遣いに微笑ましいものを感じつつ、知りたいなと思ったことを乙が先んじて話してくれたことに感謝していた。

一昨日、ミハが双子の話をした後に、互いに“ぶつかってみよう”と“一歩踏み出してみよう”と約束し合ったのだ。

ちなみにその後、ミハのキスに気を失ってしまった乙であったが、起きた後にミハから「ごめんな。キノトは妹のように可愛くて、つい…」と謝られたのだった。ちょっとばつが悪そうに頭をかきながら言うミハは、乙の双子の兄の仕草に良く似ていて思わず吹き出してしまった。
ミハからのキスには驚いたが、やはりミハはミハでしかなく、兄の様にも思っていたのであっさりと許してしまった。
普通なら、あれほど官能的なキスをされておいて「兄の様な人からのキスだし、まぁいいか」と完結できる者はいない。…さすが、乙である。

そんなこんなあったが、乙とミハは今までと変わらない様子でいた。
…2人は、物怖じしない強心臓の持ち主ともいえる。

楽しく3人で談笑していると広間の前方から突然、キャ――ッッ!!!という黄色い声が上がった。
何事かと見やれば、まさに黒山の人だかり状態で貴族の御令嬢たちが、ある人物を囲んでいるところだった。
乙は何とか見ようとつま先立ちになって頑張ったが、何より遠いこ

とと背が足りないことで見えなかった。
え?え?だれ―?とミハとルシカに聞くと、2人は顔を見合わせつつ深いため息をついた。
「???」
2人の反応がよくわからず、質問にも答えてくれないため余計に見たくなった乙は、はしたないかとは思ったがぴょんぴょんとジャンプをして見ようとしだした。
そんな乙に苦笑しつつミハは、見たいか?と聞いた。
すると間髪入れず、もちろん!と元気よく言うものだから、ミハは右手に持つ松葉杖をしっかりと持ち左手で乙の腰を抱え込みヒョイッと持ち上げた。
乙がドレスを着ているにも関わらず、いとも簡単に持ち上げてしまうのだから、退役したとはいえやはり根っからの軍人なのであろう。
体力があるということと女性の扱いとしてはなってないというところとか…。
当の乙は全然気にしていないが…。

突然視界が上がったことに、乙はうわっ!と驚きの声を上げた。
視界は一瞬にして背の高いミハと同じになった。
ルシカは、なんてことを!と驚いて苦言を呈したが、ちょっとだけだよと言うミハに渋々頷いたのだった。

「どうだ?見えるか?」
「あ―…とっと。…あ!見えた見えた!」
「で、誰だった?」
「クロウリィ!」

正解!と言いつつミハはゆっくりと乙を降ろした。

そう。

沢山の貴族の御令嬢から黄色い声を上げられているのは、クロウリィであった。
クロウリィは濃紺色の生地に金の刺繍と房がつけられた礼服を着ており、片方の肩からは白地に金糸の刺繍の施された長いマントを身に着けていた。
何故か彼が着ると、その礼服は危険な色香を漂わせ妖しく見えた。
そんな姿に貴族の御令嬢たちは、メロメロの夢見心地でうっとりとしていた。
またそれに答えるかのように、端正な顔立ちに浮かぶ碧色の瞳を妖艶な流し眼を使って彼女たちを見るものだから、ますます効果絶大といえる。

キャ――――!!!イヤ――――ン!!!こっちを向いて――――!!!
との声が響く中、乙は感心してその様子を見ていた。

「本当に、人気あるね。あっ、モテモテっていうんだっけ?」
「そうだな。何せ、あの顔にあの地位だからな。皆狙ってるんだろ」
「へ~。ハーレム状態だね。スゴイ、スゴイ!」
「はぁ…。もう少しあしらってしまえばいいのに…」
「お!キツイこと言うな~神官」
「笑いごとではありませんよ、ミハ様。彼は全く本気ではないのですから。…本気の御令嬢たちが哀れです」
「本気じゃないんだ?」
「もちろんですよ」

3人がクロウリィについて話していると、近くにいる貴族たちがコソコソと噂をしだした。

『全く、あの調子じゃ~参るよな』
『ほんとだ』

『女遊びも大概にしろって。この国の王子サマだろ？』
『確かに。全く“愚弟殿下”だよな。これなら病弱のカサルア様の方が、まだマシかもな』
『違いない。花街にもいっつも行ってるみたいだしな。もう少し自重しろって』
『いや、俺が聞いたところによると、この1カ月くらいは全く行ってないみたいだぞ』
『へ～、何の心境の変化かな』云々…。

乙は陰でコソコソと言う貴族に腹が立ち思わず、貴方達！と声を上げそうになったが、それに気付いたルシカがサッと乙の腕を引いた。それにムッとなった乙は、どうして？とルシカを仰ぎ見たが、ただ首を振るだけだった。
ミハは苦笑しつつ乙の頭に手を置き、落ち着かせるようにポンポンと撫でた。

「…キノトが怒るのも無理はないが、殿下はああいう性格だ。仕様がない。陰口をたたくのはどうかと思うがな」
「でも…」
「自業自得という言葉もあります。彼は、その、本当に遊び方が激しくてですね。有名なんですよ。またその行いを正そうともしない…困った人なんです」
「ククク。花街では結構有名だぞ」
「花街？…それって、何？」

ミハは面白そうに乙の顔を覗き込んでいた。
ルシカはと言うと、余計な事を言うなとばかりにギロッとミハを睨んだが、そんなことはお構いなしに笑いながら言った。

「花街はな…。春を売るんだ。…つまり、娼――」

「はい！もう結構です」

ルシカは強引にミハの言葉を遮り、もう聞かせないとばかりに乙の耳を手で覆った。
ミハはニコニコしながら、お固いね～とか言いつつルシカの冷たい視線を浴びていた。

そんなことしても無駄だよ。キノトも子供じゃないんだから、もうわかったみたいだよ。ほら、顔…と言いつつ乙の顔を見てみなさいとばかりに言うので、ルシカが渋々見て見ると…
乙はこれ以上は限界！というほどに、真っ赤になっていた。
顔も耳も首も…。

真っ赤になり、恥ずかしそうに俯く乙をよく見ようとするように、ミハが顔を近づけるが、からかわないで下さい！とルシカは乙を自分に振り向かせ、やさしく胸に閉じ込めたのだった。
ハハハッ！悪い悪いと、全く悪びれる様子もなく言うミハに再び冷たい視線を送るルシカであった。

3人で楽しそうに戯れる姿を遠くから見つめる者が一人。

――――クロウリィである。

彼は楽しそうにじゃれ合う3人を見て、スッと目を細めた。
その瞳に映る色からは、全く感情が窺い知れない暗い色をしていた。

どうしたんですの?と、腕にしな垂れかかっている御令嬢にクロウリィが目を向けた時には、もうすでに甘く妖しい色を煌めかせていた。

なんでもない…と甘く囁くと、彼女はうっとりと瞳をとろけさせた。

ククククッと喉で笑いながら、オンナって生き物は…と嘲りつつ妖艶に微笑むのであった。

祝宴は色々な人々の色々な思いを乗せて、坦々と進んでいった。

第8話　王宮の宴（後書き）

クロウリィ・・・前回からちょっと怪しいですね。

そのうちに、爆発するかも・・・

第9話　悔夜

祝宴に参加し王宮の居室に帰ってきたときには、夜はもう深まっていた。

乙はずっと着ていたドレスを脱ぎ、複雑に結いあげられた髪を解いた時には、得も言われぬ解放感を味わった。

ふぅ～と吐息をもらし、湯浴みをする。

侍女のマリーがリラックス効果があるからと、数種類の花や薬草を調合したオイルを浴槽に入れてくれたので、香りを楽しみながらゆっくりと堪能したのだった。

普通なら湯浴みは侍女が一緒に入り行うのだが、他人と入ることにそして何よりも体を洗ってもらうということにかなりの抵抗感があったため、ずっと拒否していた。もう最近では、マリーや他の侍女もそのことを心得ており「お手伝いさせてくださいませ！」とは言わなくなったので、乙も心置きなく入ることができるようになった。

湯浴みを終えて、濡れた髪をタオルで乾かしつつ「もう下がって大丈夫、おやすみ」と侍女たちに挨拶をした。「おやすみなさいませ、キノト様」と言い、侍女たちが静かに下がっていった。

パタン…

扉が閉まり部屋の中は、シンッ―…と静まり返った。

先ほどまで祝宴で騒がしかったのが嘘のようだ。

乙はふっと息を付き、髪を拭いていたタオルを机の上に置き、寝室の窓を開いた。

その瞬間、フワッと心地の良い夜の風が吹いてきた。

気持ちいい…。

祝宴に参加したからか、湯浴みをした後だからか…
火照った体にひんやりとした夜の風は心地よかった。

そっと目の前に広がる王宮の庭園を見た。
乙の部屋は3階にあるので遠くまで良く見渡すことができた。

そこは昼とは違いとても静かで暗く、妖しく怖い印象を与えていた。

昼と夜の相反する顔をした庭園。

引き込まれるようにぼんやりと見つめる乙。
こんなにも違う顔をしているんだと…。

暗い闇夜の中に細くて頼りない三日月が浮いていた。
細くて細くて、力を加えたら折れてしまいそうだった。

細い三日月は弱々しい光を地上に降り注ぐ。

その淡い光を身に受けた乙は…この世のものとは思えぬほど美しかった。

月光に淡く光り輝く肌は白磁のごとく滑らかで、闇夜と同化せんばかりの見事な漆黒色の長い髪は濡れてしっとりとしており、ぺったりと項に張り付き乙に絡みついているようにも見えた。

美しい柳眉に長い睫毛。
それに縁取られるかのような大きな瞳に浮かぶ色も、髪の毛と同じく漆黒色。
瞳孔と虹彩が同じ色なため、見ているだけでその瞳に吸い込まれそうになる輝きを放ち、皆を魅了してやまない罪作りな瞳を煌めかせている。

漆黒と白。

乙は相対する色彩に彩られていた。

それはこの世界を作りし至高神ホロに通ずる色彩でもある。

“白光の神”と“漆黒の神”

2つの異名を持つ彼の御方と。
しかし今では“漆黒の神”という名は忘れ去られ神官のみが知る名ではあるが…。

乙は心地の良い夜風を体一杯に受けとめる。

その姿をこっそりと見ているのは、庭園にいる植物たちや動物たち。

そして…

「夜風は体に毒だ」

囁くような声音で乙の後ろから声が聞こえた。
え？と思い振り返ると、寝室と居室をつなぐドアに背をもたせかけつつ腕を組んでこちらを見ている人がいた。
いつから…と乙は疑問に思ったが、そこにいる人物を確認するために小さく、クロウリィ？と呼んだ。
すると、フッと微かに笑ったような吐息が聞こえてきた。
しかし、室内に明かりはなく月の光も弱々しいため、部屋の奥にいる彼の表情は暗くて見えない。だから本当に笑っているのかも、彼が今どんな表情をしているのかも全くわからなかった。

どうしたの？と問う乙に返える声はない。

彼の装いは、白いマントこそ羽織ってはいなかったが祝宴の時と同じものだった。
濃紺色の生地に金糸の刺繍と房が付いた礼服は夜闇に同化し、金糸の刺繍と房、そしてクロウリィの金色の髪だけがそこにぼうっと浮いているように見えた。

すると、やけにゆっくりとした動作で一歩一歩こちらに歩み寄ってきた。
クロウリィは乙を見つめたまま窓辺まで歩み寄り、その引き締まった腕を静かに伸ばし、パタリッ…と窓を閉めた。

先ほどまで心地よい夜の風が部屋に流れ込んでいたが、窓を閉め風が入ってこなくなっただけで部屋はさらに静まりかえり、その空気の重さに乙は息苦しさを感じるのだった。
そっと柳眉を寄せ、彼の行動をいぶかしんだ。
しかし、クロウリィは面白そうに小さくクスッと笑い、碧く光る瞳を妖しく細めた。
そしておもむろに…体を少し傾けつつ乙の体を挟むように、窓の木枠に両手をつき自身の体で乙を閉じ込めてしまったのだ。

えっ……！？

動揺が声となって形の良い唇から小さくこぼれた。
またクロウリィは面白そうに小さくクスッと笑い、ますます瞳を妖しく煌めかせるのだった。
…まるで、乙の反応を楽しむかのように。

乙は快活に太陽のように笑う常の彼とは違い、妖しく危険な雰囲気を漂わせる今の彼に困惑していた。そして今、自分が置かれている状況もあまりよく理解できずに戸惑っていた。

「あ…と…、ど、どうしたの？…いきなり？」
「……」
「クロウリィ…？」
「……」
「…あの…ちょっと…」

しどろもどろになりながらも声をかけるが、全く耳に入っていないのか何の声も発しないクロウリィに焦りつつ、何でこんなことに…？と恨めしい気分にもなり、ちょっと睨んでみた。

だが、普段睨むことなどしたことがなかったため眼力が足りなかったことと、どうしても彼のほうが背が高いため上目遣いになってしまったことで、全く睨んでいるようには見えなかった。そればかりか、誘っているのか?と勘違いさせてしまうような甘い視線になってしまっていた。

するとクロウリィはもう我慢できないとばかりに、ククッと喉を震わせたかと思えば、クッハハハハハ!と喉を反らして豪快に笑った。

何事かと思った乙は、大きな瞳を何度も瞬かせていた。

ひとしきり笑い漸く治まったのか、反らしていた顔を一気に下げ、グッと顔を近づけた。

突然顔が近くに来たので反射的に身を引いたが、背中が窓にくっついていたため下がることができずにガタガタッとガラスに当たった音が部屋に悲しく響いた。

近付いた拍子にクロウリィの肩から、金糸の髪が滑り落ちた。

襟足だけ長いその髪が、乙の頬をさっと掠める。

ドキッ…と乙の心臓が高く跳ねた。

乙はなぜそうなったのか…。

その反応にどういう意味があるのか…よくわかっていなかった。

だからちょっと困ったような顔をしていたら、先ほどまで一言も声を発することのなかったクロウリィが初めて声を発した。

「初心だな…」

しかしその声は小さすぎて乙には聞き取れず、何?と聞き返したが

やはりそれには答えずに唐突に話しだした。

「…そういえば謁見の時、その時にいきなり悪かったな…」

「…え？…え、謁見？」

「覚えてないのか？大臣や神官がいる中で…大勢が見ている中で、キノトにキスをしただろう」

「あ！…うぅ。…うん」

「…あの時は、本当に悪かった。冗談のつもりだったんだ。…すまなかった」

「……」

そう言えば…、と乙は思い出していた。居並ぶ神官や大臣、陛下や大神官長がいる中で突然やってきたクロウリィにいきなりキスをされてしまったのだ。その後で、ルドルフ陛下から「命をもって償う！」とまで言われてしまったのだ。当然、それはありがたく辞退した。その時に「クロウリィが謝ってくれればそれでいい」と言い、ルドルフ陛下が必ずクロウリィに謝罪させる……ということで丸く解決したのだ。

その謝罪が、今行われている。

乙は、なぜ今？と疑問に感じたが、クロウリィは先ほどまで発していた妖しい雰囲気ではなく、反対に至って真剣に誠実に謝罪してきたのだ。その急激な変化に困惑したが、誠意をもって謝罪している…と乙は感じていた。

乙の返事を待っている間、真摯な眼差しでずっと乙を見ているから…。

「…あ、あの時は、本当に驚いた」

「すまなかった」

「うん。…わかった。いいよ、もう」

「…そうか。…ありがとう」

「うん。すごく恥ずかしかった…一杯、人見てたし」
「悪かった…」

その時のことを思い出して、ポッと顔を赤らめてしまった乙は恥かしくてその顔を隠すために俯いた。
乙が心の中で、早く忘れよ～と呑気に考えていたら、突然胸の奥を鷲掴みされる様な低く響く声が頭上から降ってきた。

「大勢が見てない所ならいいのか」

えっ！？と驚き、顔を上げた乙の目の前にいたのは…。
先ほどまで真摯に謝罪していた彼ではなく、ましてや妖しい雰囲気を醸し出していた彼でもない。

ギラギラとした眼光で乙を鋭く射抜き、獲物を前に涎を滴らせる飢えた獣…そのものだった。

怖い。
乙はそう思った。
男性とそれほど多く接したことがなく、この次に何が待っているかも想像できなかった。
でも、一つだけわかったことがある。

…喰われると。

何をどうやって喰われるのかはわからない。ただ、そう思った。漠

然と。
だから咄嗟に、逃げるために、彼の逞しい胸板を押しのけるようにドンッと力を込めたのだが、微動だにしなかった。
クロウリィは必死に逃げようとした乙にせせら笑い、胸を押したその手首を捕え自身の口元にそっとキスをするようにあてがった。
指先に薄く柔らかい唇の感触が伝わり、驚いて手を引こうとするのだが、力で敵うわけもなく怯えた様にクロウリィを仰ぎ見るのだった。

依然としてギラギラとした目で見ていたが、不意に片方の口を器用に上げ乙にとって予想外のことをした。

ペロリ。

乙の指先を舐めたのだ。
その瞬間、乙の体に電流が通ったようにビリビリとした感覚が走った。だが、それは乙だけではなくクロウリィもまた感じていた。そしてそれは、彼の中の何かのスイッチを押してしまったようだ…。
ゴクリッ…と彼の喉が大きく上下した。
薄く開いた口から、白い歯と赤い舌が見えた。

ペロリ。

クロウリィは再び乙の指先を舐めたが、今回はそれだけでは終わらなかった。
それはそれは美味しそうに、乙の指を舐め出したのだ。
細く長い指を熱く蠢く舌に絡ませ、ぴちゃぴちゃと音を立てながら一つ一つの指を丹念に舐めた。
時折、口に含み吸ったり出し入れしたりと、白い指をテラテラと光る唾液で濡らしていった。

さらに、舐めながらクロウリィは責めるような口調で乙を嬲るのだった。

「随分と男を誑し込んだんだな」
「初心な顔して、一枚面の皮を剥いたら淫売だな」
「大勢の前でなければいいんだよな」
「陰で男を連れ込むとは、驚きだよ」
「なぁ、どういう手使ってんだ？教えてくれよ」

乙は恐ろしいのと悲しいのと、なぜそんな酷いことを言うのか理解できなくて言われるままでいた。
ずっとそんな様子で、何も言わないことを良いことに、言葉は段々とエスカレートしていった。

「そんな顔して、俺を誘っているのか」
「違うのか？わざとらしく生娘の顔をして」
「なら、いくらだ？いくら払えば、ヤラせてくれるんだ？」

「……――！！！」

最後の言葉に乙は頭が真っ白になった。
そして今まで黙っていたのが嘘のように大声で叫んでいた、なんてことを！と。
だが、クロウリィはそのことが気に入らなかったのか、ピタッと舐めるのを止めて力任せに手首をつかみ引き寄せた。そして耳元に唇を寄せ、ゾッとするほど冷たい口調で直に言葉を吹き込んだ。

「もう、ヤッたんだろ。ルシカ、ニース、それにミハ…」
「や、やめて！」
「…隠さなくてもいい」

「な、なにも…も、もうやめ…」
「――――ぇよ…」
「！！！」

その瞬間荒々しく乙の腰をかき抱き、引きずるように寝台へ連れてゆき、乱暴に投げ飛ばした。
うっ…と一瞬息が詰まったが、すぐに起き上がろうとするも、クロウリィが乙の上に踊り乗り肩をベッドに押しつけてしまった。
そのまま齧り付くように激しく唇を貪り、抵抗する乙の体を自身の体を押しつけるようにして封じつつ、片手で両手首を頭上に一纏めにした。

息もつかせぬほどの口づけの激しさに、乙の息はすでに上がり苦しさに喘ぎ出した。
時折、歯が当たり唇が切れ2人の血が唾液に混ざった。
さらに深く激しく繋がろうとするかのように、乙の口の中にぬめる熱い舌をこじ入れた。

激しい呼吸と舌と舌が絡まる厭らしいクチャクチャとした音が響く。
乙の頬を伝っていく2人の唾液は、血が混じりうっすらと色付いていた。
いかに激しいかが目に見えて分かる。

クロウリィは空いている片手を使い、乙が身につけている夜着の胸元を掴んだ。
舌を絡ませていた口を一旦離し、手に掴んでいる夜着の隣に口を寄せ、歯でしっかりと噛む。
そして一気に、ビリッ！！！と縦に引き千切ったのだった。

夜着は胸元から腰骨まで一直線に裂け、その隙間からは淡く光る裸体が覗いていた。

クロウリィは、壮絶なる美しさにしばし釘付けになった。
何人も侵してはならない神聖なものに見える。しかし、布の切れ間から見え隠れする乳房とその頂のせいで、聖なるものというよりもっと俗で卑猥なものにも見えた。

堕ちた聖女を侵す背徳感にも似た甘美な痺れが体を襲う。

そっと淡く光る体に唇を落とす。
鎖骨をなぞり項へと行きつくと、器用に舌を上下させ乙の甘やかな体を味わう。
そして徐々に下へと唇を這わせ、柔らかい膨らみにたどり着く。
片方の手で優しく包み込むようにして掴み、その感触を確かめるように揉み出す。
反対の乳房に唇を這わせ、その頂を口の中に含ませチロチロと舌で刺激を与える。
するとすぐに両乳房の頂が手と舌の愛撫に反応し、プクンッと立ちあがり薄桃色に淡く色づいた。

クロウリィの愛撫は、優しく官能的なものだった。
労わるように慈しむように…。

唇をさらに下へと這わせ、細くくびれた美しい腰のラインをなぞる…
…がその時、あることに気付いた。

乙の美しい脇腹に、赤紫色の醜い痣ができていることに。

何だこれはと訝しんだ時に、ハッと気付いた。
もしや…と。
この痣はカサルアが暴れたときに乙が突き飛ばされ、テーブルに脇腹を打ち付けた時にできたものなのでは?と。

淡く光る美しい体に残る痣。

乙には似つかわしくない痣の痕。

クロウリィは労わる様に、そっとキスを落とした。
何度も何度も…。

はぁ…と軽く息を吐き、その悩ましい痣はまだ痛むのかと思った。
そして乙に「この痣はまだ痛いか?」と聞こうと顔をあげた瞬間――、

身が凍った。

なぜなら、乙が泣いていたから。
嗚咽が出るのを我慢するように、下唇を強く噛み締めていた。
口の端からは、真っ赤な鮮血が流れて出ていた。

キノト…。
震えそうになる声を必死に堪え、その名を呼んだが返事はなかった。
その後、何度呼んでも反応はなく、口からは絶え間なく鮮血が流れ出していた。

あぁ、どうして、なんで…。

クロウリィは混乱していた。

あぁ、どうして、なんで…。
キノトは泣いているのだろうか。

考えても答えは浮かばなかった。
乙を泣かせるようなことをしたとは、微塵も思っていないからだ。

普通の女であれば、善がり喘いで、今頃もっともっとと啼いているところだろうに…。
キノトは初心だからと、クロウリィは優しくしていたつもりだ。
傷付ける気などなかった。

では、なぜ?
自分の下で泣いているのか…。
今頃、自分の下で啼いているはずなのに…。

わからない。
わからないんだ…。

クロウリィには、乙の反応が理解できないでいた。
ずっと爛れた生活をしてきたからか、乙の心を感じ取れないでいた。
怖さに震えていることにも。
傷付ける言葉を吐かれ、哀しんでいることにも。
何より、別人へと変わってしまったクロウリィに怯えていることにも。

…何もわかっていなかった。

未だに、口の端から流れ続ける真っ赤な鮮血。

対照的に、クロウリィの顔は蒼白になっていた。

乙の反応は理解できなかった。けれど、その流れる血を何とかしようと、震える指をそっと伸ばした。

「や…やめるんだ…」

無理やり乙の口を開かせ、自身の指をさし入れる。

ガブリと噛む歯の強さに驚いたが、乙の血がこれ以上流れないなら…いくらでも指を噛み千切ってくれて構わないと、囁くように懇願するように言った。

しばらくすると、クロウリィの指を噛んでいるとわかるのか、噛む力を弱めて指を口から出そうと舌で追いやるのだった。

その瞬間口が開き、今まで我慢していた嗚咽が、堰切った様に溢れだした。

苦しそうにしゃっくりをしながら、ハラハラと涙を流す。

クロウリィは濃紺の礼服を脱ぎ、破れた夜着を覆うように被せ、きつく乙を抱き締めた。

最初は怖がるように身を固くし拒絶の意を表したが、根気強く何度も何度も背を撫で続けた。

――大丈夫だから。

――もうしないから。
――大丈夫だから。

――ごめん。

囁くように言葉を何度も紡いだ。

ありきたりな言葉でしかないかもしれない。
それでも、自分の行動の何かにきっと涙しているのだろうから…。

依然として、彼女の心の内はわからなかった。

それでも…。

そっと乙を抱き締める。
温もりが届くようにと…。

強く強く。

暗い闇夜の中に響く嗚咽と言葉。

相手を思いその胸に抱く。
どうかその温もりが届くようにと…。

そんな2人を見つめているのは、細く淡い光を降り注ぐ三日月だけであった。

消えそうなほどの、弱々しい光を地上に降り注ぎながら…。

第9話　悔夜（後書き）

タイトルの”悔夜”（カイヤ）は、花垣の造語です。

悔いる夜ですね・・・。

第１０話　闇の一族

午後の日差しは木漏れ日となって優しく降り注ぐ。
時折、さわやかな風が吹きサワサワと葉々を揺らしていった。
王宮の庭園はやわらかな時を刻んでいた。

乙は王宮の庭園にいる。
噴水の縁に腰かけて、物憂げな表情で水面を覗き込んでいるところだ。
その白くほっそりとした手を清らかな水に沈め、その冷たさを感じていた。
水を手に掬い、指の隙間からポタポタと滴らせドレスの袖が濡れることも気にせずに…何度も何度もそれを繰り返している。

ピチャン――…

水滴が落ち何重にも波紋を描き揺れる水面を見て、昨夜のことを思い出していた。

◆◆◆

昨夜、クロウリィは突然乙の寝室にやってきた。
得体の知れない妖しい気配を纏って…。

そして、乙を責めた。
だが、乙には全く身に覚えのないことだった。

次第に激しさを増す言葉。
恐ろしくて悲しくて、なぜそんな酷いことを言うのか理解できなくて…。
それでもなんとか反論した乙に、彼は言った。
耳元に唇を寄せ、ゾッとするほど冷たい口調で直に言葉を吹き込んだのだ。

『もう、ヤッたんだろ。ルシカ、ニース、それにミハ…』
『や、やめて！』
『…隠さなくてもいい』
『な、なにも…も、もうやめ…』
『――――…』
『！！！』

何もしてない、もうやめてと…震える声で精いっぱい否定した。
だが、それを聞くことはなく、クロウリィは囁くようにこう言ったのだ。

オレモナカマニイレテクレヨ

硬く、表情のない言葉で。
声もなく絶句してしまった乙を彼は荒々しくかき抱き、引きずるように寝台へ連れていき乱暴に投げ飛ばしたのだ。

…その後の、記憶はあやふやだった。
怖くて怖くて。
ギュッと目を閉じ、嗚咽をかみ殺していたから。

気付いて目を開けた時は、空が白み始め小鳥の鳴き声が窓から聞こえていた。
乙はきちんと夜着を身に着け、寝台にいつもと変わらずに寝ていたのだ。昨日のことはすべて夢だったのかと思った。
でも…鏡を見たときにそれが現実であることを思い知った。

…実は、泣く乙に寄り添い背を撫でていたクロウリィは、乙が眠りに就いた後で新しい夜着を着せ寝台の乱れを直したのだ。何事もなかったかのように。翌日、侍女が来たときに下手に勘ぐられないために…。
だから、乙は昨日のことを夢だったのでは?と思ったのだ。いつもと変わらない目覚めだったから。

しかし、鏡に映しだされるのは、首筋に残る赤い情痕。

それがキスマークだと気付いたときに、全身から力が抜けへたり込んだ。
カタカタと震える体を抱きながら。

◆◆◆

ひんやりと清らかな水に手を浸しながら考えていた。
なぜクロウリィはあんなことを…と。
考えても考えても答えは見つからなかった。
何か、気に障ることを言っただろうかと考えたが、やはりわからなかった。

はぁ、と軽く息をはく。
そして思った。
男性というものは、父や兄とは違うのだと。

もし誰かがこの言葉を聞いていたなら、何を今さらと呆れたに違いない。しかし、乙は今までずっと女子高で学んできて、また“男”が近寄ると双子の兄たちが乙の知らないところで排除していたため、男性という生き物の本質を知らなかったのだ。だからずっと、“男性＝父や兄”という方程式が成り立っていたのだ。
さらに、この世界に来てからも周りにいるのは男性ばかりだったが、そのどの男性も皆紳士であり、神官であり…乙をそう言った対象で見るものは皆無だったのである。したがって、乙の中の方程式は崩れることがなかったのだ。

それが…。
昨夜、クロウリィはそれを見事に打ち砕いたのだ。
雄々しい男性の欲望を漲らせ、ギラギラとした双眸でもって乙を見たのだ。
そして欲望のままに触れたのだ。

乙にとっては初めてのことであった。

だから戸惑ったし、それがどういったことを意味しているのかもわからなかったのだ。
…今もわからないが。

乙がぼんやりしていると、いつの間にそこにいたのか乙の正面にだれかが立っていた。
え…？
乙もやっとその存在に気付き、水面を見ていた顔を上げると柔らかい笑みを浮かべたニースが立っていた。
そして、お疲れのようですね、私がいることに気がつかれないほどに…、と少しからかう様な声音で言った。
対する乙は、あ～…はは…と何とも気が抜けた返事をしたのだった。
その様子にニースは、ふふふと笑うと労わるように言った。

「ふふふ。昨日はお疲れさまでした」
「…はぃぃ。疲れましたよ、慣れないことをするのは緊張しますし…でも、色々な人と色々なことを話して、とっても楽しかったなぁ～」
「そうですか、それは良かったです。それに、多くの者と交流をもつことは貴方にとってもきっと良いことでしょうからね」
「ええ。勉強を教えてくださる先生たちも、良く言っています。“実際に己の目で見て聞くことで見聞が広がるんだ―！”って！」

乙は先生の口真似をしながら嬉しそうに言った。
ちなみに先生というのは、乙がこの世界のことや国のこと等を学ぶためにルドルフ国王が用意した教師たちのことである。乙は、良く学ぶ生徒であったため教師たちも「教えがいがある」と、乙のことをとても気に入っていた。

「ふふふ、そうでしたか。ちなみに今は、どのようなことを学んでいるのですか？」
「えぇと、最近はワーグナー国の周辺の国について、かな？」
「もう国内のことは、終わったのですね。キノトは、まじめで良い生徒のようですね」
「まじめ…プッ！そうかな～？…はは！」
「ふふふ。あぁ、では勉強の成果を私に披露してはくださいませんか？」
「披露…？…う～ん、それじゃあ、すこしだけね！」

乙はおもしろそうだ！とニコニコしながら、ニースに勉強の成果を披露した。

「ええと。まず、ワーグナー国から。…ワーグナー国は、中央大陸の東に位置していて３０ある国の中で最も広大にして肥沃な大地をもっていて、また気候は一年中穏やかな春の陽気であることから、ワーグナー国は常春（とこはる）の国と言われている。そして、肥沃な大地と広大な土地であることから農業が盛んで、鉱物などの資源も豊富にある――」
「本当に良く学んでいますね」
「本当？じゃあ、次は隣国のルディアン！この国は、小さい国で領土はワーグナー国の３分の１しかない。だから、国を守るための軍事力は隣国の数倍もある、とも言われている。国の守りは堅固であり屈強な軍事国家として、ルディアン国の名声は大陸中に響き渡っていて、国が小さいことから商品の加工に力を入れている…」
「そうですね。あぁ…先ほど、軍事力は隣国の数倍もあるとも言われていると、言葉を濁したのはなぜですか？」
「それは、ルディアン国が隠しているからです。軍事力により他国を牽制しているため、実際は公表しているものよりも多いだろうと

いわれているからです」
「正解です。…それは教師が？」
「はい、そう言ってましたけど…私も、国の歳出歳入の資料などを見て、そうなんじゃないかって思いました。それに、税金も高いみたいだし…？用途を公共事業費とかに隠しているみたいだし…？」
「ふふふ。本当に聡いですね、キノトは…」

ニースは的確に答えを返してくる乙に感嘆していた。
きっと乙のことだから、今語るにおいて膨大な量の情報を知りつつあえて詳しくは語らず、簡単に要点だけを話しているのであろうと思われた。なぜなら、それを語る乙には全く迷いがないからだ。深く理解していなければ、こうも自信をもって話すことなどできないだろうから…。
ニースはもっと乙から色々と聞きたくて「…では、他には？」とキラキラとした笑みで聞いた。
しかし乙は、困ったように少し顔を曇らせていた。
ニースの要望には答えたいけれど…と、言ったような顔をしていた。

「え～…そうですね…。後は、ザウント国かな…？」
「では、よろしくお願いします」
「はい…でも、まだ学んでいる最中ですから…あまり詳しくは…」

不安げに言う乙にニースは、それでも構いませんから――と言った。
乙は少し考えるようにしながら、少しだけ…ともごもご口を濁しながら言った。

「…ザウント国は、ワーグナー国とルディアン国の東に位置する国で、海に面している国です。領土は大きいけれど、そのほとんどは砂に覆われている砂漠の国で、陸上と海上の交易がとても盛んであり他大陸との交流もある…て、こんな感じですね、今のところ…」

少し自信なさげに上目づかいでニースを見上げつつ乙は口を閉じた。
そんな様子の乙を見て（実際は目を閉じているので見てはいないが）、全てを聞き終えたニースは大変感心していた。乙の知識の深さと、教えられたことを全て鵜呑みにするだけでなく、気になったことがあると自ら調べ探究するという姿勢に。女性であるにも拘らず、これほどとは…と。
ニースは笑みを深くしながら乙を見た。

「よく、こんなに短期間で…本当に素晴らしいとしか言いようがありません」
「い…いいえ！まだまだですよ！ザウント国は、まだ途中で…これから、もっともっと学んでいこうと思ってるの」
「えぇ、頑張ってください。ですが、学びすぎて体調などを崩したりなさらないで下さいね」
「はぁ～い、わかりました！」

クスクスと2人は笑い合った。

その後も、他愛無い話をしつつ笑い合っていた。

◆◆◆

話しこんでいたら、いつの間にか王宮の庭園は日が傾き、夕焼けに

染まりつつあった。

ニースはころころと鈴が鳴るように笑う乙を、愛おしむように見つめていた。

白磁のごとく滑らかな頬は、夕焼けに染まり橙色に光り輝いていた。

その美しくも妖しく、幻想的でもある乙の頬に、不意にそっと触れた。

「…！」

乙は突然伸びてきた手に、ピクッと体を震わせてしまった。

以前であれば、この様なこと（いきなり触れられたりすること）には全く反応などしなかったというのに…。

ニースはそんな乙の様子に気付いていないのか、今度は優しく包み込むように背に腕をまわし抱き締め、そのほっそりとした首筋に顔を埋めたのだった。

乙はニースのこの突然でかなり積極的な行動に驚き、グッと身を固くした。

何…？なんで…？

疑問が次々と生まれては消えていった。

乙は自身の胸が不用意にどくどくと脈打つのを聞いた。

こんな体の反応は初めてだった。

なぜ、こんなにも緊張してどくどくと胸が脈打つのか…わからなかった。

なにも反応せず固まってしまった乙に向けて、言葉を紡ぐ。

「…どうしたのですか、震えていらっしゃる」

その声は酷く甘く響き、ねっとりと耳に纏わりつくようだった。

「クスクスッ…。変だね、胸もこんなにどくどくいってる。…脈が速い」

「…えっ、あの…」

乙は戸惑い、声を出すも何と言ってよいのかわからず、口を閉ざした。

ニースは何も言わない乙の首筋に顔を埋めたまま、熱い息をふぅ―…と吐いた。

ぞわり…。

首筋にかかる艶めかしい吐息に、乙の肌が粟立った。その何とも言えぬ感覚に戸惑い、羞恥に顔を赤くした。

そして再び、乙の反応を楽しむかのようにねっとりとニースは問うた。

「…フッ。…ねぇ、どうかされました？顔が真っ赤」

「…」

「答えないの？…耳まで赤いのに。…赤い果実のように」

「…」

「ねぇ、食べたらおいしいかな」

そう言ってペロリと乙の耳を舐め上げた。

ヒッ！！と、声にならぬ悲鳴を上げた乙の反応に満足そうに微笑んだ。

乙は、耳を舐められ昨日のことが否応もなく思い出された。

そして、怖いと感じた。

その恐怖から必死に逃げるように、カタカタと震える体を叱咤し、あらん限りの声で叫んだ。

「…っ！…や、やめ…やめて！…ニ、ニース！…ニース、ニース！！」

肺にある空気すべてを使って力いっぱいに叫んだが、喉から出た声はとても頼りなく囁くほどのものだった。

それでも必死に言い募った。

「…ス、ニース！…ど、どうしたの。な、なんで、こんなこと…」

「……」

「…お、おかしいよ。…ニース。あぁ、ニース！本当に、本当に、ニースなの！？」

いつものニースと違う。

だから乙は言った。

…本当に、ニースなの！？と。

すると、ニースは声を出さずにクックッと喉を震わせるようにして笑った。

どこか満足したような雰囲気を出しつつ…。

ニースは抱き締めていた乙から一歩、二歩と離れた。

乙は離れたニースに安堵し、ふっと安心したように息を吐いた。
そして不安げに漆黒の双眸を揺らし、ニースを見た。

…え？

乙はニースを凝視した。
何度も目を瞬いて、それが現実なのかと確認するように。

乙が驚くのも無理はない。
なにせ、ニースの目が開いていたのだから。
ニースは目が見えないために、その瞳はずっと閉じられている。だから目を開けてこちらを見ているニースに驚いたのだ。
けれど、驚いたのはそれだけが理由ではなかった。
…瞳が、瞳に映しだす色が、仄暗い闇を湛えていたからだ。
底なしの闇に冷たく引きずり込まれる様な…。

驚く乙の様子をじっと見ていたニースは、満足そうに口の端をニッとあげた。
そして一言。

気付くの遅いよ。

と、言い終わるのが早いか、サッと後方に飛び退りながら衣の胸ぐらをつかみ、鮮やかに体を半転させた。
ふぁさ――…と、白地の絹のローブが空中で扇状に広がり、乙の視界からニースが一瞬消えた。
広がった衣の白い残像を目で追うように見ていると、それは一気に黒い塊の中に消えていった。

トンッ――と、軽く地面に着地した音が聞こえた。
ハッと我に返った乙の目に飛び込んできたのは、黒く跪く塊だった。
そしてそれは音を立てずに、むくりと立ちあがり乙を正面から見据えた。
その瞳に映し出される色は、仄暗い闇だった。

「!!!」

乙は驚きに目を見開いた。
先ほどまで白い衣を纏っていたニースが、一瞬ののちに黒い衣を纏っていたのだから。
しかも、そこに立っているのは…ニースではなかった。
知らない、男性だったのだから。

突然のことに驚き、呆然と言葉を失っている乙を見つめ、その男はうっすらと笑うように目を細めた。

「…そこまで驚くことかな? 気付くの遅いし…というか、鈍すぎだね。キノト――…」

キノト――と酷く甘い声音で、ねっとりと言われた。
その妖しさにぴくりと体を振るわせ、乙は恐る恐るといったように尋ねた。

「……あ、…あ、なたは、いったい。…だ、れ?」

男は嬉しそうに口の端を上げ、少し頭を傾げた。

「僕？僕はね、君の護衛だよ。護衛」
「ごえい…？」
「そぅ。陛下に命ぜられて、ずっと君を陰で見守ってきたんだよ」
気付かなかった？と問われたが、乙は全くわからなかった。
まさか、陛下に言われて乙の護衛をしていたなど…。

実は、ルドルフ陛下は乙の負担にならないようにと、初めからずっとこの男（他にも数名）を乙の護衛として陰に控えさせていたのだ。
考えてもみれば、神の次に尊いとされる乙の身辺警護が、護衛兼侍女の3人などと、こんなに少ないわけはなかった。ルドルフ陛下は秘密裏に優秀な数名を乙の護衛として配置させていたのだ。
そんなことになっていたとは露知らない乙であった。

「…し、知らなかった」
「知らなくて当然。僕を誰だと思っているの？闇の一族といわれる、王宮の暗部を取り仕切る一族の一番手だよ？」
「え？闇の一族？暗部？」

乙は知らない単語が出てきたため聞き返したが、知らなくてもいいよと簡単に返されてしまった。
相手がそれ以上言う気がないとわかり、先ほどから気になっていたことを聞いた。
…あなた、実はニース？と。
乙にしてみたら、先ほどまでニースと庭園で会話をしていたのだが、一瞬ののちに目の前にいる男性に代わってしまっていたため、かなり容姿は違っているのだが実はニースが変装？のようなものをしているのだろうかと思ったのだ。

その、のほほんとした乙の質問に一瞬男性は驚きに目を丸くさせ、プッと吹き出した。
まだ自分のことをニース神官長だと思っているのかと…。似ても似つかないだろうと…。

男性の容姿は、まさに闇のようだった。
すこしうねる髪は暗褐色で肩ほどまであり、瞳の色もまた暗褐色ではあるがその瞳の奥には仄暗い闇が垣間見える。
年齢は２０代後半と思われ、肌の色は白く、ずっと日に当たっていなかったかのような病的な白さで、その身を覆うのは黒い衣で体の線も衣の合わせ目もわからない長衣だった。
男は優しそうな顔をくつくつと笑いに歪ませ、種明かしをした。

「僕はニース神官長ではないよ。ただ、化けていただけさ」
「化ける？…え？だって、顔がさっきまでは確かにニースだったよ？」
「じゃ、今は？」
「今は、全然違うけど…」
「くくっ…。知らない？“力”を使ったんだ」
「“力”って…なにそれ？」
「知らないのか？“力”っていうのは、至高神ホロより生まれいでた“木火土金水”の力の片鱗のことさ。…まぁ、詳しくは神官に聞くんだな。」
「……」

またしても、それ以上は言う気がないのか簡単に説明をして、口を閉ざしてしまった。

再びのことに、乙は少しムッとしたが、ルシカに聞こうかな…と考えつつ話を整理した。

えぇと。その“力”があるから、ニースに顔も姿もそっくりに変装できたってことだよね？てことは、この人はニースではないってことだね。

疑問が解決してすっきり！と、晴れ晴れとした顔の乙を見て男は、はぁ～とため息をついた。

…そんな顔してるから、男が群がってくるんだよ、と愚痴りながらいくらか真剣な目を乙に向けた。

「それはそうと…。君は少し――いや、かなり無防備すぎる」

「えぇ？」

「はぁ…。だから、もう少し慎重に行動してほしいな。いくら僕が護衛してるからと言って、守られる本人がもっと自覚もって行動してもらわないと。…ねぇ？」

「えっと…。わかった」

「本当に？…絶対わかってないと思うな」

「そんなことないよ」

「…まぁ、いいけど。…でも、昨日のことは流石にいただけないね」

「…！！！」

昨日のこと…と言われ、乙はビクッと体を揺らした。

目の前の男は知っているのだろうか？

ドキドキしながら凝視していると、男は不愉快そうに眉を寄せた。

「全く…。君からオスの匂いがして、気分が悪い。……君は僕のものなのに…」

最後のほうは声が小さく、乙には聞こえなかった。

はぁ…と深く溜息をつき男は乙に背を向けた。

「…じゃ、またね。僕は行くよ」

「え？」

「あぁ、そうだ。僕のことも、さっき話した内容も全て秘密だから。誰にも言ってはいけないよ。…それと、僕は常に君の陰にいる。何かあったら、すぐに呼ぶんだ。…わかった？」

「う、うん。わかった。…ありがとう」

戸惑いながらも乙は返事をしつつ、あ！と思った。

大事なことを聞いていなかったからだ。

…彼の名前を。

そう思っているうちに男はすたすたと歩いて行ってしまう。

まって！と追いすがり、黒い衣を掴んだ。

男は首だけ、乙を振り返り見おろした。その顔は、何？と乙に次の言葉を促していた。

「あ、あの。…名前、聞いてなかったから。呼ぶのに呼べないじゃない？」

「……」

男は乙が自分の名前を聞いてきたことに、驚いていた。そんなことを今まで聞かれたことがなかったからだ。

暗部にいる者たちは“個人”というものは重要視されていない。

だから暗部のものに用があるなら、ただ「おい」とか「闇」とかいえばそれを察して暗部は姿を見せるのだ。

この目の前にいる女は、名前がないと呼べないという。

個人など求められることはなかった、それなのに今この女は確かに“僕”を認識し必要としているのだから…。

言葉にならないほどの感動が身を襲う。

しかしそのことはおくびにも出さずに、しれっとした表情で言う。

…マースと。

乙が、マース？と問うと、彼は少し眩しそうに目を細め、乙の手をとった。

そっと包み込むように手を握り、ご入用の時はなんなりとお申し付け下さい――とニヤッと上目づかいに笑ったのだ。

その艶やかな笑みに、思わずポッと顔を赤くした乙は恥ずかしそうに俯いた。

その瞬間！

――ザッ！

という音とともに、目の前にいたマースが消えていた。

乙は一瞬のことに目を丸くし、キョロキョロと周りを見回すもマースはどこにもいなかった。

目を瞬かせ、夢じゃないよね？と確認している乙の顔に、日の落ちた黄昏の闇がそっと陰を作っていた。

第１０話　闇の一族（後書き）

一応、？章にでてくる主要キャラはこれでそろいました。

彼は、４話の最後にちらっと出てきた、あれです。

第11話　小さなお茶会（前書き）

副題は「ガールズトーク」です。

第１１話　小さなお茶会

ある晴れた日。
王宮の花の庭園から、女性たちの軽やかな笑い声が聞こえてきた。

白いイスとテーブル。
その上には、ロマの葉から入れた薫り高い紅茶と、砂糖たっぷりの甘い焼き菓子がのっている。

そして向かい合うように座っているのは、２人の女性。
乙とフィリアである。
２人は嬉しそうにクスクスと笑い合っていた。
ちなみに、乙の横で微笑んでいるフィリアという女性は、ミハやニースの親戚にあたり社交界でも“麗しの美女”と有名な御婦人である。神殿にて療養中のミハの御見舞に来ていた時にばったりと乙と出会い、それから何度か出会い話をするうちに意気投合し、こうして定期的に小さなお茶会を開く仲となったのだ。

花に囲まれた庭園での風情あるお茶会。
今日の乙の装いは、レースの付いた詰襟の白いブラウスに、踝まである紫紺色のロングスカートで、縁には金糸と銀糸の鮮やかな刺繍が施されていた。漆黒の長い髪は頭の高いところに一本で結わえられ、銀のリボンで美しく飾りつけられていた。
シンプルな中に光る手の込んだ装いは、乙の清廉さを余すことなく伝えていた。
一方、フィリアの装いは、豊満な胸とくびれた腰を魅力的に引き立てるデザインで、鮮やかな紅花色のドレスは大胆に背中が開いてい

たがいやらしさは全く感じないものだった。優しい色を浮かべる赤茶色の瞳と同じ色の豊かな巻き毛が、さらりとその背中に流れていた。

齢３３ながら2児をもうける母親であり、その女性的な美しさは衰えることを知らず溢れんばかりの魅力がこぼれおちていた。

そんな麗しい御令嬢と御婦人が花の咲き乱れる庭園にいる様子は、まるで一服の絵のごとく美しいものだった。

給仕をしているマリーや他の侍女たちも、その様子にほぅ…と見惚れていた。

クスクスと笑い合っているときに、そういえば…と今思い出したというようにフィリアは話し出した。

「そういえば…！忘れてたけど、ミハは少し来るのが遅くなるっていってたわ」

「え？そうなの？」

「えぇ。少し治療のほうが長引いているみたいよ」

「治療って…。もしかして、右足の？」

「そうよ」

右足の治療。

ミハは肉が腐る病にかかり、右足の膝から下を切断したのだ。

その後、神殿でニースに治療を行ってもらっているとのことだった。

乙はミハがどのような治療を行っているかは知らなかったが、聞くところによると、ニースが“力”を使って何かしらの治療を施しているということは知っていた。

この“怪我をした人に治療を施す”というのは、慈善活動の一環と

して中央神殿でも神官たちが定期的に一般の人々を対象に行っているのだ。

具体的に何を行っているのか興味の湧いた乙は、フィリアに尋ねた。

「ねぇ、治療って具体的には何をしているの？」

「あら？知らないの？」

「うん、具体的にはわからないな～」

「そうだったの。…詳しくは神官に聞くほうがいいと思うけど、簡単に説明してあげるわ！」

「やったぁ！ありがとう」

嬉しそうに無邪気に笑う乙を見て、フィリアはクスッと笑みを漏らした。

これじゃ～、ミハもニースも“おちる”わね～と、心の中で呟きながら。

「そぉね。…治療って言うと傷とか怪我とかを治すイメージがあるけど、この神殿で人々に施しているものも、ニースがミハに施しているものも、厳密にいえば少し違うの。治療というよりもむしろ、治癒力を高めていると言ったほうが正解ね」

「治癒力？」

「そうよ、治癒力。簡単にいうと、自己の治ろうという力にさらに“力”を加えることで、何倍にもそれを高めているとのことよ」

「へ～、そんなことができるんだ！」

「不思議よね？“力”って、至高神ホロより生まれいでた“木火土金水”の力の片鱗のことをいうらしいの。それで、神官なら修行を積むことで使用することができるそうよ」

もちろん、ニースの受け売りだけど！――ばちんと音が鳴りそうな

ほど、茶目っけたっぷりの魅力的なウインクを投げた。

「ミハは定期的にニースに、治癒力を高めてもらっているのよ。だから、神殿で療養しているところなの。神官長サマ直々なんて、特別待遇よね～」

フィリアはニヤッと笑いながら紅茶を口元に近づけ、上品に香りを楽しみつつ静かに啜った。

なるほどなと真剣に聞いていた乙は、後でルシカに詳しく聞いてみようかな？と思いつつ、フィリアに倣って紅茶に口を付けるのだった。

ふっ…と一息ついていると、突然フィリアが「それでぇ？」と前のめりになりながら乙に問うてきた。

キラッキラと目を輝かせて問い詰めるフィリアに、若干気押されつつ頭の上に「？」を沢山浮かべた乙は、困ったように目を瞬かせていた。

「んもう！焦らしちゃって！いじわる～、早く薄情なさいな！」

「え？え？な、何を？」

「だ・か・ら！私に話したいこと、相談したいことあるでしょ？って言ってるのよ」

「…え、と。……ん？」

突然、相談したいこと…と言われたが、これといって思いつかない乙はう～んと唸り、考え出してしまった。

その様子に、少し驚くように目を見張り「あらら？な―に？…もしかして気付いてないの？」と小首を傾げるのだった。信じられない

というように…。

実はフィリアは、以前会った時の乙とは様子が違うことに気付いていた。

…乙が憂いを帯びた表情をしていることに。

だから内心、いつの間にこんなに色っぽい表情を見せるようになったのだろうか、何か気に病むことがあるのだろうか?と心配していたのだ。

もちろん、心配というのは…憂い、翳りを帯びる色っぽさが、ダダ漏れしていることにだ。

こんな調子では、すぐに狼に喰われてしまうわ!と母親のように心配してのことだった。

未だに考えている乙を見て、流石にあきれたような顔をした。

「…ねぇ、私が思うに最近のことだと思うわよ…?」

「……最近、かぁ…」

結構なヒント的なものを与えられたはずだが、乙はそれでも考え込んでいた。

無自覚なのか何なのか…。

フィリアは苦笑し、もういっちゃうかな?と思ったのだった。本当は、乙自ら言ってもらいたかったけれど…と。

ふっと息をつき、乙をまっすぐに見つめた。

「キノト…。――王宮の宴で、何かあったのではない?」

「!!!」

直球の問い。
ドキッ――。
乙は心臓が大きく跳ねたのを感じた。

目を大きく見開きフィリアを凝視した。…まるで、どうして知っているのかと問うように。
厳密に言うと宴の後に、起こったことだけど…と思いながら。

「…はぁ。…やっぱり、何かあったのね」
「…」
「…もしかしてと思って、あたりを付けて言ってみたの。…といっても、何かあるとしたらそれしかないのだけれど」
「…」
「ねぇ、キノト。…私に、話したいこと、相談したいこと、あるでしょ？」

何でも聞いてあげる――。
柔らかく包み込む様な声音でいうフィリアに、乙の強張っていた体が少しほどける。
乙は少し俯いて、考えた。
あの事を言ってもよいのだろうかと。
あの、クロウリィとの夜のことを…！

口を引き結び、思案する乙であったがフィリアになら相談してもよいのではないかと思っていた。
なぜなら、彼女はとても信頼できる人物であり、かつ人生経験も豊富なためクロウリィのあの行動の意味もわかるのではないか、と思ったからだ。
自分では考えてもわからなかったから…。

そっと顔を上げ、フィリアを見つめる。
無意識のうちに拳を握りしめながら。

「…フィリアさん。あの、あの私…相談したいことがあります。…聞いてくれますか」
「もちろんよ」

フワッと、まるで太陽のように温かく微笑むので、乙は少しだけ瞳を潤ませた。
嬉しくて。

そして、ぽつぽつと語り出した。

クロウリィは…。
彼は――――

太陽のような人。

とても陽気で楽しくて、からかったり、いたずら好きで。
でも。
それ以上に優しい人だって、私は思う。

悲しい時に側にいてくれたこともあった。

彼は、温かかった。
彼からは、太陽の匂いがした。

なのに、なのに…。
あの時、彼は――

暗い闇のようだった。

あんなにも、怖いと思ったことはなかった。
身に覚えのないことを、責められた。
違うと否定しても、聞いてくれなかった。

いつもの彼とは違った。

…怖かった。
とても。

でも、その後微かに聞こえた「ごめん」という言葉と温かい手。

なぜ?
今度は優しくするのか?

わからない。
わからないの。

彼のこと。
クロウリィのこと。

囁くように言葉を紡ぐ。
乙の漆黒の瞳は、不安に揺れていた。

フィリアは何も言わずに、ただ聞いていた。
けれど、その瞳に映る色は――――興味深そうに輝きながらも、とても穏やかな色を湛えていた。
そして思わず、フフッと笑みをこぼすのだった。

…なぜか。
それは、フィリアにとってなんてことはないものだったからだ。
むしろ、「心配して損した～」とまで思っている。
だから、彼…クロウリィがとった行動の訳について思い悩む乙に、“それ”を教えてあげることは可能だった。もちろん“それ”はあくまでフィリアの推測でしかないのだが、しかしかなり高い確率――――否、確実にそうだと確信さえ持てるほどだった。
…それほどわかりやすいことだったのだ。

でも…、とフィリアは思案した。
ここで教えることはとても簡単だけれど、それは当人たちの問題であり、第三者がズケズケと土足で踏み込むようなことではないのでは？と憚られた。それに…、「こんな簡単なことなんでわからないかな～！キノトもクロウリィ殿下でさえも！」と、呆れる気持ちが大きかった。
したがってフィリアは、心を鬼にして教えてあげないことにしたのだ。

だから乙に「私もちょっと良く分からないわ～」と残念そうに言うと、先ほどよりもさらにしゅんとしてしまった。
そんな乙を少しかわいそうに思い、何かしらヒントでも出そうかな…と不安を色濃く宿す漆黒の瞳を見つめるのだった。そして、何か思いついたように赤茶色の瞳をニヤッと弧を描くように細め、テーブルに置いてある甘い焼き菓子に手を伸ばした。

「ねぇ、キノト～。男って、いつまでたってもガキなのよ。知ってる？」
「……え？」
突然の質問に、乙がパチクリと驚いたように瞑目していると、「はいどうぞ」と手に取った焼き菓子の１つを渡すのだった。そして、いたずらを思いついた子供のような嬉々とした表情を見せた。
「あのね～。ミハとニースって、大の甘党なのよ！あんな顔しておいて！」
「…ほぇ？」
「ふふ。おかしいでしょう！でもね、いい歳して甘党だってばれるのが癪みたいで、私の前でさえ我慢するのよ！ばればれだって言うのにね！ハハハ！」
「は、はぁ…」
「だからね、私が甘いお菓子を勧めても『いらない』って拒否するんだけど。実際に、『いらいなら私が食べるわ』ってこれ見よがしに食べようとすると…、」
「…すると？」
フィリアはここぞとばかりに、にっこりと笑った。
「『やっぱり、お前に食べられてしまうよりは！』って、私が手にした焼き菓子をわざわざ奪って、足元にいた愛犬にあげちゃうのよ！！」
「えぇ…！？」
「本当なのよ！行動の、意味がわからないでしょ！？ハハハ！ガキよね～、プププッ！」
フィリアは、最初こそ貴婦人らしく口元を扇子で隠して微笑んでい

たが、徐々に深くなる笑いを隠しきれずに、今ではケラケラと扇子を手で叩きながら音を立てて笑っていた。内心、絶対キノトはこのヒントに気付いてないわねと思いながら。
対する乙はというと、フィリアが出したヒントにはもちろん気付いておらず、冷静で大人であるミハやニースがとる子供のような行動がおかしくて、あはは！と盛大に笑っているのだった。

その時、いつの間にそこにいたのかテーブルの目の前に人影ができた。

「…おい。…なんて話しているんだ」

低く響く声が降ってきたと思ったら…今の今まで笑っていた乙とフィリアは、同時に笑いをピタリと収め、そろそろと声がした人物へと顔を上げた。
…ミハであった。

「「！」」

はっ！と驚いたのは同じだったがその後の対応は違った。
乙は悪いことをしている気分になって、思わず右へ左へと視線をさまよわせた。
フィリアはいたずらが見つかった子供のように少々ばつの悪い顔をしたが、次の瞬間にはツン――とすまし顔になり、反論するのだった。

「別に、なんでもありませんわ。女同士の秘密の会話ですもの。殿方は口出し無用ですわ」

「…先ほどまで、俺たちの――恥ずかしエピソードを披露していたような気がするが？」
「さぁ～て？何のことでしょうかぁ？」

あくまで知らぬ存ぜぬを繰り返すフィリアの様子に、ミハは呆れたような顔をしていた。

２人のやり取りを見守っていた乙は堪え切れずにプッ――と、吹き出しクスクスと笑った。
その様子にフィリアもミハも、クスッと笑みをこぼした。

クスクスクス――――。

午後の王宮の花の庭園。
見事に咲き誇る色鮮やかな花々の中に咲き誇るのは如何なる花か。

美しい花たちに囲まれ、今日もまた３つの小さな花たちの笑顔が咲くのだった。

第１２話　日常と友人１（前書き）

活動報告でも言いましたが、「第９話悔夜」後半のクロウリィの心の動きのあたりを大幅に改正いたしました。

第１２話　日常と友人１

乙とカサルアは、３日に１度の頻度で遊んでいる。

…あの日以来、乙と遊んでいるときに取り乱して発狂することは一度もなかった。しかし、カサルアの侍女サオの話によると、やはり何日かごとに発狂してしまうのだという。

それでも、以前よりは取り乱してから立ち直るまでにかかる時間が少なくなったのだという。

サオによると、乙と遊ぶようになってからだと…。

少しずつ、カサルアも成長しているのだと…。

それを聞き、少しでもカサルアの心を穏やかにすることができているんだ…と、乙は安堵していた。

そして――――。

最近、自らを護衛といい乙の前に姿を現したマースが、よく部屋を訪ねてくるようになったのだ。

本人は、「退屈だから遊びに来ているんだよ～」とへらへらと笑っていたが…。

乙は、新たな友人ができたようでとてもうれしく思っていた。

…それでも、少し気になることがある。

マースが部屋を訪れるのは、決まってカサルアと遊んだ日の夜だということ。

偶然なのか狙ってのことなのか…？
乙にはわからなかったが、それでも「まぁ、気のせいかな？」と思うのだった。

◆◆◆

コツコツコツ。
王宮の磨きあげられた大理石の回廊に、軽やかな靴音が響く。
乙は王宮の図書館で借りた何冊かの本を手に持ち、歩いている。
その内容は、絵本と歴史書だ。

今日の午前中は、カサルアと遊んでいて、その際に「たのしいえほん、もってきてぇ～」とおねだりされたのだ。なので、カサルアが興味を引きそうな（男の子らしい、冒険ものが好き）絵本を選んで借りてきたのだ。
そして歴史書は、今学んでいるザウント国に関するものだった。
自主的に借りてくるあたり、乙は学ぶ意欲のある大変よい生徒であった。

自室に戻る道すがら、「これで、ザウント国について良く学べるな～」とウキウキしつつ、乙は上機嫌に鼻歌などを歌っていた。
その後ろで、侍女のマリーが嬉しそうにニコニコと微笑むのだった。

コツコツコツ。
回廊の角を曲った時、前方に見知った背中を見つけた。
乙はその時上機嫌であったのも手伝って、大声で「ルシカ――！」とその名を呼び、ニコニコと小走りで近づいていった。

名を呼ばれたルシカと言えば、突然の事にビクッと驚き「何事！？」と、あわてて振り向いたのだ。
というのも、王宮でこの様に大きな声で名を呼ばれることなどまずないからだ。…あるとしたら、よほどの緊急事態であるときで――。
ルシカは緊張し険しい顔つきになりつつ、自分を呼んだ声の主の姿を探した。…が、見つけた瞬間、ふわりととろける様な笑顔を浮かべた。
まさに一瞬にして！

「ルシカ――――！」
「キノトッ！！…どうされたのですか？私にご用で？」
「ううん。図書館から帰る途中で、ルシカを見つけたから。嬉しくて、思わず声をかけちゃった！」

テヘヘと照れるように笑う乙。
その愛らしい様子と「嬉しくて…」という何気なく発せられた言葉に、はちみつ色の双眸は甘やかにとろけるのだった。

嬉しそうに微笑む漆黒色の瞳と甘くとろけるはちみつ色の瞳が、穏やかに交差する。

その場は、何とも甘くピンク色の空気に包まれていた。
偶然にもその場に居合わせた見回りの兵士や侍女たちは、皆惚けたように顔を赤らめうっとりと2人を見つめるのだった。

何しろ、本人たちに自覚はないが2人は文句なしの美男美女である。ルシカはとろけるような甘い端正な顔立ちに、誰にでも分け隔てなく優しく接する好青年である。そして乙もまた、珍しい漆黒の瞳と髪に白磁のように滑らかで肌理の細かい肌、気品漂う美しさを兼ね備えながらも大変明るく穏やかな性格である。2人は老若男女問わず、大変人気があった。

そんな2人が、見つめ合い甘い雰囲気を醸し出していたら…皆が惚けるのも無理はない。

そうとは知らず、しばらくの間他愛無い話を皆の視線を釘付けにしつつ続けていると…やれやれといった顔をして近づく2人組がいた。

「まぁったく!公衆の面前だってこと考えろよなぁ~!」
「本当に、お二人は自覚が足りませんね~」
「「!!!」」

え!?と乙とルシカが声のした方を振り向くと、ルシカと同じ神官の服装に身を包んだ若い2人連れが立っていた。

「ザック!デリー!」

驚いてルシカが声を上げると、ザックはニヤニヤとデリーはニコニコとしながらこちらに歩いてきた。

「ヤッホ!キノト~、元気ですか?って、いいっていいって挨拶は!元気そうなのはその顔見たらわかるし!なぁ~、デリー?」
「えぇ、キノトだけでなく、ルシカもまた元気そうなのは、見ただ

けでわかります…よ？」
「「……？」」
「まぁ、それはいいとして。もうちょっとさぁ～、ま・わ・りの事考えたら？」
「そうですよ。さっきも言ったけど、お二人は自覚が足りないと思いますね。…周りを見てくださいよ、お2人が見つめ合って甘～い雰囲気をダダ漏れさせているだけで、どんだけ周りに被害が出ているかを！」
「「えぇ？」」

思ってもみないことを指摘された乙とルシカは、慌てて周りをキョロキョロと確認しだした。
改めて見てみると、多くの兵士や侍女たちに…見られていたのだ！
それも、皆惚けた様に顔を赤くしながら…。

何事！？と驚く2人であったが、理由まではわからなかった。
なのでそのまま、目を見開いてまわりにいる人々を凝視していると、その視線にハッ！と気付き我に返った兵士や侍女たちはいそいそとその場から去っていくのだった。

「「？？？」」
未だに状況が分かっていない2人に、ザックとデリーは内心ため息をつきながらも、顔はからかうようにニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべていた。

「まぁ～？積もる話もあることだし？」
「公衆の面前ということもありますし？」
「「東屋にでも行こう！」」

笑顔一杯に息もぴったりに言う2人の迫力に、ルシカも乙も黙って

コクンと頷くのだった。

…ザックとデリーは良いコンビといえる。

◆◆◆

「う～ん。本当にマリーが入れてくれる茶は美味しいな～！生き返るぅ！」

「茶って…、ザックは全く風流じゃないですね。…これは、ライノの花とセリとフラカボの薬草をブレンドしたハーブティかな？絶妙なバランスでブレンドされていますよ」

デリーがそうでしょう？と確認をとるようにマリーを見ると、「はい、よくおわかりになりますね」と微笑んだ。

どうよ？と言わんばかりに得意そうにしているデリーを見て、ザックの口からは思わず愚痴が飛び出した。

「…お前って、…なんか嫌味な奴」

「ザックが無知なだけです。キノトもルシカもわかってますよ」

「「……」」

…と、当然のように言われてしまった乙とルシカは、飲んでいたハーブティをぐっとのどに詰まらせた。

そしてさり気なく互いにアイコンタクトをとりあい、『わかりましたか？』『わからないよ～』『『…ですよね～』』と苦笑いを浮かべる2人であった。

……。

しばしの沈黙。

いたたまれない空気に包まれたこの場を変えたのは、意外にも乙であった。

「…そ、そうだ！わ、私、前々から気になっていたことがあったんだ～！」

「な、なんですか！どうぞ何でも聞いてください！」

少し声を上ずりながら努めて明るく言う乙に、ルシカもまた渡りに船とばかりに引き攣った笑顔で答えた。

「あ…、と、えぇと…。そ、そうそう！“力”ってどういうことかなって思って！…うん、そう！聞きたかったの、前々から！」

「…“力”というのは？」

「えぇと、ほら！至高神ホロの“力”？の事なんだけど。私良く知らないから。前に、フィリアさんに少し教えてもらったんだけど、詳しくは神官に聞いた方がいいって言われて。…ミハはニースにその“力”で、治癒？をしてもらってるんでしょう？」

「はい、そのようです。…キノトが言った“力”というのは、至高神ホロより生じた“力”の事だったのですね」

あぁ、納得！という顔をしてルシカは微笑んだ。

「そう。至高神ホロは無限に広がる漆黒の闇から誕生したのです――」

ルシカは、至高神ホロの神話『誕生の章』を話して聞かせた。

無限に広がる漆黒の闇。
何も存在しない無の世界。
その闇はやがて意志を持つようになり、命をも持つこととなった。
そしてそれが瞼を押し上げ目を開くとその瞬間、世界に光が満ちた。
――至高神ホロの誕生である。

無限の漆黒の闇の中に、自らが光を放つことで、世界に光を生じさせたのである。
そして、至高神ホロは自らの躰から世界を作り出すこととしたのである。
まず、世界のもととなる5つの力を生じさせた。
爪から“木”を生じ、吐息から“火”を生じ、血液から“土”を生じ、髪から“金”を生じ、涙から“水”を生じさせたのである。
次に、それらの5つの力をかき混ぜることで、互いに関係性を持たせた。
そして最後に、闇と光の力を注ぎ世界を創造したのである。
――至高神ホロが造りし世界、リリーネルシアの誕生である。

「…“力”というのは、この至高神ホロより生まれいでた“木火土金水”の根源的な力を、神より“お借りする”という形で発現させたことをいうのです」
「借りる…の？」
「はい。この世界は、至高神ホロが創りし世界。その根源的な力もまた、元を正せば至高神ホロの力。つまり、神の力の一部を我々が“お借りする”のです」
「へぇ～、そうなんだ。なんだか、スケールが大きいね！」

「ふふふ。相手は神ですから」

楽しそうに講義のような会話をする2人をじっと見つめていたザックとデリーは、心底意外そうな顔をしていた。

まるで「キノトは、知らなかったのか？」という表情で…。

元々、乙は便宜上、トトゥロ大神官長の遠縁にあたる娘として学びに来ているのである。なので、そっち関係の疑問はトトゥロ大神官長に聞けばすぐにでも解決できるものであるだろうし、なによりも立場的にトトゥロ大神官長の血縁者であるため、その様なことはだれに教わるわけでもなく良く知っているだろうと思っていたのだ。なので、乙が全く“力”について知らなかったということに驚いたのである。

…まぁ、その様に2人が思うも無理はない。

何しろ、乙の本当の正体を知っているのは、国と神殿の上層部の極限られた人間でしかないのだから…。

神官であれば、第一神官以上のものである。ザックとデリーは第二神官であるため、詳しくは知らないのだ。

その様な事情があるので、2人が誤解しても仕様がないのだ。

へぇ～と感心したように聞いていた乙であったが、少しすると新たな疑問を感じた。

“木火土金水”の力を使うのなら、どのようにしてニースは“力”を使って治癒？を行っているのかと。治療であれば、痛めた患部を“水の力？”などを使い冷やしたりして、活用できなくもないが…

治癒とは如何に？と、ぽつぽつと呟くとルシカは笑って答えるのだった。

「あぁ、“力”といっても、根源的な火を出したり水を出したり、ということではありません。その様に力を出すことは…、あまりないのでは？…説明するのが少し難しいのですが、“力”というのは『こうしたい』という強いイメージと祈りの力によって生じさせている――って、わかりずらいかな？」

「うん、ちょっと。…じゃあ、ニースはミハの怪我が治るように祈っているってこと…？」

「そうです。『怪我が治るように』とイメージして、神に『怪我が治るように、治癒する力をお貸し下さい』と祈り詠唱することで“力”を発現させているのです。…私たちは、直接的に怪我や病気を治すことはできませんが、この様に治癒という形で“力”を与え、回復へとつなげることができるのです」

「う～ん。…なんか、すごい。……頭が痛い」

乙が育ってきた日本ではありえない話が、この世界には当然として存在している。

ルシカが乙にもわかりやすいようにと、かなり噛み砕いて話をしてくれたのにもかかわらず、日常とは程遠い摩訶不思議な“力”の話を半分も理解できないでいた。

したがって、沢山話してくれた感想に乙は「…頭が痛い」の一言で締め括ったのだった。

その瞬間、ブゥ――――！！とザックが勢いよくハーブティを口から吹き出しゲホゲホと咳き込み始め、「汚い！」とデリーの非難する声が上がるという騒動が起こった。

「だ、だ、ゲホッ、だってよ。感想が、『頭痛い』だぜぇ？うぇ、ゲホゲホ。…笑えるだろ！」

「まぁ、確かにオチとしてはなかなかのものでしたが。ザック…せめて、飲み込んでから笑ってほしかったよ」

ザックは咳き込みながらもお腹を抱えて笑っており、デリーはザックを非難しながらも顔は完全に笑いをこらえるように歪んでいた。
乙は自分の失言にポンと赤くなり、だって～と言いながらルシカに「ごめんね」と小さく謝るのだった。

未だにケラケラと笑うザックを横目に見ながら、デリーは付け足すように乙に教えた。

「そうそう、“力”っていうのは、修行を積むことでより強くなるんだよ。そしてそれは、神官の見た目にも表れる。…何だと思います？」
「…え？見た目？」

そう言われて、乙は3人を見比べた。
ルシカは、とろける様なはちみつ色の瞳に、肩口で切り揃えられた灰色の髪。
ザックは、海の様に青い濃青色の瞳に、短くツンツンととがる様に立てられた茶灰色の髪。
デリーは、木の実のように赤みがかった榛色の瞳に、ショートカットの茶灰色の髪。

パッと見ただけではわからなかったが、良く見ると…髪の色にそれがある様な気がするのだった。
なので、「…なんとなくだけど、髪の色かな…？3人とも、灰色っぽい髪色だよね？」と言うと、デリーは嬉しそうに「正解」と笑った。

「灰色ってところがポイントです。修行を積み“力”が強くなると、灰色に染まっていくんだ。髪の毛とそして瞳の色が」

「瞳の色も…？あ～、そういえばトトゥロ大神官長やドロリア神官長、パル神官長の瞳の色は灰色だね！もちろん髪の毛の色も！」
「そうそう。位が上になると…というか、それだけの実力があるので灰色に染まっているんだよ」
「んでもってッ！真打登場、我らがルシカさ！見てみ、完全に灰色の髪の色してるだろ。俺ら2人は灰色になりかけの色だけどさ。ルシカは、若手のホープだからな！こんな若さで、もう第一神官さ～」

ニカッと満遍の笑みで嬉しそうに笑うザックとデリー。
その様子を見ただけで、どれほどルシカが皆に慕われているかが分かる。
しかし、当の本人は乙の前でべた褒めされたことで、恥ずかしさを隠すように苦笑していた。

「2人とも持ち上げすぎ…」
「んなことないって、なぁ～デリー？」
「あぁ、本当の事だからな！」
「……はいはい。…そうだ、他にも少し例外的ですが、精霊の愛し子や精霊の加護を与えられた者は、瞳や髪が銀色に染まると言われています」
「銀色に…？世界は広いんだね～」
「世界っていや～、最近じゃあ、ルディアンの王族の若造が加護を受けてなかったか？」
「聞いたことあるな。確か王宮で掌中の珠とカワイガラレテいるとか、いないとか…」
「…ルディアン」

突如話題に上った、精霊の加護を受けたという人。
前にルシカから、神や精霊が人を愛し子としたり加護を与えたりすることが稀にあるが、それは極めて珍しいということを聞かされて

いた。
その、稀とされる精霊の加護を得た人物がルディアンにいるという。
もっと知りたい…。と乙が思うのは自然な流れで、そのことを口にしようとした瞬間――――、

ゴ――ン
ゴ――ン
ゴ――ン

と、午後の3時を刻む鐘の音が響いた。

すると、3人は「そろそろ神殿に戻る時間だ」と慌てだした。
その様子を見て、せっかく聞こうとしていただけに残念だな～。また次の機会に聞こう…と、乙もまた自室に戻る為に皆と一緒に東屋を後にした。

◆◆◆

東屋から庭園を横切り、王宮の回廊に到着した。
これから乙は王宮の自室に、ルシカ達3人は神殿へと向かう。

「じゃぁな、キノト！今日は楽しかったぜ！」
「またご一緒に、美味しいハーブティでも飲みましょう」
「えぇ、もちろん！今日はとっても勉強になったし、とっても楽し

かった～。また誘ってね！」
「ふふふ。キノトにお時間があればいつでも呼んでください。もちろんこちらからもお誘いします」
「うん！楽しみにしてる」

「…んじゃ、そろそろ行きます…か…、て…、あれって…え？」

和やかな雰囲気で別れの挨拶をすませ、ザックが「行こう」と号令をかけたのだが、…その声は何かを見つけ、不審そうな声へと変化した。
皆が「？」を頭に浮かべつつ、眉間にしわを寄せているザックの視線の先を辿ると…その先には、とても遠くではあるが、男性の肩に女性がしな垂れかかって歩く姿がちらりと見えた。どうやら、その男女が向かう先は王宮の裏手の出口の様で…。
険しい表情で見ていたザックは、ぽつりと確認するように言った。

「…あれ、殿下じゃないか？…クロウリィ、殿下」

その瞬間、ドキッ――と乙の胸が大きく脈打った。
…なに、これ？
乙の胸はうるさいほどにドキドキと暴れまわるのだった。
…なんなの、これ？
なぜ、こんなにも勝手に脈打つのか――乙は自身の反応に困惑していた。

だから、３人の会話は全く耳に入ってこなかった。

「…あぁ、そうだな。あれは、クロウリィ殿下だよ。…最近大人しくしていたんじゃないのか？」
「俺もそう聞いてた…けど。あれはどう見ても…花街に行くんだろ？」
「…どうしたんでしょうかね。…ルシカは、何か知っていますか？」
殿下と親しいでしょう？とデリーに言われたが、ルシカは静かに首を振り「知らない」と答えた。
そして、険しい表情をしたままクロウリィが消えていった方を見つめた後、乙に視線を落とした。

そっと様子を窺うと、胸の前に小さな両手を握りしめ、苦しそうに俯く乙がいた。

ルシカは切なそうに乙を見つめた。
しかしその表情とは裏腹に、はちみつ色の瞳には、仄暗い色をした冷たい炎が静かに揺れていた。

何かの決意をもって…。

第１２話　日常と友人１（後書き）

平和な日常風景を描きました。
日常があるということは、それを打ち壊す何かが今後あるわけで・・
・つかの間の小休憩のような日々です。

かなりザックとデリーは良い性格しています！
書いていてとても楽しかったです！

第１３話　日常と友人２

俺は何をしているのか。
こんなところで一体何をしているのか。

なぁ…、誰か教えてくれよ。
わからないんだ。

俺には――――。

そっと目を開くと、ドギツイ色をした天井が見えた。
夢か…。
吐息とともに絞り出すように呟く。
苦しい夢だった。
どんな夢だったかはもう覚えていないが、誰かが泣いていたような気がする。そんな夢…。

はぁ…、と再び吐息を吐きだし目を瞑ると、ポロリと何かが頬を伝った。
…それは、一筋の涙だった。

そんなことはあるはずないと、悪い夢でも振り切るように頭を振りながら身体を起こす。
ギシギシと軋むベッドには、裸体で横たわる女がいた。

しかし男はその存在すら忘れているかのように、さっさと服を着て部屋から出るのだった。

男はいつもそうだ。
金で上等な女を買い、自らの欲を吐きだす。
果てた後はさっさと部屋を去る。
パタンと部屋の扉が閉まれば、どのような女と寝たのかももう忘れている。否、女と寝たことすら忘れているのかもしれない。
後腐れのない女ばかりを買う。
その様な女は皆、吐き気のするほどに大量の香水を振りかけていた。
…花の様にやわらかい香りのする――とは違って。

花街を出ると、夜風が急に身にしみた。
酒を片手に夜道を歩く。
どこへ向かっているのか…。男にはその意識はない。
ただ、導かれるように足を動かす。

そう。
いけ好かないが、こんな自分を唯一見せることができるアイツのところへ…。

◆◆◆

夜明け前。

あと一刻もすれば空は白み始める。
未だに空は深い夜闇に覆われている。

満月か…。
ルシカは神殿での夜通しの祈りを終え、そろそろ自室に引き上げようかと思いながら窓に浮かぶ大きな月を見ていた。

満月は人の心をさらけ出す、美も醜も全て――そう言ったのは誰だったか。

つらつらと止めどもなく考えていたが、もういい加減帰ろうと神殿から出ようとすると…ルシカの足が不意に止まった。
やはり気になってしまう…。
もう大分前からその気配を神殿の外に感じていたが、あえて無視していたのだ。
言外に、会う気はないと、招かれざる客だとでも言うように…。
しかし、はぁ――と溜息をつく。
そして部屋に戻るのではなく、神殿の外へと向かうのだった。
…結局は、自分は甘い。神官だからか?と自嘲気味に浅く笑い、アイツのもとへと足を運ぶ。

カサリ…。
下草を踏み分けて歩く。少し行くと…やはりいた。
眩いばかりの月光を全身に浴び、この世の祝福を余すことなく受けているようにも見える。が、じっと佇むその顔には何の感情も浮かんではおらず、瞳は虚空を彷徨っていた。

「…クロウリィ」

ルシカは、男にそっと声をかけた。
そうでもしなければその場から消えてしまいそうなほどに、存在が淡く儚く見えたからだ。

名を呼ばれたことに気付いたようで、振り返りじっとルシカを見つめた。
無言でクロウリィへと歩み寄ると、夜風に乗って酒気とキツイ香水の匂いが漂ってきて、うっと顔をしかめた。

そんなルシカの様子を眺め、面白そうに喉を鳴らしてくつくつと笑いながらクロウリィは思う。
…いつでも、どんな時でもこいつは変わらない。

「…ルシカ。…お前は変わらないな。昔も今も」
「そうか？君こそ変わってないよ。昔と同じ、真っすぐで心根の優しい…昔から、それが羨ましくもあった」
「ククク…お前からそんな言葉を聞けるなんてな。…明日は雨か？」

からかう様に笑うクロウリィに、幾分か真剣な顔をしてルシカは言った。

「…だけど、最近の噂は酷いぞ。…らしくない、何をそんなにイライラしているんだ？」
「！」

ハッとして目を見開く。
そんな所も相変わらず変わらないと思いながら。
昔から、クロウリィは人に考えを読み取られないようにと訓練され

てきた。それは王族として生きるために必要なことだった。今では、条件反射の様に表情は自分の意思に反して勝手につくられ、本当の表情というのは分厚い仮面の下に隠されてしまっている。

だれも気付くことはない、本当の自分。自分の中の思い。

…しかし、ルシカにだけは仮面の表情は全く通じない。

ルシカだけが、本当の素顔を暴く。それが嬉しくもあるし、鬱陶しくもあった。

もう、わかって欲しいというほどガキでもないからだ。

「…何が言いたい？俺がイライラしてようが、お前には全くカンケーないだろう！」

「カンケーあるさ。…あるに決まってるだろ」

「…ッ！なぜ！なぜ、そんなことを――！！」

知ったように言うのか！！

目は怒りに吊りあがり、静かに佇むルシカを睨めつけた。

怒り。

クロウリィは知らず知らずのうちに素顔をさらけ出してしまっていた。

…そう、いつもそうなのだ。ルシカといると途端に、作り上げてきた強固な仮面がミシミシと音を立てて剥がれ落ちてしまうのだ。

本当に厄介だ。

そのまま眼光鋭く睨み付けていると、水面に揺らめく波紋のようにはちみつ色の瞳が揺れた。

そして囁くように、

友人、だから…。

と言ったのだ。

友人…。

それはクロウリィにとって、特別な言葉だった。

クロウリィとルシカは古くからの友人なのだ。生まれたその瞬間からと言っても過言ではない。

と言うのも実は、クロウリィの乳母はルシカの実母であったからだ。そのため、小さい頃から2人は兄弟のように遊びまわっていたし、互いに唯一無二の友人でもあった。

特に、クロウリィの依存度は高かった。

なぜなら、クロウリィはワーグナー国の第二王子として生まれてきたため、同年代に友人と呼べる者は殆どいなかった。しかも、母親はクロウリィが3歳の時に流行り病で亡くなっている。だからずっと幼くも懸命に生きようとする心の支えがルシカでありルシカの母親であったのだ。

だからこそ、今でもルシカという存在はクロウリィの心を大きく占めているのだ。

…大切な友人として。

しかし面と向かってそんな言葉は絶対に口になどしない。

クロウリィは、フンッと鼻を鳴らし不機嫌さを露わにするが、先ほどまであった怒りはなりを潜めていた。

「友人？笑わせてくれるぜ。…それにな、『最近の噂は酷い』って、そんなもの昔っから言われ続けてきたことだ。今さらだろう？」
「…そんなことはない。それは君が作り上げた、虚構の姿だ」
「なっ！何言って――」
「私が気付かないとでも思ったか？君は昔から…いや、あの時からだ。あの事件から君は、偽りの君を演じてるんだ」
「だまれ！ルシカ――ッ！」

クロウリィは一気に距離を詰め、ルシカの胸ぐらをつかみ迫った。
しかし、ルシカは怯むことなく真っすぐにその瞳を見つめ、嘘を暴いていく。

「知ってるよ。私だけは知ってるよ。…君が、わざと素行悪く愚弟を演じることで、ある人を…君の兄を守――」
「だまれ！！」

ガッ――――！！

クロウリィは激昂し、ルシカの横面を殴り飛ばした。
殴られた拍子にバランスを崩し、地面にドシャッと倒れこむ。

……ッ。
左ほほがじくじくと痛み、口の中にイヤ―な鉄錆に似た味が広がった。
少し口の中を切ったみたいだが歯は折れていないようだった。
終始無言でそれらのことを確認し、口の中に溜まった血を不快そう

にペッと吐き出す。
およそ品行方正な神官らしからぬ行いではあったが、今はそんなことに構ってはいられない。
そして、まるで見せつけるかのようにゆっくりと地面から立ち上がり、ひたりとクロウリィの瞳を見つめた。

クロウリィは眉間にしわを寄せ険しい表情で、「これ以上何か言ったらただじゃおかない」と、危険で猛々しい視線を送りつけていた。

2人の間には、緊迫した空気が流れる。

しかし、フッ――とルシカが息をつき、諦めた様に少し微笑した。
すると途端に先ほどまでの緊張感はどこへやら…。周囲にいる虫や小鳥たちまでもが、何かほっとしたように見守っていた。

「はぁ～、…まぁいい。それ以上は言わない。このことに、口を噤もう…」
「……」

そう言って、静かに瞳を閉じた。
まるで、溢れる思いをこれ以上言わないように箱に詰め、それを心の奥底の引き出しにしまう様な…そんな瞬間だった。そして今一度瞳を開いた時には、仄暗い色をした冷たい炎が瞳の奥底で静かに揺れていた。

「…だけど、一つだけ言いたいことがある」
「……なんだ」
「君がイライラしていることに関してだ」

「……」

「最近は女性関係で浮ついた話なんて聞かなかったのに、この頃また酷くなったそうじゃないか。…今日だってその帰りだろう。…いったい何があったんだ？」

「…お前に何か関係があるのか？そんなことを一々なぜ報告しなければいけない？」

馬鹿馬鹿しい…と吐き捨てるがルシカは引かない。

「関係も大ありだ。いったい何があったんだ？」

「だから！なにも――」

「キノト」

「…！」

「キノトに何をしたのかと聞いている」

「…」

「…キノトが最近気落ちしている。いや、王宮の宴の後くらいからだ。それに君も、そのころから女性関係の話が聞こえてきたからな。…何かあったんだろう？」

「…勝手にそうと決めつけるな」

「いや、間違ってないよ。…一昨日だって、君が女性と歩く姿を見てキノトがとても苦しそうな顔をしていた」

「…！」

しっかりと確実に獲物を捕える様に、淡々と事実を突き付けてくる。これでは流石にクロウリィでさえ簡単には反論できない。しかも、最後に突き付けられた事実に酷く動揺した姿をしっかりと見られてしまった。

…まさか、キノトに見られていたなんて。

自身が思っている以上に動揺しているクロウリィ。
その様子を見て、ルシカは少しの安堵とともに見ていた。…乙を他多数の女性と同じ目で見ていないということに。

「クロウリィ…、これだけは言わせてくれ。キノトを悲しませるようなことは、しないでほしい」

何時になく真剣な表情で、懇願するかのように訴える。
その必死な様子にスッと目を細める。

「…なんだ、それは。…神官としての忠告か？」

少し馬鹿にしたように尋ねる。
だが、ルシカは口を固く引き結びきっぱりと言い放った。

「ルシカとしての忠告だ。…キノトを想う一人としての」
「！」

クロウリィは突然のルシカの告白に目を見開いて驚いた。

…当然である。
神官として長年歩んできたルシカが、まさか一人の女性をどんな形でさえ“想う”ことなど今までなかったからだ。いや、驚くのはそこではない。神官が“想う”などといった発言をしてもいいのか…。
神に仕える神官は、その神聖さゆえに多くの規律や制約、禁忌の中で日々生活している。それを順守することで己をより高みへと極めていくのだ。
それなのに、今の発言はどうだ。場合によっては命取りともなりかねない、それほどに重い言葉だ。

どういうことなのか、正気なのか?とルシカの瞳を覗き込むが、感情の窺い知れないガラスの様に無機質な瞳が見つめ返していた。

ゴクリと喉を上下させながら、その言葉の持つ重みを感じた。

「…善処しよう」

クロウリィはそれだけ言って、彼から視線をそらした。

まだ、自分自身の事がわかっていないのだ。だから、ルシカの言葉に誠実に答えるには、これ以上良い言葉が思いつかなかったのだ。

ルシカはそっと瞳を閉じる。

私たちの心はいったいどこへと向かうのか。

少し白んできた空に向かって無言で呟く。

ピチチッ――。

小鳥が一羽白む空に向かって飛んで行った。

あぁ、もう夜明けはすぐそこに…。

第１３話　日常と友人２（後書き）

男同士の友情が副題です。
常に丁寧口調のルシカが、クロウリィと話すときはそれをやめています！
友人の仲なので～

それに、クロウリィが殴ったときにルシカは応戦しませんでした。
やはり、彼は神官なので暴力行為はしません♪

第１４話　日常と友人３

聞きたいことはたくさんあって――
でも、聞くことは叶わなくて――

私は自分がとても無力だと感じた。

何もできない小さな自分。

こんなにも小さいから、私の世界はとても小さい。

手の届く範囲――
目で見える範囲――
耳で聞こえる範囲――

全てが小さい。

…小さい。

それでも、見失わないようにしたい。
小さい私の世界に入ったものだけでも、守りたいと思う。

そう思う。

◆◆◆

満月から少し欠けた月夜。

数日前にはまん丸なお饅頭のようにプクプクとしていた月は、今や食いしん坊な誰かにパクッと食べられてしまったかのように欠けている。

誰が食べたのかな――と窓辺に寄り添い、乙はのんびりと夜空を見上げている。

やっぱりウサギかな～？あ、でもウサギは餅つきしてるんだっけ？じゃあ、誰かな～。

本人はいたって真剣に考えている。…もう考え始めて半刻ほど経つ。う～ん、と尽きることのない思考を巡らせていると――

コンコンコン。

目の前の窓をたたく音が聞こえる。

乙は、何だろう？と窓を開き覗いてみると、そこには蔦の様な植物が葉を左右に揺らしているのが見えた。

「あら？どうしたの？」

夜半に訪ねてきた珍客は、蔦であった。それに向かって乙は朗らかに尋ねるのだった。

――キノト、キノト
――アソボウ、アソボウヨ

蔦はウキウキしながら答え、先ほどよりも激しくゆらゆらと揺れる。まるで、ご褒美を欲しがる子供の様な、そんな姿に似ていた。
その様子に、乙はクスリと笑い「いいよ」と快諾した。

すると勝手知ったるという様に、蔦や木々がその窓辺に集まり、葉や枝をさわさわとのばす。
一本の蔦は細いが、それが何本も集まり固く絡まり太い一本へと成長していく。それに木々も太い枝をのばしより太く頑丈になり、人一人支えられるような太さになった。
そして準備ができると、木や蔦が腕を伸ばし乙の体へと自身を巻き付け、落ちないように窓辺から連れ出す。
王宮にある居室は3階なのでかなり高いため、それらはゆるゆると慎重に乙を降ろすのだった。
トンッと地上に降り立つと、それらはサッ――ともとの蔦や木々に戻っていった。

この一連の行動は、最近何度もしていることなので、乙も木々も慣れたものだ。
乙は、そんな彼らの行動を密かに“ジャックと豆の木、応用バージョン”と呼んでいる。

普通、植物はこの様に動くことはない。ありえないことだ。
しかし、なぜか乙の周りにいる植物たちは驚くべき技をもっている。

…だが、もっと不思議で驚くべきことは、そのことを普通に受け入れている乙自身である。
やはり乙は、かなりの大物と言えよう。

地面に降りた後、近くの木の根元まで行き腰を下ろす。
ふぅ…と乙が息をつき周りを見渡すと、待ってました！とばかりに植物が一斉に話しだした。

――キノト、キノト、コンバンワ
――コンバンワ
――ゲンキ、ゲンキ
――アノネアノネ、コノマエ、オモシロイ、コト、アッタンダヨ
――アソボ、オハナシシヨウ
――キノト、キノト、ゲンキシテル
――オハナサイタノ、オハナ
――タネガデキタノ、タネ
――タノシイ、タノシイネ

色々なところから色々な話が始まる。
乙は聖人君子ではないので一度に全員の話を聞くことはできない。
また、それぞれの話す声は小さく囁くような大きさなのだが、この様にたくさんの植物が一斉に話し始めてしまうので、会話が混ざり合ってしまいよく聞き取れないのだ。
しかし植物たちは、“乙がそこにいて自分たちの話に耳を傾けてくれる”ということが一番大事なことのようで、例え返事を返してくれなくても一向に構わないのだ。
なにより、こうして一緒にいられることが嬉しいから…。
乙もまたそのことを知ってか知らずか、彼らの嬉々として一生懸命に話す様子が嬉しくて、見守るように微笑むのだった。

乙も植物たちも思うことは一緒なのだ。

乙にしか聞こえない植物たちの声。

しばらく話していると、不意に植物たちが一斉にピタッ！とおしゃべりを止めてしまった。

「？」

不審に思って乙が、どうかしたの？と声をかけようと口を開きかけた時、すぐ近くから場違いなほどの陽気な声が聞こえてきた。

「キ―ノト―、何してんのさ。こんな夜中に出歩いちゃだめでしょ」

闇の中から浮き出るように姿を現したのは、乙の護衛であるマースであった。

彼は面白そうに目を細めながら乙を見つめる。

そして、音もなく近寄り乙の隣にどっかりと座った。

すると、微かに植物たちがざわつくように揺れた。

植物たちは、マースが来たために先ほどおしゃべりを突然止めたのだ。

…まるで、乙のもとに来たモノを警戒するかのように。

「全く、無防備すぎる。もうちょっとさ、警戒心持ってよ。夜は危険がいっぱいだし…いろんな意味で！」

「…？…うん、そうだった。警戒ね。…あ！もちろん、忘れてないよ！」

以前、マースから無防備だと指摘されたことを思い出し、慌てて忘れてないよ！とアピールをしてみたのだが…マースはただただ、無言で睨むのだった。その目は、「今の今まで、忘れてたでしょ？」と言外に言っていた。
確かに、こんな夜中に一人で王宮の庭園にいることが、何よりの証拠だった。
うっ！と口ごもる乙であったが、何とかこの場の空気を変えたくて必死に話題を探すのだった。

「……ぁ、ぇぇと。…そ、そうだ！そうそう！マースってさ、私に会いに来る時はいつも夜だよね！それって、どうして！」
「…話をそらすの？」
「そ、そんなことないよ！ただ、気になって！で、どうして？」

乙は焦りながらもにっこりと笑って答えを促した。

「…ふ～ん、まあいいさ。そのうち、身をもって知ることになるかもしれないし…？」
「？」

何か含みのある言い方をするマースに、どういう意味かと目で問いかけたが、その視線を完全に無視し「夜に来る理由～？」と真面目に考えだすのだった。
マースの性格上、真面目に見える演技をしているだけだが…。

「夜ね～。そうかな？夜に来てるかな…気のせいじゃないの？」
「…。…全部夜に来てるよ」

最初の出会いは除いて――と乙は付け加える。
そうなのだ。

マースは絶対に夜に乙を訪ねてくるのだ。むしろ、夜以外では姿すら見たことはなかった。
それなのに、マースは飄々ととぼけてみせるのだから…あからさまにはぐらかすマースに、乙は前々から思っていたことを言った。…もしかしたら、またはぐらかすかもしれないが。

「マースって、絶対に、私がカサルアと会った日の夜に訪ねて来るよね」
「……ソウナノ？シラナカッタナ～」
「絶対そうだよ」
「……エェ～、ソウナンダ」
「…」

予想通りはぐらかしてきた。
マースのあくまで白を切る様子に、流石に乙も少しむくれた。
そこまで否定しなくても…と少し悲しくなりながら、完全にマースに遊ばれていると自覚している乙は、無意識に頬を少し膨らませた。
これは子供のころからの乙の癖だ。

そんな愛らしい乙の様子に、マースは思わず微笑んだ。
普段しっかりしている乙が見せる子供っぽい表情は、かなりマースのツボにはまった。
…だから、そんな無防備な顔するなって！――と、内心嬉しいながらも他の男に見られたらヤバイなと思いつつ、はぁ～と溜息をつくのだった。

依然としてむくれている乙の、その華奢な肩に腕をまわし、抱きこむようにしながらそっと耳元に唇を寄せた。

「そう、むくれるなよ。かわいい顔が台無し」

艶やかな声音で囁き、膨らんだ薔薇色の頬をツンと突っついた。
途端にぷしゅ～としぼむ頬。
あ！――と声を上げた乙は、まさか自分が頬を膨らましていたとは知らず、その子供の様な仕草に思わず羞恥に顔を赤く染めた。
マースは赤くなった乙を満足そうに見て、クスクスと笑いながらいくらか真面目に言った。

「そうだな～、でもあのガキには気を付けな。後で痛い目を見るかも知んないから…」
「…え？どうして？」

またもや含みのある発言をするマース。
彼の言う“あのガキ”とは、話の流れからするとカサルアの事だと推測できた。しかし、何に気を付ければいいのか。そして、最後に言った痛い目を見るとはどういうことなのか…？
再び問おうと口を開きかけると――乙の行動は分かっていたようで、そっと乙の唇に自身の人差し指を宛がった。
もう、それ以上言わないで…というように。

乙がマースの瞳を見上げると、その瞳には常と同じく仄暗い闇が垣間見えた。
だが、それと同時に自嘲的な翳りも帯びていた。

もっとよく見ようと乙が少し顔を上げると、その視線から逃れるようにマースは自分から乙に顔を近づけた。
そして、その漆黒色の大きな瞳を閉ざすように、柔らかい瞼に唇を落とす。

右にも左にも――

交互に、何度も何度も――

その瞳から逃れるように。

そして、乙を抱きよせ自身の胸に閉じ込めた。
細く力を入れたら折れてしまいそうな身体をキュッと抱き締め、肩に顔を埋める。

夜闇を切り取ったかのような長い漆黒色の髪を、マースは優しく撫でた。
自分の暗褐色の髪色と似ている乙のそれを愛おしげに、何度も何度も。

ほっと息をつき、掠れる声で囁く。

「…キノト。本当に注意して」

「……」

「…キノトは、キノトは…優しすぎる、から。…だから、何でも抱え込もうとしないで。…何でもできると思わないで」

一人で、抱え込まないで…

マースは声を震わせながら、乙を胸に強く抱いた。
そうでもしないと、乙が淡く消えてしまいそうな気がしたから。

ドクン、ドクン…とマースの胸の鼓動を聞きながら、乙は静かにそれを聞いていた。

マースの怯える様に囁く言葉に、乙は「…うん」と答えるしかなかった。

けれど…。

でもね…、と。

乙は思う。

でもね…、マース。

私は、私の世界に入ったものだけでも、守りたいと思うんだ。

例え、私が傷つくことになったとしても…。

守りたいんだ。

乙は目を瞑り、マースの大きな胸に顔を押し付けた。

マースに後ろめたさを感じながら、それでも今だけは、彼の温かい胸の中にいたかったから…。

夜の闇が深まり、悲しき2人を包み込む。

そんな静寂を守るかのように、植物たちはそっと息を殺して見守るのだった。

第１４話　日常と友人３（後書き）

日常と友人はこれで終了。
最後は、意外な組み合わせ！

さてさて！
実は・・・２５万ＰＶとなりました～！ありがとうございます！
ということで、祝２５万ＰＶ記念といたしまして、一番最初に登場人物紹介を載せたいと思います！
詳しくは、活動報告をご覧ください♪

第１５話　血涙（前書き）

少し流血します。

第１５話　血涙

どんよりと厚い雲に覆われた空。
しとしとと灰色の天井から透明な雫を垂らす。

常春の国といわれるワーグナー国は、一年中暖かな春の陽気である。
それと同時に、雨も多く降る事で有名だ。
大陸一、広大で肥沃な大地は、春の様な穏やかな気候と豊富な雨水や河川によって維持されている。
したがって、街の至る所に優美な噴水があり、ワーグナー国の豊かさを物語っているのだ。

昨夜から降り続く雨は朝になってもやまず、庭園でフィリアとお茶会をする予定だったが中止となった。替わりに、フィリアは乙の居室で乙のドレス試着会を始めてしまった。
普段着なれないということもあり、貴族の御令嬢が着る様な派手で豪奢なドレス（乙にとってはそうだが、周りの者からしたらそれらは普段着用のドレスなのだが…）はあまり着ない。着たとしてもシンプルなデザインのものばかりだ。
似合わないからと、あまり着飾りたがらない乙に、周りの侍女たちは口惜しい思いをしていた。
「絶対に似合うのに！」と。また、「着飾った麗しいキノト様の姿を見た殿方は、愛を囁かずにはいられなくなるのに！」と事あるごとに言っている。
なので、フィリアが「今日は、キノトの着せ替え大会を開きま～す！キノトに着せたいドレスや装飾品があったら、ジャンジャンもってきてね！」という掛け声に、侍女たちは目の色を変えて飛び付い

た。

もちろん、乙の意思は完全無視である。

箪笥の肥やしとなりかけた、豪奢で優美でド派手なドレスたちをここぞとばかりに引っ張り出してきては、次々に着せ替えていったのだ。

結局、午前中ずっと着せ替えをさせられた乙であった。

しかし、侍女たちは興奮が冷めやらぬようで午後も続けたがったが、乙が「午後は、カサルアのところに行く予定あるから!!」と必死に断り、何とか解放されたのだった。…が、それでも諦められない侍女たちは、せめてとばかりにカサルアに会いに行く時の格好として、シンプルだが淡い桃色に白いフリルのついた可愛らしいドレスを着ることを迫った。

そのオトメなドレスに顔を真っ青にした乙であったが、マリーが薄いレースのストールを肩に掛けてくれたので、何とか着ることができた。…ストールを羽織ることで、オトメさを軽減することができたからだ。

…助かった、と乙がつぶやいたのは言うまでもない。

◆◆◆

「こんにちは。カサルア」

朗らかに挨拶すると、カサルアは待ってましたとばかりに乙に近寄

り、ガバリと抱きついて出迎えた。
キノト、キノト――！！と、名前を連呼しながら身体全体を使って喜びを露わにするカサルアに、乙もまた抱きしめ返すことでそれに答えた。

「キノト―！まってたのぉ！…あ！きょうのキノト、きゃわいい！ももいりょの、ようせいしゃんみたい！」
「えぇ！？」

ニコニコと笑いながら、いつもと違い可愛らしいドレスを着た乙を褒めちぎった。
乙はいきなりドレスのことを指摘され、動揺しながらも小声で「ありがとう…」と言った。頬はほんのり赤く色づいていた。
そんな2人の様子を見ていた侍女たちは、「初々しいわ～」と思うのと同時に「カサルア殿下、天然のたらしね…」とキラリと目を輝かせるのであった。やはり、カサルアも父であるルドルフの血を引いているわねと。もちろん、半分血の繋がった異母兄弟であるクロウリィもまた然り…と。

そうこうしているうちに、乙は抱き締められたまま「こっちこっち」とぐいぐい引っ張られ、二人掛けのソファーに座らされた。もちろんその隣にはカサルアが座った。
幼児のように舌っ足らずにしゃべるカサルアだが、身長は乙よりも視線一つ高いし力も強い。

相変わらずなカサルアの様子に苦笑しつつ、先ほど渡しそびれたものをカサルアに渡した。

「はい、これカサルアにプレゼント」
「え？ぼくにぃ？」

「そうよ。カサルアが喜ぶかな～と思って、来る時に摘んできたの」
「ぼくにぃ？」

それは、しとしとと降り続く雨のなか摘んできた花束だった。

…まぁ、花束と言ってもそう大層なものではなく、何本か摘み取った花の茎の部分にリボンを縛って簡単にまとめたものだ。だが、束と言うほどの量はなく、人に…ましてや殿下と呼ばれるほどの御仁に贈る様な贅沢な装飾もされていない。
――けれど、乙の気持はこもっている。

カサルアの居室に行く際に通った回廊でのことだ。
何の気なしに、ふと庭園を見た時に見つけたのだ。

雨の雫に負けず、凛と輝き咲き誇るその花を。

黄色く淡い色合いで、大きさは親指ほどしかない小さなその花は、一本の茎に沢山の花を付け咲き乱れていた。
それはまるで、太陽の輝きを思わせる美しい花だった。

きれいだなと乙は思った。
そして、どことなくカサルアに似ているなと思ったのだ。

屈託なく笑う笑顔が、太陽の輝きを思わせるその花に似ていると。

だから、雨の中傘をさしつつ手ずから摘んだのだ。
カサルアに見せたかったから…そして何より、その花の願いだったから――

――ツレテッテ、と。

カサルアはじっとその花に見入っていた。
途中でカサルアの侍女であるサオが、「握りしめておられると、すぐに萎えてしまいますよ」といって、ガラスの花瓶に花を生けた。
手から解放された花は、水を得られ嬉しそうに、より美しく花を咲かせた。
その間も目を離すことなく、カサルアはじっと見入っていた。

何かその様子は鬼気迫るものがあり、乙は容易に話しかけられなかった。

しばらくその状態が続いた時、突然カサルアが「あ!!」と声を上げた。
どうかしたの?と問えば、目を輝かせ頬を上気させながら言った。

「これ、こりぇね!す、すきだったんだ!うん、おもいだした!」
「好きって…カサルアがこの花好きなの?」
「ううん、ちがうの。ぼくじゃなくて、あのね…あのね、お、お、おかあしゃまが、すきなおはななの!」
「…お母さん、が?」
「うん、うん。そんなきがしゅる!」

そう言ってじっと見つめながら、記憶を掘り起こすように、花の色だとか枚数だとか香りだとかを改めて確認しながら「やっぱり、そうだよ!」と言った。

カサルアのお母さん…。
乙はそっと吐息とともに呟いた。
カサルアの母親は、随分昔に亡くなっているのだと聞いた。とても美しく、聡明な方だったという。

カサルアの母親が好きだったという花。
それは、カサルアに良く似ている花で…。

ぼんやりとカサルアと花を見ていると、ぽつりとカサルアがつぶやいた。

「おかあしゃまが、ぼくに…ぼくに、にてりゅっていってた」

その言葉を聞いて、やはりと乙は思った。
カサルアの母親もまた、この花を見て似ていると感じていたのだ。

「…私も、そう思うよ。この花…サランは、カサルアに良く似ているよ」
「ほ、ほんとう?ぼ、ぼくに、にてりゅ?」
「うん」
「そっかぁ〜」

キャハハ、と笑いうっとりとサランを見つめるカサルア。
だが、不意に背後で侍女たちが息をのむ声が聞こえてきた。
「?」
なに――?と、振り返ろうとした時に、カサルアが「ねぇ、ねぇ、キノト〜。このはなの、はなことばってなぁに?」と腕を引っ張って聞いてくるものだから、振り返らずにカサルアに向き直った。

「え？花言葉？…この、サランの花の？」
「んっ！そう！キノトしってりゅ～？」
「えぇ、知ってるわよ。サランの花言葉はね、愛、親しみ、慈しみだよ」
「あい？」
「そうだよ。…もしかしたら、カサルアのお母さんは、カサルアのようなこのサランの花が好きだったのは…この花を通してカサルアの事を見ていたからじゃないかな。愛してるって…カサルアの事を想っていたんじゃないかな」
「…ぼくを…おかあしゃまが…あいする…？」
「うん」

きっと、カサルアの母親は“サランの花が好き”なのではなく、“カサルアに似ているからサランの花が好き”だったのではないかと…。乙は、この花を見ていてそう思ったのだ。
愛という花言葉とともに。

カサルアは無言で花を見つめていた。

おもむろに手を伸ばし、ガラスの花瓶をもつ。
立ち上がり、右手で花瓶を、そして左手で…花を鷲掴みにして…

バサッ――！！！

とテーブルに投げつけた。

「！！！」

そして、瞬時に右手を振り上げ、花瓶をその上に勢いよく叩きつけた。

ガシャァアアンンンッ！！！

ガラスの割れる音が鳴り響く。
底が割れた花瓶からは、水が一気に飛び散った。
突然の事に声を忘れ、呆然とする乙。
周囲からは、甲高い悲鳴と部屋を走るバタバタという音が聞こえた。

…ガンッ！…ガンッ！…ガンッ！

ガラスの破片と水滴が、カサルアが花瓶を振りおろすごとに宙に舞った。
カサルアは髪を振り乱しながら、何度も花瓶を振りおろし、花を潰した。

やがて、もう残骸としか言えなくなったそれを静かに見おろした。

――と、カサルアが突然…笑いだした。

ククク…クッ、アッハハハハハハ――!!!!

カサルアの目は焦点が定まっておらず、虚空をぐるぐると彷徨っていた。
そして、とち狂ったかのように笑いながら、叫ぶように感情を露わにした。

「お母様が、僕を愛する?…ハッ!!嘘だ、嘘だ、嘘だ…嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ!!!」

カサルアは頭を抱え、目を見開いた。
…本人は気付いているのかいないのか、いつの間にか口調が幼児のそれから普通の話し方になっていた。

「あぁぁぁ…。嘘だ、嘘だ、嘘だ!!!お母様が、この僕を、僕を!!!!僕などという存在を愛するなんて、そんなはずがない!!!!」

そう言い終わるやいなや、手に持っていた花瓶を窓に向けて投げつけた。

ガッッ!
バリバリバリッガッシャンンン――!!

大きな音を立てて窓ガラスが割れ落ちた。
窓の外からは兵士の驚く声が聞こえてきた。

カサルアは肩で大きく息をしながら、空虚な眼で乙を見た。
「！！」
そして、首を傾げながら一歩一歩乙に近寄る。

「ハァ…ハァ…、キノト…ねぇ、キノトはさ…お母様が僕を、あいするっていったけれど…しょんなはず、ないんだよ。…だって、だってね、あのとき…あのとき！」

カサルアは、青年の口調と幼児の口調が入り混じった話し方をしていた。
幽鬼のように少しずつ乙に近寄り、そっと手を伸ばし、青ざめて冷たくなっている頬を包み込んだ。
その瞬間、ぬるっとした生暖かいものを乙はその頬に感じた。
――ツンと鼻につく臭いで分かった…血だということが。

カサルアはガラスの瓶を何度もテーブルに叩き付けたため、その拍子に握り込んだ花瓶が割れて手のひらに傷を作っていた。
しかもそれだけではない。
ガラスの破片が飛び散り、顔や首筋、腕に無数の裂傷ができ、だらだらと血を流していた。

その痛ましい姿に、咄嗟に乙はカサルアの手を掴んだが、その瞬間に勢いよく振り払われてしまった。
目を見開く乙の腕を掴み、血走った眼を向けた。

「あぁぁぁあああ！！ちがうちがうちがう、うそだうそだうそだ！！」
「カサルア！」
「あぁ、キノト！！いやだいやだ、いやなんだ！！キノト、キノト、

キノトキノトキノトキノト！！！」

何かから逃げるように、頭や髪を振り乱しながら、叫ぶようにうわ言のように乙の名を呼んだ。
その間ずっと乙の両腕をギリギリと握り締めた。

「カサルアッッ！！」

乙が一際大きく叫んだが…カサルアには何も聞こえていない。
何度乙が言っても無駄だった。
カサルアは、心の闇に囚われてしまったかのように叫び狂うだけだった。

まただ…。
あぁ…、私は何もできない。

乙は悔しさに唇を噛んだ。すると――口の中に鉄錆の味が広がった。
瞳にはいつの間にやら涙がたまり、徐々に視界がぼやけていった。

あぁ…、私は何もできない。
なんて無力なんだろう…。

キュッと瞳を閉じると、その拍子に堪えていた涙がぽたりと流れ落ちた。

――と、今まで乙の両腕を締めあげていたカサルアの手が、パッと離れた。

え?と思い、ゆるゆると瞼を上げると…長い金糸の髪の残像が見えた。

全てがスローモーションのように、ゆっくりと流れる。

誰かが乙とカサルアの間に割り込んで、力ずくでカサルアを引き剥がし、乙の腕の拘束を解いた。

そして、抵抗するカサルアを捩じ伏せ、鳩尾に一発拳を叩き込む。

うっ…!と声をもらし、力なく倒れ込む体を支え、素早くソファーに横たえた。

すると、瞬時に控えていた侍女たちがカサルアの元に駆け寄った。

それを見届けた誰かは、ゆっくりと振り返り、乙を見た。

途端に、今までゆっくりと流れていた時間が一気に流れ始めた。

ハッと我に返った乙の目の前にいたのは、金髪碧眼の男性。

…クロウリィであった。

第１５話　血涙（後書き）

？章もそろそろクライマックスに近づいてまいりました。

さてさて、前回「祝２５万ＰＶ記念」といたしまして登場人物紹介を載せました。

そして、第二弾として＊＊＊を掲載しようかと・・・（汗＆照）

詳しくは、活動報告をご覧ください！！！

第16話　決意

…クロウリィ！

乙は目を丸くしながら、突如として現れたクロウリィを呆然と見つめた。
クロウリィもまた乙をじっと見据えており、その咎める様な視線に思わず目をそらしてしまった。

以前、カサルアが発狂した際にクロウリィは言っていた。
『何も知らないくせに、知ったような顔をして！興味本位で顔を突っ込むな！』
その厳しい言葉を思い出し、後ろめたい気持ちになった。

乙が目を合わせずに俯いていると、クロウリィは固い表情のまま近付いてくる。
そのまま何も言わず、そっと乙の肩を抱き寄せ、膝裏をすくい取り抱きあげた。

！！！

急に抱きあげられ無言で、すたすたとどこかに運ばれていく乙。
クロウリィのあまりにも急な行動に驚き、抗議をしようと見上げた彼の横顔を見た瞬間、喉がひゅっとおかしな音を立てた。
何しろ彼の表情は、一切の感情を削ぎ落としたような、底冷えする冷徹なそれだったから…。

なまじ端正な顔立ちなだけに、その様な表情をされると畏怖すら抱く。

乙は身じろぎひとつせずに、大人しくクロウリィの腕に抱かれていた。

…迫力に圧倒され、声を出すことすらできなかったのだ。

しばらくすると、立派な造りの扉の前に着いた。

クロウリィは振り返らずに、ついてきた侍女たちに向かい「…俺が呼ぶまで、皆下がっていろ。…命令だ」と静かに言い、サッと扉の中に入って行った。

パタンッ…と扉が閉まり、乙はやっと降ろされるかと思いきや、クロウリィはそのまま歩き続ける。

乙は誰の部屋だろうと思っていると、その疑問が無意識のうちに声に出ていた。

あ！と思い慌てて口を噤んだが、出てしまった言葉を無しにすることはできない。何とも気まずい沈黙が続くと、頭上から「俺の」という声が降ってきた。

そう。

ここは、クロウリィの居室であった。

部屋はクロウリィの匂いに溢れ、乙はくらくらと眩暈にも似たものがした。

そのまま、何部屋も連なる居室を腕に抱かれたまま移動する。

そして漸くその腕から降ろされた先は…クロウリィの寝室のベッド

の上であった。

そっと真新しいシーツの上に降ろされ、乙は顔を強張らせた。
どんよりとした空は雨をしとしとと降らせ、濁った重たい灰色の雲が広がっており、燭台の灯されていない室内は思った以上に薄暗い。
密室の光の少ない薄暗い部屋に2人きりでいるということに、息苦しさを感じた。

だからか――
何時かの夜が思い起こされた。
ベッドに押し倒され、血がにじむほど激しいキスをされ、身体を弄ばれた――男という存在をいやというほど感じた、あの夜の事を！
知らず強張った乙の表情を上から見下ろしていたクロウリィは、そっと息を吐くと静かに一歩身を引いた。
そして、懐からハンカチを取り出し乙に差し出すのだった。

「？」
目の前に無言で差し出されたハンカチに戸惑い、乙は恐る恐るクロウリィを見上げた。

「…ハンカチ？…何…？」
「これで拭け」
「…何を？」
「ついてる」
「…？」
「血が、ついてる」
「…」

説明することも煩わしいのか、単語で言うクロウリィとの会話を理

解するのは難しかった。
しかし、苛立ちを抑えた様な声音に、詳しく聞き返す勇気は出なかった。

…こ、怖いよ、クロウリィ。
血がついてるって、私に?…でも、私、怪我してないのにな…。

と、心の中で呟いていると、いつまでたっても受け取らない乙に焦れたのか、頬にハンカチを押し当ててきた。

な、なに!?と乙が困惑している間にも、クロウリィはハンカチで何かを拭う様に頬を擦った。
何度か繰り返し、そのハンカチを見せると――そこには、本当に血がついていた。
乙は驚いてそれを見つめていると、クロウリィが吐息とともに「…カサルアの血か」と呟いた。

ハッ!として顔を上げた乙の頬に、不意にクロウリィの指先が触れた。
それは撫でるような、何かを確認するかのような優しいそれで――。

だが、それも一瞬の事。
すぐに手を引いてしまった。

そっと見上げたクロウリィの顔は、穏やかで労わる様な優しいものだった。
…が、乙と目が合うと瞬時に責める様な表情に変わってしまった。

「…全く。以前言った言葉を忘れたのか?俺は、忠告したはずだが?」

「わ、私は――」
「今回、怪我はなかったようだが…以前は怪我をしただろう?だからこそ、カサルアには関わるなと言ったんだ」
「怪我は…!私が…私の、責任だもの。…きっと私が、知らないうちに、カサルアの気に障る事を言ったんだと思う。だから、怪我をしたのは、私の責任で…カサルアは悪くないの!」
「だとしてもだ。前回も今回も、大事に至らなかったからいいものを…運が悪ければ、もっと酷い怪我を負ったかもしれないんだ!」
そのことをわかっているのか!と、怒気も露わなクロウリィに、乙はビクッと首を竦める。
乙の事を心配してくれているのはわかるが、先ほどとは打って変わってのこの表情。
「でも!でも、私はカサルアに――」
必死に言い募ろうとする乙の言葉を皆まで聞かず、途中で遮ってしまう。
「怪我だけじゃない、知りもしないで、カサルアの…この件について深く首を突っ込もうとするな!」
「…!」
「お前には、何ら関わりのないことだ!」
関わりのないこと。
いや、関わるな…とやんわりとだが、以前から周囲の人々に言われてきた。
身内の問題、王宮の問題だから関わるなと…。
…クロウリィの言いたい事はわかる。

カサルアは、世間一般には“病弱”なため公には姿を現さないのだと公表されている。
――本当の事は秘されているのだ。
隠すほどの“何かが”あるためだろう。
だからこそ、何も知らない素人が深く関わって良い問題ではないのだ。

でも…。
乙は、カサルアを助けたいと思った。
何かから逃れるように悲鳴を上げて泣きわめき、悲愴な姿を晒すカサルアをどうにかしたいと思ったのだ。例え、それがお節介なことでしかなかったとしても、このまま黙っていることなど到底できなかった。
…カサルアに、心から笑ってほしかったから。
自然と言葉が溢れ出していた。

「…私は、カサルアを助けたい。悲しみから、助けたいの」

凛とした声が部屋に響き渡る。
クロウリィは何も言わず、じっと乙を見つめる。

「…私は、私の世界に入ったものだけでも、守りたいの」
「…」
「私は無力で何もできないけれど。でも、でもね！自分の手の中にあるものだけでも、守りたいの。例え、私が傷ついたとしても。…だから、だからお願い――」

カサルアの事を教えて――

クロウリィの碧い瞳を見つめながら、真摯に言葉を紡ぐ。
交差する視線。
堪え切れず、先に目をそらしたのは、クロウリィであった。
はぁ…と疲れた様に溜息を吐いた。
そのまま崩れるように乙が座る寝台に腰かけた。
ギシッと軋む寝台。
俯きながら固まったように、クロウリィは床の一点を見つめていた。
何かを深く考えているようだが、その顔は終始無表情だった。
…どのくらいの時が経ったか。
雨脚が酷くなり、窓に叩きつけるバシバシという音が寂しく響いた。
寝台に腰かけたまま微動だにしなかったクロウリィは、徐に決意を秘めた瞳を乙に向けた。
そして、唇を動かし言葉を紡いだ。
本当に、知りたいのか――
真実を知る勇気があるのか――と。
乙は、口を引き結び頷いた。

漆黒色の瞳には、何を聞いても受け止めて見せるという強い意志が宿っていた。
思わずクロウリィは、眩しそうに目を細めるのだった。
そして一言乙の背後の暗闇に向けて呟いた。

「闇よ」

すると、部屋の隅の暗がりから何らかの気配が、ぶわっと溢れだした。
意識的に気配を露わしたそれは、暗闇の一部を切り取ったかのように音もなくこちらに近寄ってくる。
そして薄暗い室内の中で、人の輪郭だと判別できるギリギリのところで止まり膝をつき首を垂れた。

「お呼びでしょうか」

乙は、ハッと気付いた。
その人物がマースであることに…。

目を見開いた乙を眼の端で捉えつつもクロウリィは何も言わず、冷えた目で王宮の暗部を取り仕切る一族“闇の一族”であるその者に向かって命じた。

「闇よ。これからこの部屋に誰も近づけるな、もちろんこの部屋に闇が入る事も禁じる。…外に侍っている闇たちにもそう伝えよ」

「御意」

無駄な会話など一切ない。
マースは終始乙に意識を向けることなく、淡々と命令を受け、その

まま腰を折り後ろへ下がっていってしまった。
再び暗闇の一部と化すと、気配も何も感じられなくなった。
遠くで微かに扉が閉まる音だけが聞こえた。

シン――と静まり返る沈黙が肌に突き刺さる。

クロウリィは軽く息をつき、乙に向き直った。

互いに瞳を合わせる。

「これから話すのは、王宮がひた隠しにしている秘密だ。一生口を閉ざす誓いを立てることになる。…それでも、聞く気はあるのか」

最後に確認するように、乙に問いかけてきた。
乙は迷わずに、「はい」と一言告げる。

クロウリィは無言で頷く。

「わかった、話そう。…これは、今から15年前に起こった、悲劇だ――」

重い口を開き、そっと話し出す。
その瞳には、沈痛な色が翳っていた。

第17話　壊れかけた心

＊＊＊

カサルアの母親はハンナといい、美しく聡明な女性であった。
また、家柄も申し分なくハンナの父親は当時の宰相でもあった。
彼女はルドルフ国王の正妻であり、国王からの愛情も深く第一王子となるカサルアを産むなど、公私ともに順調といえた。

彼女は、とても満ち足りた日々を送っていたのだ。

しかし、ある日事件が発覚した。
ハンナの父親が秘密裏に自らの政敵を闇に葬る為に、国王の下知であると巧妙に画策し、闇の一族を勝手に動かしたことが知れてしまったのだ。

闇の一族は代々、国王に忠誠を誓っているため、国王の命にのみ動く。
それは、ワーグナー国建国以来脈々と受け継がれてきた事柄であり、両者の間でなされる誓約によってそれは守られ、何人たりとも違えてはならないものだった。
また王宮の暗部に属するのが“闇の一族”だということを知っている者は、国の上層部でもごく一部であり、ほとんどの者は名すら知らないというのが現状だった。

その闇の一族を私的に動かしてしまったのだ。

宰相の悪事が闇の一族に露呈した際に、彼らは『なんたることか！』と猛烈と怒り狂い、宰相に制裁を与える決議を一族の中で採った。

それは“宰相の命を狩る”という大変重いものだった。

これほど重い罰が与えられるのには理由があった。

闇の一族は国王に仕えているのであり、それは代々の信頼の上で成り立っている。

それが、謀られたとはいえ闇の一族は国王との誓約を破ったこととなり、さらには信頼を傷付けるという事にまで発展してしまったのだ。…彼らが黙っているわけがない。

彼らは一族の決議と掟に従い、宰相を狩るべく動いた。

…が、

宰相は事が露呈し、もはや逃げ道がなくなったと知ると、自ら首を掻き切って果ててしまったのだ。

闇の一族に狩られるという不名誉を与えられるくらいならば、いっその事と…。

しかし、彼らの怒りは頂点に達していた。

『素直に一族に狩られればよいものを！小賢しくも我等の手から逃れようとは！』と。

当時、一族の中でも保守派と過激派というものがあり、もう少し穏便に事を進めるべきとしていた保守派の者たちもいた。けれども、今回“宰相が勝手に自害した”ということで過激派以上に激昂し『擁護してやっていたというに、何たることか！手加減なんぞいらぬわ！！』と過激派の意見に諸手を挙げて賛成したのだった。

それは“宰相の血族の者の手によって、血族の過ちを正す”というものだった。

つまりは、宰相の一人娘であるハンナが、宰相の代わりとしてその血を引き継ぐものを狩るということだ。
そしてその血を引き継ぐものというのは…ハンナの子、カサルアであった。

“闇の一族の者が宰相の代わりに、その血族の者を狩る”というのではなく、“宰相の血族の者が、その血族の者を狩る”ことを強いたのだ。
以前よりも、さらに重い罰を与えるために…。

またこの時、一連の騒動を一族の者以外で正確に把握していたのは、国王ただ一人だけであった。

全ては秘密裏に進められていたのだ。

＊＊＊

父親が自殺をしたという知らせを受け、ハンナは急ぎ生家の屋敷へと戻った。

棺桶に入れられた父親は、苦悶の末首を掻き切ったとは思えないほど、穏やかな表情をしていた。
見つかった際には、首から血が噴き出し全身が真っ赤に染まってい

たという。

「お父様…。どうして…。そして、なぜ自害など…」

崩れるように棺桶に縋り、一人哀しみの涙を流した。
母親はあまりの事に気を失ったまま、今は寝台で臥しているという。
ハラハラと止むことのない涙を流していると、不意に背後から声をかけられた。

「王妃」
「！」

ハンナは驚き声のした方へ振り返った。
それというのも、「お父様と2人だけにして…」と侍女にはお願いしてあったため、この部屋にはハンナと死した父親しかいないはずなのだ。それなのに、自らを呼ぶ声が聞こえたのだから…驚かないはずはない。

誰です？と問えば、背後の暗闇から浮き出るように黒い衣を纏った3人の男たちが姿を露わした。
突然の侵入者に慄きつつも、ハンナは気丈に振る舞った。

「…だ、だれです？この様な、ところに。いったい、何の用ですか？」
「お初にお目にかかります。我等は、闇の一族の者でございます。貴女様はルドルフ国王の妃であられますれば、少しなりとも我ら一族のことは知っておられましょう」
「闇の…。それは確か、国王に仕えているという…？」
「左様でございます」
「…そのあなた方が、私に何の用ですか？」

国王に仕え、暗部を取り仕切るものだと…そう、国王からは聞いていた。
だが、その彼らが何の用だというのか。
ハンナは得体の知れないザワザワとした恐怖を感じていた。

「はい、実は貴方様に込み入ったお話があるのです」
「…話?…あ、後に、してはもらえませんか。…あなた方も見ておわかりのように、私の…私の父が亡くなったばかりなのです。…動揺もしており、冷静にあなた方の話とやらを聞く事が出来ないと、思います…」

俯きつつ父親に視線を向ける。
その瞳には沈痛な色が浮かんでいた。
気丈に振る舞ってはいるが、ハンナの心は父親の突然の死に直面し深い哀しみに大いに乱れ、王妃としての体面を果たすほどの精神力はもはや残っていなかった。
王妃ともなれば、何があったとしても人前で、みだりに我を忘れ乱れることなどできようはずもない。だからこそ今、侍女たちを遠ざけているのだ。

だが、黒い衣を纏った彼らはそれを鑑みることはなく、淡々と話を続けた。

「左様でございますか。しかし、我等は一族の者から貴方様に話を伝えるという任務をおびておりますゆえに。どうぞお聞きください」
「…少し待てませんか」
「待つことも可能ですが…。宜しいのですか。我らの話は、そこにおられる、屍と化し転がっている者の死に関することですが」
「…ッ!お父様の!?」

「左様でございます」

自害したお父様の死に関すること…。
ハンナは大いに動揺した。知りたいと願っていた事を、タイミング良く話に来たのだから。
目を大きく見開き彼らを凝視した。
ハンナの顔には、恐れと期待が入り混じっており、多少興奮もしていた。

…だからか。
ハンナは彼らが父親の事を『屍と化し転がっている者』と、侮辱したことに気付かなかった。
その言葉を理解していたら、少しは警戒しながら聞くことができただろう。彼らの話を聞いた後の彼女の受ける衝撃は、如何ほどのものか…それがありありと目に見えるようだった。

その事をわかっているのかいないのか、3人の男たちは無意識に薄っすらと、残忍な笑みをその顔に浮かばせていた。
…これから話すことが、楽しくてしょうがないとでもいう様に。

「では、お話しいたしましょう。死の原因と貴女様の役割について…」

＊＊＊

父親の死から30日が経ち、喪が明けたハンナは王宮に帰ってきていた。

しかし、以前とは比べ物にならないほどハンナは痩せ細り顔色が悪かった。
時折、遠くを見つめ涙ぐみ、俯く姿を侍女たちは目にしていた。
お父上様を亡くされた哀しみはいかほどかと…。
お労しや――と袖で涙を拭くのだった。

確かに、父親を失ったハンナは嘆き悲しんでいた。
しかしそれだけではない…。

ハンナは口をキュッと引き結び、湧き上がる恐れ、困惑、怒りといった様々な感情に耐えた。
そうしなければ身の内の感情が爆発してしまう様な気がしたから。

そっと目を閉じ、あの日闇の一族から言い渡された絶望を反芻していた。

『貴女様の父君は、我等を謀ったのです』
『その責めを負うのは当然の事。しかし、しかし――』
『そう、困ったことに、狡猾なる父君は我等の罰をお受けになることを拒否したのです』
『その様なことあってはならぬ…大罪もいいところ！』
『自害などと、何と甘い！』
『したがって我々は、今回我が一族を愚弄した罪も重ねて、もっと重き罰を与えることとしたのです』
『なぁに、簡単なことです』
『簡単です』
『宰相の血族の者の手によって、血族の過ちを正すというだけです

から』
『血族の者が、血族の者を狩る…ただそれだけです。何も、一族を根絶やしにするというのではありませんから』
『そうです。父君の血を引く貴女様が、その血を引く貴女様の息子を狩ればよいのです』
『…お分かりになりませんか？』
『つまりは、貴女様がカサルア殿下を、殺せばよいのです』
『殺せばよい』
『殺せば』
『殺せ』
『殺せ――』

イヤァァアア――――!!!!

ハンナは思わず叫び声をあげた。
青い瞳にはうっすらと涙が滲んでいた。

私に出来る筈がない！愛しい我が子を殺すなんて！

ガタガタと震える体を抱きしめイヤイヤとばかりに、頭を振った。
出来る筈がないと！

しかし、ハンナはその選択肢しか残っていないことも知っていた。
あの後「そんなこと、無理です！」と涙ながらに訴えたが、いつまでも了承しないハンナの様子に黒い衣を纏った3人はそれまでの穏やかな様子を一変させた。
目を吊り上げ、怒りと憎しみを織り交ぜた様な顔を歪ませ、厳しい口調で言い放った。

『何と！この親ありてこの娘ありだ！』
『我等を愚弄するか！』
『これはもう決定されたことだ！もし従えぬと言うならば、我らとてもう容赦はせぬ！』
『あぁ、容赦などするものか！』
『了承しないとあらば、一族を根絶やしにしてくれる！』
『いや、そればかりではない！忌まわしき一族に仕えしものどもも、共に道連れにしてくれるわ！』
『数百はくだらぬ命を狩ってしんぜようぞ！』
『我等は手加減などせぬわ！』

ガンガンと響く3人の声。
彼らは本気だった。
ハンナが了承しないなら、本当に数百にも上る人々を殺すというのだ！
しかも、ハンナはその罰として一人だけ生き残らされるという…。

どちらに進んでも地獄。

いや、了承しない方が遥かに酷い。
しかしだからと言って、愛しい我が子を殺すことなどできない。

喪の最中ずっと考えていたが、答えなど出ない。
さらに、他言無用と口止めされているため、誰にも相談することができなかった。

…ハンナは少しずつ心を病んでいった。

＊＊＊

1週間に一度、闇の一族の者がハンナに「どうするのか」と聞きに来た。
もちろん答えなど出ない。

あれから3カ月たち、ハンナは病床に臥していた。
寝付きも悪く、夢見も悪い。
食欲もなく、時たま幻聴まで聞こえるほどで…。

病床のハンナをカサルアは毎日見舞っていたが、それにハンナが耐えられなくなってしまったのだ。
カサルアを見ると胸が痛い。苦しい。頭が割れそうだった。
だからここしばらくは、遠慮させていた。
けれど、会えなければ会えないでそれは悲しく、寝台で「カサルア、カサルア、どこにいるの？会いに来てはくれないの？」と取り乱す始末で…。

そんな様子のハンナを気遣って、侍女たちは以前ハンナが「カサルアに似ている、このサランの花が大好き」と言っていたのを思い出し、寝台からでも見える位置にその花を生けた。
ハンナもまた、殊の外嬉しがり愛しそうに見つめていた。

…しかし、ハンナの病状は悪くなる一方だった。

＊＊＊

それから3カ月たち、ハンナの病はさらに深刻化していた。

日常のほとんどを寝台で過ごし、覚醒と眠りを常に彷徨っていた。起きているのか眠っているのかどちらともわからない状態で、突然叫び声をあげたり笑ったり泣いたりするのだ。また時には、夢遊病のように寝台から起き上がり、何事かを言いながら部屋をぐるぐると歩きまわるなどもした。

ハンナの心は壊れかけていた。

しかし、完全には壊れていなかった。

というのも、ハンナは時折正気に返ったように「カサルアはどこにいますか?」「元気にしていますか?」と、侍女たちに尋ねるからだ。

侍女たちは、この様な状態になってさえ、息子を想う母親の愛情というものの深さに胸を熱くするのだった。

だから、今度正気に返ったときには、きっとカサルア殿下をお連れしようと固く誓いあったのだった。

…どうか御心安らかになって下さいますようにと。

侍女たちの切なる願いだった。

第17話　壊れかけた心（後書き）

次話もこの続きです。

壊れかけたハンナの心・・・板挟みになりながら、出した結論とは？

第１８話　壊れた心（前書き）

怖い表現箇所があります。
ご注意を・・・

第１８話　壊れた心

＊＊＊

ハンナの侍女に連れられて、カサルアは廊下を歩いていた。
その足取りは軽く、駆け出したいのを必死で抑えているようだった。

「ねぇ、おかあさまにあえる？ほんとうに、あえる？」

近くにいる侍女たちにウキウキしながら尋ねていた。
もう、母親とは６カ月近く会っていない。
病だから会えないと言われ、泣きながらも会いたいのを我慢してきた。
１０歳の子供にとってそれがどんなに辛いことであったか…。
キラキラとした笑顔を振りまきながら、寝室の扉をくぐった。

「おか―さま――！」

大好きな母親の姿を見つけ、寝台に駆け寄った。
ハンナは優しい笑みを浮かべ飛び付くカサルアを抱きしめたのだった。

おかあさま！
カサルアは嬉しくて顔をすりすりさせながら思いっきり甘えた。

しかし、カサルアは違和感を覚えそっと身体を離した。
…以前の母親とは違うのだ。
柔らかく甘い香りのした母親は、痩せ細り病人特有のすえた臭いがした。それに、輝くばかりの金色の巻き毛は、今は見る影もなく輝きを失い乱れていた。

…花のように美しく慈愛に満ちた母親は、そこにはいなかった。

病気ですっかり変わり果ててしまった母親の姿に、カサルアはショックを受けていた。
それでも、母親に会えたことには変わりなく、泣きそうになりながらも懸命に笑った。

「おかあさま、きょうはきぶんがいいの?ぼく、とってもあいたかった。おかあさまにあえて、とっても、とってもうれしいよ!」
「私も。カサルアに会えてとっても嬉しいわ」
「ほんとう?」
「えぇ。さあさあ、良く顔を見せて頂戴な。愛しい我が子の顔を…」

痩せ細った指でカサルアの頬を包み込む。
すると「あぁ、自分の子供なんだ」とハンナは妙に安心した。

でも…、どうして泣きそうな顔をしているのかしら?とハンナは首を傾げた。
私と会えて嬉しくないのかしら?と。

カサルアは、母親に会えなかった間に起きた出来事を沢山話して聞かせた。
勉強がどこまで進んだか、剣術も乗馬も以前よりもどんなにか上手

くなったか、異母弟のクロウリィと毎日のように遊んでいるとか…。
楽しい毎日を送っているのだと、自分の事は心配しなくてもよいと、
顔を歪めながらも笑って見せた。

息子の話を聞いていたハンナは、どこか心がスッと冷えていくのが
分かった。
…この子はどうして笑っていられるのかしら、と。

私はこんなにも苦しいのに。
…苦しい？なぜ、私はこんなにも苦しいの？なぜ？
あぁ、そうだわ。
私は……

この子がいるからこんなにも苦しいの。

そうよ、そう。
この子がいなくなれば、私はこんなにも苦しい思いをしなくて済む
の。
そうよ。…なんだ、簡単なことじゃないの。
この子を、私の息子を…。

突然、ハンナの記憶がぶわっと蘇ってきた。

『貴女様の父君は、我等を謀ったのです』
『その責めを負うのは当然の事』
『宰相の血族の者の手によって、血族の過ちを正すというだけです
から』
『そうです。父君の血を引く貴女様が、その血を引く貴女様の息子

を狩ればよいのです』
『つまりは、貴女様がカサルア殿下を、殺せばよいのです』
『殺せばよい』

『これはもう決定されたことだ！もし従えぬと言うならば、我らとてもう容赦はせぬ！』
『了承しないとあらば、一族を根絶やしにしてくれる！』
『いや、そればかりではない！忌まわしき一族に仕えしものどもも、共に道連れにしてくれるわ！』
『数百はくだらぬ命を狩ってしんぜようぞ！』
『我等は手加減などせぬわ！』

殺せ殺せ殺せ

ハンナは、恐慌状態に陥っていた。

そのまま逃げるように、部屋の隅にある化粧台へと走っていった。

侍女たちは、「早く医者を！」「だれか――！だれか――！」「ハンナ様、落ち着いてください！」と、バタバタと駆け回り声を上げていた。…皆が、この事態に対応できていないでいた。

数名の侍女がハンナを取り囲み、宥めようと声をかけていたが、一人がハンナの肩に手をかけた瞬間――「触るな――！」と叫び声をあげ、どこにそんな力があったのか…力の限り突き飛ばしたのだった。

すると突き飛ばされた侍女が、キャ――！と叫び「痛い痛い！イヤ――」と突き飛ばされたにしては尋常でないほどの声をあげて、苦しみ出した。

皆がその様子に驚き、倒れ込んだ侍女を見ると…白いブラウスが真っ赤な血に染まっていたのだ。

！！！

そして突然、クスクスクス…と場違いなほど、陽気な笑い声が響いた。

皆が、その方向に顔をめぐらすと、ハンナが血濡れの短剣をもって笑っていたのだ。

唖然として静まり返る室内。

ハンナは何が面白いのか、さらに声をあげて笑った。
そして一歩一歩、踏みしめるように歩いた。
…カサルアのもとに。

ハンナの青い瞳は爛々と輝き、口元は笑みの形に弧を描いていた。
それはさながら、獲物を前に舌舐めずりする獣を思わせた。

誰も身じろぎ一つしない…いや、できなかった。

カラカラと笑うハンナは、呆然と立ち尽くすカサルアを見下ろした。
ぐっと顔を近づけると、怯えた様に身体を震わせた。
途端にハンナからは笑みが消え、憎しみに歪んだ顔になった。

「カサルア！お前が、お前がいるせいで、私は！」

カタカタと震える小さな体を掴み、怒声を浴びせる。

「お前のせいだ！こんなにも苦しいのは、お前が生きているからだ！…私が何をしたというのだ。なぜ私が代わりに父の罰を受けなければいけない！なぜこんなにも、私は悩まなくてはいけない！なぜなぜなぜなぜ――！」

バサバサと髪を振り乱し、無意識のうちにカサルアの首を絞めあげる。
容赦ない力がカサルアを襲う。
息が詰まり何とか身を捩って必死に抵抗を試みるが、痩せ衰えたとはいえ大人の力には敵わない。
侍女たちも、悲鳴を上げつつ「どうかお静まり下さい！」と説得を試みるのだが、狂気に支配されているハンナには全く届かない。また、短刀を手に持っているため容易に近づくことさえもできなかっ

た。

「もう終わりだ！終わりにしてやる！私は、私はこの苦しみから解放されるんだ！」

高らかに宣言し、首を絞められもがくカサルアに、鋭利に輝く短剣を向ける。

キラリと冷たく光るそれ。

「お前さえ、お前さえ生まれてこなければ――！！！」

絶叫が室内に木霊する。

ハンナは短刀を勢いよく振り上げ、カサルアを刺すべく腕を降ろす。

もう駄目だと、皆が思った次の瞬間――！

ガキィィイイインン！

短剣を持つハンナの腕に何かが当たり、凶器がその手から弾かれた。

その衝撃で、カサルアを絞めあげていた手も緩み、カサルアが床に崩れ落ちた。

解放され、苦しそうにゲホゲホと咳き込んでいる。

いったい誰が！？と、皆が振り返った先にいたのは、まだ小さな子供――クロウリィだった。

彼はたまたま騒ぎを聞きつけ、何事かと駆けつけた先でカサルアが首を絞められ苦しがっているのを見た。そして、侍女たちの制止を振り切り、カサルアを助けるために咄嗟に手近にあった花瓶を投げつけたのだ。

…それは奇しくも、サランの花が活けられた花瓶だった。

ハンナは花瓶の水をかぶり、顔からぽたぽたと水滴を滴らせていた。焦点の定まらない視線の先には、床に無残に花を散らせた、淡く黄色いサランの花があった。

…カ…サ…ルア……？

ぼんやりと床に蹲るカサルアを見ると、その瞳は怯え化け物でも見るかのようにハンナを見詰めていた。
その時、ハンナは悟った。
あぁ、私はカサルアを殺そうとしたのだと。
…私は、母親失格だと。

そっと手のひらを見ると、その手が酷く穢れているように見えた。
ハンナはクスクス笑いながら、後ろに飛ばされた短剣を静かに拾った。

そして、もう一度カサルアを見ると…ハンナが再び短剣を握ったことで、一気に青褪めガクガクと震えだしていた。
ハンナは自嘲気味に笑い、私は本当に母親失格だなと思うのだった。

そして――

カサルア…と呟く。

ハンナの声は小さくて、誰にも聞こえはしなかったが…。

カサルア…。

こんな母親で、ごめんなさい。

私はもう、どうすることもできない。

…ごめんなさい。

誰にも聞こえないほど、小さな小さな声で言う。

最後に、ハンナはふわりと微笑むと、短剣を自らの首に添える。

そして、勢いよく引き抜くと――

ザッ――と血飛沫が宙に舞い、赤い雨を降らせる。

ドサリッと倒れたハンナの首からは、ドポドポと血が流れ出した。

赤黒い血が緋色の絨毯を色濃く染めた。

イヤァァアアア――――!!!

カサルアは、血を吐く様に絶叫した。

目の前で、母親が首を掻き切って自害してしまった…。

どうして、なんで?

疑問の言葉が頭の中を駆け巡った。
子供の心に容易には受け入れられない事実。
カサルアは、事切れたかのように気を失ってしまった。

クロウリィはその意識のない小さな体を抱きしめた。
強く強く。

目の前には真っ赤な血の海が広がっていた。

＊＊＊

「…目の前で、…死んだ？」

乙は呆然と呟いた。
その問いにクロウリィは、あぁ…とだけ答える。
あまりの事に何も考えられず、青褪めた顔をしている乙を見ながら、事の顛末を話した。

「あの後、カサルアは、気を失ったまま3日間意識が戻らなかった。気がついた時には…あの日の事は、何も覚えていなかった。何もだ。…母親が自分を殺そうとしたことも、目の前で自害したことも、何もかも忘れていた。…カサルアの記憶は、母親が病に伏しているところで止まってしまっていたんだ――」

無理もないが…と言ったクロウリィは痛ましそうに目を細めた。

「だが、それだけでは終わらない。…また、“自害”してしまったんだ。闇の一族の罰を受けるべき者が、再び…。そのことに、奴らは烈火のごとく怒り出した」
「そんな！ハンナさんは亡くなってしまったのに！まだ、足りないというの？」
「そうだ。けれど、奴らも一族の決議と掟に従っている。それが再び破られてしまったからには、奴らの怒りも相当で…ある意味後にも引けなくなってしまったんだ。だから、今度は、宣言通り…宰相の一族やそれに仕えし者たちを狩ろうとした」
「……」
まさか、まだ命を狩ろうと言うの…？
乙は絶句した。
しかし、クロウリィは幾分か表情を柔らかくさせ「でも、そうはならなかった」と言った。
「『これ以上の悲劇はもう沢山だ』と、陛下が待ったをかけたんだ。…自らの王妃がその対象となるとわかっていたとしても、口を出すことすらできなかった。けど、今度ばかりは口を挟んだ。…それに、これ以上の騒動になったら、いくらなんでも多くの者に知られてしまい、王家の信用は地に落ちてしまうから…」
そう。
ルドルフ国王は、何とか事態を収拾させるために無理やり介入したのだ。
その結果、何とか闇の一族を宥め、一連の騒動については皆に口を閉ざさせた。
それは、この王家の醜聞を外に流さないようにするためと、ハンナ

の名誉を守る為だった。
…“我が子を殺そうとした末に自害した王妃”と、罵られないように。

だからハンナは、病死とされた。

そして、心が止まってしまったカサルアは、病弱とされ王宮で療養しているのだとされた。

「…これが、王宮がひた隠しにしている秘密であり、１５年前に起こった悲劇だ――」

クロウリィはそう締め括った。

この話はあまりにも残酷で、なんと悲哀に満ちたものであるか――。

…カサルアの発作は、きっとあの日の事に繋がる何かを見聞きした際に起こるのだろう。
もしかしたら、断片的に思い出されるのかもしれない。
乙はそう思っていた。

だから、こんなにも辛い場面を思い出し、必死に逃げようとしているのだ…カサルアは！

しかし、でも…と乙は思う。
哀しみを避けているだけでは何もそこからは生まれない。
辛い過去を乗り越えてこそ、救われるのだと…。

そっと目を閉じてカサルアを想う。
私には、何ができるだろうかと。

その横顔を見ながらクロウリィの顔が少し歪む。
実は、乙には言っていないもう一つの事柄があるからだ。
それは、闇の一族が王の命に従う時に、言った言葉だ――

『陛下がそこまでおっしゃるのなら、我等は引きます…ですが』
『我等はその血族の子に、いつの日にか罪を償っていただきたいと考えております』
『いつになってもかまいません』
『しかし、条件付きで…』
『それは…』

――我らが、邪魔だと感じた時に“カサルア”殿下を狩ります。

そう言って、残忍に笑う男たち。
その顔を見て背筋が凍ったのを今でも覚えている。

…ということは、カサルアは、いつ殺されるとも知れないのだ。
何と言っても、彼らが邪魔だと感じた時に殺されるのだから。

だからこそ、カサルアは王宮に閉じ込められるように生活させられているのだ。
目立った行動をとらないようにするために…カサルアを生かすために。

しかし、最近乙が関わりだして、内心びくびくしているのだ。
乙が関わる事で日常が破られ、奴らがこの機会に何か仕掛けてくるのではないかと…。
だからクロウリィは、キツイ言葉を言ってカサルアから離れる様に乙に言った。

でも、少しだけ期待してもいるのだ。
新しい風は何かを変えてくれるのではないかと。
…ほんの少しだけだが。

激しく窓を叩く雨。
今は冷たく凍えるようで、いつまでたっても止みそうにない。
しかし、いつかはきっと上がる。

それはきっと晴れやかに、突き抜ける様な青空が、そっと笑って迎えてくれる。

きっと、きっと…。

室内に響く雨音を聞く。

身の内に響くその音を聞きながら、２人は無言で俯いていた。

第18話　壊れた心（後書き）

ハンナは最後正気にかえりました。

乙はこの後どうするのでしょうか・・・？

カサルアは？

クロウリィは？

第１９話　外出（前書き）

お出かけは気分が高揚します。

第19話　外出

「街に遊びに行くか？」

と、ミハに誘われたのは今から3日前。
乙の外出許可が下りたというのだ。

以前、国王陛下の即位を祝う宴の折にルシカから、「街に行ってみたい？」と問われ「行きたい」と言ったら、「トトゥロ大神官長にお伺いしてみます」と言ってくれたのだ。
どうやらその許可が下りたらしい。
けれど、その条件として“身の安全が確保されるなら”と言うことだそうで…元東方将軍でもあるミハが、直々に乙の護衛にあたることになったのだ。

ある意味、最強の護衛かもしれない。

階下へと降りていくと、出入り口にはミハがすでに乙を待っていた。
その向こう側には、馬車が見える。
ミハ！と声をかけると、こちらを振り向いて軽く手をあげた。

午後の明るい陽光に、ミハの朱い髪が燃えるように輝いていた。
乙はウキウキと体を弾ませながら、ミハのもとへと駆け寄った。

「ミハ～！ごめん、待った？」

「いいや、さっき着いたところだ」
「よかった～…って、あ？」

ふぅ、と肩で息をつきミハを見ると…いつもと服装が違うことに気付いた。
ミハは、もちろん乙も同様に、今日は街へ行くので庶民風の綿でできた上下を着ているのだが、ミハは常のような長衣ではなく“ズボン”を穿いていたのだ。…それに、どう見ても足があるように見えてならないのだから、乙が驚くのも無理はない。

そう。
ミハは病で右足の膝から下を失っている。
そのため、いつもは長衣を着て足もとがそうと目立たないようにしているのだ。
それが今日はズボンを穿いているばかりか…どう見ても足があるように見えるのだから…。

「？」と乙が疑問に思っていると、その表情にミハがクスリと笑った。

「よく気付いたな～。侍女たちは全く、だったんだがな～」
「え？そうなの？」
「あぁ。キノトは私のことをよく見てるな――！」

うれしそうにニカッと笑いつつ、「実はな――」と右足のズボンの裾をヒョイッと上げた。

「…それは、義足？」
「正解」

革の靴からのぞくのは、肌色の柔らかい人のそれではなくて、綺麗に削られた漆塗りの木だった。
それは、この世界の義足だった。

「これはな～、少し窮屈であまり好きではないのだが…今日は特別だからな」
「特別？」

顔を上げた乙にミハは頷いて見せた。

「そう。今日は全力でキノトを守るからな。…だから――」

――悠長に松葉杖なんてついてはいられないよ。

そう言って、深緑色の瞳を柔らかく細めた。

ミハは何かあったらすぐに対応できるようにと、乙のために義足を着けてきたのだ。

「ミハ…」

うれしいと潤む瞳。
その濡れた底知れぬ漆黒の闇に吸い込まれるように、ミハの一歩足が動いた。

カツン……――

大理石に響く自らの靴音。

もう一歩、足を踏み出そうとした時、「キノト様」と声がかかった。
ハッとして足を止める。

「キノト様、くれぐれも迷子になどならないで下さいませね。私は行けませんが、他の侍女が後方についておりますゆえ。な・に・か、ありましたら、どうぞご遠慮なくお申し付けくださいませ」

“な・に・か”という部分に力を込め、ミハを軽く睨むマリー。
先ほど、ミハが無意識に乙に近付いていった行動の真意を見透かされているようで、ひやりと背筋に冷たい汗が流れたのだった。

ハハハ…と力ない笑いが漏れた。
これ以上ここにとどまるべきではないと判断して、乙に声をかけた。

「取り敢えず馬車に乗り込むぞ。あまり遅くなると、道が混むからな」

そう言うと、乙に自らの手を差し出した。

それは、大きく無骨な手で、武人のそれであった。

慣れない行動に少し頬を赤らめながら、乙はおずおずといったように手を差し出した。
乙の手はミハとは対照的な、ほっそりとして白く柔らかなそれだった。

随分と違うなと、乙は微かに笑う。

そっと指先が触れあえば、そこからジンと熱で痺れた。

互いに誤魔化す様に照れ笑いながら、ミハのエスコートで馬車に乗り込んだ。

◆◆◆

カッポ、カッポと馬が石畳を蹴る音と、カタカタと車輪が回る音が馬車内に響いた。
中は思った以上に広く、豪華だった。
柔らかいクッションに体はすっぽりと沈んでいたが、それとは逆に気分は高揚していた。

乙は物語の中でしか知らない人生初の馬車に、キラキラとした視線をあちこちに向けた。

「うわ～！すごいすごい！初めて馬車に乗ったよ！石畳だし、レトロ～！」

普段の乙よりも随分とはしゃいだ様子に、ミハは興味深そうな視線を向けた。

「そんなに楽しいか？」
「うん。だって、馬が引いてるんだよ！馬だよ馬！」
「…馬なんて、普通だと思うが？」
「ミハにとってはそうなんだろうけど…私にとっては、すっごいことなの！初めて見るんだよ！」

日本でごく一般的に育った乙にしてみたら、馬などはテレビの中で見るくらいが精々である。本物などは見たことがなかった。そんな事とは露知らず、ミハは不思議そうな顔をしていた。…そんな不便な世界もあるのかと思いながら。

「…そうなのか？」

「そうなの！それに馬車も初めてだし…。それに馬車って…、馬車に乗るのなんて…。まるでお姫様みたい！物語の中にいるみたいだよ！」

拳を握って力説する乙に、思わずブッ！と吹き出してしまった。まさか、こんなにも愛らしい言葉を乙が言うとは思っていなかったからだ。

…見ているこっちが赤くなりそうだ、とミハは暴れる心臓を宥めながら、何かを思いついたようにニヤリと口の端をあげた。

「そうか…お姫様みたいか。なら、今日はお姫様になるか？」

「え？何？」

驚く乙の前に片膝をつき、そっと手をとった。

「！」

「今日一日、キノトは私の姫だ。私だけの…ね」

「な、な、な…」

「キノト姫の唯一の騎士、ミハ・ロード・ガーバントが誓う…」

驚いて目を丸くしている乙を他所に、ミハは乙の手に自らの唇を落とした。

そして離す瞬間、チロリと舌で舐めた。

「！」

真っ赤に染まった乙の顔を上目遣いで見やり、妖しくも艶やかな笑みを見せた。

ますます赤くなっていく愛らしい顔に、「今日は楽しくなりそうだ」とより一層笑みを深くするミハであった。

◆◆◆

「一杯人がいるね――！」

馬車から下りてあたりを見回せば、大通りに面し沢山の露店や店が所狭しと並んでいた。

溢れんばかりの活気に満ちて、乙は自然と気分が高揚した。

「まずはざっと見て回るか？」

「うん！そうする！」

昼時なので人が多く、ミハはさり気なく乙を守るようにしながら歩く。

しかし乙は忙しなくキョロキョロと珍しそうに露店をのぞいたり、何の店か質問したりと自由気ままに行動するため、いつの間にか人波に押され逸れかけたりもした。

こっそりと周りで警護している者たちは、常にヒヤヒヤと見ていたが、ミハはまるで小さな子供の様な乙を面白そうに見ていた。

しばらくはそうしていたが、警護の者たちの「どうにかして下さい」との無言の圧力に、やれやれと息をついた。

「キノト、人が多いいから、手だして」

「え?…手を?」

先ほど買った串焼きの肉を頬張りながら、言われた通りに手を出した。

すると、キュッと手をつながれた。

え?とミハを見ると「迷子防止」と笑って、「あそこで売ってるやつは美味しいぞ」と至極当然のように手を引いた。

ミハの逞しい背中を見ながら、つながれた手に視線を落とした。

優しい手…。

幼い頃に手を引かれた記憶と重なって、何だかこそばゆくなった。

「ミハ!何が売ってるの?」

はにかみながら横に並ぶと、甘い香りが鼻腔をくすぐった。

「クロルクっていう、サクサクしたお菓子だ。甘いの好きだろ?」

「うん、好き。良い香り〜」

「じゃ、1つ食べてみるか?…店主、1つもらおう」

はいよ!とでっぷりとした、いかにもお菓子が好きです!という体型の店主が、1つを乙に手渡した。

楕円型をした一口大のクロルクは、こんがりきつね色に焼けていた。

できたてで温かいそれを一口噛むと、サクッとした軽い触感ととも

に甘いはちみつの味が口内に広がった。

「あ…これって、ハニークッキーみたい！美味しい！」

思わず顔をとろけさせた乙に、店主はゴフッと咳き込んだ。
妙な咳をし続ける店主には気付かず、美味しいよ！とミハに報告する乙。

「…そうか、気にいったみたいだな」

「サクサクしてて、甘くて、すごくおいしい。ミハも食べてみたら？」

「そうだな。久しぶりに食べたくなってきたな。店主、それを二袋もらおう、お代――」

「い、いや。お代は結構だ！…イイもん見せてもらったしな！」

「…」

銅貨を渡そうとするミハの手を押し返し、店主はにっこりと乙を見た。

「お嬢さん、持ってってくんな！」

「え…、でも…」

「いいからいいから。かわいいお嬢さんにゃ、サービスしなくっちゃな！」

どうぞと、ニコニコしながらクロルクが入った袋を乙に渡した。
戸惑いながらミハを見ると、苦笑いして頷くので、乙は「ありがとう」と受け取った。

「またどうぞ～」と、陽気に声をかける店主の声を聞きながら、ミハに促されて歩き出した。

「なんか、もらっちゃった。いいのかな～、タダで」
「…いいんじゃないか？サービスって言ってるんだから。…それに、お代はもう払ってあるしな…」
「え？何？」
「いや、何でもない」

後半は声が小さすぎて乙には聞こえなかった。

「ふぅん？…あ、はいこれ。ミハのぶん」

店主からもらった袋の1つをミハに渡そうとすると、首を振って断った。

「それはキノトにと思って買おうとしたんだから。そうだな…、1つは今食べて、もう1つは帰ってから食べたらいい」
「いいの？ミハ、甘いの好きなのに」
「…ぐっ！それどこで聞い…。フィリアか…、フィリアに聞いたんだな。余計なことを…」
「あ～…ハハ？いいから、いいから。じゃぁさ、2人で食べよう！」

降下したミハの機嫌に慌てた乙は、袋をごそごそさせてクロルクを1つ取りだした。
何か言いたげに開いたミハの口に、すかさず放り込んだ。

「！」

突然口の中に入れられ驚いたミハであったが、サクッと一口噛んだ瞬間口内にはちみつの味がひろがった。
とろける様な甘さに、見る見る表情が明るくなっていった。

そんなミハの表情を満足げに見て、乙も1つ取りだしてパクッと頬張った。

「甘くておいしい」

からりと笑った乙につられて、ミハも笑った。

「噴水の方に行こうか」
「わかった」

そう言って大通りの露店や店をのぞき、気に入ったものがあったら買いながら、2人は街の中心部にある噴水へと向かった。
もちろん手はつないだままだ。

優美な彫刻が施された大きな噴水の縁に腰かけながら、手に持ち切れないほどの食べ物を2人で食べた。
そのほとんどは、クロルクを買った時の店主同様「おまけだよ！持って行きな！」と強引に手渡されたものばかりだった。

…まぁ、キノトのあの笑顔を見たら、な。

はぁ、と溜息をつき隣に腰掛ける乙を見ると、食べ物に囲まれながら「沢山もらっちゃった～。次、何食べよう」とニコニコしていた。
乙のうれしそうな笑顔を見て、再び溜息をついた。
そして先ほどから乙を盗み見ている男どもに鋭い一瞥をくれてやると、慌てて視線をそらすのだった。

流石、元東方将軍。

一睨みの威力たるや、効果絶大だった。

やれやれと山盛りの食べ物の中から、袋で渡されたものを控えていた侍女たちに渡す。こんなにあっても食べきれないし、持ち運ぶのも一苦労だからだ。

もぐもぐと食べる乙の横で、仕分け作業やその他警護の者たちとふたつみつ話していると、どこからやってきたのか男が近付いてきた。

「やぁ、こんにちは美しいひと」

「…？」

シュークリームに似たパシュというお菓子を、口の中に入れた瞬間声をかけられたものだから、視線だけで「何か？」と乙は目の前にいる男に問うた。

…だが、それでは通じなかったようで、男は全く違う解釈をした。

「はぁ～ん、美しいひと。そんなに甘い視線で見つめたら、ダメダメ！私を虜にしてしまうつもりかい？いや、もうすでに私の心は、貴女の奴隷さ～」

バチンと音が鳴りそうな程のウインクを投げた。

何を言っているのか…。

絶句しかけた乙だったが、男はそんなことお構いなしで色っぽく金色の髪を掻きあげた。

なんだなんだと周りで見ていた人垣から、おぉ！という感嘆の声とキャー！という黄色い悲鳴が上がった。

男は目を引くほどの端正な顔立ちに、良く通る美声を持っていた。

吟遊詩人か…。
隣でぼそっとミハが言った。
その言葉に男が反応して、小脇に抱えていた竪琴をポロンと鳴らした。

「その通り！愛の歌を紡ぎ響かせる伝道師！私はその名も、吟遊詩人カリス！どうぞご贔屓に。…そして貴女！」
「…は、はい？」

乙はカリスと名乗る男に気圧され、反射的に返事をしてしまった。
男はにっこりと色香を漂わせて微笑んだ。

「あぁ、何と初々しくも清らかな女性だろうか。しかし、それでいながら何と罪作りなのか！一瞬で私を虜にしてしまったのだから！」
「はい？」
「はぁ、何と！そのことさえも知らぬというのか！あぁ、何ということか！」
「…」

大げさに頭を抱え込む男に、乙はやはり何も言えなかった。
すると男は高らかに詠う様に言葉を紡いだ。

「あぁ…、貴女のその大きな瞳は、黒真珠にも劣らぬ美しくも気高い輝きを見せ、長い御髪は闇夜を紡ぎだしたかのように妖しく私を誘うというのに！貴女は知らぬという！私の胸が張り裂けんばかりに高鳴り、苦しいというのに、貴女はまだそれでも足りぬというのか！？その白い珠のように輝く肌は、しっとりと私に吸いつき、私の下で喘ぎほんのりと桜色に染ま…」

「いいかげんにしろ」

地を這う様な声音でミハがどすを利かせた。
いつまでたっても終わりそうにないばかりか、最後のほうは趣旨が違ってきていたからだ。

昼間から、どんな妄想してるんだ…！

呆れた様に冷たい視線を送るが敵もさるもの、命知らずにも応酬してきた。

「…なんです、貴方？せっかく、私の美しいひとに愛を詠い上げていたというのに」
「愛？ただの変態野郎が？」
「何と嘆かわしい！貴方は、私の甘美なる詩についていけなかったのですね。あぁ、嘆かわしい！」
「……はぁ、疲れる。もうどこかに行け」
「まさか！私の美しいひとを置いていけるわけがないでしょう。ねぇ、美しい人。これから私とめくるめく、甘美なる詩の世界へ旅に出ませんか？」
「…」

話を振られたのだが、乙は先ほどから全く男の言葉が理解できないでいた。
無防備にポカンとしていると、男があっ！と声を上げた。

「うふふ。何て愛らしいのか。口の端にクリームがついていますよ…」

男が手を伸ばし指で拭おうとすると、横からミハの手がガシッとそれを掴んだ。

「勝手に手を出されたら困るな…」

掴んでいた手を勢いよく押し返せば、男はヨロヨロと後退りした。
目を見開く男をしり目に、隣に座る乙の腰を引き寄せ抱き込むように閉じ込めた。

「何と言っても、私のお姫様だからな」

クスリと笑ってミハは、乙の口の端についたクリームをペロリと舐めた。

「！」

驚いた乙が声を上げようとした瞬間、ミハが唇を落とした。
角度を変えて何度も唇を味わう。

……ちゅ……クチ…チッ…。

唇を貪るリップ音がその場に響く。

しばらく堪能した後、顔を離す。
すると、乙の濡れそぼり赤く色付いた唇が目に付いた。

ミハ…、と突然キスをしてきた事に抗議するように乙が軽く睨んできたが、どうしても上目遣いの潤んだ瞳では迫力がでなかった。むしろ誘っている様な、立ち上る色香を放っていた。

ウッ…、これはいけない…。

ミハは衆目にこの様な状態の乙を見せるわけにはいかず、急いで自らの胸の中に抱きしめて隠した。
必死に身じろぎ抜け出そうとするが、乙の力ではどうすることもできない。

傍目には、イチャイチャしている様に見える。

そんな2人の熱々ぶりにあてられ、彼らを囲んでいた人垣が一斉にどこかへと散っていった。
そして、当てつけのように目の前で“美しいひと”にキスをされてしまった男は、興味が失せたとばかりに「やってられるかよ」と捨て台詞を吐いて踵を返したのだった。

ミハは目の端で男が去るのを確認し、部下に目配せした。
すると部下は微かに頷き、男が去った方向に歩いて行った。

「もう！ミハ！」

怒ったような乙の声音に慌てて腕を解くと、ぜぇぜぇと苦しそうに肩で息をしていた。
苦しいから…、と言う乙にミハは力を込めすぎたかと反省した。

「…はぁ、…あれ？さっきの、人は？」
「…さぁ～？」
「そう…。それにしても、変な人だったね。…あ！ミハ、いきなり人前でキスとかしないでよ。恥ずかしい…」
「すまなかった。つい、そそられ…いや、あの男を黙らせるためだったのだが。効果覿面だったな！」
「～～～」

あっけらかんと言うミハに乙は、羞恥に顔を赤くした。

「まぁ、いいから。ほら、買ったやつを食べろ。でないと、私が全部食べるぞ」

ニッと笑って乙が先ほど一口食べたシュークリームに似たパシュを、ミハは大きな口をあけて食べた。
もぐもぐと美味しそうに食べるので乙も、パクッとパシュに齧り付くと口内にとろける様な甘さが広がった。

噴水の水音を背後に聞いて、クスクスと笑いながら甘いお菓子を頬張った。

第１９話　外出（後書き）

いちゃいちゃしております～。
次もこの続きから始まります。

イラスト集の絵を追加いたしました！
興味がある人はご覧ください！

第２０話　出発の証（前書き）

大変長らくお待たせいたしました～！

第２０話　出発の証

「この後どうする？」

一日中遊びまわったというのに、乙はまだまだ元気な様子で話す。

「…ん～。そうだな…、そろそろ夕方になるからな…」

対するミハは、空に顔を上げスッと目を細めながら言った。
その横顔に傾きかけた太陽が濃い影を作った。

「もう、帰る？」

ミハの様子からそろそろ帰ったほうが良いのかな？と、乙は感じ取った。

この世界には電気がない。
だから、人々は太陽と共に生活をしている。
日が昇ると同時に生活が始まり、日没とともに終わる。
夜になるとランプや蝋燭、暖炉などで明かりをとるが、ランプや蝋燭は高価なため長い時間使用することはない。
だから、夜は本当に暗い。
乙がこの世界にきて最初に驚いたことだ。

――夜はなんと暗く、なんと明るいことかと。

明かり一つない夜はとても暗く、その夜空に浮かぶ星は煌々と輝いていたから。

しかし同時に、夜は大変危険でもある。
よからぬ輩が夜に跋扈するからだ。

だからこそ乙は、「もう、帰る？」と聞いたのだ。
まだまだ遊びたかったし、見て回りたかったが、ミハを困らすわけにはいかないから…。

乙は、ミハの返答を待った。
相変わらず目を細めて何事かを考えているようだったが、ゆっくりと目を閉じそしてまたゆっくりと目を開いた。
深緑色の瞳は、深い森のように柔らかい色をたたえていた。

「連れて行きたい所があるんだ。乙に見てほしい物がある」
「私に？何を見せてくれるの？」
「それは行ってからのお楽しみだな」
「…お楽しみか～。わくわくするね！」

◆◆◆

クスクスと笑う乙をエスコートして、再び馬車に乗り込んだ。

カッポカッポ、カタカタという音を聞きながら目的地へと進んで行った。
そこは中心からは離れた場所だった。

馬車から降りたった乙は思わず、「ここ?」と呟いた。
何しろそこは、何もない大きな空き地だったから。
乙はそろそろと近寄り、何もない空き地に入って行った。
不思議に思いながらもその中心まで歩いて行く。ミハも乙の後ろからついてきたが、少し離れたところで止まった。
広い空き地を見渡しながら乙は言った。

「ここが、ミハが見せたかった場所なの?何もないけど…いったいここは何?」
「あぁ…。ここは…、ここには、近々ある建物ができる。その場所だ…」
「建物?」
「そうだ。ここには、孤児院を建てるつもりだ…特に、双子の孤児を積極的に受け入れる、な…」
「え!?」

勢い良く乙は振り返った。
ミハは穏やかにその視線を受け止めた。

「双子の、孤児って…どういう…」
「前にも話したが、双子っていうのは忌み嫌われている…孤児が出やすい」

ミハから“双子は凶兆の前触れとして、忌み嫌われてきた”と、乙は前に聞いたことがあった。

そのため双子が生まれたら、引き離されて育つか、または一方を殺してしまうというのだ。

貴族のもとに生まれた双子は、大体は離れて育つ。

…が。

特に庶民や貧しい者は、売ってしまうか、捨ててしまうか…特に、殺してしまう事も多いという。双子としてこの世に生を受けた赤子にとって、何ともつらい運命が待っている。

ミハは話しながら、沈痛な色をその瞳に滲ませた。

「…良識がない場合、特に酷い。子供の命を簡単に手放してしまう…それが現実なんだ」

「…つらい、ね…」

乙は何と言っていいかもわからなかった。

胸が詰まって、眩暈さえした。

「だから…、だからこそ、双子を積極的に受け入れる孤児院を作りたい。…命を、この世に生まれた命を、一人でも多くの命を救いたいんだ。ここが、その最初の孤児院になる…」

そっと微笑みながら空を見上げたミハ。

その瞳には、孤児院で幸せそうに暮らす子供たちの姿が見えているのだろうか。

柔らかく微笑む顔を見て、乙はふと思った。

「もしかして、それはミハの提案で…？」

「いや、違う。私だけでなくて、…ニースとの、な」

「！」
「ここの孤児院は、国と神殿の承認が与えられることになった。そこで、国と神殿の代表として私とニースが当たる事になったんだ。…陛下や大神官長も、２人が適任だと笑って言っておられたよ」
その時の事を思い出したのか、フッと苦笑した。
「すごい！国と神殿が承認したんだね！すごいよ、それってすごいことだよ！ミハ！」
「ああ。それに国も神殿でも、双子の問題をどうにかしたいと思っていたみたいでな、タイミングが良かったっていうのもある」
「うん！それに、２人が問題解決にあたったら、すごく効果あると思う！何と言っても、この国で最も有名な双子が携わるんだもの。――きっと、きっと、上手くいくよ！」
頬を上気させながら乙は笑った。
そして、いくらか真剣な表情になって、窺うように尋ねた。
「ミハ…。さっき、ニースと、提案したって言ったけど…それって、もしかして…？」
「あぁ、もしかしてだ」
「じゃ、じゃあ、ニースと…？」
「…ニースと話し合ってみたんだ。お互い、スタートラインに立つために」
そう力強く頷いて、遠くを見るように目を細めた。
まるで、大切な幸せな記憶を思い出す様な、そんな穏やかな瞳だった。

＊＊＊

少し前のことだ。
ミハはある決意を秘めてニースの元へと向かっていた。

コツ、カッ、コツ、カッ――

大理石を鳴らすミハの靴音と松葉杖の不規則なリズム音が、シンと物静かな神殿に響いていた。
ニース自ら買って出た“力”による治療のため、定期的にニースはミハの元を訪れていた。…神官長という多忙の中である。
だが、逆にミハはニースの自室に訪れたことは一度もなかった。

不規則に鳴り響く音は、ミハの緊張を高めた。

止まりそうになる足を何とか前に押し出し、ニースの元へと向かう。
…ここで止まってしまったら、自分の決心が鈍ってしまうから。

あ…。

いつの間にかニースの部屋の前に着いていた。
フッと不安を吐きだすように呼吸を整える。
そして意を決して、コンコン――と扉を叩き、「…私だ、ミハだ」と名乗る。すると、中で息を飲む音が扉越しにも聞こえてきた。

一拍置いて「どうぞ…」と言う固い声が返ってきた。

キィ――…と鳴る音とともに扉を開ける。

ミハの目に最初に飛び込んできたのは大きな執務机で、その上には書類や本などがうず高く積みあがっていた。
ニースはというと、その山の向こう側に立っていた。
ニースの居室を初めて見たミハは、少し意外にも思っていた。ニースの几帳面な性格にしては、机の上が乱雑だったからだ。

キョロキョロと無遠慮に見渡す視線を感じたのか、ニースは少し戸惑っているようだった。

「…ミハ。…なん……。いえ、それより、中にどうぞ…」
「…あぁ」

ニースは突然ミハがやってきたことに、どのように対処すればよいのか、わからないでいるようだ。
勧められたソファーにミハが腰掛けると、ニースも相向かいに座ったが、どこか所在なさげな様子だった。
常とは違い、おどおどとした様子のニースにミハは軽く苦笑した。

「ニース…、大丈夫か？緊張しているように見えるが？」
「…ッ。そう言うミハこそ…、何だか…、……」
「……」
「……」

無言。
結果、２人とも緊張していることが分かった。
このスチエーションに…！

痛い沈黙から抜け出すように、ハハ…とミハが力なく笑い、今日来た訳を話しだした。

「今日はな、ニースと話したい事があってきた」
「…そうですか」
「……。実は…前に進もうと思って、私も…もちろんニースも、…一緒にな」
「…それはどういう？」
「前に、キノトに言われたんだ『何も、2人は始まってないし、もちろん終わってもいない』と…」
「え…？」
「私たち2人の事を話したんだ、双子の呪いのことも含めて…。そしたら、キノトが言ったんだ。『2人はスタート地点に立ってすらないって…」

そうあの日。
乙に双子の話、そして自分たちの過去について話をしたのだ。

『私たちは救われたんだ、キノトに。…でも、本当に私は臆病だ。なかなか前に進めないでいる。…ニースとも、何も、何も変わっちゃいない。…きっと、ニースは私を怨んでいるから』
『そんなことないです！そんなことっ！！』
『…いや、そうなんだ。私さえいなければ、ニースは…』
『勝手に決め付けちゃだめ！…ニースがそう言ったの？違うでしょう？それは、ミハが勝手に思い込んでいるだけです』
『…いや、そんな――』
『いや、じゃないです！…何も、2人は始まってないし、もちろん終わってもいない。2人はスタート地点に立ってすらないの！そこに立つことすら避けてるんです！だから、だから、まずそこに立って、きちんと2人で話し合ってください。今から始めるんです！』
『……始まっていない…？終わってもいない…？』

『そうです！相手の気持ちを勝手に思い込むんじゃなくて、ちゃんとぶつかって！きっと、きっと思いは伝わるから。…だって、2人きりの兄弟じゃないですか』

そう言って、フッと堪えていた涙を一筋流したのだ。

キラキラと伝い落ちる涙。美しい宝石のようだとミハは思ったのだ。

『……ぶつかるのか…ニースと…』

『そうだよ。…ぶつかることって、すごく怖いことだけど。…立ち止まっているままじゃ、何も始まらないから』『あぁ、そうだな。始めてみるよ。…スタートラインに立てるように』

『うん。…私も、始めてみようと思う』

『一緒に、一緒に始めてみよう。勇気を出して』

『…あぁ。始めよう』

乙と誓ったのだ。

前に進むと…。

ニースは息をのんで聞いていた。

その顔は血の気が引いて真っ青になっていた。

ニース…？と、そっと声をかけると、ビクッと体を震わせた。

明らかに様子がおかしいニースにもう一度声をかけると、両腕で体を抱きしめるように抱え込み、俯いた。

「ニース？おい、どうし――」

「ミハ！！…あぁ、ミハ！！ミハ、ミハ…！！」

突然、肩を震わせながらミハの名を何度も叫んだ。

泣いているのだろうか…？

嗚咽をかみ殺すようにしながら、必死にニースは言葉を紡ぐ。

「ミハ、ミハ！！わ、私が…私が悪いのです。…ミハ、は、何も…
何も悪くなどないのに。私が、ミハに、そんなにも、…！」
「ニース…？いったいどうしたんだ？」
「あぁ、神よ！…私は、わ、たしは…。何と罪深い…！あぁ！神よ
！！神よ！！」

髪を振り乱し、次から次へと溢れてくる涙が頬をつたった。

「ニース！」

尋常ではない様子のニースへ身を乗り出し、強い調子で名を呼ぶ。

「どうしたんだニース！…ニース！」
「あ…あぁ…、……」
「ニース！こっちを、私を見ろ！！」
「……ッ！」

強く肩を掴む。
はぁ…、はぁ…、と荒い呼吸を繰り返すニース。
そして、恐る恐る開いた瞳は、

曇天を思わせる鈍い灰色だった。

一度として光を映したことのない瞳は、涙で濡れて輝いていた。
ニースは見えるはずはないのに、必死に瞳を彷徨わせミハを探した。

「…ミ、ミハ…？どこに…？」
「ここに。目の前にいる、だから落ち着け」

縋る様にミハへ手を伸ばす。

「ミハ…、本当に、わ、私が…。私が、悪いのです。ミハは、何も、悪くなどない」

「…ニース」

「怨む?…私が、ミハを怨むなど!あぁ、そんなことあるはずはないのに!」

「!」

「そうです。そんなことあるはずもないのに…。むしろ、私が、私さえいなければ…。そうしたら、ミハは幸せな日々を送ることができたのに…」

「な、何を言って!」

驚くミハに、ニースはずっと心にしまっていた胸の内を明かした。

「私が子供の時に、あんなことを、ミハに…!なぜ、言ってしまったのか!あぁ…、己の弱い心が憎らしい!」

溢れる涙がぽたぽたと、握った拳の上に落ちる。

「本当に、ミハ…!私が悪いのです!全て、すべて…!」

「ニース!違う!あの時のニースの言葉は真実なんだ…。気に病むことなどないんだ。私が、双子なのに、ニースから全てを奪ってしまったから…!だから、ニースは何も悪くなどないんだ!全て私が――」

「いいえ!いいえ!ミハ、それは違うのです!!…私が、あのようなことを言わなければ…!」

そう。
あの時、2人が8歳の時。
いつものように遊んでいたら、ニースがおもむろにミハに言ったのだ。
ニースは、今までそのことを一度も口に出したとはなかった。
きっとずっと感じていたことであっただろうに、しかし子どもながらにそのことは言ってはいけないと分かっていたのだろう。
それでも、不意に言葉に出してしまったのか、その言葉を初めてニースが言ったのだ。

『どうしてふたごなのに、ぼくだけめがみえないの？』

『どうしてぼくだけと―さま、か―さまとくらせないの？』

『ミハがぜんぶとったの？』

『……ぼくから……ぜんぶ……』

ミハは言う。

「あの時の、ニースの言葉は、真実の言葉だった。…双子なのに。ニースだけが目が悪いのは、きっと私がニースの視力を奪ってしまったからなんだ。それに、ニースが養子に行ってしまったのだって…私が、先に生まれてきたから――」

自分さえいなければ、ニースは…！

手に顔を埋めるミハ。

「すまない、ニース！私が――」

「違うのです！ミハ！…あぁ、違うのです」

流れる涙もそのままに、ミハの肩に手を置く。

「あのようなことを言った私が悪いのです。…それに、目が悪いのは、それは端なる生まれつきです。そして、養子に行ったのも、ミハが原因ではない」

「…そんな！」

「いいえ。私はそれが正しかったのだと思います。目が見えぬ私に、ガーバント家を盛りたてていくことなどできようはずもないのだから」

「……ッ」

「それに――」

ニースは言葉を切り、ミハに顔を上げるように促す。

顔を上げたミハの瞳に映ったのは、…涙を流しながら微笑む顔だった。

「ミハ…。それに、私はよかったと思っています。…目が見えぬことも、養子になったことも。…もちろん、ミハと双子として生まれてきたこと、全ての事が」

「…！」

ニースはミハに言ってしまったことを、ずっと悔やんでいた。

なぜあんなことを言ってしまったのか…。

しかし、あの当時、何も知らない子供だった。

全てを与えられているミハと与えられないニース――そう感じてい

た。

ミハが全てとってしまったのだと。

でもそう言った後に、気付いたのだ。

――そんなことはないと。

自分もミハに負けぬほどの愛や幸せを与えられているのだと…！

仲の良い兄弟だったのにあのようなことがあって、ミハと疎遠になってしまった。

会えない日々が増える中、感じたのだ――双子は2人で1つだと。

片割れだけでは生きられないと…。

全ての原因は、自分の弱い心のせいだった。

だからこそ、そのような弱い心を捨てるために、神官という道へ入っていったのだ。

「ミハは、何も悪くないのです」

「そんな…。それを言うなら、ニースこそ何も悪くなどないのに…」

力ない声で呟くように言った。

…初めて知ったのだ。

互いの胸の内を…。

そしてわかった。

――それぞれが、自分が悪いと思っていたということが。

あぁ…。それは、何と…。

「キノトの言った通りだった…」
「…え？」
「『勝手に決め付けてはだめ』『勝手に思い込んでいるだけ』…キノトはそう言っていた」
「…ええ、本当に。そうでした…」
「キノトはすごいな…」

微かに苦笑しながら、顔を見合わせる。
ニースの涙は止まっていた。

「ミハ…。私たちは、前に…進めますか？」
「もちろんだ。…ニース、一緒に、前に進もう…」
「えぇ」

穏やかな顔をした2人は、本当に瓜二つだった。
まるで鏡を見ているように…。

＊＊＊

話し終えたミハは、本当に穏やかな顔をしていた。

乙の前に立ちそっと手を握った。

「ニースと話ができてよかった…。でなければ、私たちはずっとすれ違ったままだった。ありがとう、キノト。キノトのおかげなんだ」

「…ミハ」

「だからここは、この孤児院は…2人の出発の証の様なものなんだ」

見上げるように空き地へと視線を向けた。

その横顔に、今日最後の夕焼けが一際強い光を放っていった。

「きっと…、きっと、良い孤児院になるよ。こんなにも2人の心が詰まっているんだから」

キュッとミハの手を握り返す。

ミハも手を握り返しながら、神妙な顔つきになり乙を見た。

「キノト…。それで、お願いがあるんだが…」

「ん？なに？私に出来ることなら」

微笑みながらミハを見上げる。

「……実は、孤児院に。…キノトからの、加護を与えてほしいんだ」

「…！」

加護――。

その言葉を聞いて息を詰まらせた。

驚愕に見張られた瞳には、戸惑いが浮かんでいた。

「…ミ、ミハ…。ごめん、私には、私には…そんな“力”なんてないの。加護なんて…」

そう。
乙には“力”がない。
至高神ホロの愛し子であるにもかかわらず、そのホロの力の片鱗である、“木火土金水”の“力”を扱うことが未だできないでいた。
だから“力”が扱えないのであれば、加護など到底できるはずもなかった。

「本当にごめん。…ニースやルシカに教わっているんだけど…全然なの。ごめんね…」

密かに、特別授業を行ってもらっているのだが、全くその気もないのだ。
実はそのことをかなり気にしていた。
“力”を使うことのできない自分は、ホロの子ではないのではないのか…？と。

申し訳なさそうに謝る乙に、ミハは安心させるように微笑む。

「キノト、何も“力”を使って加護を与えなくてもいいんだ」
「…え？だってそれじゃぁ…」
「いいんだ。ただ、キノトが願ってくれたら…子供たちがすくすくと育つようにと、願ってくれたら」
「……」
願うだけでいい――。
ミハはそう言ってくれた。
何の“力”もない自分。
けれど、願うだけでもいいというなら――力になりたい。

乙は、「うん…」と頷いた。
それを見たミハは先ほどの夕焼けにも負けないほどの、光り輝く笑顔になった。

「ありがとう、キノト！…あぁ、キノトが願ってくれるなら、きっと良い孤児院になる」
「…そうかな？」
「そうに決まってる。…それに、ここは出発の証だから。絶対に良い孤児院にするつもりだ…」

スタートラインに立った2人。
その証である孤児院。

ミハは、前に進んだ。
勇気を出して一歩を踏み出したのだ。

なら…。
私も…、一歩を踏み出さなきゃ。

乙は漆黒の瞳に決意の色を浮かべた。

――この手で守ると。

夜の帳が落ち始める。
乙は馬車に乗り込む前に、もう一度だれもいない空き地を見渡した。

そして、２人の証を想い、目を閉じる。

――カサルア。

心の中で呟いた。

乙も一歩踏み出すために…。

第２０話　出発の証（後書き）

本当に長らくお待ちいただきました！
際どい所で終ってしまって、悶々とした方もいると思います・・・汗

今回はミハのターンです！
第６・７話で双子の過去のことや乙との約束が出てきます、それのその後という感じです！
さて、次回はいよいよ？章の山場です！
そして？章もそろそろ終了しますよ～、お見逃しなく！！

第２１話　記憶の扉（前書き）

長い間お待たせいたしました！！
ずっと、忙しくて更新ができませんでしたが、やっとアップすることができました！！

今回と次回が、？章の山場です。

第２１話　記憶の扉

「キノトはぁ～、まだ～？」

ケホケホと咳き込みながら侍女に問うカサルア。

「もうそろそろお見えになりますから、もう少しお待ちください」

「う～、はやく～。…あいたいよ、キノトにあいたいよぉ…」

熱で顔を真っ赤にしながら、カサルアが弱々しく懇願する。

すると、タイミング良く「キノト様がお見えになりました」と、侍女の声が室内に響きわたった。

微かな衣ずれとともに現れたのは、淡い黄色のシンプルなドレスに身を包んだ乙だった。

ふんわりと微笑む乙にカサルアはいてもたってもいられず、寝台から起き上がり一目散に飛び付いた。

「キノト―！あいたかったの―！」

がっしりと抱きつき、甘えるように顔を乙の首筋に擦りつけた。

カサルアがカゼをひいたというので、乙は心配していたが、思ったよりも元気そうな様子にいくらか安堵した。しかし、服越しに感じる体温は、常よりも熱かった。

「カゼなんだから、じっとしていないと、治らないよ」

「う〜ん、だって〜」
「だってじゃないでしょう？ほら、寝台に戻って」
「…むぅぅ。いや―！キノトとあそぶのぉ―！」

イヤイヤと幼子の様にぐずるカサルアの背を、乙はそっと撫でた。

「だめだよ、寝てないと…。側に付いていてあげるから、ね？」
「いや―！キノトとあそぶぅ―！」

ますますぐずりだし、乙を「離すもんか」という様に、ぎゅっと抱きしめ、顔を首筋に埋めるのだった。
「困ったな〜」と、乙が天井を仰ぎ見た時、ひたりと首筋に熱く柔らかい何かが触れたのがわかった。

「…ッ！！」

突然のことに乙は、ビクッと体を震わせた。
何？今の…、と混乱していると、再びその感触が首筋を襲った。

ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ…

今度は、はっきりと水音までした。
ギョッとした乙は、その原因であろうカサルアを力一杯押しのけた――つもりであったが、乙の細腕では首筋から顔を離させるほどの威力しかなかった。

驚いて目を丸くしている乙に、カサルアはへらりと笑ってみせた。
その口元は、唾液でテラテラと濡れていた。開いた口からは、真っ

赤な舌先が見えた。

カサルアが、首筋を、な、舐めた…！？

そうとわかった瞬間、乙はカッと熟れた果実のように真っ赤になってしまった。

そんな乙へ追い打ちをかけるように、カサルアは乙をぎゅっと抱きしめ、頬ずりをするのだった。
まるで、猫が体を擦りつける様な仕草で…。

すりすりと繰り返し頬ずりをしながら、再びほっそりとした首筋に顔を埋めた。
そしてはぁ～と、満足げに熱い息を吐く。
首筋にかかる感覚に、乙の肌がザワザワと粟立つ。

なに、これ…。

びりびりとした甘い痺れが身体を襲った。
不思議な感覚に戸惑っている乙をよそに、何を思ったのか、今度は犬のようにクンクンと匂いをかぎはじめたのだ。

「…ッ！！！」

再びギョッとした乙は制止の声を上げようと思い口を開いたが、それは言葉にならなかった。
なぜなら、乙が言うより先に、カサルアがとんでもないことを言ってのけたから。

「キノト、いいにおい～」

うれしそうににっこりと笑いながら言うカサルアの言葉に、乙は先ほどよりもさらに顔を赤く染めた。

「なんてこと言うの～！」と、内心滂沱の涙を流しながら。

そんなことはお構いなしに、「う～ん、いいにおい～。キノトはぁ、あまいにおいがするの―」と言って、クンクンと匂いをかぎ続けるのだった。

乙は先ほどから妙に過激すぎるカサルアの行動に戸惑っていた。

それに、乙の心臓はドクドクと脈打ち、壊れてしまうのではないかというくらい激しかった。

だから何とか距離を取ろうと、ぐっと身を引いたのだが、それを咎めるかのように突然乙の白い首筋に、カプッと噛みついてきたのだ。

「ッ！！！」

息をのむ乙。

サ―と血の気が引いていくのが、傍目にもわかるほどだった。

カサルアのそれが、いくら甘噛みだとしても、人間の本能として急所である首筋をいきなり噛まれたら、誰でも恐怖せずにはいられない。

側に控えている侍女たちからすれば、２人はずっと親しげに抱擁しているように見えた。そのため、「仲がよろしいわ～」と微笑みすら浮かべていたのだ。

しかし、突然緊張し青褪めた乙を見て、何やら様子がおかしいと思ったのだ。

「…あの、キノト様？どうかなさい――」

ましたか？という言葉をカサルアが遮るように声を上げた。

「うぅぅ…。だめぇ――！キノト――！」

「「「！」」」

突然の大声に、驚く乙と侍女たち。

「イヤ――ぁあああ！はなれたくないの――！」

カサルアは、ケホケホと咳き込み、首筋に顔を埋めながら必死に訴えた。

先ほどよりも熱が上がったのか、とろけてしまいそうな程、熱い身体だった。

乙は困った様に側に控えるサオを見れば、頷きながら近寄ってきた。

「カサルア様、お辛いでしょうから、寝台にお戻りください。キノト様にも、カゼがうつってしまいますよ」

「いやぁ――！キノト、かぜ、いやぁ――！」

「ですから、カサルア様。寝台へ、お戻りを…」

「イヤ――ぁあああ！！」

何とか説得を試みるが、イヤイヤと首を振るのだった。

しかし、立っているのが辛くなってきたのか、荒い呼吸を振り返しながら、少しずつ乙に凭れかかってきた。

身体にかかる体重を乙は支えきれずに、少しよろめく。
慌ててサオが手を差し出すが、突然カサルアは「だめぇえええ――！」と叫び、乙の手を引いてあっという間に寝台へ連れて行ってしまった。

それはまるで、好きなおもちゃを取り上げられそうになった、子供の様な仕草だった。

――ポスンッ――

スプリングのきいた寝台へ、背中から跳ねるように着地した乙。
バウンドするその身体の上に、カサルアが覆いかぶさる。
乙はそのほっそりとした身体で、カサルアの全身を受け止める様な姿勢になった。

密着する身体。
熱い熱い身体。

乙の胸に顔を埋めるカサルア。
今、どのような表情をしているのかはわからない。
しかし、ぜぇ、ぜぇ、と辛そうに上下する背中は、とても寂しそうに見えた。

乙は何も言わず、そっと背中を撫でるのだった。

…心と体が一致していないカサルア。そのため、心は１０歳の時に止まってしまった。
しかし、いくら心が止まってしまったとしても、体は成長を止めなかった。
心と体は繋がっているから…。
そのため、体は少しずつ成長していくが、それは酷く遅いものだった。

だからこそ、心と体のバランスが悪く、心も体も弱かった。
些細なことで体調を悪くするし、心を病んだ。

それに今も苦しんでいる。

――体に、心に。

今も辛そうに耐えている。

――過去に、現在に。

いつかは、そのバランスを正さなければいけない。

そう、生きるためには――。

時折、ケホケホと咳き込むが、先ほどよりも落ち着いてきたようだ。
しかし覆いかぶさるように乙の上に乗っているカサルアは、何かを考えているのか、水を打ったように静かだった。
その異様な静けさに、乙は肌が震える思いがした。

すると、カサルアが耳元でポツリと呟いた。

「キノト…あまい、におい…」

乙は、まだ言うの?と、少し顔が赤くなった。
しかし、先ほどとは言葉の持つ響きが違うことに気付いた。

「…ほんとに、いいにおい。…あまい、におい」

「…」

「あまいね…。キノトはねぇ、おはなみたいなのぉ…」

「花…?」

「でもね、あのときはちがったの…あまくないし、おはなじゃなかったの…」

何かを思い出す様に、少しずつ言葉を紡いでいく。

「あのときは、へんなにおいがしたの。…あまくなかったの。おはなでもなかったのぉ…」

「カサルア…、あの時っていつのこと?私の事…?」

困惑したように問う乙。
自分のことを言っているのだろうか、それとも違う誰かのことだろうか…と考えてみたが、よくわからなかった。

「でもね、ぼくはぁ、わらったよ。だって、ひさしぶりにあったんだもん」

「…カサルア?」

「だからね、だから…、わらって、たくしゃんおはなししたの。おはなし…」

「…」

乙の問いかけは応じず、独り言のように話し続けた。
…熱に浮かされているように。

「おべんきょうのおはなしに、けんじゅつのおはなしに…。あとね、あとはね…、クロウとあそんだおはなしとかねぇ。いっぱい、いっぱい、したのぉ」
「…そぅ」
「だからね、ぼくのことは、しんぱいしにゃくていいかりゃって…」
「…うん」
「わらったの、ぼくは…。わらったんだ！」

カサルアの落ち着いていた呼吸が、話すごとに荒くなっていった。

「わらったの…、でも、でも…！いつもとちがうの、いつもと！おはなみたいだったのに、ちがうの！」
「…」
「それが、それが、イヤだったの！！」

感情が高ぶり、声を震わせた。
はぁ…、はぁ…、はぁ…、と苦しそうな呼吸とともに、起き上がるカサルア。

「あれは、ほんとうに、そうだったのかなぁ…。あれが、ほんとうに――」

どこか遠くを見る様に、スッと目を細める。

――おかあさまだったのかな。

ぼんやりと焦点の合っていない目で呟いた。

第２１話　記憶の扉（後書き）

長くなってしまったので、半分を次話にまわしました。
次回、衝撃的な展開に・・・！！

第２２話　記憶（前書き）

？章の山場です。

流血します。ご注意ください。

第２２話　記憶

――おかあさまだったのかな。

そう、ぽつりとカサルアが呟いた。

乙や侍女たちは一斉に息をのんだ。

カサルアが“おかあさま”と言った、その言葉に…！

まさか！と思ったのだ。先ほどからうわ言の様に話していたことが、カサルアの母親であるハンナ王妃の事であったとは、誰も想像だにしていなかったから…。

サオは驚愕に目を見開いて、カサルアに近寄っていった。

「…カ、カサルア、様…。あ、あの時とは、まさか…、ハンナ様が――」

ハンナ様が、ご自害なさった時のこと…。そう言おうとして、グッと口をつぐんだ。

カサルアに対しあの日の事は、全てタブーだからだ。

つらい記憶を心の中に封じ込めてしまったカサルアは、あの日に繋がる何かを感じると、記憶が混乱し感情が爆発してしまうのだ。

だから、侍女たちはそうならない様に細心の注意をしてきたが、今の様に自ら思いだしてしまったことに対しては、どうすることもできない。いやむしろ、自ら思いだすという事は、今まで一度として

なかったことなのだ！

緊張に包まれる室内。
カサルアの荒い呼吸音が不規則に木霊する。

「ほんとに、おかあさまだったのかな？…だったら、なんで、どうして、僕に“触らないで”って、“来るな”って！どうして、突き飛ばしたりしたの！！」
「カサルア！落ち着いて！」
「あぁ…、あ、アァッ――！“お前がいるせいで”って――！！」

“お前が生きているせいで”って――！！

両手で頭を抱え込み、金色の髪を振り乱す。
目は血走り、大声で叫ぶように声を荒げる。

途中からカサルアの口調が幼児のそれから、普通の話し方になっていた。

乙は何とか落ち着かせようするが、カサルアが馬乗りになっているため、ほとんど身動きが取れない。
それでも「カサルアしっかりして！」と、何とか手を伸ばす。

すると、カサルアはその手を叩き払い、叫び声をあげた。

「イヤ――！！止めてッ！！おかあさま――――！！」

怯えたように青褪めるカサルア。

そして事もあろうに、乙の首を――手に掛けたのだ！！

「！！！」

グッと細い指が首に巻き付く。

上から体重をかけ、乙のほっそりとした首に徐々に指が食い込んでいく。

側にいた侍女たちが、悲鳴を上げ、場が騒然となる。

どこかで陶器の割れる音がしたが、乙の耳には入ってこなかった。

苦しい…。

頭に血が溜まりぐつぐつと沸騰する。

視界が赤くぼやけていく。

「ハァ、ハァ…。ハハッ！！苦しい？苦しいでしょう？」

「……ゥ」

「お母様！首を絞められるのはね、とっても苦しいんだよ！！」

カサルアは、ハハハと空虚に笑う。

その瞳は熱に溺れ、狂喜に彩られていた。

「…カ…サル、……ア……」

乙は何とか声を絞り出すが、その声はカサルアには全く届いていな

い。
先ほどよりも体重をかけ、首を絞めあげる。
ぐうぅ…。
薄れそうになる意識の中。
乙は顔にぽつぽつと、冷たい何かが落ちてくるのを感じた。
何だろうと、目をあけると、カサルアの目から落ちてきているのだとわかった。
涙が…。
カサルアのまん丸に見開いたその瞳から、止まることなく涙が溢れていた。
乙は思った。
カサルアは、過去と現在を混同してしまっているのだと。
過去のあの日、母親に首を絞められて殺されそうになった時のことを…。
大好きな母親に、殺されそうになった時のことを…。
乙はそっと手を伸ばし、カサルアの頬に触れた。
哀しい涙が幾筋も流れていた。
「カ…サ……ル…ア…」
両手で優しく顔を包み込む。
ビクッとカサルアが身体を震わせた。

すると先ほどとは違った反応を見せた。

過去を見ていた瞳は、徐々に焦点をあわせていき、本来の色を取り戻していく。

表情も常のように、穏やかなものへと変化していく。

劇的な変化。

まるで、夢から覚めたかのように、パチパチと目を瞬いた。

「あ…、キ…ノ…ト…？」

そう呟いた次の瞬間――。

ドンッッ――！！

体と体がぶつかる様な衝撃音。

それと同時に、乙の首を絞めていた戒めが無くなり、一気に肺に新鮮な空気が流れ込んできた。

ゲホゲホと身体を丸めて咳き込む。

全身に酸素が行き渡るのが脈打つ血管からわかるくらいに、ドクドクと激しい激流となって身体を襲った。

乙は涙目になりながら、薄っすらと目を開いた。

すると、黒い何かが視界いっぱいに広がっていた。

それは乙を覗き込むようにしており、薄目を開けた乙へあからさま

に呆れた様な吐息をもらした。

「はぁ…、全く…。大丈夫？キノト。言ったでしょ、何かあったらすぐに呼んでって。僕は、君の陰だからって…。それに、こうも言ったよね。あのガキには気を付けろって…」

飄々とした口調で言いながら、咳き込む乙の背を優しく撫でる。
乙は涙に歪む視界で、闇の様な衣と髪と…そして、瞳を見た。

「…マー…ス…」

掠れる声で、闇の一族の一番手であり、乙の護衛をも務める彼の人の名を呼んだ。
すると、嬉しそうに目を細めた。

そう。
馬乗りになって首を絞められていた乙を助けたのは、マースだったのだ。
なので、マースから体当たりを受けたカサルアは、床に叩き落とされていた。

マースは白いシーツの上に広がる、漆黒の髪を手に取った。
そっと唇に持っていき、静かに口づけを落とす。

「キノト…、君は優しすぎるよ。どうして、抵抗しなかったのさぁ…」

囁くように言うマースの表情は苦悶に満ちていた。
乙は口を開くが、首を絞められていたせいか、声を出せなかった。

その様子にますます苦しそうに顔を歪める。
そして、乙の首筋にそっと目を落とすと――マースが目を見開いた。
乙の白く陶器の様に滑らかな首筋に、赤黒く鬱血した醜い痕が残っていたからだ。
…そしてそれは、くっきりと、指の形をしていた。

スッ―…と、マースの表情に温度がなくなる。
全身に、仄暗く冷たい闇を纏っていく。
乙は驚いてマースの闇色の衣を掴むが、マースが立ち上がった拍子にするりと手から抜けてしまった。
気配なく佇むマース。
その闇色の冷たい瞳は、少し離れたところで呆然と立ち尽くすカサルアを捉えていた。

「…カサルア殿下。１５年前の、闇の一族との約定を覚えておいでか？」
「…」
固い口調で話すマース。
カサルアは何の反応も見せない。
「私は、闇の一族の者。決議と掟に従う」
「…」
「今こそ、１５年前の、その約定を…成就させる」
「…」

乙は、坦々と感情なく述べるマースの言葉の意味がわからないでいた。
しかし話の流れから推測するに、悪い方向に向かっているのだけはわかった。

「…貴方は、目障りで邪魔だ…」

マースの地を這う様な声が響く。

「…闇の一族の一番手である、この私が、貴方を――」

狩る――！！

カッ――と、眼光を光らせた。

あっという間の出来事だった。
マースは、獲物に狙いを定める獣の如く姿勢を低くし、カサルアの元へと一気に距離を縮める。
そして、流れるような無駄のない動作で、衣の中に隠し持っていた短剣を頭上に翳した。

ご覚悟を――！！

マースが叫び、短剣を握る手に力を込めた。
それが、まさに振り下ろされる瞬間――!!

ふぁさ…、と闇夜を切り取ったかのような漆黒が、マースの視界に入りこむ。
全てがスローモーションのように見えた。

漆黒……の…髪?

ハッ!!と、絶句するマース。
そう。何を隠そう、マースとカサルアの間に飛び込んできたのは、乙だったのだ!!

乙はマースに背を向け、カサルアをその胸に抱き込んだ。

クソッ――!!

マースが気付いた時にはすでに遅く、銀色の鋭利な切っ先が、乙の背を目掛けて振り下ろされていた。
勢いがついたそれを、だれも止めることはできない。
それでも、何とか軌道をそらそうと、マースは手首を捻るが――

ザシュッ――……。

衣と肉を切り裂く音が、悲しく響く。

「！！！」

声にならぬ乙の叫び声が空気を震わせる。
反った身体の背後に、真っ赤な花弁が大輪の花を咲かせた。

――血飛沫だ。

乙はカサルアを胸に抱いたまま、崩れるように絨毯へと倒れ込んだ。

「「「キャャァアア――――！！！」」」

侍女の数多の叫び声と怒号が室内に響く。

カサルアはカタカタと小刻みに震えていた。

「…あぁ、…あ。…キ…ノト、…な、なん…で…？」

自分の身代わりになる様な事をしたのか…。
未だに乙の腕に抱かれてるカサルアは、そっと顔をあげて乙を見た。
目が合うと、何と乙は…ふわりと微笑んだのだ。

「――あ…」

その瞬間、カサルアの頭の中でずっと閉じ込めていた記憶が、一気

に脳内に溢れだした。

――あの日。お見舞いに行ったカサルアに、柔らかく微笑んだ母親の姿。

――突然叫び声をあげて、カサルアを突き飛ばした母親。

――憎しみに彩られた表情で『お前さえ生まれてこなければ』と呪いの言葉を吐いた母親。

――カサルアの首を絞め、短剣で突き刺そうとした母親。

そして…。

――最後にふわりと頬笑み、短剣で自らの首を掻き切って自害をした、血まみれの母親。

忘れたくて蓋をしていた記憶。

衝撃的な映像に頭が付いていかない。

しかし、一部の冷静な思考回路で、わかったことがあった。

お母様は、すでに、死んでいる…。

過去の再現の様な今の光景。

ガンガンと内側から金槌で叩かれている様な、鋭い痛みで目の前が霞んでいく。

カサルアは青褪めながら、意識を失ってしまった乙を掻き抱いた。

その背中からは止め処なく、温かい血が流れ出ていた。

…ご、ごめんなさい、キノト。
こんな僕を…！！

カサルアは目を瞑りながら、懺悔するように胸の中で囁いた。

キノト…。
ごめん……。
ごめんね……。
僕が、現実を、受け入れていたら…。
こんなことには…。

自然と涙が溢れてきた。
それは洪水のように頬から流れ落ち、真っ赤な血の中へ落ちていった。

「キノト…、キノト。……キノト――――ッ！！！」

カサルアは叫んだ。
喉が潰れるほどに…。

その慟哭は、王宮を揺るがすほどだった。

第２２話　記憶（後書き）

きのとちゃんの命はいかに・・・？

話題を変えまして！

祝４０万ＰＶとなりました～！！これも、今まで支えて下さいました皆様のおかげです！！

ありがとうございます！！

・・・ということで、恒例になりつつありますが！「イラスト集」に新しくイラストをアップいたしました♪

興味がある方は、ぜひお立ち寄りください！！

これからも、よろしくお願いします＞（＿　＿）＜

第２３話　神の意志（前書き）

本年一発目です。
今年もどうぞよろしくお願いいたします。

第２３話　神の意志

「首の痣は１週間ほどで消えるでしょう。喉も数日もすれば絞め付けられる様な違和感もなくなり、声も普段通り出せると思われます」

乙を診察した宮廷女医のサレアが、坦々と述べる。

その報告を聞くのは、錚々たる面々だ。

ルドルフ国王にクロウリィ殿下、トトゥロ大神官長にニース神官長、そしてルシカ第一神官。

良い報告に、ほっと息をついた一同だった。

しかし、「ただ…」と付け加えたサレアの言葉に、皆表情を固くした。

「…背の傷は深く、完治には１か月ほどかかります。ですが、以前と変わらずに生活することが可能です」

皆の表情が曇る。

サレアは浅く吐息をつき、少し目を伏せながら言葉を続けた。

「…そして、誠に残念ですが…。…背には、傷が、残ってしまうと…思われます」

「「「！！！」」」

はっと息を飲む音が室内に響く。

背に傷が残るだと…？

女性の体に傷。
それは、なんて…。

ルドルフは顔を苦渋に歪めながら問う。

「サレア。…何とか、何とかならんか?神官等の“力”を使って、治癒を施してもだめなのか?」
「陛下…。残念ですが、傷が深すぎます。“力”を使ったとしても…」

その言葉に一同は落胆する。

クロウリィは掌に顔を埋め、昨日の出来事を思い出していた。

＊＊＊

その日、クロウリィは珍しく、王宮の裏手にある王陵墓に来ていた。
そこは1年中絶えることなく美しい花々が咲き誇り、常世とは思えぬ世界が広がっている幻想的な空間だ。
それでいて、酷く静かな場所でもあった。

クロウリィは、ある石碑の前に佇んでいた。
何をするでもなく、ただぼんやりと…自らの母親の墓の前に。

クロウリィの母親は、彼が3歳の時に亡くなっている。
そのため、母親の記憶はほとんどなかった。

…それでも、母親という存在は心の奥底に温かい光として存在している。

サ―…と心地よい風が通り過ぎる。
クロウリィの金糸の髪が揺れる。
襟足だけ伸ばした髪の束が、視界に入り込む。

フン…。
何を女々しく感傷に浸っているんだか…。

自嘲するように鼻を鳴らす。
そして踵を返し、来た道を戻る為に背を向けて歩きだしたが、数歩も行かないうちに足を止めた。

王宮から微かに叫び声が聞こえた様な気がしたからだ。

耳をそばだてるがそれ以降は何も聞こえてはこなかった。
背に厭な汗が伝う。
口をグッと引き結び、再び歩き出そうとした時、前方から侍女が駆けてきた。
スカートの裾が捲れ上がるのもそのままに、叫びながらクロウリィの元へと向かってくる。

「クロウリィ殿下――!!カサルア殿下が――!!」

その言葉を聞いた瞬間、クロウリィは走り出した。
カサルアの元へ…。

カサルアの居室に辿りついた時、クロウリィは常と違う様子に眉をひそめた。
侍女の様子からして、カサルアが発狂して手がつけられない状態になっており、クロウリィに助けを求めに来たのだと、そう思っていたからだ。
しかし、部屋は異様に静かなのだ。

…カサルアは発狂していないのだろうか？

不審に思いつつも足を止めず、どかどかと寝室へ入っていった。

そして…。
クロウリィは息を飲んだ。
目前に広がる光景に――！

緋色の絨毯を己の背から流れ出る鮮血で赤黒く染めた――乙が横たわっていたのだ！

…それからはあっという間の出来事だった。

背中をざっくりと切られ、止め処なく鮮血が流れる乙の背中を、傍らにいるマースが素早く止血を施した。
マースは自らを覆う闇色の衣を脱ぎ捨て、乙の体にそれをきつく巻きつけた。
そして素早くカサルアの寝台に乙を乗せ、体勢を楽にさせる。

そうこうしているうちに、宮廷女医のサレアが到着し、寝台に駆け寄って乙に処置を施していった。
サレアは乙の傷に動じることなく、助手や侍女へ的確な指示を飛ばす。

クロウリィはというと、あまりの衝撃に足に根が生えた様に突っ立っていた。
そして気付いた時には、寝室から連れ出されてしまっていた。

しばらくクロウリィが呆然と扉の前に立っていると、慌てた様子でニースとルシカがやってきた。
ニースは扉の前でサレアの助手と何事かを話し、そのまま滑るように部屋へと入っていった。それにルシカも続こうとしたが、鼻先で無情にも扉を閉められてしまった。
ルシカは必死に助手に中に入れるように追い縋ったが、難しい顔で否定されてしまった。

…ルシカは神官だ。
だからこそ、処置中の乙へ“力”を注ぎ、その手助けをするためにニースとともにやってきたのだ。
しかし、乙は神の子である。
そのため、そうそう人に肌を見せることなどしていいはずがない。
特に男性には…。
だからこそ、神官であろうとも、神官長であるニースしか入室が許されなかったのだ。

ギリッと音が聞こえそうな程、唇を噛むルシカ。
温厚なルシカには珍しいほど、その表情は苦渋に満ちていた。
そしてそれは、クロウリィも一緒だった。

一目でも会いたい――。

その思いが苦しいほどに胸を締め付けた。

その後、ルドルフやトトゥロが到着し、皆が固唾を飲んでサレアの処置を待ったのだ。

そして、いつの間にか日が暮れ、夜となり、朝となった。

長い時間、皆が祈るように待った。

そしてようやく、寝室から出てきたサレアから容体を聞いたのだ。

＊＊＊

クロウリィは掌に埋めていた顔を上げた。

寝室から乙付きの侍女が出てきたからだ。

「キノト様の意識が戻られました」

その言葉に皆がほっと息をついた。

寝室に移動すると、寝台にうつ伏せに横たわる乙がいた。

しかし寝台には紗の天幕が張られており、皆からは良く見えないようになっていた。

乙は伏せていた顔を静かに皆の方へ向けた。

夜闇を纏ったかのような漆黒色の双眸は、常ならば知的で優しい光を宿しているのだが、今はどこかぼんやりとけぶった様な瞳をしていた。
それは、未だに夢か現かを彷徨っている様な、そんな瞳だった。

ルドルフは乙の寝台に近寄ったものの、用意されていた椅子には座らず、突然膝をついて首を垂れた。そして、ルドルフに続くように、クロウリィやトトゥロ、ニースにルシカ、全員がそれに倣ったのだ！

「！！」

驚いた乙は大きな目をさらに大きく瞠った。

「…キノト様。…あぁ、神の愛し子である貴女様を、危険な目にあわせてしまっただけでなく、さらに御身に傷を付けてしまいました。…本当に、申し訳ありませんでした。如何なる咎も受け入れる所存であります」

ルドルフは沈痛な面持ちで言葉を紡ぎ、垂れた首を絨毯に押し付けた。
それに続く様に、皆がルドルフに倣った。
…いわゆる土下座というものだった。

「…ッ！！」

乙は突然のことに、息が詰まった。

そう。
いくら乙が、この世界リリーネルシアの創造主にして唯一の神、至高神ホロの愛し子だとしても、乙自身は自らが神の次に尊いという、

その意味するところをよく理解してはいなかった。
まぁ、それも無理はない。
今まで身分制度も何もない、四民平等という世で生きてきたのだ。
それがこの世界に降り立った途端、傅かれる環境におかれ、さらには神の如く敬われる立場となってしまったのだから。
自身が神の愛し子だということを頭では理解しているが、当然の様に皆に傅かれ敬われることに耐えることはできなかった。
だからこそ、皆が乙の願いを聞き入れ、なるべく普通に接してくれているのだ。

…それなのに、今のこの状況はどういうことだろうか。
この国の君主であるルドルフやこの国の中央神殿の大神官長であるトトゥロなど、錚々たる面々が頭を地に付け乙に跪いているのだから…！
乙が、戸惑わないわけがない。

こういった場面で、乙は自身の立場がいかに上位に位置しているのかを、まざまざと実感してしまった。
乙は、心がスッと冷えていくのがわかった。

無言で断罪される罪人のごとく緊張し、息をひそめる面々。

乙は震える唇を何とか動かした。

「…や、やめて、くだ、さい」

酷く掠れた弱々しい声が室内に響く。

「…本当に、顔を…。もう、もう…やめて、…ッ！」

漆黒の瞳からツ―…と一筋の涙があふれた。
それは止め処もなく次から次へと溢れてきた。
まるで、清らかに湧き出る泉の様で…徐々に真っ白い枕を濡らしていった。

乙の制止の声にルドルフらは、地につけていた顔を少し上げた。
しかし声なく涙を流す乙を眼の端にとらえながらも、決して視線を上げることはなかった。
ただただ、首を垂れるだけだった。

「…もう、やめて。…お願いだから、もう…やめて」

懇願する様に「やめて…」と繰り返す乙。
ルドルフは表情を引き締めながら、口を開いた。

「…貴女様を危険に巻き込んでしまった我々に、断罪を――」
「……だんざい」

乙は呆然とその言葉の意味を咀嚼した。

断罪。
それは言葉の通り、罪に対して判決を下すこと――。

その瞬間、乙の体が震えた。

「なぜ…！なぜ、私が!?皆さんは、何も悪くないのに?罪って…なぜ?なぜなの!!」

混乱した乙は叫ぶように問うた。

「どうして？なぜなの？…誰も、何も悪くないのに！」
「…いいえ。…我等は、尊い御身を死の危険にさらしてしまったのです。…裁かれるべきなのです」
「…ッ！…違う、違う！だって、だれも悪くない！…怪我をしたのだって、私の意志だもの！…あの時、私は私の意志で、カサルアを助けようと！だから、誰も悪くないし、誰かを裁く気も、私には、全くありません！！」
「…」

そうなのだ。
マースがカサルアを殺すために短剣を振り上げた時、カサルアを守るために飛び込んでいったのは、他でもない乙自身の意志だ。
カサルアを守りたい、その一心だった。

だから、怪我を負ったのは、誰の責任でもないのだ。
むしろ無謀にも飛び出していった、乙自身の責任なのだ。

「裁く気はありません！！」

ハアハアと荒い息を吐きながら、乙は強い口調で言った。
シン――と、痛いほどの沈黙が室内を重く支配した。

そしてルドルフが、「わかりました…」と吐息を吐きだすように言った。

「わかりました…我々については、わかりました。…では、カサルアとマースの処遇については、いかがいたしましょうか」

乙は目を見開いた。
何と今度は、実際に怪我をするに至った原因でもある、カサルアと

マースについてはどうするのだと言ってきたのだ。

「…ふ、2人とも、何も悪くはないのだから！何も、何も！！」

そう叫ぶと、際限なく涙が溢れてきた。

乙は耐えられなくなり枕に顔を埋めた。

嗚咽をかみ殺すように身体を震わせる乙に、誰も断罪なさらないのかと、言い募ろうとルドルフが口を開きかけたが、トトゥロがそれを制した。

静かに顔を振るトトゥロ。

「それが、キノト様のご意志です…」

本人が何もしない、誰も裁かないというのだから…。

ルドルフとトトゥロは、互いにじっと瞳を交わした。

しばらくして、根負けしたかのように目をそらしたルドルフは、乙に言った。

――お心のままに。

その言葉を聞いて乙は、本格的に泣き出した。

とても、怖かったのだ。

自身の価値の尊さが…。

そして、乙の判断によって、簡単に人の命すら奪えることが…。
すごく、すごく…。

真っ青になり体を震わせた乙は、それでも…と、思ったのだ。
カサルアを守るために無謀にも飛びこんだことも、それにより多くの人たちに迷惑をかけていることも——何ひとつ後悔はなかった。
だって私には、心に決めたことがあったから…。

とても無力で何もできない小さな自分。
こんなにも小さいから、私の世界はとても小さい。

手の届く範囲——
目で見える範囲——
耳で聞こえる範囲——
全てが小さい。

…小さい。

それでも、見失わないようにしたいと…。
小さい私の世界に入ったものだけでも、守りたいと…。

そう思ったのだ。

…だから後悔なんてないのだ。

そう、後悔なんて――。

例え、自分の命を失ったとしても……。

◆◆◆

夜が深まり人も草木も寝静まった頃、乙はうっすらと瞼をあげた。
麻酔が切れてきたのか、傷がじくじくと痛み出したのだ。

クッと出そうになる悲鳴をかみ殺す。

寝室には乙以外に人はいなかった。
というのも、部屋から出るようにと言ったのだ――乙の命令で…。
今はだれにも会いたくなかったのだ。
しかし、控えている侍女に乙の呻き声が聞こえでもしたら、すぐにでも寝室に飛んできてしまうので、乙は必死に耐えた。

人知れず呻いていると、突然部屋の隅から闇そのものが動いたように、乙に近寄ってきた。

月明かりに照らされたそれは――マースだった！

「マース！？」

思わず叫びそうになった乙は慌てて口を噤んだ。
マースは音も無くその場に跪き首を垂れた。

「マース…？」
「…キノト…。守るって、言ったのに…。ごめん…。ごめん…」
「マース…。やめて、お願いだから…。マースのせいじゃない、せいじゃないよ」
「…いや、君を危険な目に…。…むしろ、殺してしまうところ――」
「違うよ！」

マースの言葉を遮り、乙は言った。

「私が、飛び込んでいったんだから、誰のせいでもない。…それに、お医者さんが言ってたの。短剣を振り下ろす際に、軌道をそらしたようだって。じゃなきゃ、もっと傷は深く、大変なことになっていたって…」
「…それは――」
「だからね。マースが、私を、守ってくれたんだよ」
「…でも――」
「ううん。マースが守ってくれたの」

ふわりと、まるで春の穏やかな木漏れ日の様に微笑んだ乙。
優しく包み込むようなそれは、マースの暗然とした心に一筋の光の様に輝いた。

泣きそうに顔が歪むマースに、乙は言葉を続けた。

「それに、マースは、前に言ってくれてたよね…。“注意して”って…。あの時はわからなかったけど、今になって思えば、このことを言ってたんだよね」
「…」
「マースはずっと前から、私を守ろうとしてくれてた」

「…」

「…ありがとう、マース」

マースは弾かれた様に顔を上げた。

ありがとう…。

その言葉はマースの胸に強く響いた。

何しろ、自然と涙さえも溢れてきたのだから…。

闇の一族である自分。

任務は成功させなければならない。失敗などという言葉は存在しない。

それなのに、乙を守ると言っておきながら、己の剣で傷付けてしまったのだ。

…大失敗もいいところだ。

だからこそ、任務失敗の咎と乙への贖罪の意味も込めて、自らの命を絶つこととしたのだ。闇の一族の長もまた、それが適当だという判断を下した。

そしていざ、短剣で己を貫こうとした時…それができなかったのだ。

何度首を刎ねようとしても、切っ先が喉に触れる一歩手前でなぜか止まってしまうのだ。

…まるで、大きな力で止められているかのような、不思議な感覚だった。

長もこれはおかしいと思った様で、少し考えていたが、いきなり“力”を使ってみろと言ったのだ。

マースは、言われるままに“力”を出した。
再び長は考え込んでいたが、唐突に「おかしい」と言ったのだ。

「神の愛し子を傷つけておきながら、なぜ未だにお前は神に通ずる“力”を使えるのだ」と…。

そうなのだ。
普通であれば、乙を傷つけた時点でマースは、この地上から跡形もなく消えていて可笑しくないのだ。
…神によって。
しかし、マースは未だに生きており“力”さえも使える。
これはいったいどういうことなのか…。

「もしかしたら…。全て、神の愛し子の采配次第、ということなのだろうか…」

長は脱力したように言った。

…それが、神の意志なのだろうと。

決断を下すのは、神ではなく、乙自身だということ。
それを神は尊重するということ。

でなければ、説明などできない。
神の愛し子である乙を傷つけておきながら、マースが未だに生きていることが。そして何より、この国そのものが未だに存在していることが…！

数ある国の中で、神はワーグナー国に乙を任せたのだ。
その乙を守るはずの国が、逆に御身を傷つけてしまったとしたら―
―国自体が世界から消えていても何らおかしくはないのだ。しかし、
未だに国は存在している。
このことからもわかるように、神はこの件に関して全く関知してい
ないということになる。

全ては、乙の意思次第だと…！

幾筋もの涙がマースの頬を濡らしていった。
乙は心配そうに「マース…」と囁いた。

「マース…、大丈夫？…どこか、痛いの？」
「…いいや、そうじゃ…。うん、そうかも。……嬉しすぎて、胸が
痛いよ」
「嬉しくて、胸が痛いの？…何それ？変なマース」

クスクスと鈴が転がる様に笑う乙。
その柔らかな笑顔を眩しそうに見るマース。

「…キノト、お願いがあるんだ」
「何？」
「キノトのために“力”を使いたいんだ。…キノトの、背の傷を、
僕が治したいんだ」
「え？マースが？」
「そう。だから…、僕に、治癒させてくれないか！」

懇願するマース。

その必死な様子に、乙は目を丸くしながらも、コクンと小さくうなずいた。

「…うん、ありがとう」

その言葉を聞いて、マースはいよいよ本格的に泣き出してしまった。
一度としてその暗褐色の瞳から、流れ出たことはなかった涙。
それがどうしたことか、次から次へと溢れてくる。

どうしたら止まるのだろうか…。

マースは混乱しながら必死に涙を拭うが、それをあざ笑うかのようにぼたぼたと顎を伝って、緋色の絨毯に大きな染みを作っていった。

一向に止まりそうにない涙に、マースが助けを求める様に、赤く腫れた目で乙を仰ぎ見る。
すると優しい笑顔で乙は言った。

そういう時は、思いっきり泣くんだよ。
そうしたら、自然に止まるから。

そっとマースに向けて手を差し出した。
こっちにおいでという様に――。

マースは飛び付くようにその手を取った。
月夜に照らされた青白い乙の掌に顔を押し付け、泣いた。

夢中で口づけながら――。

強く強く。

神の意志。
それは、乙の意志であると同時に、総じて神の意志でもある。
神は、乙の意志を尊重しているのだ。

それが、例えどんな結果になろうとも――。
例え愛しき我が子が、死に絶えようとも――。

それこそが、神の意志なのだ。

＝＝＝

第２３話　神の意志（後書き）

マースと乙ちゃんは、「日常と友人３」話にてこの時のお話をしています。
じわじわと、乙ちゃんの立場が…！
キャラクター投票も始めてみましたので、どうぞ投票にご協力ください！

また、みてみん様のほうで、今「コラボ侍」という有志企画に参加しております。
その中で「竹千代」というキャラクターを生み出しました。そして早村様の手によって「コラボ侍」が小説化されました！ぜひ、小説を覗いてみて下さい！
花垣も近々、竹千代をメインに小説を書きたいと思っています～。
詳しくは、活動報告をご覧ください！

第２４話　終わる連鎖１

王宮のとある一室。
重苦しい空気が場を支配していた。

１つの机を向かい合うように、３人が座っている。
…ルドルフ国王と闇の一族の長ザイン、そしてマースである。

ルドルフは机に両肘をつき、口の前で両手を組んでいる。
その強張った表情からも、話し合いがとうてい和やかではないことがうかがえる。

「では、ザイン…始めてくれ」
「はい」

神妙に頷くザインは、そっと遠くを見る様に目を細めた。
すると目元にある皺がより深く刻まれた。

「…１５年前。もう、１５年も前になります。あの約定が結ばれて…」
「…あぁ」

あの約定――意味することは１つだった。

「始まりは、宰相が我等を謀ったことでしたな。…その制裁として我等、闇の一族は“宰相の命を狩る”という決議をとりました。…

しかし、姑息なことに自害をなさった」
「…あぁ」
「ですから、我等は次に“宰相の血族の者の手によって、血族の過ちを正す”という決議をとったのです」
「…」
ザインは1つ1つ過去を振り返るように話していく。
「そうです。それは正しく、ハンナ王妃の手で、カサルア殿下を殺すこと…。しかし、困ったことに、またもや自害をなさった」
「…」
ルドルフは無言で聞いていた。
顔はいたって平時のままだったが、心の中は荒れ狂う海の様に、大いに乱れていた。
後悔の念で――！
…あの時、ハンナには何もしてやれなかった！
…ハンナが辛い時に何もしてやることができなかった！
王という立場上、その時ハンナを助けることなどできなかったのだ。
古より脈々と続く、闇の一族との信頼関係から、その決議に対して否ということはできなかったのだ。
ルドルフは、感情を押し殺すように目を閉じる。
そんな様子を慮ってか、ザインは話を途切れさせた。心配そうにルドルフをうかがうザインに、話を続けよ…と、先を促した。

「…はい、では。…ハンナ王妃の自害によって、またもや約束が破られました」
「…」
「よって、我等は宣言通り、宰相の一族やそれに仕えしものを、狩ろうといたしました。…しかし、陛下が“待った”をかけたのです」
「…そうだ」
「陛下が、そこまでおっしゃるのならばと…。我等も手を引いたのです。…しかしその血族の子に、いつの日にか罪を償っていただけるのならばと…。そうです――」

――我らが、邪魔だと感じた時に“カサルア”殿下を狩ります、と。

「…約定を結んだのです。…そうでございましたな、陛下」
「……あぁ、そうだ」

ルドルフは固い口調で是と答えた。

――15年前に結んだ約定。
それを結んだからと言って、カサルアがすぐに殺されるというのではなかった。しかし、彼らが邪魔だと判断した時に、問答無用で殺されてしまうのだ。
…しかもそれが、何時になるかはわからない。
普通の精神状態だったら、果たして今まで持ったかどうか怪しいものだった。ある意味、カサルアが心を閉ざしてしまったからこそ、今まで生きてこられたと言っても過言ではなかった…。

ルドルフは、そっと瞳を開きザインを見た。
それで…と、再び先を促した。

その眼光は鋭く、抜き身の刃の様な鋭さを持っていた。

「…。はい、そしてこの度“今がその時”と、こちらに控えておりますものが、カサルア殿下を狩ろうといたしました。しかし、神の愛し子であられるキノト様が、その御身をもって阻まれました」

「…」

「…我等にとっても、思いもよらぬこと…。…これほどまでに尊い犠牲を、出してしまうなどと…」

「あぁ…。これは、内輪のこと。…神の子ともあろう方が、犠牲になるべきではなかった」

「はい、それはもう…」

ルドルフとザインは悲痛に顔を歪めた。

ザインの後ろで微動だにせず控えていたマースは、人知れず唇を噛んだ。

「…神の子、御自ら止めに入ったこと。…これを尊重しないわけにはまいりません」

「…というと」

「はい。これにて、我等、闇の一族が約定、成就せり…ということです」

ハッとルドルフは息を飲んだ。

「ということは、つまりは…。カサルアは…？」

勢い余って身を乗り出す様に聞けば、ザインは少しだけ目を伏せた。

「もちろん、何も。…キノト様がお救いになった命です。その命を、なぜ我等ごとき只人が、奪うことができましょうや」

「…ッ！」

ルドルフは目を見張り、顔を歪ませた。
よく見ると、ザインも同じ顔をしていた。

これまでずっと続いてきた、負の連鎖が、ようやく終わろうというのだから…。
ザインは息を吐き出しながら言った。

「…それに、陛下。我等は、カサルア殿下の心を狩りましたゆえ。…殻に閉じこもっていたその心を。だから、もう良いのです。…終わったのですよ」

その瞬間、フッと身体が軽くなり何かから解き放たれた様な、心地よい解放感が全身に広がった。それはこの場にいるルドルフやザインだけではなく、１５年前の事件に関わった全ての者たちが同時にそう感じたのだ。

…終わったのだと。

なぜ皆が一様に感じたのかは、わからない。だか１５年間、終わらない負の連鎖に、皆が知らぬうちに身体を縛られ、いつしか雁字搦めにされていたのだ。
しかし、その鎖が断ち切られた…。
不思議と感じ、共鳴したのかもしれない。

皆がほうっと息をついた。

…ようやく終わったのだと。

しかし、本当の真実を知るものは数人しかいない。
負の連鎖が、神の愛し子たる尊い方――乙の犠牲によって終わったことを…。

「終わったのだな…」
「はい、終わったのです。…つきましては、２つほど陛下に御報告があります」
「…何だ」
ほっとした余韻に浸る間もなく、ザインは坦々と次の報告を始めた。
「はい。１つ目は、こちらに控える者をキノト様付きの護衛から降ろしまして、その任を別の者に…。また、キノト様の警護はさらに人員を増やし、厳重にいたします」
ザインがちらりとマースに目配せすれば、そっとルドルフに頭を下げた。

実は、この移動はマースの希望でもあった。
乙を守れなかったばかりか、傷付けてしまった…。マースはずっとこのことを悔いていたのだ。いくら乙が『自分が悪い』と言っても、傷付けてしまったことには変わりないのだから…。
不甲斐ない自分では不適格だと…。

ルドルフは、目を伏せるマースの暗褐色の瞳を見つめた。
ルドルフは何か言おうと思ったが、口を開いただけですぐに閉じてしまった。
なぜなら、マースの何の表情も浮かばない、底なしの闇の様なそれ

は、もう意志を固めていたから…。

「…そうか、あいわかった」

ルドルフはじっとその瞳を見ながら了承すれば、マースはその視線から逃げるように瞳を閉じた。

…自分を見つめる瞳が、本当にいいのかと問うているように思えたからだ。

「…陛下。そしてもう1つ」

「…申してみよ」

ザインは、そんな2人をちらりと見やりながら、表情を固くした。

「…実は、キノト様が、…“力”をお使いになられたかも…しれません」

「何!!!」

ルドルフは突然の報告に、思わず声を上げた。

まさか、乙の“力”についての報告を聞くとは、思ってもいなかったからだ!

ルドルフが驚くのも無理はない。

ザインとて、その報告を聞いた時には、にわかに信じられなかったのだから…。

なぜなら乙は神の愛し子でありながら、今まで一度として、至高神ホロの力の片鱗である“木火土金水”の“力”を扱うことができないでいたのだ。だからこそ、乙に特別授業と称して、“力”を扱うための訓練を受けさせていたが、良い報告は受けていなかった。

それなのに、一度も使えたことのない“力”を使ったというのだか

ら、驚かないはずはない。

「それで、いつ、どこで？」

「…はい。実は…、カサルア殿下をかばわれた時、だそうで…」

「？」

「あの時、キノト様はこの者の背後におり、多少離れた場所にいたということですが…いざ、短剣を振り下ろそうとした時には、キノト様が2人の間に、突然、入り込んできたというのです」

「どういうことだ…」

困惑したようにルドルフは問う。

「えぇ、つまりは…遠いところにおられたはずなのに、瞬間的に、2人の間に移動された…ということかと…」

「何！！そんなことが――」

出来るのか…と、呆然と呟いた。

瞬間的に移動する。

…その様なことが果たしてできるのだろうか。

長らくある歴史の中で、誰か1人でもその様な摩訶不思議な“力”が扱えたものがいただろうか。

…いや、いない。正史にはその様な記録など残っていない。

目を見開くルドルフに、ザインは力なく言った。

「それこそ、天下に比類なき、神の愛し子たる御方の“力”…。その“力”の片鱗なのでしょう…」

一度は和んだ空気も一気に重苦しいものへと変わってしまった。
乙の未知なる“力”。
人智をも超える“力”。
それは、この世界にとって正か悪か…。

「…いずれ、嵐が来る」

ルドルフは、ぽつりとつぶやいた。
その言葉は、たゆたう水の波紋の如く室内に響いて消えていった。

◆◆◆

「キノト、大丈夫？傷、いたい？」
「大丈夫だよ。傷もほとんどふさがったみたいだから」

乙が安心させるように言うと、カサルアは嬉しい様な悲しい様な、複雑な顔をした。

ここは乙の王宮にある居室。
あの事件から1週間がたち、面会謝絶が無くなったのと同時に自室に戻ってきたのだ。
すると、それを聞いたカサルアがすぐに飛んできたのだ。

「キノト…ごめんね。ごめんね。…僕のせいで」
「…カサルア。もういいの、もういいから謝らないで。…ね？」

乙はベッドから上体を起こし、顔を歪めるカサルアの頭にそっと手を伸ばす。
肩口できれいに切り揃えられている金色の髪は、さらさらとした手触りでとても気持ちがよかった。
乙は微笑みながら、何度も何度も手で梳く様に撫でた。
カサルアは気持ちよさそうに目を細めながら、どこか眩しげに乙を見ていた。

しばらくして、ぽつぽつと言葉を紡ぎ出した。

「…キノト」
「ん？」
「…キノト」
「なぁに？」
「…うん。あのね…、僕は…、僕は、心のどこかで…わかっていたのかも」
「うん」

「…お母様が、死んでいるって、ことを」

カサルアは、フッと息を吐きだす。

「…わかっていたけど、信じたくなかった。…うん、信じたくなかったんだ」
「…カサルア」
「だから、忘れようと…心の奥底でふたをした。…でも、時々そのふたが取れちゃうんだ。…それで、とっても怖くなって、よくわか

らなくなっちゃうんだ…」

「…うん。怖いよね、怖かったよね」

何度か目にしたことのある、カサルアの発狂は乙が想っていた通りだった。それは、目の前で母親が死んでしまった、あの時の恐怖を思い出したが故のものだったのだ…。

カサルアは今にも倒れそうなほど顔を青褪め、微かに震えていた。しかし、それでも話を止めることはなかった。乙は、カサルアの強い意志を感じていた。

…10歳の時にふたをした記憶。

…そして止まった時間。

カサルアは、勇気を出してその歪められた時を、今まさに動き出そうとしている。

自らの力で再び歩み出そうとしているのだ…。

カサルアは血の気の引いた顔をしていた。

それでも、肥沃な大地を思わせる柔らかな色彩を帯びる茶色の瞳は、真っすぐに乙を捉えていた。

「キノト…」

そっと囁く。

「ありがとう…」

たくさんの思いが詰まったありがとうを――万感の思いを込めて。

躊躇うことなくぶつかってきてくれたことも――
自身を危険にさらしながらも守ってくれたことも――
そして…大きな愛で包み込んでくれたことも――

全てに。
乙がしてくれた、すべてに――

――ありがとう

乙は知らず、漆黒の瞳から一雫の涙を流した。

あぁ…、カサルアは、一歩踏み出したんだ…。

そう思うと身の内から熱いものが込み上げてきた。
はぁ…と、熱い息を吐き出しながら乙は言った。

「うん…」

柔らかい陽光が2人を包み込む。
輝くような光の中でどちらからともなく近付き、そっと抱きしめあった。

互いの温もりを感じながら…。
しっかりと…。

＝＝＝

第２４話　終わる連鎖１（後書き）

ごめんなさい！書いていたら８千字超えてしまったので、２つに分けました；；
明日更新します！
マースと乙ちゃんのからみ～！次回必ず！必ずです！！

第２５話　終わる連鎖２

乙とカサルアはそっと抱きしめあっていた。

どのくらいそうしていたか。

相手がまるで自分の一部であるかのような、そんな気がしていた頃…コンコンと、扉をノックする音が聞こえてきた。

「キノト、怪我は――。おっと…、お邪魔だったかな…？」

柔らかく深みのある声に、からかう様な響きを乗せながら登場したのは…

「「ミハ！」」

２人はまるで図ったかのように、息ぴったりに驚きの声を上げると、ミハは口の端を上げて軽快な笑い声をあげた。

ククククッと肩を震わせるように笑うので、ミハの朱い髪は陽光の光も相まって燃える炎の様に輝いて見えた。

カサルアはサッと乙から離れ、恥ずかしそうに顔を真っ赤にしてミハを睨んだ。

「か、からかわないで…よ！」

「ククククッ…。いえ、からかってなどいませんよ？…しかし、驚きました。カサルア殿下は、手がお早いようで…」

「な、な、なに言って！」
「いえ、言葉を間違えました。…大変仲がよろしいようなので。羨ましい限りです」
「～～～！！何おぉぉお！！」

楽しげなやり取りが2人の間でテンポよく繰り広げられていく。
見ている分には楽しいが、完全に遊ばれているカサルアにとってはたまったものではなかった。
先ほどよりもさらに真っ赤に染まったカサルアの顔を見て、乙は助け船を出した。

「え～と、ミハ？ミハは、私のお見舞いに来てくれたんじゃないの？」
「ん？あぁ、そうだったそうだった」
「もう…」
「ハハ、そう怒らないでくれよ。…それで、傷の方は…。その様子を見る限りでは、良いようだな」

安堵したようにフッと微笑んだ。

「ええ、とっても。それに、ニースが毎日治癒をしてくれるから、治りも早いみたい」
「あぁ、ニースからも聞いている…“とても”治りが早いって」
「…ッ」

乙の胸がドキリッと音を立てた。

そう。
傷を負った日からニースが毎日の様に、乙の元を訪れては“力”を使って治癒をしているのだ。

毎日欠かさず、長い時間をかけて。
だが例え、優秀な神官長であるニースが毎日長い時間をかけて治癒を行ったとしても、ここまでの回復は驚くべきことだった。医師の見立てでは、“力”を使って1か月程で完治すると言っていたのだが、あれから1週間しかたっていないのにも拘らず、乙の背の傷は殆ど塞がっているのだ。
これには医師もニースも首を傾げていた。…いや、ニースはわかっていただろう。自分以外の誰かが、“力”を使って治癒をしていることに…。
それでも、ニースは何も言わずそっと穏やかに微笑むだけだった。
乙はその笑顔に申し訳なさを感じていたが、乙を治癒している“その誰か”から『内緒にしてほしい』と言われていたので、話すことはできなかったのだ。

乙はミハに曖昧に笑いながら、あの夜のことを思い出していた。

＊＊＊

…あの夜。
背に深い傷を負った乙のもとを訪ねてきたマースは、何度も何度も謝罪した。
そしてマースは『キノトのために“力”を使いたいんだ。…キノトの、背の傷を、僕が治したいんだ』と、言った。その懇願する様な眼差しに驚きつつも乙が頷くと、どうしたことか、マースは涙してしまったのだ。
止め処なく流れる涙。

手の甲でごしごしと拭うものだから、真っ赤に目を腫らしていた。
いつまでも流れ続ける涙に困惑し、助けを求めるマースに、乙がそっと手を差し出すと、飛び付く様に掌を取った。
…顔に押し付け、何度も何度も口づけながら。

しばらく泣き続けるマースを見ていた乙だったが、徐々に胸が苦しくなってきた。
身体を丸くし、震え、涙を流すその姿を見て…。

だから、それは無意識だった。もう片方の掌をマースの頬に、そっと添えたのは…。
マースの涙にぬれる頬はヒヤリと冷たかった。
乙が包み込み温めるように撫でると、マースはハッとしたように顔を上げた。

乙の漆黒色の瞳とマースの暗褐色の瞳が緩やかに交差した。

その瞬間…。
ザッ！と勢いよく立ちあがったマースは、そのままの勢いで寝台に乗りあがり、乙を押し倒したのだ！
マースは乙の手首を取り、寝台に縫い付け、肢体を密着させ覆いかぶさるように体重をかけた。

はっと息を飲む乙。

乙は仰向けに力任せに押し倒され、傷ついた背に痛みが走り悲鳴を上げた。しかし、素早くマースがその悲鳴を飲みこむように、乙の

唇を自身の唇で塞いだ。

乱暴に唇を合わせ、舌を絡め取る。
声も喘ぎも吐息すら奪う様に、強く激しく。

唇を合わせ月夜に照らされる2人は、さながら1つの生き物の様に蠢いていた。
真っ白のシーツの上に、乙の漆黒の髪が無造作に散らばり、その白い素肌は月光に映え青白く輝き、艶めかしくその存在を主張していた。対するマースも暗褐色のうねる髪に、日にあたったことがない様な病的な白さの肌が、夜陰にて強調されていた。

白と黒のコントラスト。
似た様な色彩の2人。
そして、唇で繋がった生き物。

背の痛みに悲鳴を上げていた乙だったが、少しずつマースの口づけに酔うかの様に、痛みよりも別に甘い痺れが身体を駆け巡っていくのを感じていた。
そんな乙の変化を察したマースは、そっと唇を離す。
すると、唇と唇との間に橋を架けるように、銀糸がツー…と繋がった。
マースは舌を出し、その糸を辿るように舐めとり、乱暴に貪ったためにぷくりと腫れた乙の唇に再び口づけた。
くちゅ…、という音とともに唇を離す。

乙は、はぁはぁ…と大きく胸を上下させ、疼く背の痛みに身を捩った。

――清らかであり艶めかしい

その姿を真上から見下ろし、マースは思わずゴクリと喉を鳴らした。
マースの仄暗い闇の様な瞳は、常ならば感情など感じられない様な色をしているが、今は獰猛でいてさらに暖炉の熾の様な静かな熱を孕んでいた。

相変わらずポタポタと乙の顔や首筋に、マースの涙が落ちていた。
時折落ちてくるその冷たい刺激に、乙は閉じていた瞳を薄く開く…。
すると目に飛び込んできたのは、仄暗い闇を宿した瞳で、その瞳からキラキラと輝く雫だった。

…まだ、泣いてる。

乙は驚きに目を見張りながら、顔を歪めて問いかけた。

――まだ、胸が痛いの？

マースははっと目を見開いた。

キノトは、どうして…。

なぜ、マースの性急ともいえる行動について言及するのではなく、

涙するマースをまず先に気遣うのか…。

けれど、それが、それこそがキノトなんだ…。

マースは心の奥底から、乙に対する愛しさが込み上げてきた。

とてもとても熱い思いだった…。

それは、先ほどまで己の中で芽生え始めていた嗜虐的な心を追い出し、温かくいとおしむ心へと塗り変えていく様な、とても不思議な感覚だった。

スー…と音もなく上体を乙へ倒し、問いかける瞳を閉ざす様に、瞼の上に唇を落とす。

寝台に縫い付ける様にしていた手首を離し、乙の頬に手を添え、まるで壊れモノにでも触るように優しく包み込み、何度も何度も口づける。

頬に、額に、鼻に、そして唇に――

先ほどの乱暴さとは打って変わって、どこか神聖な儀式の様に、それは施されていく。

乙の顔中に口づけ、マースは少し身体を離す。両手を乙の体の下に入れ、慎重に痛みの少ない様に反転させた。その時、少し不安そうな表情をした乙を宥めるように、優しく口づけを落とす。

うつ伏せになった背中の夜着の隙間からは、白い包帯が見え隠れした。

マースは夜着を留めている背中の紐をほどき、乙の夜着を肌蹴させた。…すると、やはり上半身に包帯がぐるぐると巻かれてあり、薄っすらと深紅の血が滲んでいた。

痛ましい乙の姿に、マースは眼を細めた。

これが、神の子が負った、代償か…。
一生消えない、醜い傷跡…。
僕が付けた…。

マースは唇をグッと引き結んだ。
自身の力の続く限り、この傷をどうにか治癒したい…と。
流れ続ける涙が邪魔をして、視界がぼやけた。いつになったら止まるのかと呻きながら、手の甲でゴシゴシと目をこすり涙をぬぐった。

そして、集中するために深呼吸を繰り返す。
何度も息を吸って吐きだすたびに、少しずつ感覚が研ぎ澄まされていった。最後に、一際大きく息を吐きだすと、掌に力が満ちていくのがわかる。

マースは瞳を閉じ、おもむろに乙の背中に手を置いた。
冷たい手で、スッと素肌を撫でると、ビクッと乙の身体が反応した。
マースは乙の華奢な肩を撫で、優美な身体のラインを辿り、細い腰からまた上に撫で上げた。
包帯越しに、背骨に沿ってツー…と指先を這わせれば、くすぐったそうに身を捩った。

乙は枕に顔を埋め、クスクスと思わず出てしまう笑い声を堪えていた。
その様を見つつ、マースは乙の顔に手を伸ばし、口全体を覆う様に手を当てた。
何だろうと不思議がる乙は、次の瞬間ハッと息を飲み、叫びそうになった。しかし、顔を覆う様に手が当てられていたので悲鳴が口を

出ることはなかった。

…何が起こったかというと。

マースが突然乙の体に巻かれていた包帯を、短剣で一気に切ってしまったのだ！

ハラリハラリと乙の身体から包帯がすべり落ち、乙の陶器の様な素肌に鋭利に切られた深い傷口が顔を出した。そこからは未だに血が滲み出していた。

「う…、ふぅ…ッ…はぁ…」

乙の呻く声がマースの掌から聞こえてきた。

「ごめん…痛かった？…でも、大丈夫。すぐ痛くなくなるから」

安心させるように囁き、乙の頭を撫でる。

そして視線を傷口に戻し、その上にもう片方の手を当てた。グッと力を込めれば、ひゅうっと喉が鳴る音が聞こえた。

じわじわと血が滲みだしてきたが、マースは構わず傷口をなぞるように手を動かす。

乙の荒い息遣いとマースの手に塞がれた口から呻き声が漏れ出す。

乙はされるがまま痛みに耐えていたが、少しずつ痛みとは異なる感覚が、背中から全身にかけて広がっていくのを感じた。それは温かく、じわじわと広がっていく不思議な感覚だった。

マースは額に汗を光らせながら治癒を施していく。

そして、ハッと鋭い息遣いをしたかと思うと、何と今度は傷の上に

舌を這わせ始めたのだ！
再び鋭い痛みが乙の背中を駆け抜けた。
あまりの痛さに、乙は思わず口を覆うマースの手を噛んでしまった。
プツンッ…と歯が食い込み、皮が裂ける音がした。見る見るうちに、乙の口内に鉄錆の味が広がっていく。

それでも、マースは顔色一つ変えずに、舌を這わせ続けた。
治癒を行うために…。

蠢く舌は、傷口を這う様に、時に抉る様に…。
マースは血を舐めとり、口元を深紅に濡らしていく…。

ぴちゃ、ぴちゃ…

どこか艶やかさを持った水音が断続的に響く。

うぅ、…はぁ…あ…

そして同時に苦痛に呻く声も…。

だがしばらくすると、先ほどと同じ様に、痛みとは異なった温かい感覚と、そして疼き痺れる様な…何ともどかしい感覚が身体に広がっていった。
乙はその陶然とした感覚に意識を奪われ、どこかへ持って行かれる様な気がした。

はぁ…と熱い息を身体から吐き出す。
その顔は、とろんとしており酔った様に瞳を潤ませていた。

マースは乙のつるりとした頬を撫で、そっと唇を塞ぎ舌を割り入れた。
唾液を交換する様に、忙しなく口内を暴いていった。

――それは夜が明けるまで行われた。

そして、マースは去り際…

――明日も行くから…。

そう言って出ていったのだ。

＊＊＊

あの日から、マースは人知れず毎夜訪れ、乙に“治癒”を施していった。
だからこそ、乙の傷跡は1週間しか経っていないというのに、殆ど塞がってしまっているのだ。

ミハの問う様な視線に乙は曖昧に笑い、急いで話題を変えた。

「そう言えば…、ミハの手に持っているのは何？なんだかいい香りがする」

「…ん？…あぁ、そうそう、忘れてた。ほらこれ、キノトにお土産だ」

ミハは苦笑しながら、手に持っていた白い紙袋を差し出した。

「なになに…？…あ！これ、パシュだ！パシュだわ！」

乙は嬉しそうに声を上げ、キラキラとした表情になった。
これを食べたのは、ミハと外出した時以来だった。

頬を上気させて嬉しがる乙をじーっと大人しく眺めていたカサルアだったが、とうとう我慢できなくなったのか、体を乗り出して袋の中を覗き込んできた。

「なぁに？これ、キノト。なぁに、これ？」

「これはね、パシュっていうお菓子なんだよ。甘くてね、と～ってもおいしいの」

「お菓子なの？これ？」

カサルアは初めて見たパシュに興味深々だった。

「そうだよ。中にクリームが入っていて、噛むと中から溢れてくるんだよ！とってもおいしいの」

「うん！おいしそう！」

ニコニコと笑い合う2人に、ミハが「それじゃぁ、お茶にでもしようか？」と提案すると、カサルアが「うん！じゃ、言いに行ってくる～！」と、勢い良く寝室を飛び出してしまった。

「…侍女を呼べばいいのに」

ミハがぼそっと突っ込むと、乙がフフッと笑った。

「確かに、そうだよね。…でも、少しずつ理解していけばいいんじゃないかな？色々なことを…」

「まぁな…。…それにしても、こうも変わるものなんだな…前とは比べ物にならない」

「うん」

そう。

カサルアの変化は劇的だった。

心が１０歳で止まってしまったので、カサルアはずっと小さな子供の様な言動をしていた。しかし、止まっていた心の時間が動き出した途端に、その遅れた分を取り戻そうという様に急激に成長していた。

さらに、心に引っ張られる様に成長が遅れていた身体も、この１週間で少し逞しくなったようにも思えるのだ。

過去の呪縛から脱したカサルアは、これからどんどん成長していくことだろう。

「…カサルアは、一歩踏み出したんだよ。…勇気を出して」

「…そうか。…一歩を、な…」
「うん」

柔らかく微笑む乙。
それはまるで花がほころぶ様な美しい笑顔だった。
ミハはつられる様に笑い、眼を細めた。

「…えらかったな、キノト」

そう言って乙の頭を撫でた。
つやつやとした髪は、陽光に煌めきながらも、夜のしじまを思い出させた。

少し目じりを赤らめた乙は、微かに頷いた。
ミハはふっと笑いながら、顔を近づけ、唇を合わせようとすると――

「だぁぁあああ、めぇぇえええ――――！！！」

力一杯制止する声が室内に響いた。
2人が驚いて扉の方を見ると、怒気も露わに顔を赤くするカサルアがいた。

「だめだったら、だめ――――！！！キノトは、あげない――――！！！」

突進する様に2人の間に割り込み、乙の体にギュウギュウと抱きついた。

必死に取られまいとするその様子に、ミハは軽快な笑い声をあげ、乙を取られた仕返しとばかりにニヤリと口の端を上げた。

「フフッ！…でもね、殿下…男の嫉妬は見苦しいですよ」

「むうぅぅ！…ち、ちがうもん！し、しっとじゃないもん！！」

ますます顔を赤くするカサルアだった。

元気一杯なカサルアを見て、乙はクスクスと笑った。

――本当によかった。

そう心の中で呟きながら、どうかこんな温かい日々が続きますように、と願った…。

どんなに激しく窓を叩くような雨でも…

冷たく凍えるようで、いつまでたっても止みそうになくとも…

しかし、いつかはきっと雨は上がる。

それはきっと晴れやかに、突き抜ける様な青空が、そっと笑って迎えてくれるのだ。

きっと、きっと…。

必ず、雨は上がるのだから…。

そう、もう雨は上がったのだ…。

＝＝＝

第２５話　終わる連鎖２（後書き）

？章も残すところ、あと３話です！

第２６話　それぞれの思い（前書き）

珍しく今回は、短めです～

第２６話　それぞれの思い

夜明け前。
あと一刻もすれば空は白み始める。
だが、未だに空は深い夜闇に覆われている。

満月か…。

ルシカは神殿での夜通しの祈りを終え、そろそろ自室に引き上げようかと思いながら、窓に浮かぶ大きな月を見ていた。
少し疲れたように、はぁ…と息を吐く。
そして、先ほどから気になっていた、神殿の外へと視線を向けた。
人の気配があるのだ。それもよく知ったものの…。

「…以前もこんなことがあったな」

呟く言葉は、薄暗い闇の中に消えていった。
はぁ…と再び息を吐き、しょうがないなと扉へと歩き出した。

――神殿の外へ。
――アイツがいる、ところへと…。

◆◆◆

カサリ…。
下草を踏み分けて少し行くと…やはりいた。
眩いばかりの月光を全身に浴び、この世の祝福を余すことなく受けているように見える、アイツが…。
しかしその表情は暗く沈み、やつれていた。

「クロウリィ…」

ルシカはそっと名を呼ぶが、俯いた顔が上がることはなかった。

「…クロウリィ。…何か用が、あったんじゃないのか」
「…」

再度尋ねるが、クロウリィは石像の様に固まりピクリとも動かなかった。
ルシカはその様子を見てそっと息を吐いた。

無理もない、か…。

内心で呟く。
小さい頃から共に過ごしてきた仲だからわかる。クロウリィが何を考え何に悩んでいるのかが、手に取るようにわかるのだ。

カサルア殿下の事で、悩んでいることが――

そう。

カサルア殿下が長年患ってきた“ご病気”が、回復に向かったということで、王宮は色々と騒がしくなった。

１０歳の時に母親が死に、そのショックでカサルアが心に傷を負ったという事実を知るものは、王宮でも上層部の限られた者達だけだった。

公には、病弱で表にも顔を出せないほどと、公表されていた。

しかし、乙の犠牲により心の殻を破ったカサルアは、周囲が目を瞠るほどの成長を遂げていた。

実際の２５という年齢には未だ届かないものの、心も体も随分としっかりしてきた。

よって最近では、王宮を元気に闊歩するカサルアの姿を見られるようになった。

…そうなれば、貴族たちが黙っているはずはない。

今まで、第一王位継承者であるカサルアは病弱のため、その責務を全うできないのではないかと疑問視されてきた。しかし、第二王位継承者である“愚弟殿下”と揶揄されるクロウリィでは、不適格であると言われてきた。

病弱のカサルアか、愚弟のクロウリィか…。

次の王は誰になるのかと、頭を悩ませてきた。

それでも、病弱だがクロウリィの素行の悪さに比べたらまだまし…と、皆の意見はカサルアを押すものが大半だった。

それが、カサルアの病気回復によって一気に勢いを増したのだ。

『陛下！カサルア殿下のご尊顔を拝したく！』
『そうですとも』
『ご病気は、驚異的に回復なさっているとか…』
『今こそ、真の後継者をお決めいただき、我等家臣にお示しくださいませ！』
『陛下！』
『陛下！！』

…だから今までにも増して、クロウリィは皆に叩かれているのだ。
王子としての自覚がないだとか、もっと王族として誠意ある行動をしてほしいだとか…、ここぞとばかりに貴族からあれやこれやと言われていた。

…その全ては、カサルアのためにやってきたことだというのに。

その真意を知るものは目の前にいる、ルシカくらいのものかもしれない…。

ルシカは己の目の前で、暗く沈むクロウリィを見つめた。
顔に出すことはないが、クロウリィはカサルアの心が回復したことを誰よりも喜んでいたし、第一王位継承者として皆に敬われ傅かれることを望んでいた。

これでやっとカサルアは、普通に生きることができると…。

では、なぜクロウリィはこんなにも沈んだ顔をしているのか？
ルシカにはその理由がわかっていた。

そして、こんな表情を見せられるのは自分だけだということも…。

ルシカにはわかっていた。

――辛い時に辛いと、心の内をさらけ出すことなど、王族にはできないのだから…。

ふと頭上で輝く満月を見上げる。
温度の無い冷たい月の光。
しかしどうして、降り注ぐ光はこうも優しいのか…。

クスッと微笑みながら、ルシカは月を眺める。

「…そうだ。…今回の事で、君に言っておきたい事がある」
「…」

唐突に話し出すルシカ。
だが、クロウリィからは何の反応もない。

「…私は。私は、決めたんだ。…今のままでは何もできないと、自

分には何の力もないと…わかったから」

今回の王宮での騒動。
ルシカは、乙に何もしてやれることがなかった。

乙が怪我をした時に、“力”を使って治癒を施すこともできなかった――否、許されなかったのだ。
ただの第一神官では…。

言外に、そう言われた様なものだった。
お前は、神の愛し子たる御方に治療を施すだけの、…身分には非ずと。

いくら若手の中で、飛びぬけて力に秀でていようとも…
その若さですでに、第一神官の位についていようとも…

そして、平素から乙と懇意にしていようとも…

だから、今のままではだめだと思った。
…何の力もない自分では、乙に何もしてやれないのだと。

「あの時、私は何もできなかった。…あれほど悔しかったことはない、あれほど己の不甲斐なさを感じたことはない…」
「…」
「だから、だから…、私は決めたんだ」

自由に動けるだけの、地位も力も欲しい。

「大切な人を守れるように、傍らにいられるように…」

もう、失敗したくない。

あんな思いをしたくない。

「だから、私は…」

――キノト専属の神官になることを、決めたんだ。

クロウリィは、ハッと顔を上げた。

驚愕に目を丸くしながら、月を見上げるルシカを凝視した。

「…キノト…の、専属…？」

それは衝撃的な告白だった。

しかしながら、ルシカの口から紡がれる言葉はとても静かで、水面の波紋の様に緩やかだった。けれど、その奥に潜むのは驚くほどの力強で…クロウリィは知らず背筋がゾクリとした。

――本気なのか、コイツは…。

ゴクリと喉を鳴らしながら、クロウリィは問いかけた。

「…ルシカ、お前…本気なのか。…キノトの、専属の神官になるっ

て…」
「あぁ、もちろん本気さ。…でなきゃこんなこと、口に出して言えるわけがない」
「…だ、だが、それは、なれるのか…専属になんて、なれ――」
「なるんだよ」

ルシカはクロウリィの言葉を皆まで言わせず遮る。

「…何がなんでも、なるんだ。…そう、決めたんだ」

力強い言葉。
その姿はまるで、己の決意を誓っているかのようだった。

そんな生き生きとした様子のルシカを見ながら、クロウリィはどこか迷子の子供の様な気持ちになった。

殺伐とした焦燥感。

いつでも、何でも、すぐに決めてしまうルシカ。
報告はすべて決まってから。
だから、クロウリィはいつもおいてけぼりをくらっていた。

ルシカと友達になった時も、ルシカが神官になると決めた時も、そして今も…。

即断かつ固い意志。
だから、クロウリィが何と言おうとも、それが翻ることはなかった。

…そしてそれが、幼い頃から羨ましくもあった。

遠い目をしながら、ルシカを見つめる。
すると、ルシカが初めてクロウリィを見た。

今夜初めて出会う、はちみつ色の甘やかな瞳。
それが、そっと柔らかく細められた。

「…クロウリィ。私は、決めた。自分の進むべき道を…」
「…」
「だから、クロウリィ、君も…決めるんだ、自分の進むべき道を」
「……ッ」

クロウリィは、顔を歪めた。
自分に何をしろというのだと、泣きそうに困惑し、そして怒っている様な複雑な顔をした。

サ―…と風が2人の間を通り抜ける。

クロウリィの襟足だけ伸ばされた金糸の髪が夜風に揺れる。
ルシカはその流れる髪をそっと掬い取る。

さらさらとした感触を楽しむかの様に、掌で遊ばせる。

「…なぁ、クロウリィ。…もう、大丈夫だ、大丈夫だよ。カサルアは…」
「…」

囁く様に、言い聞かせるように、言葉を紡ぐ。

「もう立派に、生きていける。クロウリィが、無理してかばう様な事を、しなくても」

「…」

「だから…」

ルシカはキュッと金糸の髪を握りしめた。

「…もう、この髪も切って良いんだ」

「…ッッ！！！」

先ほど、ルシカの告白を聞いた比ではないほど、クロウリィは驚いた。

冷や汗が喉元を伝い落ちていった。

まさか、知っているのだろうか…

襟足だけずっと伸ばしてきた、髪の意味を…？

再び石像の様に固まってしまったクロウリィに、ルシカは軽く笑った。

知らないとでも思っていたのかと、面白そうに瞳が眇められた。

「…クロウリィの考えていることは、わかるよ。…君も、私のことがわかる様に、ね？」

「…ぅう」

「だから、もう切っても良いんだ。そして、自分の道を進んで良い

んだ…否、進まなければいけないんだ、これからは…」

終始優しく語りかけるルシカ。
そしてすべてが確信をついた言葉。

…だからこそ、なのだ。
胸の奥底にある己の本当の気持ちが、ひょっこりとつられて出てきてしまいそうな気がして…。
クロウリィは苦しくなり、それに蓋をするかの様に瞳を閉じた。

――このまま、この気持ちに気付いてしまっていいのだろうか…。
――しかし、そうしたら、これからどうすればいい…。

苦悶に顔を歪ませ、クロウリィは俯いた。

…未だ、クロウリィでさえ気付いていない様な、形にすらなっていない様な、奥底に眠った心がある。
靄の様に不確かなそれは、触ると酷く甘く痺れ、同時にそれは現実にはならないのだと、理解できてしまうもので…。
毒の様に身体を蝕む。

「…どうすれば」

吐息混じりに吐きだされる言葉は、夜闇の中で孤独に彷徨う。

月夜に俯く金糸の髪が、己の心を表すかのように、静かに風に揺れていた。

＝＝＝

第２６話　それぞれの思い（後書き）

？章ラストまで、あと２話！

みてみん様での有志企画で生み出されたキャラクターを小説にしました！

「アイノコ～血と風と～」

よかったら読んでみて下さい～！和風アヤカシものです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9975k/

漆黒の愛し子

2011年6月26日15時39分発行